

に落ちるところではさらに10cm下がっている。しかし南東側の北西部分ではT. P. +13.55cmと高く、南東に明確な段をもって落ちる。これは部分的な深みかもしれない。総合してみると地形的に一番高い部分から両側に傾斜していると言える。

遺物は3-445溝では図73-8が出土したのみで、出土状況は記録していない。3-446溝・4-285溝では遺物のほとんどが底から浮く。検出面より浮いているものが多いのは、3-2層の影響で激しい凹凸があり、肩を明確に検出するのに本来の4面よりかなり下げたためである。446溝部分では個体が散在しているような状況だが、285溝部分では北西側と南西側に各1ヶ所集中する部分がある。完形率の高い弥生土器が、その場で割れたような状況で出土している例が多いのが特徴で、特に285溝部分南東側の土器9・11などは、ほぼ原形を保った形で検出された。

遺物の9割以上が弥生土器で、それも完形率の高いものも多いが、わずかな土師器・須恵器は底面近くの深い部分で出土したものもあり、溝自体の時期は飛鳥時代であるのが確実である。切り合いなしにつながる他の溝からもそれは肯定できる。

ならばこの出土状況はどのように理解すべきなのか。溝群掘削の際、弥生土器の入った遺構を破壊し、その時、土器はある程度丁寧に掘り出した後、溝群を埋める時に投棄したと考えざるをえない。

弥生土器は一般的な集落の様相と比べると、壺の比率が高いといえる。また、生駒西麓産の比率が高く、正確に分別した285溝部分では6割を超え、特に長頸壺では8割を越している。

弥生土器に関しては、高坏や長頸壺などから見れば、河内V-2～3様式頃と言える。

図73に実測可能なものを挙げた。なお、甕底部片など、実測可能でも完形率悪く、他と重複する型式のものは省いたものもある。18・19は土師器、それ以外は弥生土器である。

1は高坏。外面はやや磨滅するが、脚裾端にヨコナデが残る以外はタテミガキ。内面も磨滅し、口縁部と脚部の一部にヨコナデが残るのみである。透かしは三方透かし。胎土は灰白10Y R 8 / 2を呈し、赤色粒若干あり。素地の粘土がやや粗い。

2は高坏身部片。外面はヨコナデ。内面はヨコナデ後タテミガキ。胎土はにぶい黄褐10Y R 4 / 3を呈し、角閃石多し、石英・長石若干、黒雲母わずかにありの生駒西麓産胎土。

3も高坏身部片。外面口縁にヨコナデ残る以外は磨滅。胎土は明黄褐2.5Y 6 / 6を呈し、石英・長石あり、角閃石わずかにあり。

4も高坏身部片。外面は、上半ヨコミガキ、下半ヨコナデ後屈曲部からやや下がりタテミガキ。内面は口縁にヨコナデ残る他は磨滅。胎土はにぶい黄褐2.5Y 5 / 4を呈し、角閃石非常に多し、長石あり、石英・黒雲母若干ありの生駒西麓産胎土。

5は高坏。外面は、口縁と脚の端部にヨコナデ残る他はタテミガキ。身部内面は2段にタテミガキ後底部中心に一定方向ミガキ。脚部内面はヨコナデ。透かしは四方透かし。円板充填。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 3を呈し、石英あり。長石若干、チャートわずかにあり。

6は鉢。外面は、口縁部ヨコナデ、底部側面はユビオサエ後ヨコナデ、その後に体部にタテミガキ、底部は粗いナデ。内面は口縁ヨコナデ、それより下はタテミガキ。胎土は10Y R 4 / 4を呈し、長石・角閃石あり、石英若干ありの生駒西麓産胎土。

7も鉢。外面は、底部側面にタタキ残るが、上方にヨコハケ後全面ヨコナデ。内面は口縁部にユビオサエ残り、下半タテナデ、上半ナメハケ。胎土はにぶい橙7.5Y 7 / 4を呈し、長石若干あり、石英・赤色粒わずかにあり。

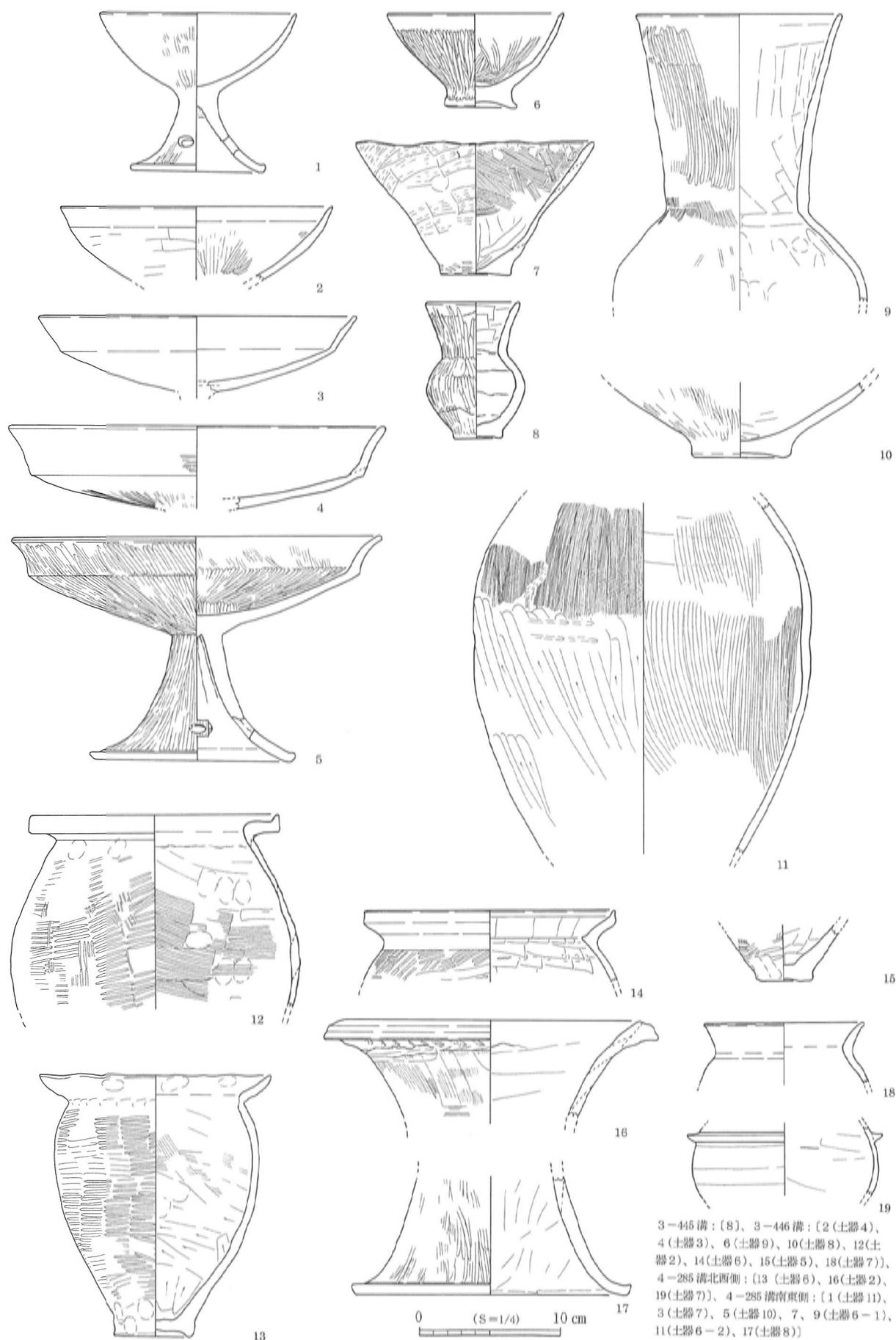


图73 3—445溝・446溝、4—285溝出土遺物

3—445溝：〔8〕、3—446溝：〔2(土器4)、4(土器3)、6(土器9)、10(土器8)、12(土器2)、14(土器6)、15(土器5)、18(土器7)〕、4—285溝北西側：〔13(土器6)、16(土器2)、19(土器7)〕、4—285溝南東側：〔1(土器11)、3(土器7)、5(土器10)、7、9(土器6—1)、11(土器6—2)、17(土器8)〕

8は小型長頸壺である。外面はヨコナデ後タテミガキ、底部はユビナデとユビオサエ、底部側面にはユビナデが入る。内面は、完形品で観察しにくい、口縁部はヨコナデ、頸部直下はタテユビナデ、その下はヨコユビナデのようである。底部にはユビオサエが入る。粘土継ぎ目がよく残る。胎土はにぶい橙7.5Y R 7 / 3を呈し、長石あり、石英・赤色粒若干あり。

9は長頸壺。外面は、口縁部～頸部ヨコナデ後タテミガキ。頸部と胴部の境にタテハケ、胴部は磨滅するがタテミガキ残存。内面は、頸部タテナデ後口縁部ヨコナデ、頸部～胴部境にヨコナデ、胴部はタテユビナデ後ヨコナデ。胎土は暗灰黄2.5Y 5 / 2を呈し、角閃石あり、石英・長石若干ありの生駒西麓産胎土。

10は壺底部片。外面はミガキ、底部と底部側面はナデ。内面はナデ。胎土は暗灰黄2.5Y 5 / 2を呈し、角閃石多し、長石若干、石英わずかにありの生駒西麓産胎土。

11は甕胴部片。外面は、下部タテケズリ後上部タテハケ、上部にはハケの下にタタキ残る、最大径部分の水平のタタキは凹面でケズリが飛んで残ったもの。内面は上部にヨコナデ残るが、最終はタテハケ。ハケ目は外面より粗い。外面は全面煤附着するが、中位に濃く、上下は薄い。胎土は黒褐2.5Y 3 / 1を呈し、角閃石非常に多し、石英多し、長石ありの生駒西麓産胎土。

12は甕上半片。外面は、口縁部ヨコナデ、頸部にユビオサエ残るが胴部はタタキ、ヨコ方向のタタキを散在するタテのタタキが切る。内面は口縁部ヨコナデ、胴部は接合痕毎にユビオサエ並び、その後ヨコハケ、最終はヨコナデ。外面に煤附着するが、肩部にはほとんどない。胎土は7.5Y R 5 / 2を呈し、角閃石多し、長石あり、石英若干、黒雲母わずかにありの生駒西麓産胎土。

13は甕。外面は、口縁部ユビオサエ後ヨコナデ、頸部にもユビオサエ残る、胴部はタタキ、底部と底部側面はユビナデとユビオサエ。内面は、口縁部ユビオサエ後ヨコナデ、胴部下半ケズリ、上半ハケ後ナデ。外面には煤附着するが胴部中ほどと口縁が濃い。胎土は灰黄褐10Y R 3 / 2を呈し、角閃石多し、石英・長石あり、白雲母・赤色粒わずかにありの生駒西麓産胎土。

14は甕片。外面は、口縁～頸部ヨコナデ、肩部はタタキで、一部それを消すヨコナデあり。内面は頸部よりやや下に接合痕上に並ぶユビオサエが残るが、最終はヨコナデ。外面煤附着。胎土はにぶい黄褐10Y R 5 / 4を呈し、角閃石多し、長石若干あり、石英わずかにありの生駒西麓産胎土。

15は甕底部片。外面は、タテハケ、タタキ、底部側面のタテユビナデの順に入れる。底部は中心にユビオサエ、周縁は不定方向ナデ。内面はヨコナデ。胎土はにぶい橙7.5Y R 7 / 3を呈し、石英多し、長石若干あり。

16は器台口縁部片。外面は、口縁端面ヨコナデ、その下からタテハケ後ヨコナデ、残存部下端にタテハケを切るヨコハケあり。内面はヨコナデ。外面の口縁からやや下の接合痕上に一部、別の粘土を貼りつける。そこだけにぶい褐7.5Y R 5 / 4を呈する。胎土は暗灰黄2.5Y 4 / 2を呈し、角閃石多し、石英あり、長石若干ありの生駒西麓産胎土。

17は器台裾片。16と同一個体の可能性もある。外面は、裾端面ヨコナデの他はタテハケ後タテミガキ。内面はナデ。胎土は暗灰黄2.5Y 4 / 2を呈し、角閃石多し、石英・長石ありの生駒西麓産胎土。

18は土師器甕片。調整はヨコナデ。外面煤附着。胎土は10Y R 5 / 3を呈し、石英・長石多し、赤色粒わずかにあり。

19は土師器鋳付き土器片。調整はヨコナデ。胎土はにぶい黄橙10Y R 6 / 3を呈し、石英・赤色粒をわずかに含む精良な胎土。

3-447・4-286溝（図74～79・表37・38）02-2トレンチ西半から02-3-3トレンチを貫く。トレンチ境あたりでやや蛇行するが、N36°Wを指向する直線的な溝である。幅は大体1.2～1.4mを測るが、残りの良い部分では1.8mほど。深さは50cmほど。底のレベルは、286溝部分の4-288溝との交点から南東側がやや浅いが、他はほとんどT.P.+13.0～13.2mの間で安定し、傾斜は認められない。重複する遺構とは、溝群として交叉する溝とは切り合いなく、他は3-376住居や3-建物6など全ての遺構に切られている。最も大型の溝で、調査区西半の中心的な溝である。

埋土には流水堆積があり、泥土が堆積した中、わずかに水が流れていたような状況である。ただし、断面図の最上層（図76断面の1）は部分堆積で、一部では溝の外側にも広がっていた。建物より後で、付近が浸蝕されて堆積したものらしく、その上面では柱穴が検出されなかった。

遺物の出土状況は、溝底部に付くものはほとんどない。しかし、部分堆積があった付近（図75）では、上面付近で出土するものと。埋土下半付近にあるものに分かれるようで、上面付近のものは部分堆積層内のものであった可能性が強く、若干投棄の時期が異なる可能性がある。平面的には若干集中する傾向があり、447溝部分・286溝部分各々三つの土器群に分けられる。ただし、4-286・288溝交点部分に関しては、後に別項目を立てて述べる。447溝土器群1はわりと散在し、多くは上面付近出土である。土器群2は上面付近と下半付近に分かれ、図79-6の須恵器甕の破片が上面付近で集中して出土しているのが目立つ。この甕は、出土レベルや位置から、3-建物1に関連する遺物であった可能性もある。土器群3はほとんど埋土下半から出土。286溝部分では、部分堆積層はない。北西側では1ヶ所に集中し、レベルも集中する。南東側はさらに分ければ2群になり、北西側は位置もレベルも散在気味で、大きめの破片が多く、南東側は溝底部の土坑状の凹部の上に集中し、特に低いレベルに多く、破片は小さいものが多い。

遺物の内訳としては、圧倒的に弥生土器が多い。弥生時代遺構の集中する部分の北西縁辺を走るからであろう。また、工芸生産関係遺物が少ない。

弥生土器は甕と壺が多く、特に壺が甕の2分の1より破片数が多いのは、一般的な集落の組成と比べればやや異質であろう。高坏は一定数あると言える。生駒西麓産胎土の土器は甕・壺に多く、特に甕は高率である。それに対し、高坏・鉢・器台では低率。

土師器・須恵器は数は少ないが、組成上、特異な点は認められない。

弥生土器群は河内第VI様式的様相であり、庄内式土器を含む。土師器・須恵器は飛鳥I～III期にありえる組成だが、II期が妥当であろう。

実測可能なものからさらに選抜して、図78・79に掲載した。同型式とできるものは残りの良い1点に絞った。図78は弥生土器と庄内式土器と石包丁。図79は、6が須恵器、他は土師器である。

図78-1は高坏身部片。外面はタテミガキ後口縁に6条の櫛描文。内面はヨコナデ。胎土はにぶい黄橙10Y R 7/4を呈し、石英あり、長石若干、角閃石・赤色粒わずかにあり。中河内低地産か。

2は高坏身部片。庄内式で良からう。外面は、稜より上はタテミガキ、下はユビオサエ後、タテ方向の調整が見えるが不分明、稜直下はヨコナデ。内面は磨滅するがヨコナデか。胎土は橙5Y R 7/6を呈し、角閃石多し、石英あり、長石若干あり。色調は異なるが生駒西麓産か。

3も高坏身部片。口縁端面付近にヨコナデ残る他はミガキ。河内VI様式から庄内式まであってよいものである。外面稜直下以外タテミガキなのはVI様式的。胎土はにぶい橙7.5Y R 7/3を呈し、石英・長石若干、角閃石・黒雲母わずかにあり。中河内低地産か。

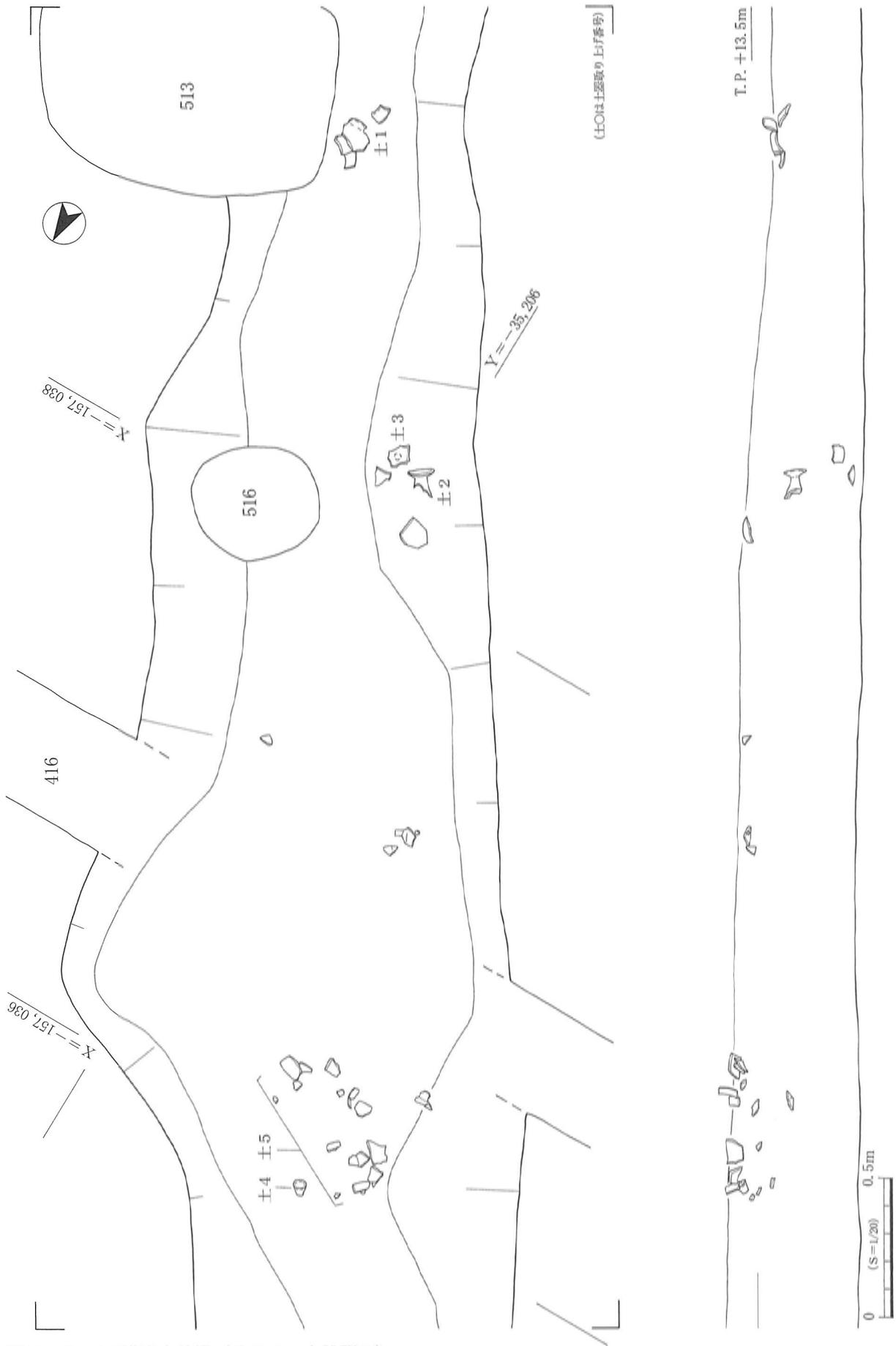


図74 3-447溝出土状況 (その1・土器群1)



図75 3-447溝出土状況 (その2・土器群2)

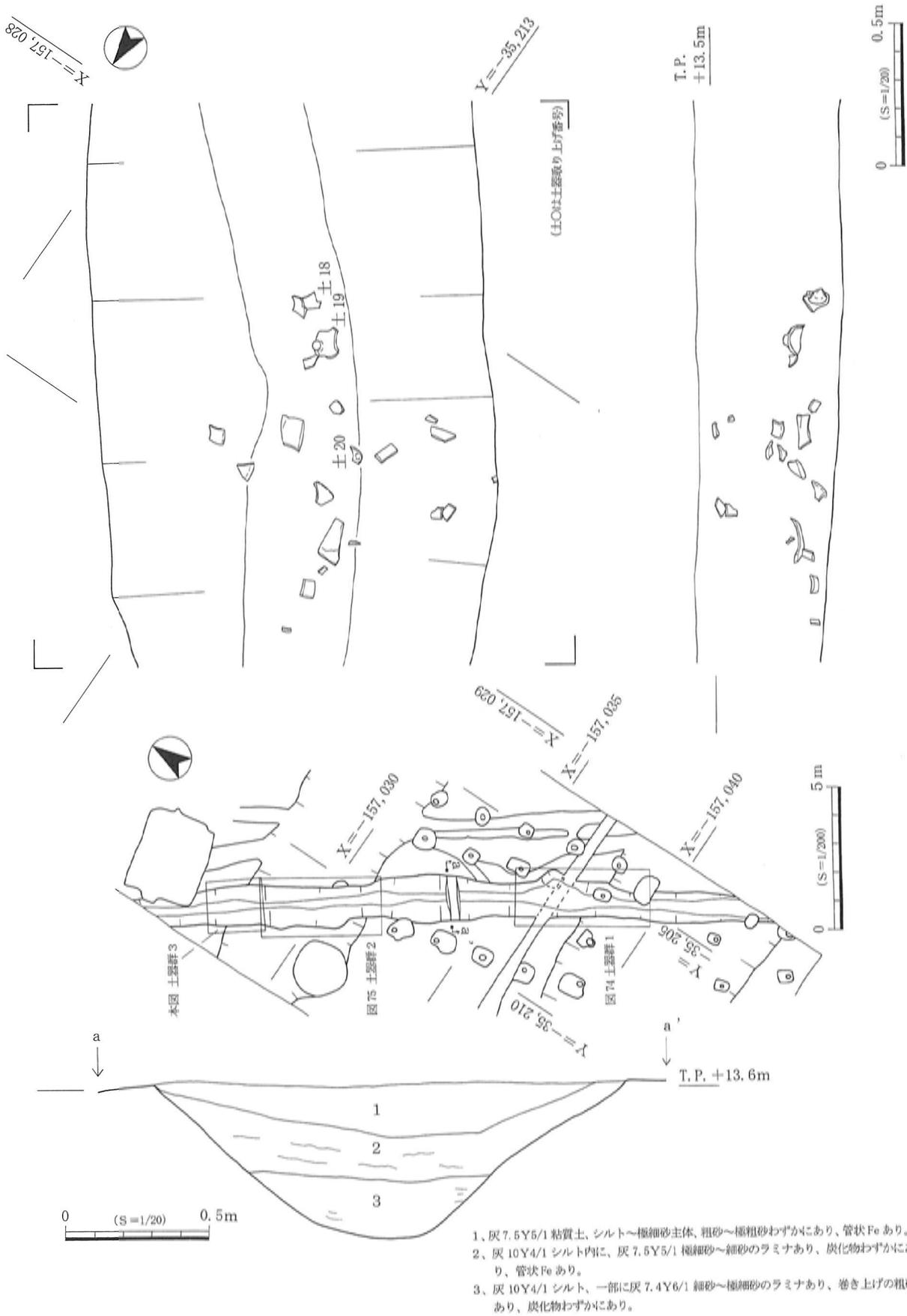


図76 3-447溝全体図・断面・出土状況（その3・土器群3）



図77 4-286溝北西側・南東側出土状況

4は高坏片。外面はタテハケ後まばらにタテミガキ。身部内面はタテミガキ。脚柱部内面は上半タテナデ、下半ヨコナデ。透かしは四方透かし。胎土は灰黄2.5Y 7 / 2を呈し、角閃石あり、石英・長石若干あり、赤色粒・黒雲母わずかにあり。中河内産か。

5も高坏片。外面は身部と脚部の接合部分に工具痕のアタマ残るタテミガキ。身部内面もタテミガキ。脚柱部は下部にユビオサエ列残り、軽いユビヨコナデ。三方透かし。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 3を呈し、石英多し、長石あり。

6は高坏脚部片。脚柱部は内外面絞り痕残る。外面はその上下に沈線、下の沈線直下に爪形文1帯、脚裾はタテハケ。脚裾部内面は、上半タテユビナデ後下半ヨコハケ。三方透かし。胎土は橙5 Y R 7 / 3を呈し、角閃石あり、石英若干あり、長石・赤色粒わずかにあり。

7も高坏脚部片。外面はタテハケ後ヨコナデか。内面は脚柱部タテユビナデ後、脚裾部ヨコナデ。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 4を呈し、長石若干あり。

8も高坏脚部片。外面は屈曲部にタテハケの工具痕を残し、脚裾部ヨコナデ後タテミガキ。内面は脚柱部タテナデ、脚裾部ヨコナデ。四方透かし。胎土はにぶい橙7.5Y R 7 / 4を呈し、石英あり、長石若干あり。

9は高坏脚裾部か。庄内式であろう。外面は磨滅するが、残存部はヨコナデ。内面はタテユビナデ後脚裾ヨコナデ。透かし穴は残存部からすると6～8個入りそう。胎土は橙7.5Y R 7 / 6を呈し、石英多し、長石若干あり。

この形の脚裾は弥生時代後期の岡山県上東式に起源を持ち、後期のうちに大分県の安国寺式から北陸の法仏式にまで広がる。器台にもあるが高坏のほうが多い。脚柱部は筒状で、身部は有段が多い。加飾するものが多いが、庄内期で加飾ないのは大阪府亀井北遺跡に類例がある。

10は甑底部片。外面はタタキ、底部側面にはユビオサエ、底部には数条の平行する植物茎圧痕が残り、ナデ。内面はハケ後棒状工具によるタテナデ、上部はヨコナデか。底部の焼成前穿孔は3個で両面穿孔である。胎土は褐10Y R 4 / 4を呈し、石英・長石あり、黒雲母若干あり。

11～13は線刻があり、絵画土器の可能性のある壺片。

11は壺の頸部片。肩部から立ちあがった部分である。長頸壺か。胎土はにぶい黄褐10Y R 4 / 3を呈し、角閃石多し、石英・長石ありの生駒西麓産胎土。

12も同じような部位の破片。胎土は灰黄2.5Y 7 / 2を呈し、石英若干、長石わずかにあり。

13は肩部片。これも長頸壺か。胎土は暗灰黄2.5Y 4 / 2を呈し、角閃石多し、石英・長石ありの生駒西麓産胎土。

14は短頸化した長頸壺片。外面はタテハケ後口縁ヨコナデ。内面は、頸部タテユビナデ後ヨコナデ。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 4を呈し、混和砂粒なし、微細粒に長石・石英・黒雲母あり。

15は広口壺片。外面は頸部タテハケ後口縁ヨコナデ、肩部ヨコナデ、タテハケの工具のアタリ残る。内面は、頸部タテユビナデ、口縁ヨコハケ後、全体にヨコナデ。胎土はにぶい黄10Y R 6 / 3を呈し、角閃石あり、石英・長石若干ありの生駒西麓産胎土。

16は壺胴部片。長頸壺か。外面はタタキ後上半ヨコナデ、下半タテナデ、底部はナデか。内面は最大径あたりにユビオサエ残り、底部にはユビオサエ、下半タテナデ、上半ヨコナデ。胎土は黄褐10Y R 5 / 4を呈し、石英・角閃石あり、長石若干、黒雲母・赤色粒わずかにありの生駒西麓産胎土。

17は壺か鉢の底部片。外面はタタキ後ヨコナデ、底部側面はユビオサエ、底部はナデ。内面はナデ。

胎土はにぶい黄橙10Y R 6 / 3を呈し、石英・長石・赤色粒若干あり。

18は壺底部片。外面はナデだが方向不明。内面はナナメハケ。胎土は黄褐2.5Y 5 / 3を呈し、角閃石あり、石英・長石若干、黒雲母わずかにありの生駒西麓産胎土。

19は鉢底部片か。外面はタテミガキ、底部はナデ。内面はタテミガキ。胎土はにぶい黄褐10Y R 5 / 3を呈し、角閃石多し、石英・長石若干ありの生駒西麓産胎土。

20は小型の甕とも言えるが、法量と上部の開きかたからは鉢か。外面はタタキ、底部側面からやや上まで、ヨコナデ。内面はハケか。胎土は褐灰7.5Y R 5 / 1を呈し、石英若干あり、長石・赤色粒わずかにあり。

21は鉢。底部は側面を親指、凹面を中指で押さえるユビオサエを連続して作る。体部外面は磨滅するがヨコナデか。内面は一部ヨコハケ残るが最終調整不明。胎土は浅黄橙7.5Y R 8 / 4を呈し、赤色粒・長石をわずかに含む。

22は鉢片。外面は、底部側面にユビオサエ、体部はヨコナデ。内面は、底部ユビオサエ後体部ナナメハケ、最後にヨコナデ。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 4を呈し、赤色粒・石英わずかにあり。

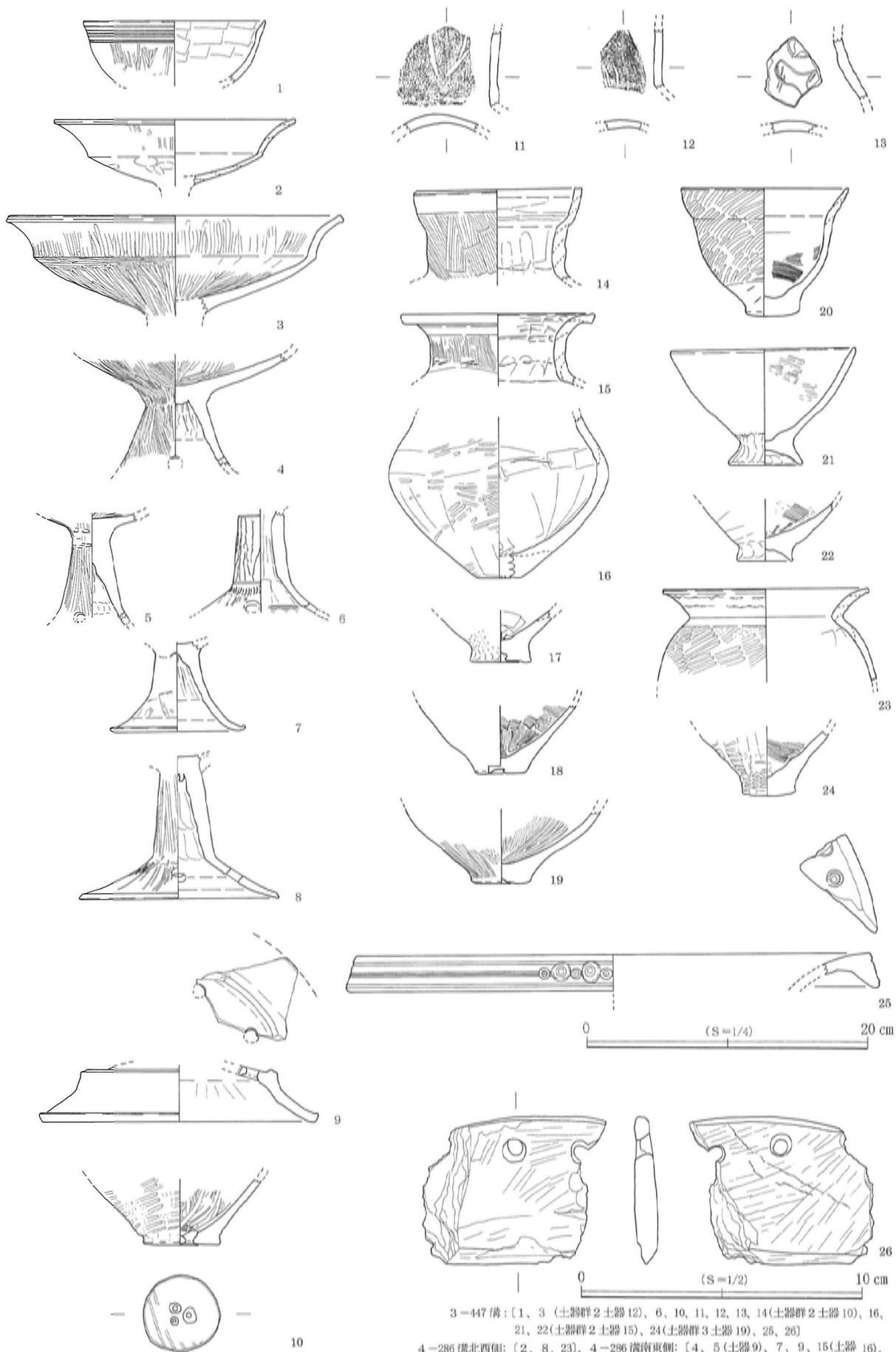
23は甕片。外面は、口縁ヨコナデ、体部タタキ、肩部以外に煤附着。内面は、器表剥離するが一部に

表37 3-447溝 遺物破片数集計表

大別	総数	種別	破片数		器種	破片数		型式・部位	破片数		細別	破片数					
			破片数	%		破片数	%		破片数	%		破片数	%				
土器・陶磁器	1244	弥生	1023	82.2	甕	410	40.1	タタキ	17	4.1							
					(生駒西麓)	1	0.2	底部	18	4.4							
					甕	3	0.3										
					壺	247	24.1	長頭壺	20	8.1							
								短頭壺	1	0.4							
								広口壺	26	10.5							
								底部	22	8.9							
					鉢	21	2.1										
					高坏	78	7.6										
					器台	8	0.8										
					土師器	186	15.0	甕	30	16.1							
								羽蓋	2	1.1							
								壺	4	2.2	短頭壺	4					
					鉢	26	14.0										
					高坏	14	7.5	脚部	3	21.4							
					坏血類	38	20.4										
					鑄型	1	0.5										
		須恵器	35	2.8	甕	26	74.3										
					壺	4	11.4										
					坏	3	8.6	II形式	1	33.3	身	1	100.0				
		石製品	1		石	11											

表38 4-286溝 遺物破片数集計表

大別	総数	種別	破片数		器種	破片数		型式・部位	破片数		細別	破片数				
			破片数	%		破片数	%		破片数	%		破片数	%			
土器・陶磁器	596	弥生 (生駒小片)	573	96.1	甕	195	34.0	タタキ	131	67.2	生駒西麓	42	32.1			
					(生駒西麓)	62	31.8	ハケ	25	12.8	生駒西麓	12	48.0			
					壺	147	25.7	底部	5	2.6	生駒西麓	3	60.0			
					(生駒西麓)	52	35.4	長頭壺	35	23.8	生駒西麓	19	54.3			
								広口壺	8	5.4	生駒西麓	5	62.5			
								底部	15	10.2	生駒西麓	6	40.0			
								鉢	9	1.6						
								高坏	40	7.0						
								器台	6	1.0						
					土師器	23	3.9	甕	3	13.0						
								羽蓋	2	8.7						
								壺	2	8.7	小型壺	2	100.0			
								鉢	1	4.3						
					高坏	2	8.7									
					坏血類	7	30.4									
		須恵器	0	0.0												
		その他		鉄滓	1		サヌカイト	2		石	1					



3-447溝：〔1、3（土器群2土器12）、6、10、11、12、13、14（土器群2土器10）、16、21、22（土器群2土器15）、24（土器群3土器19）、25、26〕
 4-286溝北西側：〔2、8、23〕、4-286溝南東側：〔4、5（土器9）、7、9、15（土器16）、17（土器21）、18（土器27）、19（土器7、14）、20〕

図78 3-447・4-286溝（同一遺構）出土遺物（その1）

ヨコナデ残る。胎土はにぶい橙5Y R 6 / 4を呈し、石英あり、長石若干あり。

24も甕片。外面はタタキ後、タテナデが散在。内面は、底部ユビオサエ、ナナメハケ。胎土はにぶい黄褐10Y R 5 / 4を呈し、角閃石・長石・石英あり。赤色粒・黒雲母若干ありの生駒西麓産胎土。

25は器台口縁片。磨滅するが、ヨコナデか。垂下口縁には4条の沈線が入り、円形刺突文を入れた円形附文と円形刺突文が交互に並ぶ。口縁上面には二重円形刺突文。その内側の円が垂下口縁のものと同じサイズ。胎土は黄褐2.5Y 5 / 3を呈し、角閃石多し、長石・石英若干、黒雲母わずかにありの生駒西麓産胎土。

26は石包丁片。石材は緑泥片岩。穴は両面穿孔、刃部も両刃だが、どちらも図右の面からの方が深く入る。加工仕上げの擦痕残るが、使用痕らしきものは見られない。

図79-1は土師器小型壺片。調整はナデ。単位幅やなで上げかたから布によるナデかと思われる。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 2を呈し、長石わずかにありの精良な胎土。

2は土師器坏。外面は、口縁ヨコナデ、下部はユビオサエ後、板状工具によるヨコナデ。内面は口縁にヨコナデ以外磨滅により不明。胎土は橙2.5Y R 6 / 6を呈し、赤色粒わずかにありの精良な胎土。

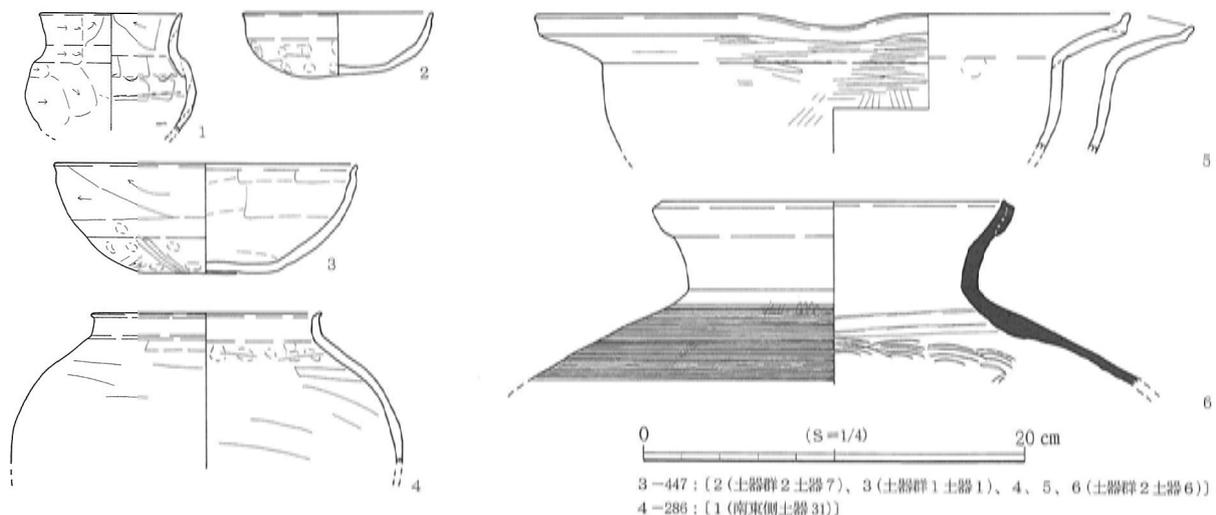
3も土師器坏。外面は体部上半にヨコナデ、下部は、底部はユビオサエ散在、体部はユビオサエ2列、最後にケズリ。内面は体部ヨコナデ、底部は磨滅により不明。胎土はにぶい黄褐10Y R 4 / 3を呈し、長石わずかにありの精良な胎土。

4は土師器短頸壺片。外面はヨコナデ。内面は頸部ユビオサエ後全体ヨコナデ。胎土は黄橙10Y R 8 / 6を呈し、赤色粒若干、石英わずかにありの精良な胎土。

5は片口の土師器鉢片。外面は口縁ヨコナデ、他はミガキ。内面は一部ユビオサエ残るが、ヨコナデ。胎土はにぶい橙5Y R 6 / 3を呈し、石英多し、長石あり、黒雲母わずかにあり。精良な胎土ではない。

6は須恵器甕片。外面は、口縁部回転ナデ、胴部はタタキ後カキメ、肩部に降灰痕あり。内面は、口縁部から頸部直下まで回転ナデ、胴部は同心円タタキ半スリ消し、口縁上半に降灰痕あり。胎土は灰5Y 6 / 1を呈し、長石・石英わずかにあり。

3-450溝(図80~86・表39) 02-2トレンチ西半の北側を走る。おおむねE26° Nを指向する直線的な溝である。幅1.0~1.2mほどだが残りの良い所では1.8mほどあり、これが当初の幅に近いだろう。深さは30~55cmほど、底のレベルはT. P. +13.05~13.25mの間で不規則に凹凸するが、強いて言えば



3-447: [2(土器群2土器7)、3(土器群1土器1)、4、5、6(土器群2土器6)]
4-286: [1(南東側土器31)]

図79 3-447・4-286溝(同一遺構)出土遺物(その2)

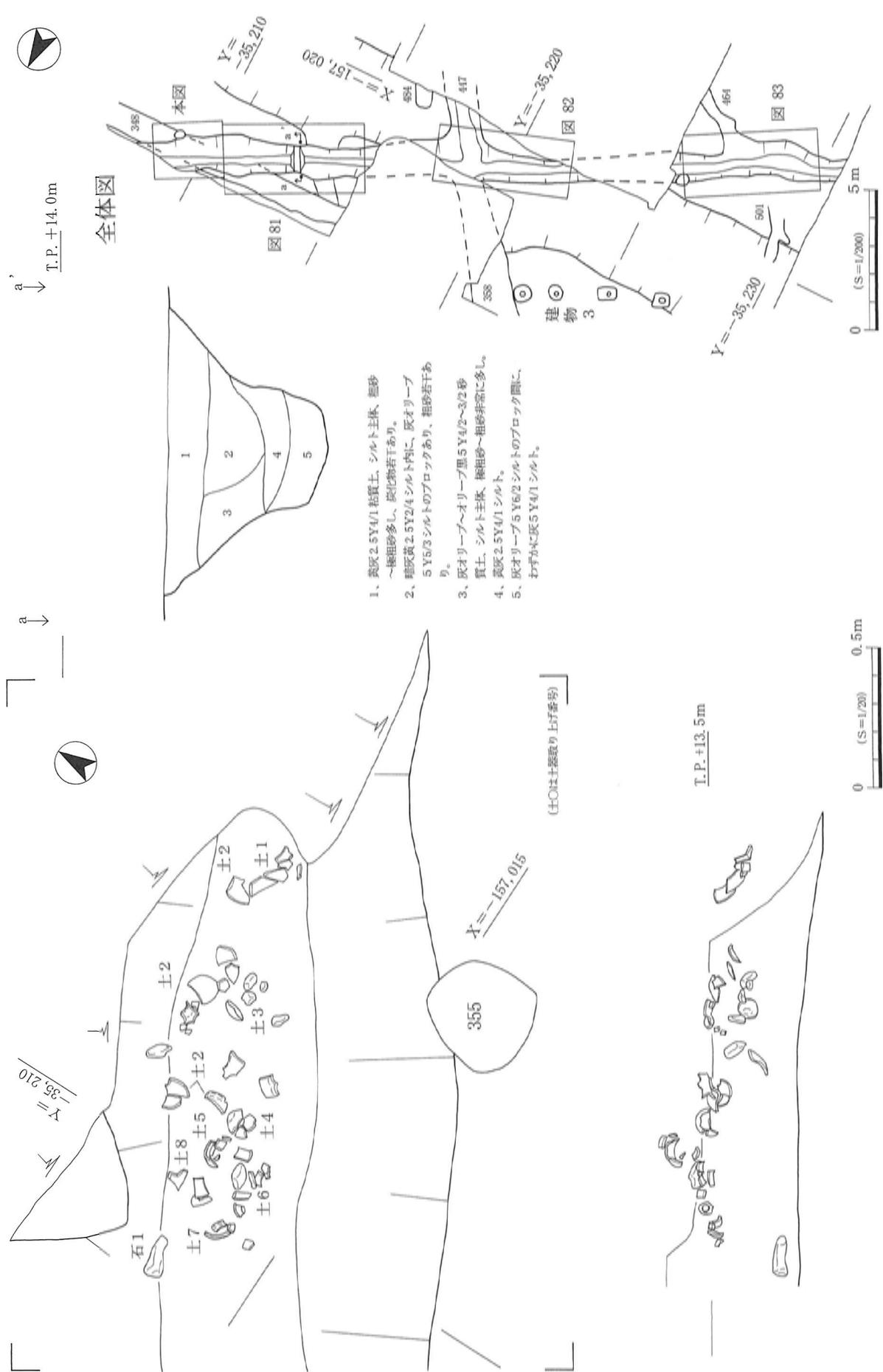


図80 3-450溝全体図・断面・出土状況（その1・土器群1）



図81 3-450溝出土状況 (その2・土器群2~4)



図82 3-450溝出土状況 (その3・土器群5)



図83 3-450溝出土状況 (その4・土器群6)

北東に傾斜するか。断面形は逆台形に近いが、下部は壁が立ち、二段落ち状である。最下層などにブロック土が見られ、水成堆積層は確認できない。図80の断面図を見れば、4の上面は掘り直しの可能性もあるが、流水堆積層が形成されず、2もブロック土である事から見れば、埋め戻し作業中の変化と考えた方が自然であろう。大型の溝同士で3-447溝とは切り合いなしに交叉するが、その部分では両者の深さが一致する。また、交叉部の角は平面的にはかなり丸く曲がる。

遺物の出土状況としては、ほとんどの遺物が浮き、埋土上半に多い傾向はあるが、レベル的に分別できる状況ではない。また、中礫以上の石が高い位置にあるものが多い事から、遺物の投棄時にはそれらが沈み込むような、例えば滞水状態の泥土のような、状況にはなかった事が分かる。平面的には現代建物の基礎などで分断されているので不分明なところもあるが、土器群1~4は各群間に短い空閑部分があり、土器群6は物自体少なく散在状態である。だが、土器群5は長い距離に密に遺物があり、土器群4と、土器群6の北東部分はその続きの可能性もある。また、完形率が高いものもあるが、大部分は完形率が低いのに個体の破片の広がりはあまりない事から、これらの遺物は、破損した大きな破片の状態、埋め戻しに伴って投棄されたものと思われる。

土器の組成は土師器が圧倒的に多く、弥生土器は少ない。須恵器も他と比べるとやや低い比率である。弥生土器の組成は比率的には3-447溝に似る。土師器は羽釜と高坏が結構比率が高いのが目立つ他、甕の羽口や棒状土製品が注目される。須恵器では坏がかなり多い。遺物群の示す時期としては飛鳥Ⅱ期に限定してもいいだろう。

掲載遺物は、実測可能遺物から、同型式はなるべく1点になるよう、その半数ほどに絞り込んだ。図84は須恵器、図85は26鉄滓と27弥生土器以外は土師器、図86は土師器である。

図84-1は坏蓋。ただし、器壁が薄く、屈曲部の回転ヘラケズリがないなど、通常と違う点があり、

表39 3-450溝 遺物破片数集計表

大別	総数	種別		器種		型式・部位		細別									
		破片数	%	破片数	%	破片数	%	破片数	%								
土器・陶磁器	2581	弥生	211	8.2	甕	62	29.4	タタキ	6	9.7							
					壺	31	14.7	底部	6	9.7							
								長頸壺	2	6.5							
								広口壺	2	6.5	生駒西麓	2	100.0				
								底部	3	9.7							
								高坏	11	5.2							
								器台	4	1.9							
					土師器	1962	76.0	甕	350	17.8							
								羽釜	266	13.6					非生駒	1	0.4
								甕	21	1.1							
								壺	10	0.5	短頸壺	9	90.0				
		鉢	182	9.3													
		高坏	123	6.3				脚部	14	11.4							
		坏血類	322	16.4				ミニチュア	2	1.6							
		輪羽口	3	0.2				皿	2	0.6							
		棒状製品	1	0.1													
		須恵器	408	15.8				甕	203	49.8	口縁	7	3.4				
					壺	85	20.8	長頸壺	6	7.1							
								短頸壺	1	1.2							
								甕	1	1.2							
								平瓶	1	1.2							
								鉢	2	0.5							
								高坏	1	0.2							
坏	140	34.3	Ⅱ形式	61	43.6	身	26	42.6									
						蓋	35	57.4									
			Ⅲ形式	22	15.7	身	22	100.0									
						蓋	13	59.1									
その他			瓦	1		土師質	1										
			鉄滓	2		石	67		粘土塊	5							
			桃核	1													

もしかすると、土師器坏形坏身の底部が膨らんだものかもしれない。外面は、体部回転ナデ、天井部回転ヘラ切り後不定方向の軽いナデ。内面回転ナデ。胎土は灰5Y6/1を呈し、石英・長石あり、黒色粒若干あり。

2も坏蓋である。外面は、体部回転ナデ、屈曲部に回転ヘラケズリ1条、天井部は回転ヘラ切り後不定方向の粗いナデ。内面は、回転ナデ後天井部一定方向ナデ。胎土は灰白7.5Y7/1を呈し、長石若干あり。

3も坏蓋。2とほぼ同法量。外面は、体部回転ナデ、屈曲部回転ヘラケズリ1条、天井部回転ヘラ切り後粗い不定方向ナデ。内面は回転ナデ。胎土は暗青灰10B G 4/1を呈し、石英あり、長石・黒色粒若干あり。

4は蓋坏身である。外面は、体部回転ナデ、屈曲部回転ヘラケズリ、底部回転ヘラ切り。内面は回転ナデ後底部一定方向ナデ。胎土は灰白2.5Y7/1を呈し、長石若干、石英・チャート・黒色粒わずかにあり。石英粒は粗く極粗砂大。

5も蓋坏身。外面は、体部回転ナデ、屈曲部回転ヘラケズリ、底部は周縁部に回転ヘラ切り入るが、中心は無調整で粘土塊附着する中、ユビオサエ散在。内面は回転ナデ後底部一定方向ナデ。胎土は灰N6/0を呈し、石英・長石・黒色粒わずかにあり。陶邑産か。

6も蓋坏身。外面は体部回転ナデ、底部回転ヘラ切り後粘土塊附着。内面回転ナデ後底部一定方向ナデ。受け部の上面にのみ降灰痕がある。底部外面ヘラ記号あり。胎土は灰白N7/0を呈し、黒色粒あり、石英・長石わずかにあり。微細粒に黒雲母もあり。

7は坏蓋。外面は体部と、つまみからその周辺が回転ナデ、その間に回転ヘラケズリ。内面は回転ナデ後天井部一定方向ナデ。上面にはヘラ記号あり、大部分に降灰痕。しかし、図上側の点線より左は降灰痕なく、同じ口径のものを重ね焼きした事が分かる。胎土は灰7.5Y6/1を呈し、黒色粒あり、石英・長石若干あり。

8は坏身。外面は、体部回転ナデ、屈曲部回転ヘラケズリ、底部は回転ヘラ切り後不定方向ナデ、太い沈線が1条入るがヘラ記号か。内面は回転ナデ後底部一定方向ナデ。外側面の一部に降灰痕あり。胎土は青灰5PB6/1を呈し、長石・黒色粒あり、石英わずかにあり。

9も坏身。外面は、体部回転ナデ、屈曲部回転ヘラケズリ、底部回転ヘラ切り。内面は回転ナデ後底部一定方向ナデ。胎土は灰白N7/0を呈し、長石わずかにあり。

10も坏身。外面は、体部回転ナデ、屈曲部回転ヘラケズリ、底部回転ヘラ切り。内面は回転ナデ後底部一定方向ナデ。胎土は青灰10B G 5/1を呈し、黒色粒若干、長石わずかにあり。

11は土師器坏形の坏身。外面は体部回転ナデ、屈曲部回転ヘラケズリ、底部はユビオサエ・不定方向ユビナデ後不定方向ハケ散在。内面は、底部一定方向ナデ後体部回転ナデ、その後底部に初めのナデと直交するナデが一部入る。胎土は表面暗青灰5PB4/1、内部黄灰2.5Y6/1を呈し、石英・長石・黒色粒若干あり。

12は細頸壺口縁片。調整は回転ナデ。全体に自然釉かかり、内面は発泡。胎土は青灰10B G 6/1を呈し、石英わずかと、花崗岩の径3mmの砂粒1粒あり。

13は壺胴部片。外面は、肩部回転ナデ、以下は回転ケズリ。内面は回転ナデ。胎土は灰白5Y7/2を呈し、石英・長石あり、黒色粒若干、チャートわずかにあり。

14も壺胴部片。漆壺である。外面は上半回転ナデ、下半回転ヘラケズリ、肩部に漆垂れる。内面は全

面漆附着だが、回転ナデか。漆は黒褐10Y R 3 / 2と茶色いので生漆か。内面は上半にも付き、薄く残るのみなので、掻き出した後と思われる。胎土は灰白5 Y 8 / 1を呈し、石英・長石若干あり。白っぽい粗めの胎土素地がやや異質である。

15は短頸壺片。調整は回転ナデ、外面肩部、図の点線より下は自然釉かかり、上はなし。蓋を重ね焼成か。胎土は灰N 6 / 0を呈し、石英・長石わずかにあり。

16は有脚壺片。外面は、胴部上半回転ナデ、下半は回転ヘラケズリ、脚部は回転ナデ、肩部に降灰痕。胴部内面は回転ナデ後底部にナデの道具をはがした痕、底部に降灰痕。脚部内面は回転ナデ。胎土は灰

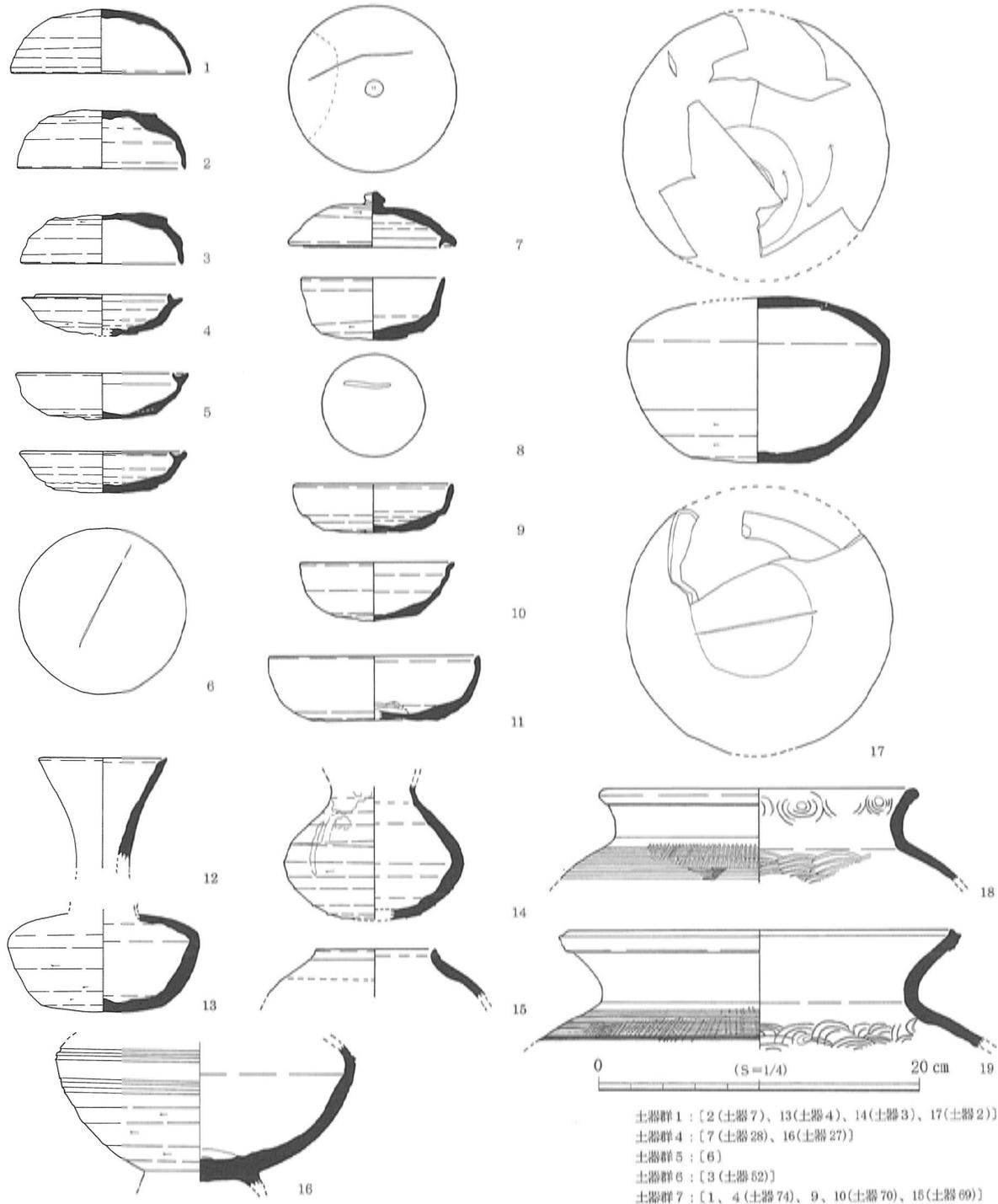
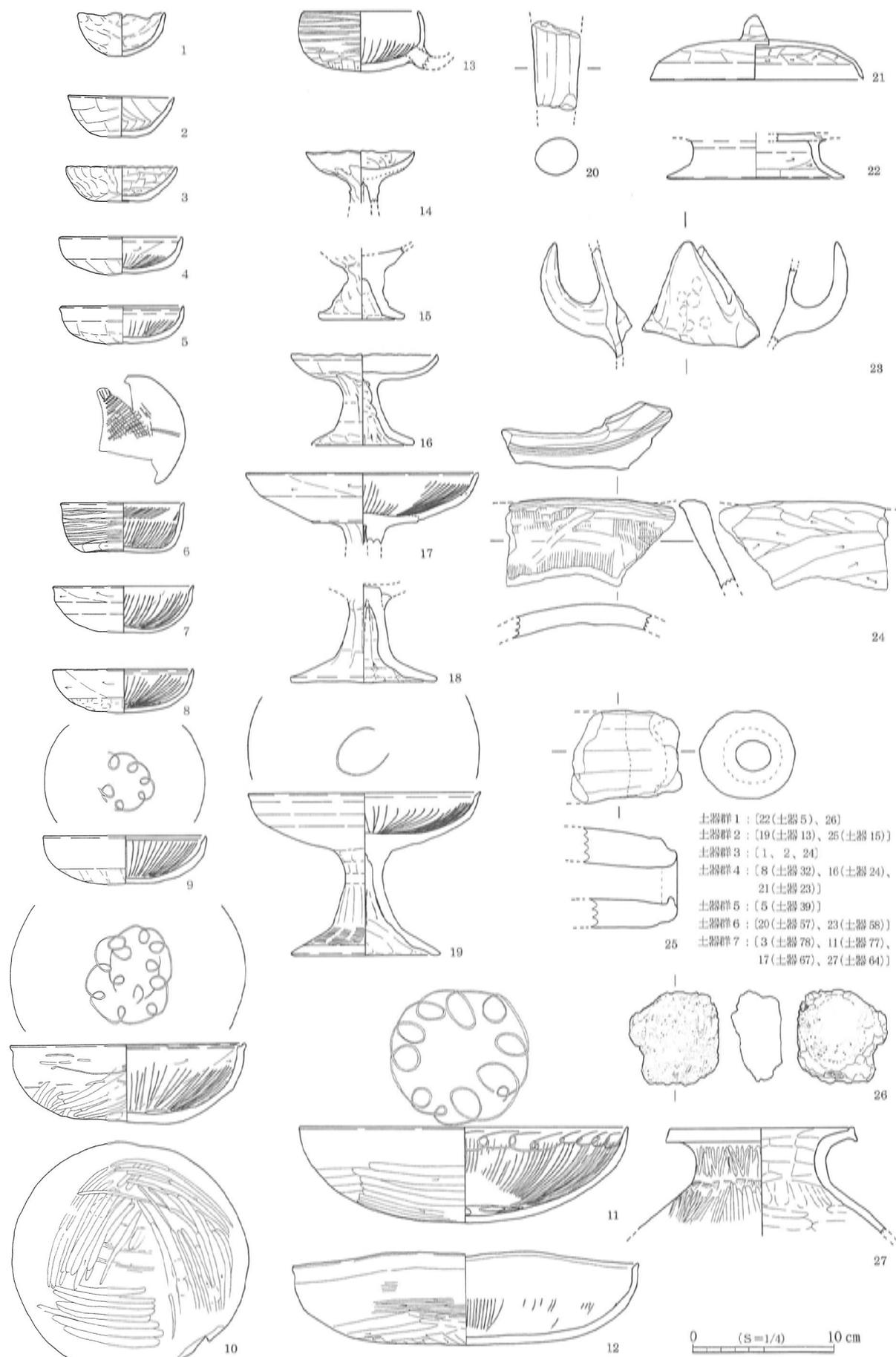


図84 3-450溝出土遺物(その1)



土器群 1 : [22(土器 5)、26]
 土器群 2 : [19(土器 13)、25(土器 15)]
 土器群 3 : [1、2、24]
 土器群 4 : [8(土器 32)、16(土器 24)、
 21(土器 23)]
 土器群 5 : [5(土器 39)]
 土器群 6 : [20(土器 67)、23(土器 68)]
 土器群 7 : [3(土器 78)、11(土器 77)、
 17(土器 67)、27(土器 64)]

図85 3—450溝出土遺物 (その2)

N 6 / 0 を呈し、石英あり、長石・黒色粒若干あり。

17は平瓶。外面は、上部回転ナデ、ただし口縁の付く周辺はそれを中心としたナデ、下部は回転ヘラケズリ、底部にヘラ記号あり、上面では頸部の中心を志向するヘラ沈線1本と、工具のアタリのような短く太い沈線1本。内面は回転ナデ、天井部を閉じた粘土板の段残り、粘土板は不定方向ナデ。胎土は青灰10B G 5 / 1 を呈し、石英あり、長石若干、黒色粒わずかにあり。

18は甕片。外面は、口縁回転ナデ、肩部タタキ後カキメ。内面は、口縁回転ナデだが上半1列にタタキ残る。肩部はタタキ。胎土は灰白5 Y R 7 / 1 を呈し、長石若干あり。

19も甕片。外面は、口縁回転ナデ、肩部タタキ後カキメ。内面は、口縁回転ナデ、肩部タタキ。胎土は灰N 6 / 0 を呈し、長石・石英若干、黒色粒わずかにあり。

図85-1はミニチュア土器。鉢か。調整はユビナデ・ユビオサエ。口縁は調整により波打つ。胎土は橙7.5 Y R 7 / 6 を呈し、赤色粒若干ありの精良な胎土。

2は坏形だが、ミニチュア土器か。口縁は残り悪く、実際は波打つようだ。調整はナデ。胎土は灰白10 Y R 7 / 1 を呈し、赤色粒わずかにありの精良な胎土。

3は法量的には坏であっても良いが、調整からは坏形のミニチュアと思われる。外面は、体部タテユビナデ、底部は無調整に近いが軽い不定方向ナデがまばらに入る。内面は、口縁と屈曲部にユビオサエ後、体部ヨコナデ、底部一定方向ナデ。口縁はユビオサエにより波打つ。胎土はにぶい橙7.5 Y R 7 / 4 を呈し、赤色粒・白色粘土粒わずかにありの精良な胎土。

4は坏。外面は上半ヨコナデ、下半タテナデ。内面は右上になで上げるヨコナデ後暗文。胎土は浅黄橙10 Y R 8 / 3 を呈し、赤色粒・白色粘土粒わずかにありの精良な胎土。

5は坏。4と同法量。外面は、体部はヨコナデ2段、底部一定方向ナデ。内面はヨコナデ後暗文。胎土はにぶい黄橙を呈し、長石わずかにありの精良な胎土。

6も坏。口径は4・5と同じで深いタイプ。外面は、体部、左上になで上げのヨコナデ、屈曲部にヨコケズリ、底部はナデ後一定方向ミガキ、最後に体部にミガキ。内面は、ヨコナデ、上段は右上になで上げ、後暗文。暗文は見込みの格子状を上放射状が切る。胎土はにぶい橙7.5 Y R 7 / 3 を呈し、赤色粒わずかにありの精良な胎土。

7も坏。4～5より一回り口径大きい。外面は、上半ヨコナデ2段、下半は磨滅するがナデか、底部は不定方向ナデか。内面は、右上になで上げのヨコナデ後暗文。胎土はにぶい黄橙10 Y R 7 / 3 を呈し、混和砂粒のない精良な胎土。

8も坏。7と同法量。外面は、上半ヨコナデ、下半は、屈曲部にユビオサエ後、底部から不定方向ナデ。内面はヨコナデ後、底部に平行する幅2mmのミガキ、最後に幅1mmの暗文。胎土は灰白10 Y R 7 / 2 を呈し、混和砂粒のない精良な胎土。

9も坏。7・8より一回り大きい口径。外面は、底部から下半に一定方向ナデ後半ヨコナデ。内面はヨコナデ後暗文。見込みの螺旋状暗文と体部の放射状暗文との間に切り合いなし。胎土は明褐灰5 Y R 7 / 1 を呈し、混和砂粒のない精良な胎土。

10も坏。9よりかなり大きい。外面は体部上半ヨコナデ後、下半ケズリ、そのケズリは、底面に一定方向を入れてから、それを中心として、平行する群を右回りに入れていく、最後に体部にミガキ散在。内面は、ヨコナデ後暗文。暗文は、放射状は左が右を切り、二重螺旋に切られる。二重螺旋は外が内を切る。胎土はにぶい黄橙10 Y R 7 / 3 を呈し、赤色粒・長石・石英・白色粘土粒をわずかに含む精良な

胎土。

11は環形の鉢か、法量的には坏と鉢の間である。外面は、上半ヨコナデ、下半のケズリがそれを切る。内面は、ヨコナデ後暗文。暗文は、放射状を上下が切る、口縁の暗文は、輪が上に来る螺旋を書き、輪の頭に線を加え、楕円が重なるような文様を作る。胎土は灰白10Y R 7 / 2を呈し、赤色粒・白色粘土粒わずかにありの精良な胎土。

12も環形の鉢。11と同法量。口縁は歪む。外面は底部から下半にケズリ後、体部ヨコハケ後ヨコミガキ、最後に口縁ヨコナデ。内面は、磨滅するが、部分的にヨコナデ後暗文が残る。見込みの暗文不明。

13は把手付き坏。外面は、屈曲部ヨコケズリ後底部一定方向ケズリ、体部ヨコナデ、最後にヨコミガキ。内面はヨコナデ後暗文。把手はユビナデ。胎土は灰白10Y R 8 / 1を呈し、石英・赤色粒わずかにありの精良な胎土。

14はミニチュア高坏片。外面はヨコナデ、脚部からタテユビナデで粘土をなで上げる。身部内面はヨコナデ。脚部内面には縦方向の接合痕が残る。胎土は褐灰10Y R 6 / 1を呈し、白色粘土粒わずかにありの精良な胎土。

15もミニチュア高坏片。外面はユビナデ、脚部のものは内面と対応。身部内面は剥離し調整不明。脚部内面は、上端は指先でヨコナデ、その下はタテユビナデ、脚裾はユビオサエ。胎土は灰黄2.5Y 7 / 2を呈し、赤色粒・長石わずかにありの精良な胎土。

16はミニチュア高坏。口縁は波打ち、ナデ前のユビオサエによると思われる。外面は、身部ヨコナデ、脚柱部タテユビナデ、脚裾部ヨコナデ、脚裾端部ヨコユビナデ。身部内面は磨滅するがヨコナデ残る。脚部内面は、上から棒状工具による螺旋状に下がるナデ、その下に粗いタテユビナデ、脚裾部もタテユビナデ。接地部分に平坦面あり。胎土は浅黄橙7.5Y R 8 / 4を呈し、赤色粒・白色粘土粒ありの精良な胎土。

17は高坏片。外面は、身部ヨコナデ、接合部の段より下はタテユビナデ。身部内面はヨコナデ後暗文。脚部内面には絞り痕。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 2を呈し、白色粘土粒若干、赤色粒・黒雲母わずかにありの精良な胎土。

18は高坏脚部片。外面は、脚柱部タテナデ、脚裾部は磨滅で不明。内面は、脚柱部ヨコナデ、脚裾部ユビオサエ・ユビナデ。上端は身部に挿入した形で剥離。胎土は橙5Y R 7 / 6を呈し、白色粘土粒・赤色粒わずかにありの精良な胎土。

19は高坏。外面は、身部上半ヨコナデ、下半はユビナデ・ユビオサエ後粗いヨコナデ、身部と脚部の境はヨコユビナデ、脚柱部はタテユビナデで1状ヨコナデが入る、脚裾部はヨコハケ後端部にヨコナデ。身部内面はヨコナデ後暗文、見込みの暗文は完周しない円形の暗文。脚部内面は、脚柱部軽いヨコナデ、脚裾部はタテユビナデ、接地部分に平坦面あり。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 2を呈し、赤色粒若干、長石・石英わずかにありの精良な胎土。

20は棒状土製品。鑄造関係の部品と思われる。調整はタテナデ。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 3を呈し、石英多し、長石あり、チャート若干あり。

21は蓋。調整は内面天井部が一定方向ナデの他はヨコナデ。胎土は褐灰7.5Y R 4 / 1を呈し、白色粘土粒・赤色粒ありの精良な胎土。微細粒には角閃石もあり。

22は台付き鉢の脚部か。脚部はヨコナデ、身底部は両面一定方向ナデ。胎土は灰白10Y R 7 / 2を呈し、混和砂粒のない精良な胎土。

23は把手だが、附属する器種は不明。把手はユビオサエ後ナデ。体部内面は把手接合の際のユビオサエが残りながらヨコナデ。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 2を呈し、長石・赤色粒・石英わずかにあり。

24は移動式竈掛け口片。外面はタテハケに部分的にヨコナデ。端面は強く面を取るミガキ。内面はナデで煤附着。胎土は7.5Y R 4 / 4を呈し、角閃石多し、石英・長石あり、赤色粒・黒雲母わずかにありの生駒西麓産胎土。

25は轆の羽口片。外面はナデ残り、図右、先端から、黒褐2.5Y 3 / 1を呈し、溶融しガラス化。その左は灰白7.5Y R 8 / 1を呈し、発泡激しい、炉内部分か。その左は灰白2.5Y 7 / 1を呈し、荒れが少ない、炉壁に挿入されていた部分か。内側も被火により、横断面図の点線まで赤変。胎土は石英多し、長石若干あり、赤色粒わずかにあり。

26は椀形鍛冶鉄滓。図の右側は気孔少なく平滑、わずかに炭化物をかむ。

27は弥生土器壺片。外面は、口縁部ヨコナデ後頸部タテミガキ、肩部タテハケ後タテミガキ。内面は口縁～頸部ヨコナデ、頸部直下はタテユビナデ、その下はヨコユビナデ。胎土は褐7.5Y 4 / 4を呈し、角閃石多し、長石あり、石英若干、赤色粒わずかにありの生駒西麓産胎土。

図86-1は小型壺。丸底。外面は、中位に接合痕残り、下半タテナデ、上半ヨコナデ、肩部に最後にユビオサエ二つ。内面は、下半左上がりナナメナデ、上半ヨコナデ。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 2を呈し、長石若干あり、赤色粒・石英・黒雲母わずかにあり。

2も小型壺。外面は、底部不定方向ナデ、胴部はユビオサエ後右上がりナナメナデ、口縁～肩部ヨコナデ。内面はヨコナデ。胎土は浅黄橙10Y R 8 / 3を呈し、長石・赤色粒若干、石英・チャートわずかにありの精良な胎土。

3も小型壺。丸底。底部を別作りしたような接合痕残る。外面は、底部ユビオサエ後タテナデ、接合部ナナメナデ、胴部中位はタタキの平坦面残り、その後左傾タテナデ、肩部～口縁ヨコナデ。内面は、底部一定方向ナデ、接合部から胴部はナナメナデ、肩部～口縁部ヨコナデ。

4は甕片。外面は、口縁部～肩部ヨコナデ、その下はユビオサエ、タタキ、ハケの順、磨滅した部分もタタキの平坦面は残る。内面は、口縁ヨコナデ、胴部上半は肩部にヨコハケ後ヨコナデだがナデの単位見えず、下半はユビオサエ・ユビナデ後ヨコナデでナデの単位見える。炭化物附着なし。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 3を呈し、石英若干、長石・黒雲母・赤色粒わずかにあり。

5も甕片。外面は口縁部～頸部ヨコナデ、胴部タテナデ、一部煤附着。内面は口縁ヨコナデ、胴部ナナメナデ。胎土はにぶい橙5Y R 7 / 4を呈し、長石若干、石英わずかにあり。

6も甕片。外面は、口縁部ヨコナデ、胴部ユビオサエ後ナデ、煤附着。内面は、口縁部～肩部ヨコナデ、その下ナナメナデ。胎土は橙7.5Y 6 / 6を呈し、赤色粒あり、石英・長石わずかにあり。

7も甕片。調整はナデのみ。内面と、外面口縁端部に煤附着。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 2を呈し、赤色粒わずかにあり。

8も甕片。他に同一個体らしき胴部片もあり。外面は口縁部ヨコナデ、胴部タテ～ナナメハケ。内面は口縁ヨコナデ、胴部ナナメナデ。胎土は淡橙5Y R 8 / 4を呈し、赤色粒あり、石英・長石わずかにありの精良な胎土。

9は甕である。外面は、胴部下半ヨコハケ、その上半はヨコユビナデ、タテハケ、タテナデの順に入る。肩部～口縁部ヨコナデ。内面はヨコナデ、胴部下半に炭化物附着。しかし、炭化物は一部破断面にも附着し、外面には煤の附着がない。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 3を呈し、長石若干、石英・赤色粒



図86 3-450溝出土遺物(その3)

わずかにあり。今回の調査では比較的大型の土師器甕になる。

10は羽釜片。外面は、口縁部～齔ヨコナデ、その下タテハケ、齔の下面から下煤附着。内面は、齔接合部分で、タテユビナデ、ヨコハケの順に入れ、齔より下ナナメナデ、上はヨコナデ。胎土はにぶい赤褐5YR4/3を呈し、長石・黒雲母・角閃石あり、石英若干、赤色粒わずかにありの生駒西麓産胎土。

11も羽釜片。後の撰津産羽釜のような形をしており、この時期としては類例の少ないものである。外面は、口縁部～齔ヨコナデ、その下はタテハケ後ナナメナデ。内面はヨコナデ。胎土は灰白10YR8/2を呈し、石英多し、長石・チャート若干あり、赤色粒・黒雲母わずかにあり。

12は浅くて口縁が開く甕の破片か。天地逆の移動式竈の破片にしては薄過ぎる。外面は、口縁端部ヨコナデ、他タテハケ後ナデ散在。内面は、ユビオサエの列が二つ残るがナデ。胎土はにぶい褐7.5YR5/4を呈し、角閃石あり、石英・長石若干あり、黒雲母わずかにありの生駒西麓産胎土。

13は甕片。外面はタテハケ後口縁部ヨコナデ。内面は、ユビオサエ、ヨコハケ、ヨコナデ、口縁部のヨコナデの順に入る。胎土は浅黄橙10YR8/3を呈し、長石・石英わずかにありの精良な胎土。

14は甕底部片。外面はタテハケ後、底部側面ヨコケズリ、底部もヘラケズリ、最後に全面ナデか。内面は、タテナデ、底部はユビオサエ後ナデ。胎土はにぶい黄橙10YR7/3を呈し、赤色粒あり、石英・長石わずかにありの精良な胎土。

3-497溝(図87・表40) 02-2トレンチ西半で、3-376住居と堀田に切られ、短くしか残っていないが、位置と方向から3-446溝とつながっていた可能性が高い。北西側は3-447溝に合流するかも知れない。溝の規模は3-446溝と同じ。出土状況など実測していないが、遺物のみ掲載する。

出土遺物はほとんどが弥生土器だが、1片のみ土師器坏が出土している。弥生土器では長頸壺が突出して多く、その中で生駒西麓産が4割近くあるのが目立つ。集落的というより、調査区の弥生時代井戸

表40 3-497溝 遺物破片数集計表

天別	総数	種別		器種	破片数		型式・部位	破片数		細別	破片数		
		破片数	%		破片数	%		破片数	%		破片数	%	
土器・陶磁器	76	弥生	75	98.7	甕	5	6.7	タタキ	5	100.0	生駒西麓	19	38.0
					壺	65	86.7	長頸壺	50	76.9	生駒西麓	1	50.0
					(生駒西麓)	31	47.7	広口壺	2	3.1			
					鉢	3	4.0						
					器台	1	1.3				生駒西麓	1	100.0
その他		土師器	1	1.3	坏血類	1	100.0						
		石	1										

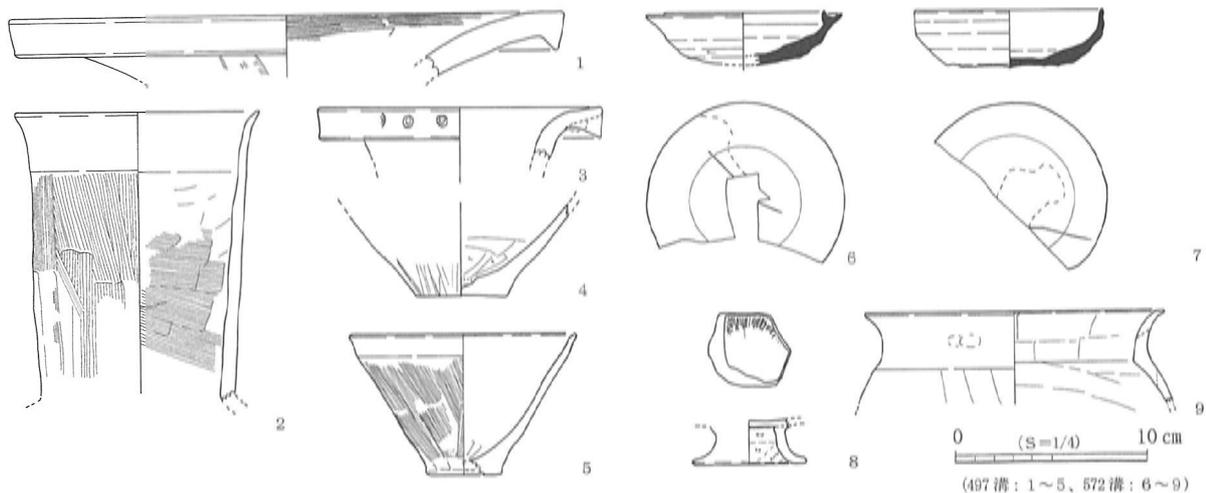


図87 3-497溝・572溝出土遺物

の遺物組成に似ると言える。南西側近くの3-496井戸と関連があるのだろうか。

実測可能な遺物を図87-1~5に掲載する。全て弥生土器である。

1は器台口縁部片。外面は、口縁端面はヨコナデ、体部はタテハケ。内面はヨコハケ。胎土はにぶい黄褐10Y R 5 / 4を呈し、角閃石非常に多し、石英あり、長石若干ありの生駒西麓産胎土。

2は長頸壺片。外面はタテハケ後口縁部ヨコナデ。内面はヨコハケ後上半ヨコナデ。ヨコナデは下ほど弱くなる。胎土はにぶい黄褐10Y R 4 / 3を呈し、角閃石多し、石英・長石あり、黒雲母わずかにありの生駒西麓産胎土。

3は広口壺片。調整はヨコナデ。垂下口縁に二重竹管文。胎土はにぶい黄橙10Y R 6 / 4を呈し、長石・石英若干あり。

4は壺底部片。外面はタテミガキ、底部側面に2本沈線縦に入る。内面は、底部ユビオサエの後、ナメナデ。胎土はオリーブ褐2.5Y 4 / 3を呈し、角閃石非常に多し、石英・長石あり、黒雲母わずかにありの生駒西麓産胎土。

5は鉢。外面は、底部側面に板状工具によるオサエ残る、体部はタテハケ、後口縁部ヨコナデ。内面は磨滅で最終調整不明だが、底部に工具痕残り、ナメにナデ上げるか。体部にはタテユビナデ残る。口縁部はヨコユビナデか。胎土は淡黄2.5Y 8 / 3を呈し、長石わずかにあり。

3-515溝(図88・89・表41) 02-2トレンチ西半で、3-建物4~6の下に走る、不定形で浅い溝である。人為的なものかも疑問である。浸蝕痕のようなものかもしれない。遺物から飛鳥時代に埋められた事が分かるのみである。重複する全ての遺構に切られる。

遺物の出土状況は、浅い事もあるだろうが、底に付くものが多い。平面的には溝の南北2群に集中する。南の土器群1は弥生土器ばかりである。北の土器群2には土師器・須恵器もある。

弥生土器では壺が突出して多く、なかでも長頸壺が主体のようである。土師器は調理具がやや少ないが、これといった特色はない。須恵器は全体量が少ないとは言える。

土師器・須恵器から見れば飛鳥時代前半。弥生土器群は河内V-2~3様式頃か。

図89に実測可能なものを示す。1~7は土師器、9~16は弥生土器。

1は坏。外面は上半ヨコナデの他、器壁剥落のため不明。内面磨滅のため調整不明。胎土は浅黄橙7.5Y R 8 / 6を呈し、赤色粒・長石をわずかに含む精良な胎土。

2も坏。外面は上半ヨコナデの他調整不明。内面はヨコナデ後暗文。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 3を呈し、長石わずかにありの精良な胎土。

3は高坏身部片。外面は、上半ヨコナデ、中位に1列ユビオサエ残り、下部は磨滅するがナデか。内面はヨコナデ後暗文。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 4を呈し、長石・赤色粒わずかにありの精良な胎土。

4は高坏脚部片。外面は、脚柱部絞り痕残りナデ、脚裾部はタテハケ後ヨコナデ。内面は、脚柱部絞り痕残り、指の入る範囲で軽くヨコナデ、脚裾部は上からユビオサエ・タテユビナデ・ユビオサエ。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 3を呈し、赤色粒わずかにありの精良な胎土。

5はガラス小玉鋳型片。二次的被火か器面荒れるが、上面はナデか。芯持ち孔は貫通し径約0.5mm、鋳型穴は径5mm、深さ3mm。胎土は橙7.5Y R 6 / 6を呈し、混和砂粒なし。

6もガラス小玉鋳型片。二次的被火か器面荒れ、調整不明。芯持ち孔・鋳型穴の状況は5に同じ。胎土は橙10Y R 6 / 6を呈し、長石・石英若干あり。微細粒に黒雲母もあり。

7は把手片。附属する器種は不分明だが、甌か。調整はナデ。胎土は浅黄橙7.5Y R 8 / 6を呈し、

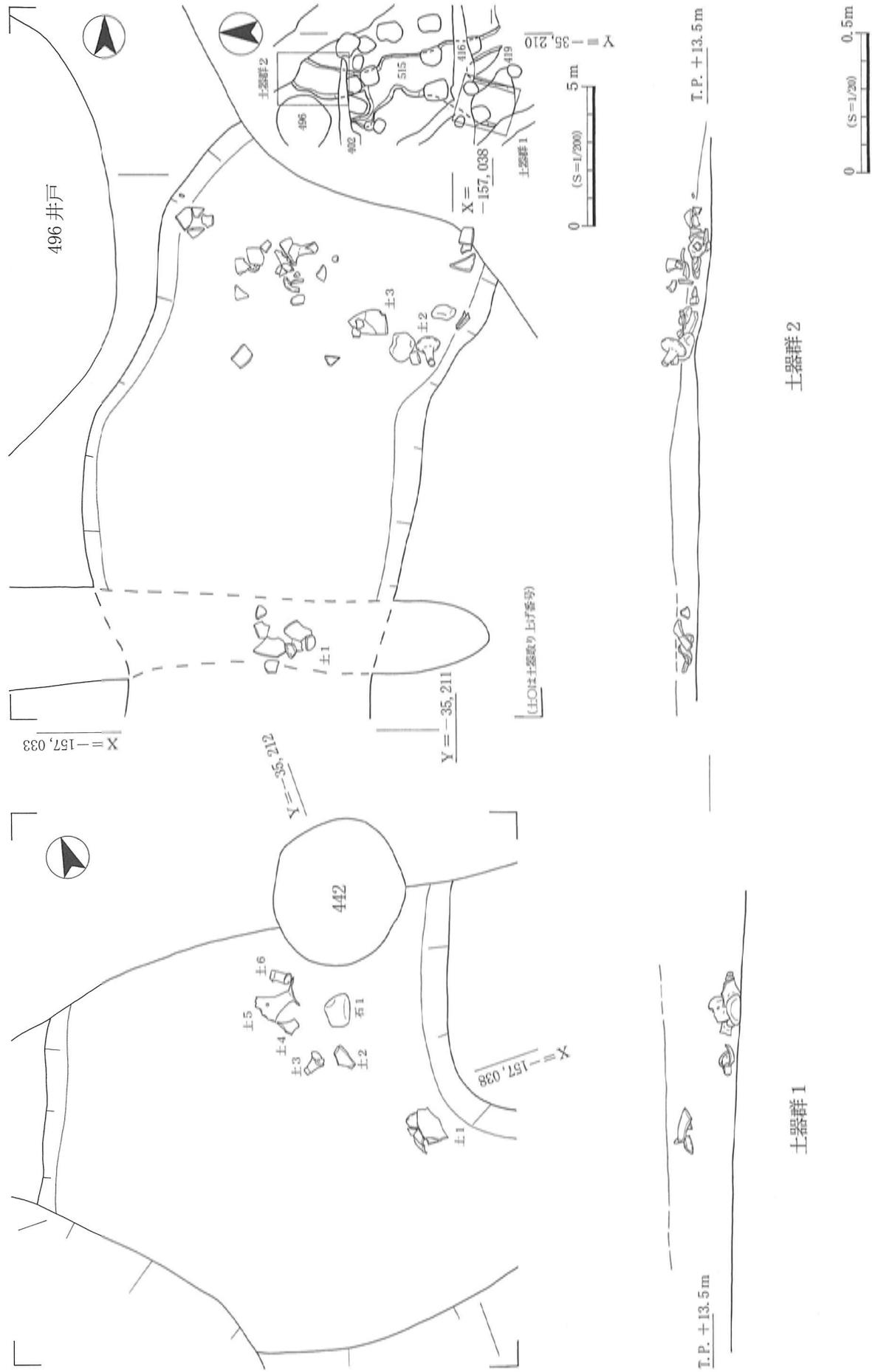


図88 3-515溝出土状況

長石・石英わずかにありの精良な胎土。

8は弥生土器ではないかと思われるが、器種が不明の特異な破片である。平面形は直線的2辺と弧状の2辺が組み合わさるような形か。下の剥離痕はそこで平底になって終わるか、段が付いて下に伸びる

表41 3-515溝 遺物破片数集計表

大別	種別	破片数		器種	破片数		型式・部位		細別							
		破片数	%		破片数	%	破片数	%	破片数	%						
土器・陶磁器	弥生	429	338	78.8	甕	49	14.5	夕タキ	48	98.0						
					(生駒西麓)	24	49.0	底部	1	2.0						
					壺	139	41.1	長頸壺	37	26.6	生駒西麓	9	24.3			
					(生駒西麓)	30	21.6	広口壺	4	2.9	生駒西麓	1	25.0			
								底部	8	5.8	生駒西麓	2	25.0			
					鉢	1	0.3									
					高坏	31	9.2				生駒西麓	6	19.4			
					甌	1	0.3				生駒西麓	1	100.0			
					土師器	82	19.1	甕	9	11.0						
								羽釜	9	11.0				非生駒	1	11.1
								甌	2	2.4						
								鉢	8	9.8						
								高坏	15	18.3	脚部	1	6.7			
								坏皿類	23	28.0	皿	2	8.7			
								埴型	1	1.2						
								甕	2	22.2						
								壺	3	33.3	長頸壺	1	33.3			
								高坏	2	22.2	提瓶	2	66.7			
			坏	1	11.1											
その他	サヌカイト	1		石	6											

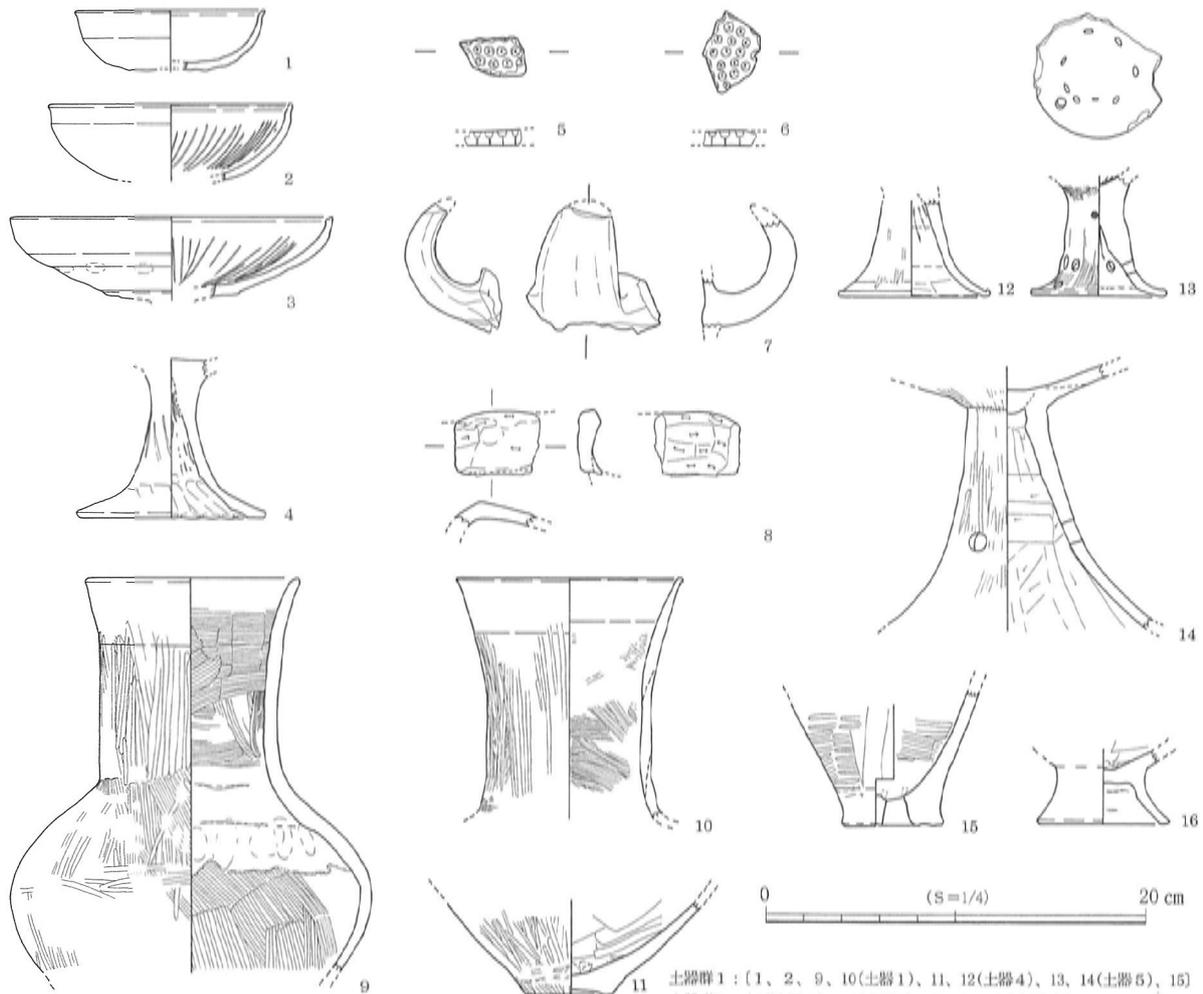


図89 3-515溝出土遺物

かである。調整は板状工具によるナデ。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 2を呈し、長石あり、石英・赤色粒わずかにあり。

9は長頸壺。外面は、タテハケ後タテミガキが基本で、その後口縁ヨコナデ、胴部最大形部分ヨコミガキ。内面は、頸部ヨコハケで一部タテハケ混じる、後口縁ヨコナデ、肩部はユビオサエ・タテユビナデ後ヨコナデで接合痕残る、それ以下はタテ～ナナメハケ。胎土はオリーブ褐2.5Y 4 / 4を呈し、角閃石多し、石英・長石あり、赤色粒わずかにありの生駒西麓産胎土。

10も長頸壺片。外面は、タテハケ後タテミガキ、最後に口縁ヨコナデ。内面はヨコ～ナナメナデ後、上半ヨコナデ。胎土はにぶい黄橙10Y R 6 / 3を呈し、石英・長石あり。

11は壺底部片。外面は一部タタキ残るがタテミガキ、底部はユビナデ。内面は、底部ツブシ後右上がりナナメナデ。胎土はにぶい黄褐10Y R 4 / 3を呈し、角閃石多し、石英あり、長石わずかにありの生駒西麓産胎土。

12は高坏脚部片。外面は磨滅するが、ヨコナデ後タテミガキか。内面は、脚柱部下半ヨコユビナデ、脚裾部ヨコナデ。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 3を呈し、石英あり、長石わずかにあり。

13も高坏脚部片。外面はタテハケ後脚柱部ヨコナデ。身部内面は工具のアタリ残り、左上がりナナメナデか。脚部内面は、上部絞り痕のみ、下部接合痕残しヨコナデ。脚柱部上部に未完通の竹管刺突1個、下部で1周並ぶ透かし穴は七方透かし、その下に透かし穴1個。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 3を呈し、長石・石英あり、角閃石わずかにあり。

14も高坏脚部片。外面はタテミガキ、身部のミガキが脚部のを切る。身部内面は器表剥離調整不明。脚部内面は、上部ヨコナデ、下部ケズリ。三方透かし。胎土はにぶい黄褐10Y R 5 / 4を呈し、角閃石非常に多し、石英多し、長石ありの生駒西麓産胎土。

15は甑底部片。外面はタタキ後一部タテナデ、底部側面ヨコナデ。内面は、底部ツブシ後穿孔か、上にヨコハケあり、その間をヨコナデが消す。胎土は明褐7.5Y 5 / 6を呈し、角閃石多し、長石・石英ありの生駒西麓産胎土。

16は台付き鉢脚部片か。外面はタテナデ。身部内面は底部ツブシ後右上がりナナメナデ。脚部内面は軽いヨコナデ。胎土はにぶい黄褐10Y R 5 / 4を呈し、角閃石多し、長石あり、石英若干ありの生駒西麓産胎土。

3-572溝（図87-6～9・表42） 02-2トレンチ東半の北東側で、02-1トレンチの3-154溝と4m強の間をあけて平行する溝である。残りの良い所で幅1m前後、深さ30cmほど。N23°Wを指向する。底面のレベルは、多少の凹凸はあるが、南東側がT.P.+13.35mほど、北西側がT.P.+13.20mほどなので北西にわずかに傾斜しているとしても良いだろう。

表42 3-572溝 遺物破片数集計表

大別	総数	種別		器種		型式・部位		細別					
		破片数	%	破片数	%	破片数	%	破片数	%				
土器・陶磁器	39	弥生土師器	1	2.6	甕	6	25.0	皿	2	22.2			
											鉢	2	8.3
		須恵器	14	35.9	高坏	1	4.2	坏血類	9	37.5			
					壺	1	7.1						
					壺	1	7.1						
		その他	1	木製品	1	石	3	Ⅲ形式	5	71.4	身	1	20.0
											蓋	4	80.0

遺物はさほど多くはなく、散在した状態で出土した。出土状況は実測していない。弥生土器がほとんどない他は、数が少なくとも組成上目だった特色はない。飛鳥Ⅱ期頃か。図87-6～9に実測可能なものを示す。

図87-6は須恵器蓋坏身。外面は、体部回転ナデ、その下に回転ヘラケズリ、底部は回転ヘラ切り。降灰痕が図下側の点線より右側のみにある。底部ヘラ記号あり。内面は、回転ナデ後底部一定方向ナデ。胎土は青灰5B6/1を呈し、石英・長石若干あり。

7は須恵器坏身。外面は、屈曲部回転ヘラケズリ後、その部分も含め体部回転ナデ、底部は周縁に回転ヘラ切り入るが、中心は無調整。底部にヘラ記号あり。底部、図下の点線部分に煤附着。内面は、回転ナデ後底部一定方向ナデ。胎土は灰N5/0を呈し、黒色粒あり、長石・石英わずかにあり。石英粒は粗く極粗砂大。

8は土師器台付き坏の脚部片か。外面はヨコナデ。身部内面はヨコナデ後暗文。脚部内面はヨコナデで下端のナデはなで下ろし、接地部分に平坦面あり。胎土は灰白10YR8/2を呈し、赤色粒わずかにありの精良な胎土。

9は土師器甕片。外面は、口縁ユビオサエ一部残るがヨコナデ、胴部はタテナデ。内面はヨコナデ。内外面とも煤附着。胎土は灰黄褐10YR6/2を呈し、長石・赤色粒若干ありの粗製胎土。

3-736・4-205・287溝（図90～98・表43～45） トレンチ毎に遺構番号を振ってしまったが、一つの溝である。02-2トレンチ東半の南東部から02-3-3トレンチ東側まで走り、4-285溝に交わる。北東側は現代建物基礎にあたり、その続きは検出できなかった。E31°Nを指向する直線的な溝である。残りの良い部分で幅1.9mほどを測るが、これが本来のものであろう。深さは20～30cmほど。底のレベルで見ると、あまり凹凸はなく、北東側がT.P.+13.3m前後、南西側がT.P.+13.1m前後と、緩やかに南西側に傾斜しているようである。断面形は3-736部分では溝の肩が浅い段を成す二段皿状の部分が多いが、4-287部分では逆台形を呈する。埋土は上下2層に分かれ、下層はしまりの悪い粘質土が薄くあり、上層はブロック土があり、人為的埋土と思われる。

遺物は、底部や、下層にあるものもあるが、多くは上層の中に入り浮く。かなり大きな石も浮いた状態にあったので、人為的に埋める過程でブロック土と共に投棄されたものと思われる。石が多いのが特徴だが、石も土器も特に集中する事なく、散在して出土した。

土器の組成を見ると、部分によって若干変化がある。弥生時代遺構が集中する部分に近い4-287部分では弥生土器が3割近くあるのに対し、そこから遠い3-736部分は5%にも満たない。弥生土器ではやはり壺が多い。土師器と須恵器の割合は4対1ほどである。各々の器種構成も今回の調査では一般的なものである。石に関しては砂岩などの自然礫も多かったが、凝灰岩に関しては加工されたものかどうか分からないものがあった。ノミ痕などないが、仕上げられたものの破片の可能性も考えられる。他に、木製品で櫛や玉があるのが注目できる。遺物の示す時期としては飛鳥Ⅱ期に限定できる。

石に関しては加工品の可能性のあるものを、土器と木製品は実測可能なものを掲載した。図95は土師器、図96は1～12が須恵器、13～17が木器、図97・98は石である。

図95-1は坏。外面は体部下半に2列にユビオサエが入った後、口縁部ヨコナデ、下部は方向不明のナデ。内面は、体部ヨコナデ、底部一定方向ナデ。胎土はにぶい橙5YR7/4を呈し、石英・赤色粒・長石わずかにありの精良な胎土。

2も坏。口径は1とほぼ同じだがやや浅いタイプ。外面は体部ヨコナデ2条、屈曲部やや右下がりの

ヨコナデ、底部は一定方向ナデ。内面はヨコナデ後暗文。暗文は左が右を切る。胎土は橙5YR6/6を呈し、長石・赤色粒わずかにありの精良な胎土。

3も坏。1・2より一回り口径の大きなタイプ。外面は、体部ヨコナデ、下部は磨滅するが粗いヨコナデか。内面はヨコナデ後暗文だが、下半磨滅、使用痕か。胎土は灰白2.5Y8/1を呈し、長石・石英わずかにあり、チャート1粒ありの精良な胎土。

表43 3-736溝 遺物破片数集計表

大別	種別	破片数	%	器種	破片数	%	型式・部位		細別			
							破片数	%	破片数	%		
土器・陶磁器	弥生	6	4.1	甕	2	33.3	タタキ	2	100.0			
				(生駒西麓)	2	100.0						
	土師器	118	79.7	壺	1	16.7						
				高坏	1	16.7						
				甕	25	21.2						
				羽釜	17	14.4						
				甌	1	0.8						
				壺	10	8.5	小型壺	9	90.0			
				鉢	26	22.0						
				高坏	4	3.4	脚部	1	25.0			
	須恵器	24	16.2	坏血類	23	19.5	ミニチュア	3	75.0			
				甕	31	129.2	皿	2	8.7			
				壺	6	25.0	口縁	7	22.6			
				坏	15	62.5	有脚	1	16.7			
その他	木製品	2	炭	1	石	14	蓋	2	33.3	身	7	77.8
							II形式	9	60.0	蓋	2	22.2

表44 4-205溝 遺物破片数集計表

大別	種別	破片数	%	器種	破片数	%	型式・部位		細別		
							破片数	%	破片数	%	
土器・陶磁器	弥生	10	5.6	高坏	1	10.0					
				(生駒小片)	4						
	土師器	145	81.9	甕	27	18.6					
				羽釜	6	4.1					
				壺	1	0.7					
				鉢	5	3.4					
				高坏	3	2.1	ミニチュア	3	100.0		
				坏血類	12	8.3					
	須恵器	22	12.4	甕	13	59.1					
				壺	5	22.7					
坏				2	9.1	III形式	2	100.0	身	2	100.0
その他	石	12									

表45 4-287溝 遺物破片数集計表

大別	種別	破片数	%	器種	破片数	%	型式・部位		細別				
							破片数	%	破片数	%			
土器・陶磁器	弥生	60	27.1	甕	9	15.0	タタキ	7	77.8	生駒西麓	5	71.4	
				(生駒小片)	12					生駒西麓	3	100.0	
				壺	12	20.0	長頸壺	3	25.0	生駒西麓	3	100.0	
				(生駒西麓)	6	50.0	広口壺	3	25.0	生駒西麓	1	50.0	
	土師器	129	58.4	高坏	1	1.7	底部	2	16.7				
				甕	21	16.3							
				羽釜	8	6.2							
				鉢	27	20.9							
				高坏	8	6.2	脚部	1	12.5				
				坏血類	24	18.6	ミニチュア	3	37.5				
				須恵器	32	14.5	甕	15	46.9				
							壺	8	25.0	II形式	4	50.0	身
	坏	8	25.0				III形式	3	37.5	身	1	33.3	
									蓋	2	66.7		
	その他	瓦	2	平	1		土師質	1					
				丸	1		須恵質	1					
				木製品	4		石製品	1		石	31		

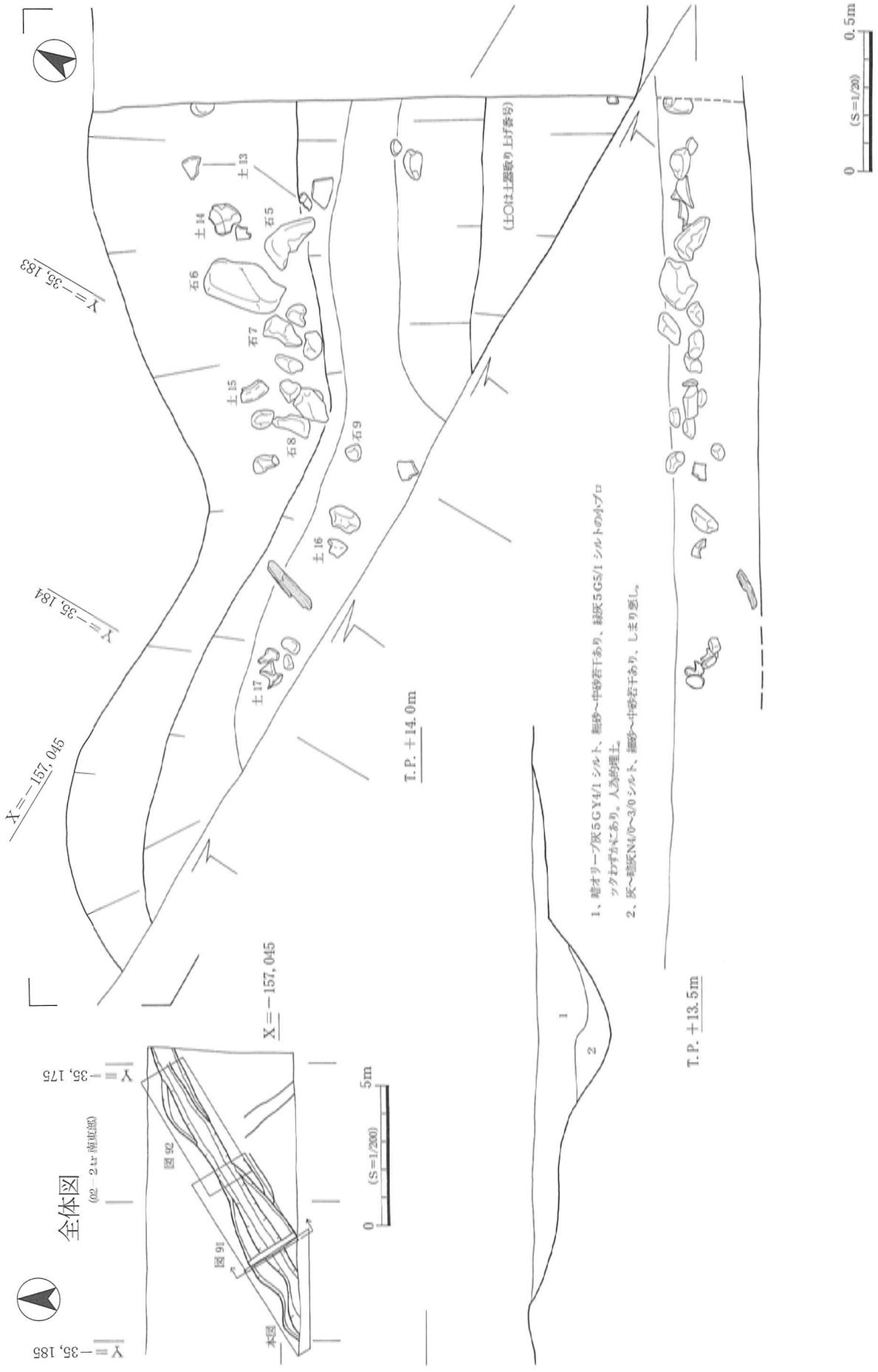


図90 3-736溝全体・断面・出土状況(その1)

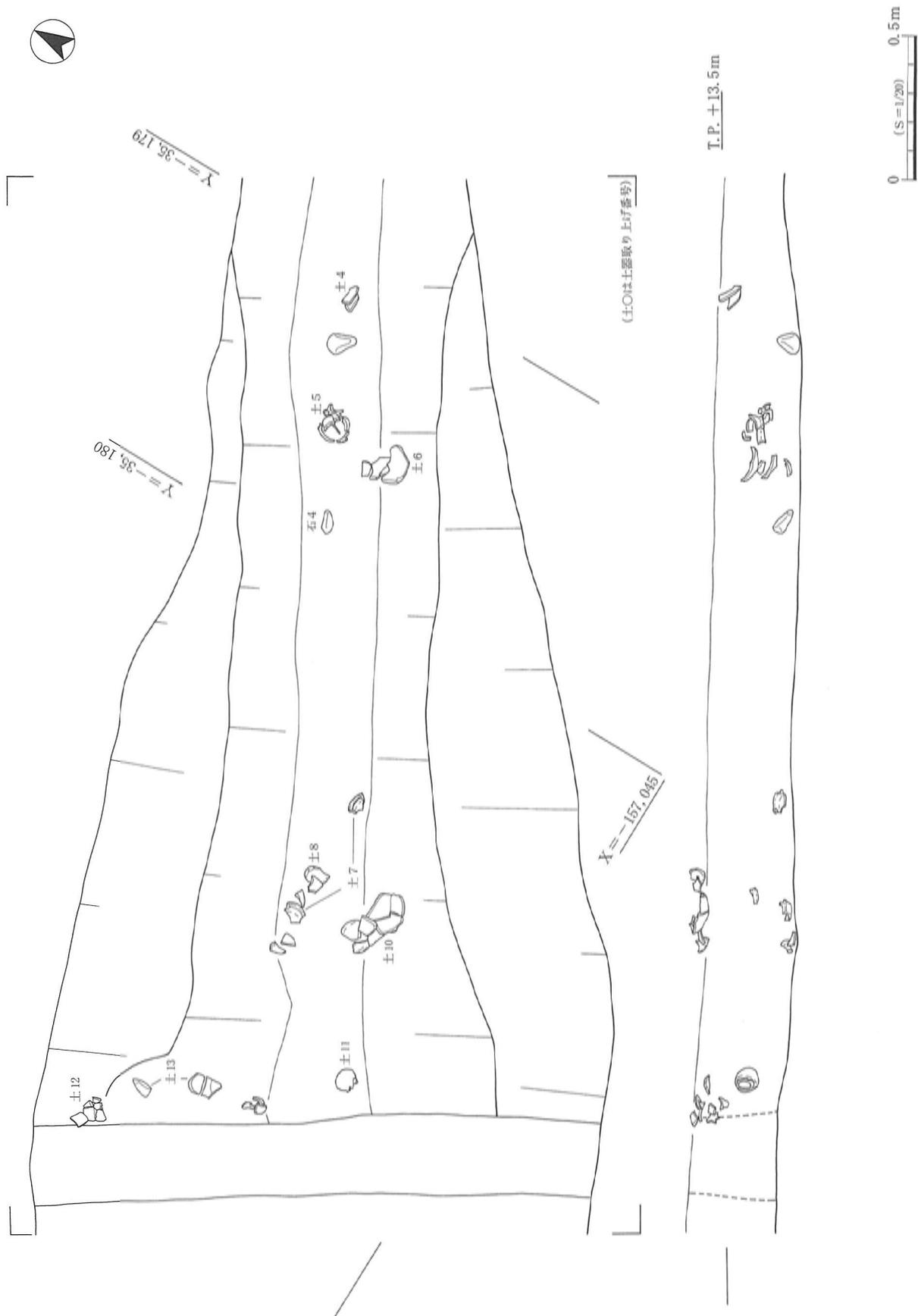


図91 3-736溝出土状況 (その2)

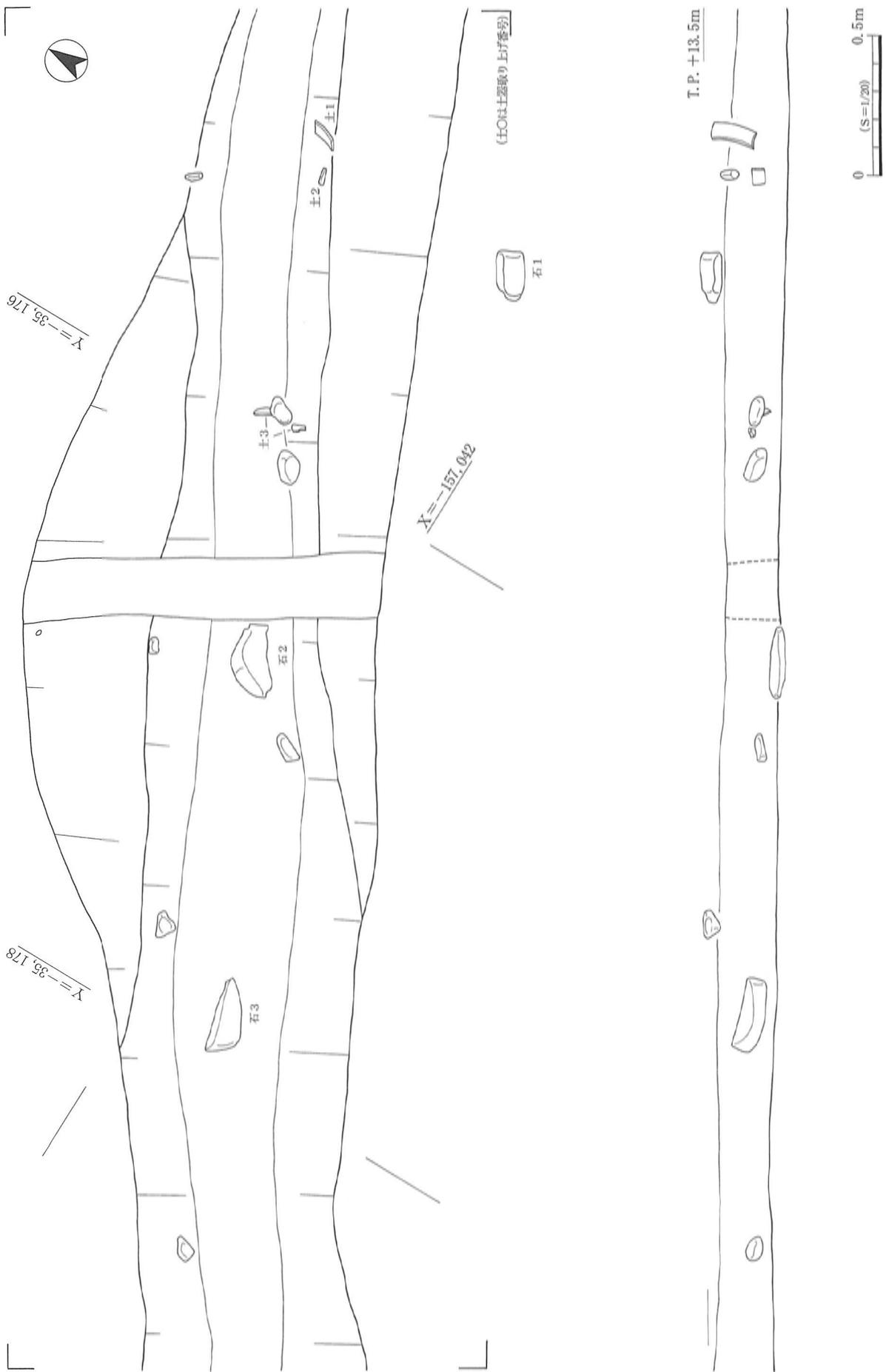


図92 3-736溝出土状況 (その3)

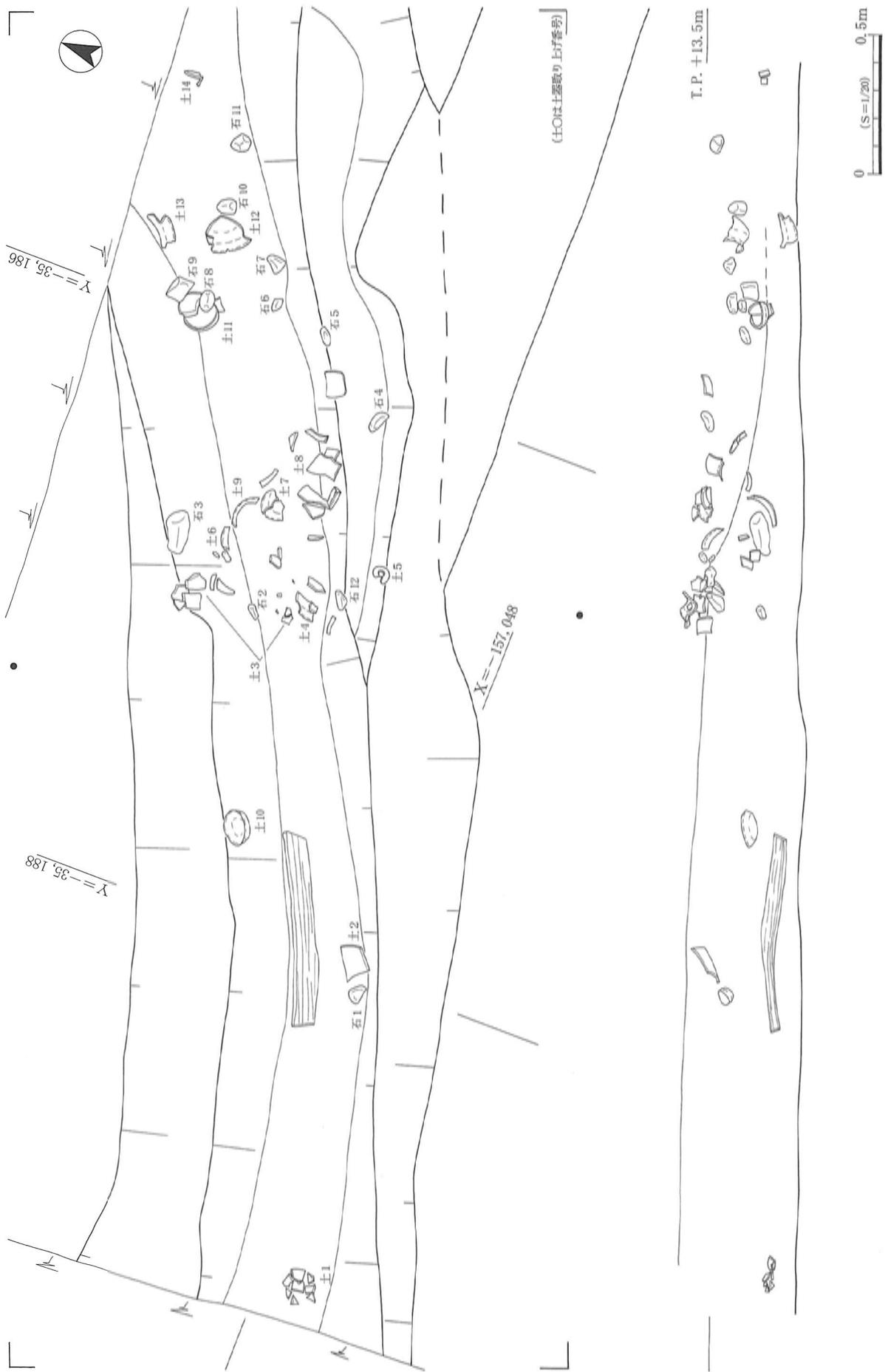


图93 4-205溝出土状況

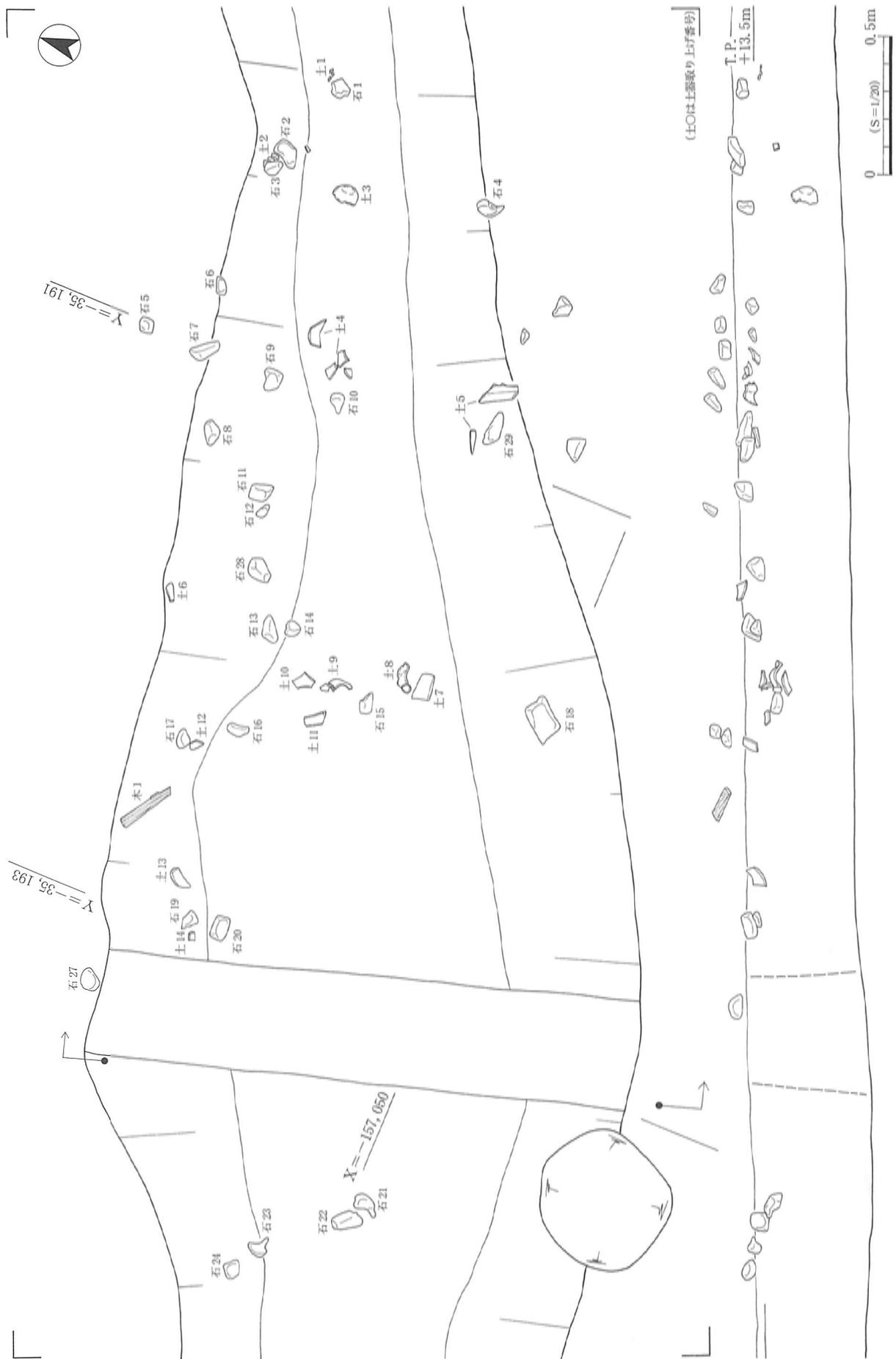


图94 4-287溝出土状況

4も坏。3と口径差2.4cmあるので、間にもう1型式入るかもしれない。外面は、体部上半右上になで上げるヨコナデ、下半から底部はユビオサエ残しながらナデ。内面はヨコナデ後暗文。暗文は見込みの螺旋状が体部の放射状を切る。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 2を呈し、混和砂粒のない精良な胎土。

5も坏。4と同法量タイプ。外面は、口縁部ヨコナデ、以下は軽いナデか。内面も同じ。内面やや磨滅し暗文の有無不明。胎土はにぶい黄橙10Y R 6 / 3を呈し、石英・長石わずかにありの精良な胎土。

6も坏。4・5と口径同じでやや深いタイプ。外面は、口縁部ヨコナデ、下部はユビオサエ後ナデ。内面は、磨滅強いがヨコナデ後ナデか。胎土は明褐灰7.5Y R 7 / 2を呈し、赤色粒ありの精良な胎土。

7も坏。6よりかなり大きい。外面は、ナデ後体部上半にヨコミガキ。内面はヨコナデ後暗文。暗文同士の切り合いは不明。胎土は灰白10Y R 7 / 1を呈し、混和砂粒のない精良な胎土。

8はミニチュア高坏片。磨滅のため、外面のユビオサエと接合痕のみ残る。口縁は残り悪く、本来は波打っていたと思われる。胎土は浅黄橙7.5Y R 8 / 4を呈し、赤色粒若干ありの精良な胎土。

9もミニチュア高坏片。外面はユビオサエ2列で端部はヨコナデ。内面は、脚柱部はヨコユビナデ、脚裾部はユビオサエ2列。胎土は灰白10Y R 8 / 1を呈し、混和砂粒のない精良な胎土。

10もミニチュア高坏片。外面は、脚柱部にユビオサエ、その上下にタテユビナデ。身部内面はナデか。脚部内面はユビオサエ、端部接地部分に平坦面あり。外面親指、内面人差し指での調整か。胎土は浅黄橙7.5Y R 8 / 3を呈し、長石・白雲母を若干含む精良な胎土。

11もミニチュア高坏片。調整はユビナデ・ユビオサエ、外面親指、内面人差し指によるか。胎土は浅黄橙7.5Y R 8 / 6を呈し、長石・石英・白雲母わずかにありの精良な胎土。

12もミニチュア高坏。外面はタテユビナデ。内面は、脚柱部螺旋状にユビナデ、脚裾部ヨコユビナデ。身部内面は左上がりハケ後ナデ。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 3を呈し、長石・赤色粒・角閃石・チャートわずかにありの精良な胎土。

13は高坏片。外面は、身部はユビナデ、脚部はタテナデ後タテミガキか。身部内面はナデ後暗文。脚部内面はナデか。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 2を呈し、長石若干ありの精良な胎土。

14はミニチュア壺。外面は、頸部ユビオサエ後、全体にヨコナデ、底部は不定方向ナデ。内面は、胴部最大形部分に接合痕あり、それより下はユビオサエ、上はヨコナデ。胎土は浅黄橙10Y R 8 / 3を呈し、石英・長石わずかにありの精良な胎土。

15もミニチュア壺。外面、胴部下半の接合痕は指の幅単位で垂れ下がるのでタテユビナデか、その凹部にタテハケ残り、最後にヨコナデ。内面は、胴部最大径部分にユビオサエ列、肩部にユビナデ、最後にヨコナデ。胎土は浅黄橙10Y R 8 / 3を呈し、石英・長石わずかにありの精良な胎土。

16は小型壺。外面は、胴部下半にユビオサエ後底部に荒いナデ、その後胴部にナメナデ、最後に口縁部ヨコナデ。内面は、胴部ナメナデ、口縁～肩部ナメナデ。接合痕を見ると、底部から螺旋状に巻き上げている。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 2を呈し、石英・長石若干、白雲母わずかにあり。頸部があまりしまらず、胴部もやや浅めである。

17は壺。長頸壺か。漆壺である。内面はほとんど漆附着、底部が厚い。頸部の破断面から、外面の一部まで附着。外面は、底部一定方向ケズリ、胴部下半ヨコケズリ、頭をそろえた5単位で1周、肩部はヨコミガキ、頸部はタテミガキか。内面は、頸部ナデで、その直下にユビオサエあるの分かるのみ。胎土は橙5Y R 7 / 6を呈し、白色粘土粒多し、長石・赤色粒・石英若干ありの精良な胎土。漆壺として搬入されたものとなれば、河内産ではない可能性もあるが胎土などに特異な点はない。

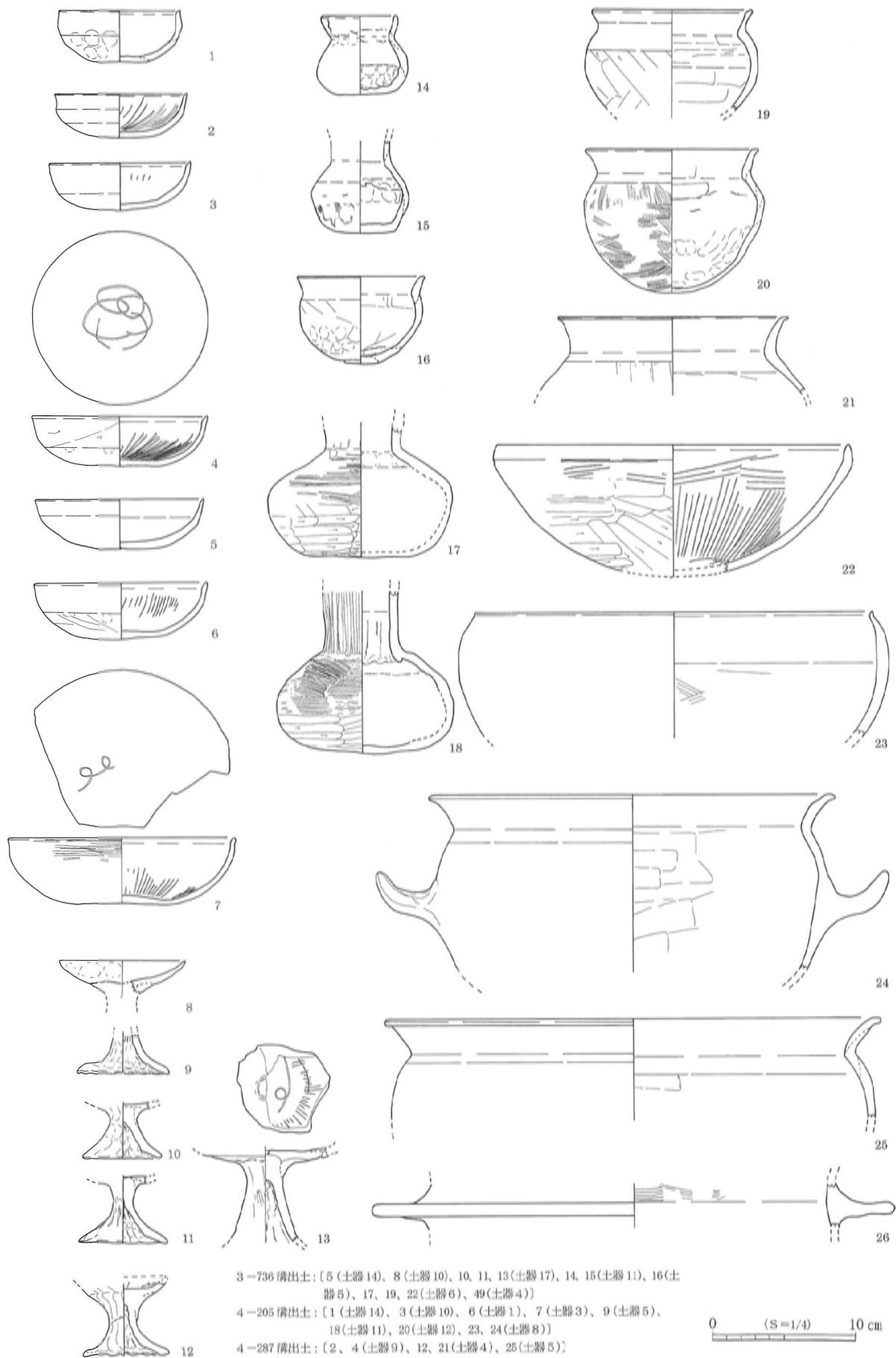


図95 3-736溝・4-205溝・4-287溝(同一遺構)出土遺物(その1)

18も壺。外面は、底部一定方向ケズリ、胴部下半ヨコケズリ、頭をそろえたケズリの単位が5単位で1周する、肩部には左右往復しながらミガキ下ろすミガキの単位が、右が左を切り、5単位で1周、その後、胴部最大径部分にヨコミガキ、頸部にはヨコナデ、その上はタテミガキ。内面は、頸部と胴部の接合部分にユビオサエ残しながらヨコナデ、底部は一定方向ナデ。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 4を呈し、赤色粒・石英・チャート・長石わずかにありの精良な胎土。

19は小型甕。外面は、胴部ナメナデ後口縁～肩部ヨコナデ、下半煤附着し器壁荒れる。内面はヨコナデだが、方向・切り合いが胴部最大径部分で上下反転する。胎土は灰白10Y R 7 / 1を呈し、石英・長石・赤色粒わずかにあり。

20も小型甕。外面は、胴部上半にタテハケ、底部に一定方向ハケを入れた後、その間に右下がりのナメハケを入れる、さらにヨコハケが散在する、口縁部～頸部はヨコナデ。内面は、胴部下半はユビオサエ・タテユビナデ、上半はヨコユビナデ、口縁部はヨコナデ、底部に炭化物附着。胎土は褐灰10Y R 5 / 1を呈し、赤色粒若干、長石わずかにありの精良な胎土。

21も甕片。外面は、口縁部～頸部ヨコナデ、肩部タテハケ後ヨコナデ。内面はヨコナデ。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 3を呈し、長石若干、石英わずかにありの精良な胎土。

22は鉢。外面は、下半ケズリ、上半ヨコナデ後暗文。内面はヨコナデ後暗文、暗文は見込みの螺旋状を放射状が切り、放射状を上横位が切る。内外面の暗文は同一工具による。胎土は明褐灰7.5Y R 7 / 2を呈し、長石・赤色粒あり、石英若干ありの精良な胎土。

23は鉄鉢形鉢片。外面は、上部はヨコナデだが、下部は器表剥離調整不明。内面は、上部ヨコナデ、下部ハケ。胎土は灰白5Y 7 / 2を呈し、赤色粒若干ありの精良な胎土。

24は鍋と分類される事もあるが、今回の報告では把手付き鉢片とする。外面はヨコナデ、把手もナデ。内面もヨコナデ。胎土は浅黄2.5Y 7 / 3を呈し、混和砂粒のない精良な胎土。

25も鉢片とする。調整はヨコナデ。内面にのみ煤附着。胎土はにぶい橙10Y R 7 / 2を呈し、混和砂粒のない精良な胎土。

26は羽釜鏝片。外面はヨコナデ、下面に煤附着。内面はヨコハケ後、下部にナデ。胎土はにぶい黄褐10Y R 4 / 3を呈し、石英・長石多し、角閃石あり、白雲母わずかにありの生駒西麓産胎土。

図96-1は蓋坏身。外面は、体部回転ナデ、下に回転ヘラケズリ1条をはさんで底部回転ヘラ切り。内面は回転ナデ後底部一定方向ナデ。胎土は青灰5PB 6 / 1を呈し、石英・黒色粒あり、長石若干あり。石英粒は粗く極粗砂大。

2も蓋坏身。外面は、体部回転ナデ、屈曲部回転ヘラケズリ、底部回転ヘラ切り。内面は、回転ナデ後底部一定方向ナデ。胎土は暗青灰5PB 4 / 1を呈し、石英若干あり。

3も蓋坏身。外面は、体部回転ナデ、その下に回転ヘラケズリ1条、底部は粗いナデでヘラ記号あり。内面は回転ナデ後底部一定方向ナデで、薄く生漆附着。漆パレットに転用か。胎土は灰白N 7 / 0を呈し、チャート・石英・長石わずかにあり。

4は坏蓋。外面は、体部とつまみ周辺は回転ナデ、その間に回転ヘラケズリ、降灰痕あり。内面は回転ナデ後天井部一定方向ナデ。胎土は青灰5BG 5 / 1を呈し、石英あり、長石・黒色粒若干あり。石英粒は粗く極粗砂大。

5は坏身。外面は、体部回転ナデ、屈曲部回転ヘラケズリ後ヨコナデ、底部は植物茎圧痕あり、粘土塊附着、粗いナデ。内面は回転ナデ後底部一定方向ナデ。胎土は灰N 5 / 0を呈し、長石・石英・黒色

粒わずかにあり。

6も坏身。外面は、体部回転ナデ、屈曲部回転ヘラケズリ後回転ナデ、底部は周縁に回転ヘラ切りで、中心は一定方向ナデ。内面は回転ナデ後底部一定方向ナデ。底部膨れるのは轆轤からははずす時の変形か。胎土は灰白2.5Y 7 / 1を呈し、長石若干あり、白色粘土粒わずかにあり。

7は平瓶片。口縁及びその周辺はヨコナデ。胴部外面は回転ナデ。胴部内面は、側面回転ナデ、天井部の板状粘土で閉じた部分はユビオサエ後一定方向ナデ。胎土は青灰10B G 5 / 1を呈し、石英・長石・黒色粒あり。石英粒は粗く極粗砂大かそれより大きいものもある。

8は壺胴部。外面は、上半回転ナデ、下半回転ヘラケズリ。内面は回転ナデ。外面上半と、内面底部に降灰痕。外面下半に煤附着。胎土は青灰5 P B 6 / 1を呈し、石英・長石若干あり。

9は高坏か有脚壺の破片。あまり類例のない器形である。外面は、屈曲部から脚部の間に接合痕残しながら回転ヘラケズリ後、全面回転ナデ。内面は回転ナデ。胎土は青灰5 P B 5 / 1を呈し、石英・長石・黒色粒わずかにあり。

10は捏ね鉢片。調整は回転ナデ。胎土は灰N 6 / 0を呈し、長石若干、石英わずかにあり。

11は甕片。調整は回転ナデ。胎土は青灰5 B 5 / 1を呈し、石英あり、長石若干あり。陶邑産か。

12も甕片。外面は木目の出たタタキ後、ヨコハケ散在。内面はタタキのみ。胎土は青灰5 B 5 / 1を呈し、長石あり、石英わずかにあり。

13は加工木。図右側はほぞ穴か。広い面も片側にそれと直交するような抉りがある。

14は糸巻き杵木。図右側は端部残存。二つの未完通のほぞ穴があり、その反対側は丸く仕上げてある。

15は加工木。二つの直交するほぞ穴がある。図右の端は弧状。

16は櫛片。上面・側面は片側に傾き、歯も片側が直線的で表裏がある。上のラインはわずかに弧を描く。歯の厚さは0.7mmほど、切り目幅は0.5mmほど。表面は非常に滑らか。材はツゲか。

17は木製玉。扁球形。表裏に穴が貫通し、側面からそこにもう一つ穴を通す。穴は径2mm弱。ケズリの単位見えないほど滑らかに仕上げてある。

図97-1は凝灰岩。灰色で気孔があり、長石・角閃石・雲母の粒子が見られる。図上辺の割れは風化していないが、左右の割れは風化。上面は非常に平滑で線条のようなもの見えるが石の目かもしれない。下面はざらつき、剥離面らしい。上面の点線部分に煤附着。

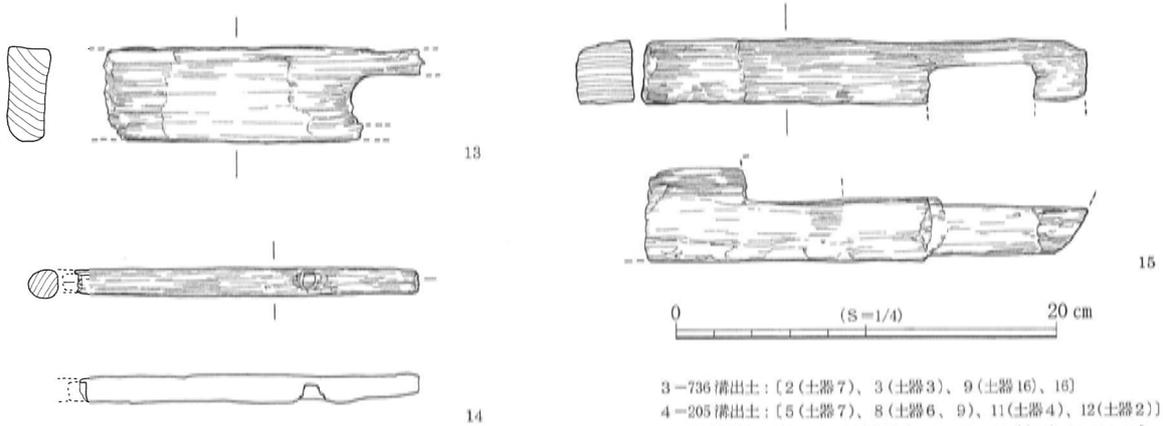
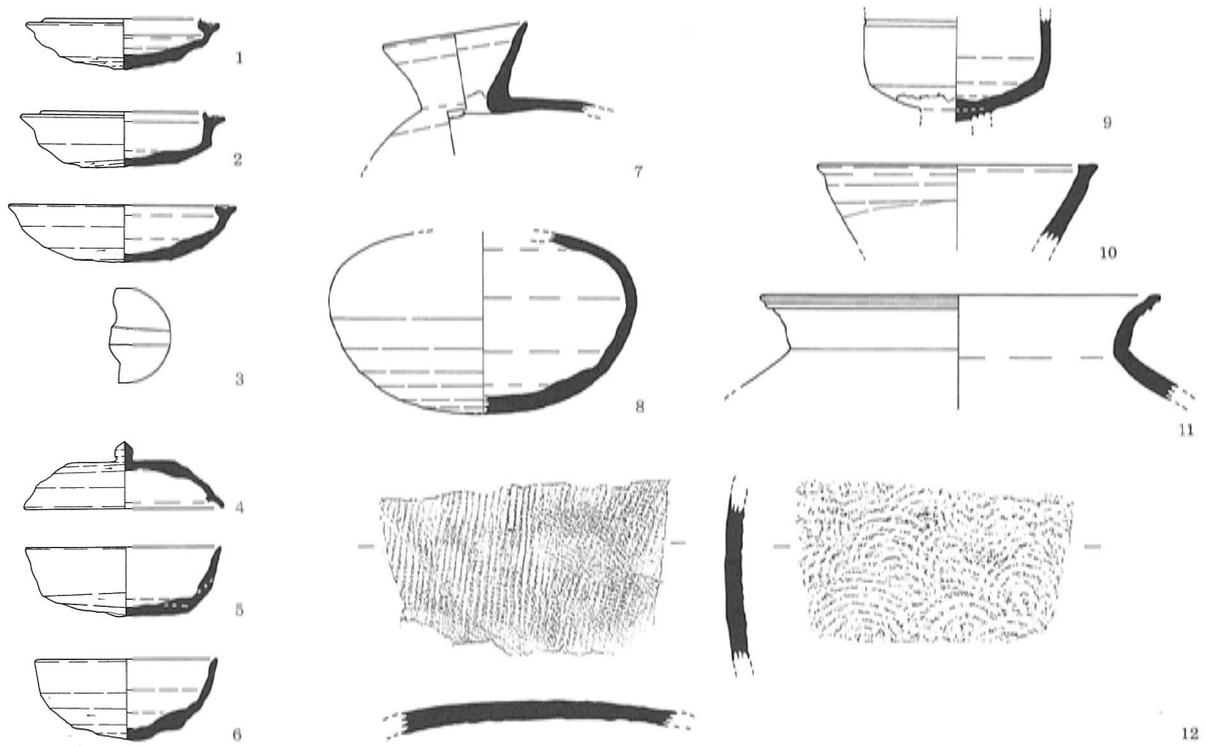
2も同じ凝灰岩。表裏に平滑な面残る、図右の端面は段状に加工したようにも見える。その面と左の割れ面に煤附着。

3も凝灰岩。左右は割れ、断面形は台形。小さい方の面に明赤褐2.5Y 5 / 6の附着物あり。広い方の面には煤附着。

4も凝灰岩。灰10Y 6 / 1を呈し、各面に気孔が多く見られる。雲母・角閃石・石英・長石の細粒若干見える。下面は凹凸あり、剥離面か。上面は、他の面より平滑で、表面の気孔に砂粒の入ったもの多い。図左側に直線的な段状の形が残る。表面にノミ痕らしきものも見え、この面は加工されている可能性が高い。図上・左の割れ面に煤附着、下の割れ面にはなし。

5も凝灰岩。図左の面は平滑で煤附着。右の4面のうち、下の面のみ平滑、他は割れか剥離。

6は安山岩か。石の目が見え、それに沿った石英の貫入も見られる。細かい粒子で石英・長石・角閃石・黒雲母・ガラスが認められ、ガラス・石英のかみ合った結晶も幾つか見られる。広い面二つに擦痕が見られ、その部分は非常に滑らか。図点線部分に煤附着。砥石に使用されたか。



3-736溝出土：〔2(土器7)、3(土器3)、9(土器16)、16〕
 4-205溝出土：〔5(土器7)、8(土器6、9)、11(土器4)、12(土器2)〕
 4-287溝出土：〔1、4、6(土器3)、7、10、13(木1)14、15、17〕

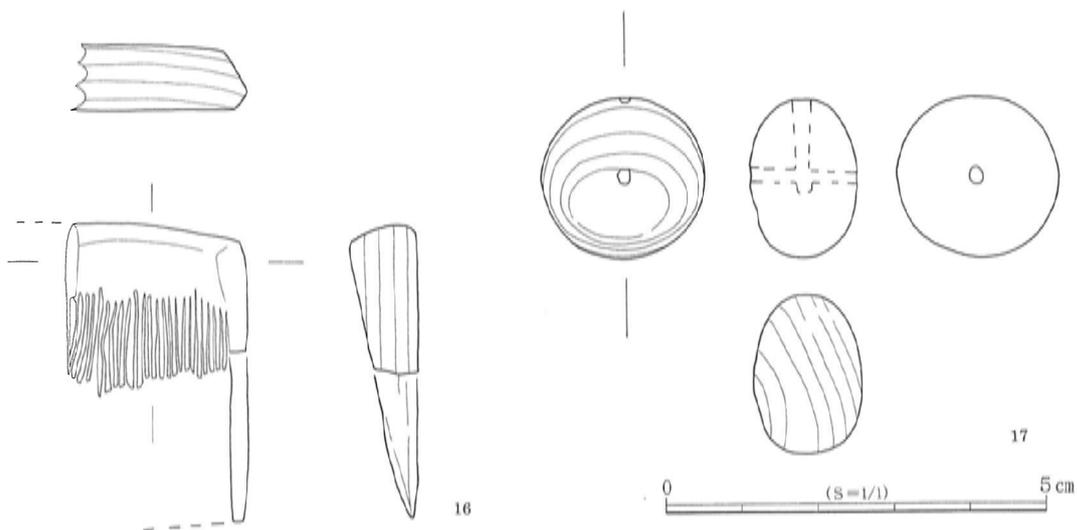
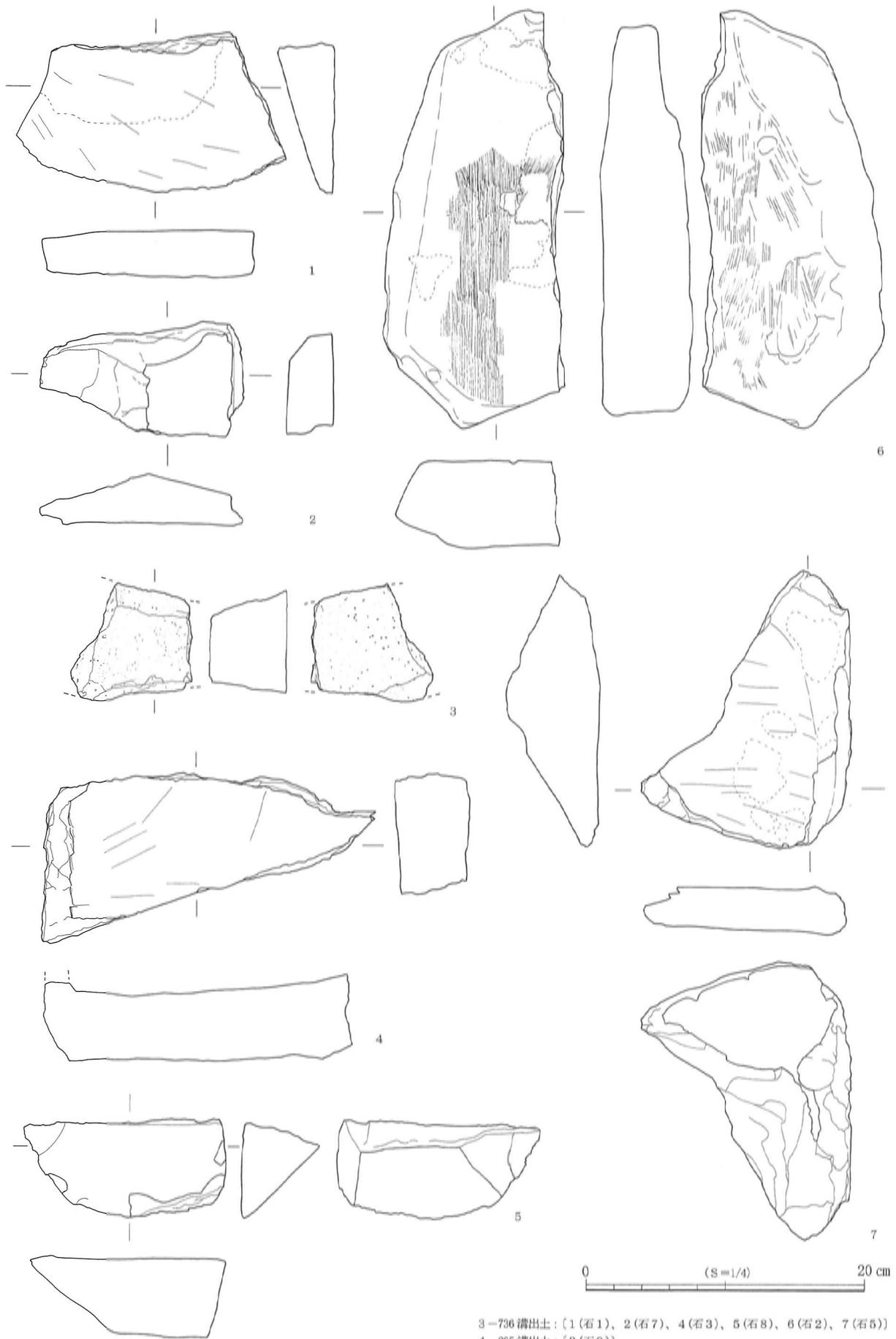


図96 3-736溝・4-205溝・4-287溝(同一遺構)出土遺物(その2)



3-736溝出土：〔1(石1)、2(石7)、4(石3)、5(石8)、6(石2)、7(石5)〕
4-205溝出土：〔3(石9)〕

図97 3-736溝・4-205溝・4-287溝(同一遺構)出土遺物(その3)

7は凝灰岩。図の左の面と右の左端の大きな面が平滑。左の点線部分以外に煤附着。

図98も凝灰岩。下面は平滑。上面にも平滑な面が2面ありその間は緩やかな稜を成す。図左端の割れ面は他の割れ面よりかなり風化が進んでいる。

4-125・126溝（図99・100・表46・47） 02-3-1トレンチ北側で、2本平行して走っていた溝である。南西側はおそらく合流して3-145溝につながると思われる。125溝の方が幅1.2~1.5m。126溝は幅0.9~1.1m。共に深さは30~40cmぐらい。底のレベルはT.P.+13.3mほどで、まったく勾配がない。125溝の最下層にのみわずかに流水堆積層があるが、他は人為的埋土と思われる。E28°Nを指向する。125溝はトレンチ東端で4-124溝と直角に合流し、それはおそらく4-122溝につながる。126溝は南東辺に4-132水口が取りつく。溝同士の間は25~50cm。

遺物は個体毎に散在し、底に付くものはない。量的には125溝の方が126溝の6倍ほど出土しており、その点でも125溝の方が幹線的である。組成としてはどちらも弥生土器を含まず、土師器・須恵器の組成には特色はない。鉄滓が出土しているのが注目できる。両方の溝を合わせて、遺物の示す時期は飛鳥Ⅱ期に限定してして問題ない。

図100には実測可能なものをあげた。1~15が4-125溝出土、16~23が4-126溝出土である。

1は土師器坏。外面は上半ヨコナデ、下半方向不明のナデ。内面はヨコナデ後暗文。胎土はにぶい橙7.5Y R 6/4を呈し、赤色粒若干ありの精良な胎土。

2も土師器坏。外面は、上半ヨコナデ、下半ナナムユビナデ。内面はヨコナデ後暗文。底部は内側からの打撃により焼成後穿孔されている。胎土は灰黄2.5Y 7/2を呈し、混和砂粒のない精良な胎土。

3は土師器ミニチュア高坏片。外面はタテユビナデ。内面はヨコユビナデ。胎土は灰白2.5Y 8/2を呈し、赤色粒・長石・石英わずかにありの精良な胎土。

4も土師器ミニチュア高坏である。外面は、身部ユビオサエ、脚柱部ヨコナデ、脚裾部タテユビナデ。身部内面は、口縁端部ユビオサエ後、全体にヨコナデ。脚部内面は、ヨコユビナデ後脚裾端部ユビオサエ。口縁と脚裾はユビオサエにより波打つ。胎土はにぶい黄橙10Y R 7/2を呈し、混和砂粒のない精

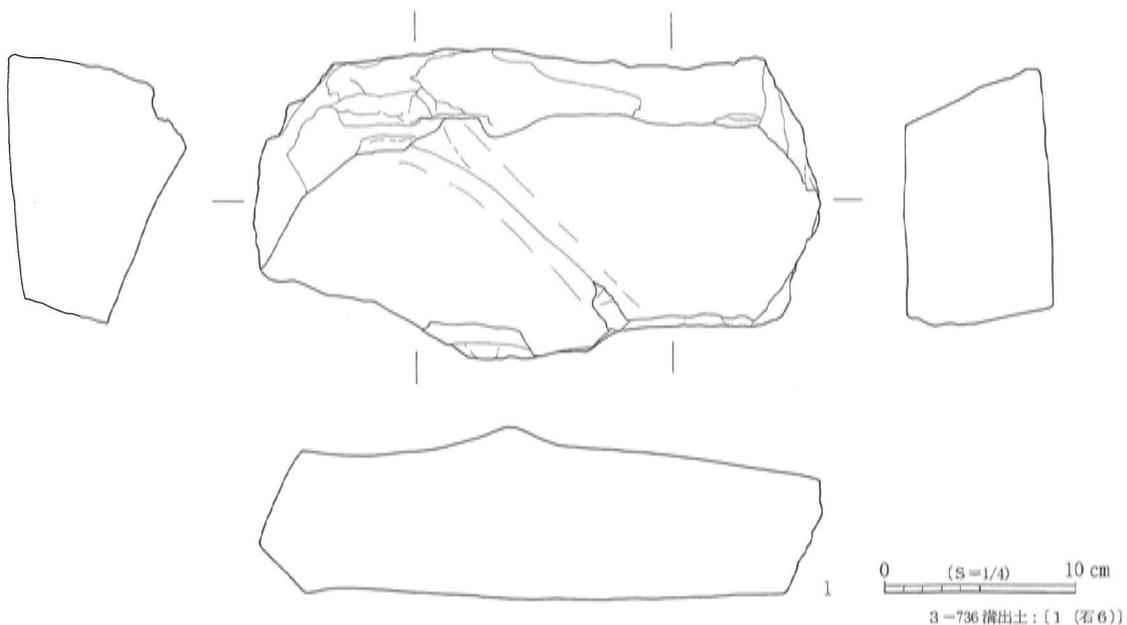
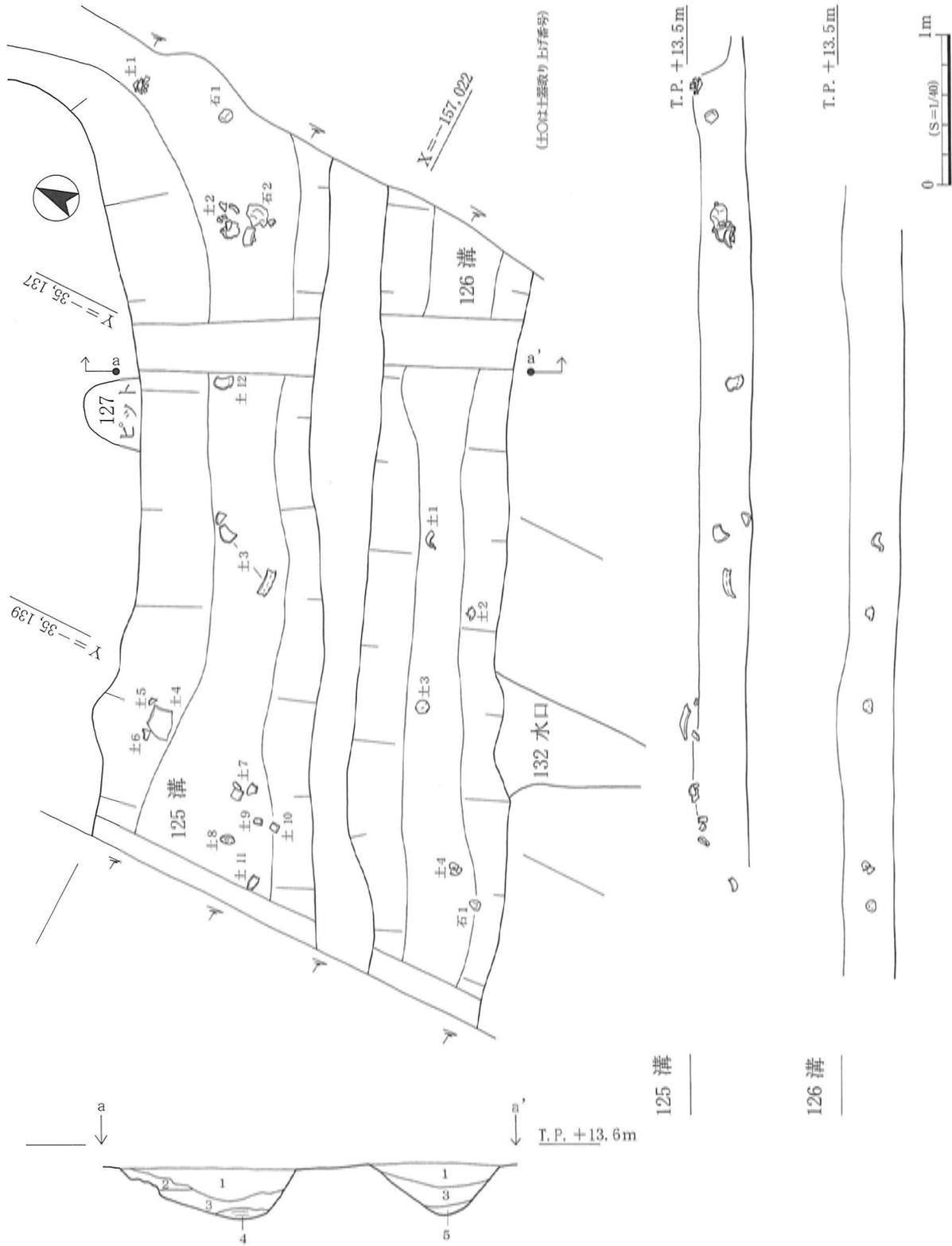


図98 3-736溝・4-205溝・4-287溝（同一遺構）出土遺物（その4）



- 1、灰 7.5Y5/1 シルト、極細砂～細砂若干あり、炭化物わずかにあり、管状 Fe 若干あり。
- 2、緑灰 10GY6/1 シルト～極細砂のブロック間に、オリブ灰 2.5GY6/1 シルトあり。
- 3、オリブ灰 2.5GY5/1 シルト、炭化物小片・植物遺体片わずかにあり。
- 4、灰 5Y4/1 シルト～極細シルト、平行ラミナあり、有機物多し。
- 5、3内に緑灰 10GY シルトのぼやけた小ブロックあり。

図99 4-125溝・126溝出土状況・断面

良な胎土。

5は土師器高坏身部片。外面は、身部はヨコナデ、接合部の段より下はヨコユビナデ。内面はヨコナデ後暗文。内面のヨコナデは外側から中心に3単位で入れる。口縁側のは外面と同じ位置でなで上げる。2単位目は1周で止める。最後に中心のものは1周してなで上げる。胎土は灰黄褐10Y R 6 / 2を呈し、白色粘土粒わずかにありの精良な胎土。

6は土師器小型壺。外面は、口縁部～肩部ヨコナデ、胴部ナナメユビナデ、底部は平底だが磨滅で調整不明。内面は、胴部接合痕上にユビオサエ並ぶのが残るが、最終的にヨコナデ。胎土は橙7.5Y R 7 / 6を呈し、長石若干、石英・赤色粒わずかにありの精良な胎土。

7は土師器甕。外面は、下半タテハケ後上半ヨコナデ。内面は、上半ヨコナデ、下半ユビオサエ後ナメナデ。二次的被火の痕跡なし。胎土は灰黄2.5Y 7 / 2を呈し、混和砂粒なし。

8は土師器移動式竈掛け口片。上面は同心円タタキ後両側ケズリ。外面はタテハケ。内面はヨコナデ。内面から上面にかけて煤附着。胎土は灰黄褐10Y R 4 / 2を呈し、長石若干あり、赤色粒わずかにあり、微細粒に角閃石多しの生駒西麓産胎土。

9も土師器移動式竈掛け口片。上面はケズリ後ナデ。外面はタテハケ後ユビナデ散在。内面は上部ヨコケズリ後棒状工具によるナデ。内面から上面にかけて煤附着。胎土は灰黄褐10Y R 4 / 2を呈し、石英多し、長石若干、黒雲母・角閃石わずかにあり、微細粒には角閃石多し、の生駒西麓産胎土。掛け口の内径はおおよそ30cmほどと思われる。

10も土師器移動式竈掛け口片。上面同心円タタキの他はナデ。内面から上面に煤附着。胎土は灰黄褐10Y R 4 / 2を呈し、石英多し、長石あり、微細粒に角閃石多しの生駒西麓産胎土。

11は土師器鉢片。調整はヨコナデ。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 4を呈し、赤色粒・石英・長石わずかにありの精良な胎土。

表46 4-125溝 遺物破片数集計表

大別	総数	種別		器種		型式・部位		細別				
		破片数	%	破片数	%	破片数	%	破片数	%			
土器・陶磁器	146	弥生	0	0.0								
		土師器	140	95.9	壺	42	30.0	ハケ	14			
					羽蓋	8	5.7					
					竈	8	5.7					
					壺	5	3.6	小型壺	2	40.0		
					鉢	16	11.4					
					高坏	8	5.7	ミニチュア	4	50.0		
					坏血類	28	20.0					
					須恵器	6	4.1	壺	1	16.7		
					壺	4	66.7					
			坏	2	33.3	皿形式	1	50.0	蓋	1	100.0	
その他		鉄滓	1		木製品	1		石	1			

表47 4-126溝 遺物破片数集計表

大別	総数	種別		器種		型式・部位		細別					
		破片数	%	破片数	%	破片数	%	破片数	%				
土器・陶磁器	29	弥生	0	0.0									
		土師器	24	82.8	壺	3	12.5						
					羽蓋	2	8.3						
					竈	1	4.2						
					壺	1	4.2	小型壺	1	100.0			
					鉢	5	20.8						
					高坏	1	4.2						
					坏血類	9	37.5						
					須恵器	5	17.2	壺	4	80.0	平瓶	2	50.0
					坏	1	20.0	はそう	1	25.0			
その他		鉄滓	1		石	1		皿形式	1	100.0	身	1	100.0

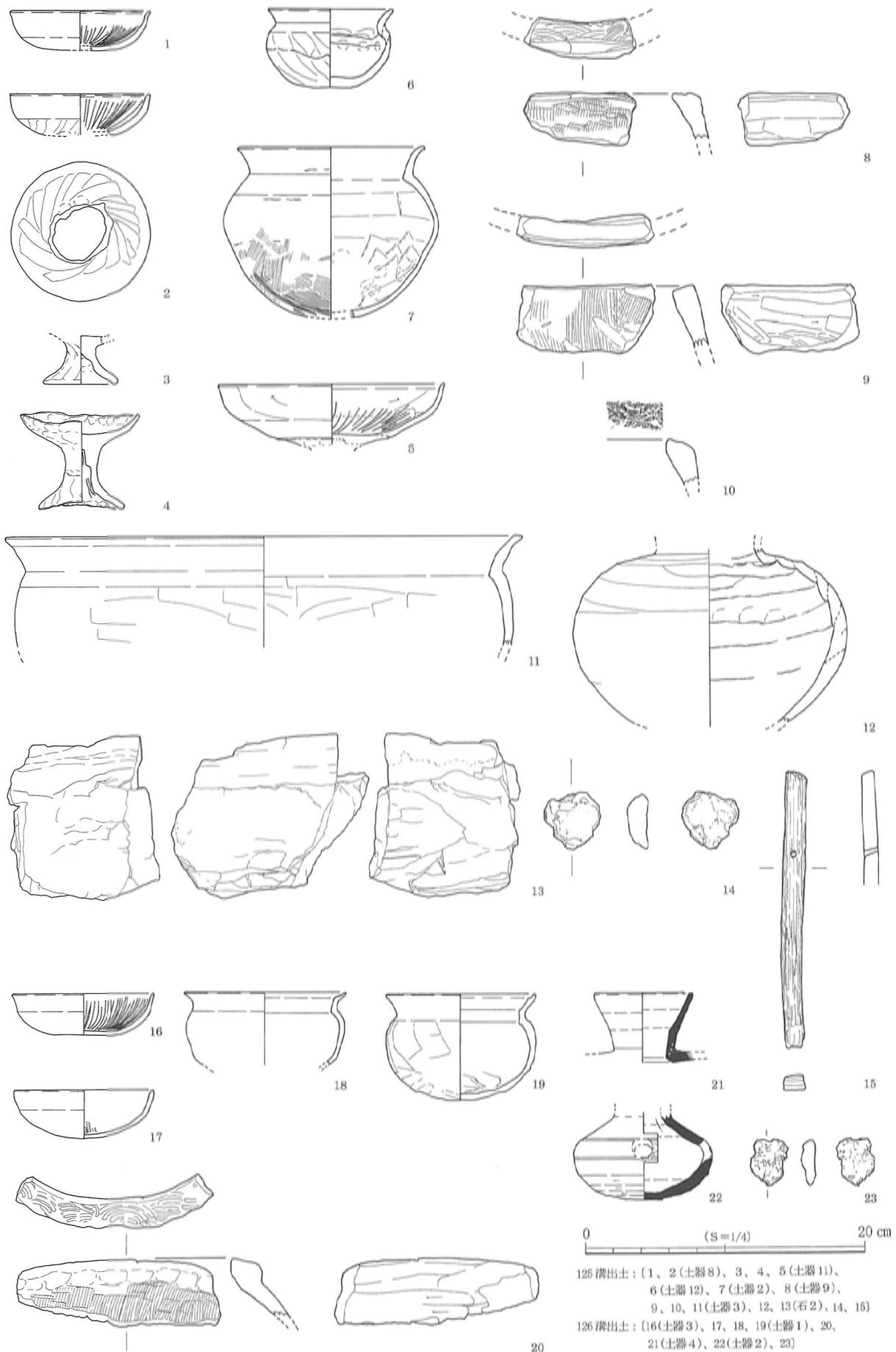


图100 4—125溝・126溝出土遺物

125 溝出土：〔1、2(土器8)、3、4、5(土器11)、
6(土器12)、7(土器2)、8(土器9)、
9、10、11(土器3)、12、13(石2)、14、15〕
126 溝出土：〔16(土器3)、17、18、19(土器1)、20、
21(土器4)、22(土器2)、23〕

12は土師器壺片。外面は肩部にケズリ残し全体にヨコナデ。胴部下半に薄く煤附着し、焼きハゼのような破断面あり。内面は、接合痕良く残り、その上にユビオサエ、頸部にヘラケズリ、最終的には全面ヨコナデ。胎土は浅黄2.5Y 7 / 4を呈し、白色粘土粒若干、長石わずかにありの精良な胎土。

13はほぼ石英と長石だけからなる礫である。ガラス原料の可能性もある。図右の一番上の面のみ非常に平坦で、かつ摩擦を受けたようにざらついており、なんらかの工具痕の可能性もある。

14は椀形鍛冶鉄滓。かなり小さい部類になる。

15は加工木。図上端は斜めにカットされている。下端は折れ。1辺3mm弱の四角い孔が貫通する。

16は土師器杯。外面は口縁ヨコナデ、下部は磨滅で不明。内面は右上になで上げるヨコナデ後暗文。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 4を呈し、白色粘土粒わずかにありの精良な胎土。

17も土師器杯。16と同法量。外面は口縁部ヨコナデ、下部は磨滅で不明。内面は磨滅するがヨコナデ後暗文か。胎土は浅黄橙7.5Y R 8 / 6を呈し、混和砂粒のない精良な胎土。

18は土師器小型壺片。調整はヨコナデ。胎土はにぶい橙7.5Y R 7 / 4を呈し、混和砂粒のない精良な胎土。

19も土師器小型壺。これらは南河内地域で見ると、甕のミニチュアのようにも見えるが、口縁端部に内傾する面を持つなどの独自性もある。外面は底部ユビオサエ・ユビナデ、上部はヨコナデ。内面は、上部ヨコナデ、下部ナメナデ。胎土は橙7.5Y R 6 / 6を呈し、石英・長石・赤色粒わずかにありの精良な胎土。

20は土師器移動式竈掛け口片。上面は同心円タタキ、その外側面はユビオサエ。外面それ以下はタテハケ。内面はヨコケズリ。内面から上面にかけて煤附着。胎土は褐7.5Y R 4 / 3を呈し、石英多し、長石若干あり、微細粒に角閃石多しの生駒西麓産胎土。

21は須恵器平瓶片。調整は回転ナデ。頸部内面にヘラケズリ、肩部内面に細かい布目残る。胎土は灰7.5Y 5 / 1を呈し、長石・黒色粒わずかにあり。

22は須恵器罍片。外面は、上部回転ナデ、下部は回転ヘラケズリ、胴部の孔は下半分の外面端に細かい割れが入る。内面は、頸部に絞り痕、全体に回転ナデ、底部の一定方向ナデはそれに切られる。胎土は青灰5P B 6 / 1を呈し、石英わずかにあり。

23は椀形鍛冶鉄滓。かなり小さい。

4-185溝(図101・表48) 02-3-2トレンチ南壁付近で検出された、浅くやや不整形な溝であるが、溝群に含まれると見て良い。幅50cmほど、深さ10cm弱。出土状況などは実測していない。遺物は多くなく、散在していた。遺物の示す時期は飛鳥時代前半。

実測可能なものを図101に示す。1~3は土師器、4は弥生土器。

1は坏。外面は磨滅するが、下半にユビオサエ後、上半はヨコナデ。内面はヨコナデ後暗文。暗文は一部斜めのものが放射状に切られ、最後に口縁近くで横位に1本入る。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 2を呈し、長石・赤色粒わずかにありの精良な胎土。

2も坏。外面は磨滅し、一部上半のヨコミガキと下半のユビオサエ残る。内面はヨコナデ後暗文、暗文は上段を下段が切る。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 3を呈し、長石・石英わずかにありの精良な胎土。

3は羽釜片。外面はヨコナデで、罅下面より下は煤附着。内面はヨコハケ、下部にタテユビナデあり、全面に薄く煤附着。胎土は灰黄褐10Y R 4 / 2を呈し、角閃石多し、石英あり、長石若干、白雲母わずかにありの生駒西麓産胎土。

4は壺底部片。外面はやや磨滅するがタテミガキ。内面は底部にユビオサエ後ナメハケ。胎土はにぶい黄橙10Y R 7/2を呈し、石英多し、長石・角閃石若干あり、赤色粒・ガラスわずかにあり。中河内低地産か。

4-205・285~288溝付近(図102) あらためて02-3-3トレンチ東側付近の溝の状況を概観しておく。この部分は幹線的な溝が多く交叉する部分である。ただ、4-287溝も4-285・286溝の北西側も4-288溝も、底が交叉部分に向かって傾斜し、4-285・286溝南東側はいずれも交叉部分からいったん浅くなる。つまり、水が流れるとするとこの交叉部分に集中し、ある程度滞水する事になり、4-286溝南東側の一番浅い部分より水位が上がった分がようやく南東側に排水される事になる。また、もし南東側から導水したとすると4-286溝の浅い部分を越えるまで水位を上げても、その北西に続く3-447溝の途中で止まる事になる。溝群西群の中でも注目できる部分ではあるが、このような形態になっている事は、この溝群が単純な排水路や導水路ではない事を示しているように思える。

4-286・288溝交点付近(図103・104・表49) その中でもこの交点は攪乱による破壊も少なく、土器が集中して出土した。出土位置からは、4-286溝の中であり、そこで触れるべきかもしれないが、明らかに4-288溝から流入したと考えられる土器群が存在したので、ここで独立して述べる。

4-288溝は底部が4-286溝との交点へ向かって段を成して落ちる。その形は、断面V字形で流水による浸蝕を受けたような形態を示す。それと反対側は攪乱で一部破壊されているが、4-287溝が4-286溝と底の高さをあわせて接してしているのが分かる。

遺物は4-288溝底部の北東に落ちる段より北東にやや離れ、浮いたものが多い。一部の礫を除き、4-288溝に近い遺物は高い位置にまとまり、遠いものは上下に分散する。それと平面的には4-288溝を延長したラインにまとまる事から4-288溝から4-286溝へ流入したもののようである。その左右の遺物群は、中央の遺物群から波及したのか、4-286溝の遺物群とすべきかは判然としない。

数的には弥生土器が圧倒的に多いが、やや完形率が悪く、土師器・須恵器の方が残りは良い。土師器高坏がほぼ完形で出土しているのは注目しても良いだろう。土師器では甕がなく、羽釜も鉢より少ないように、煮炊き具が少なく、鉢と高坏がやや高率なのが目立つ。また、工芸生産関係の遺物がないのも

表48 4-185溝 遺物破片数集計表

大別	総数	種別	破片数		器種	破片数		型式・部位	破片数		細別	破片数	
			破片数	%		破片数	%		破片数	%		破片数	%
土器・陶磁器	54	弥生	8	14.8	甕	4	50.0	夕タキ	2	50.0			
					(生駒西麓)	2	50.0						
		土師器	41	75.9	壺	1	12.5	底部	1	100.0			
					羽釜	5	12.2						
					鉢	5	12.2						
					杯皿類	12	29.3						
須恵器	5	9.3	壺	1	20.0								
			壺	1	20.0								
			杯	3	60.0								
皿形式	1	33.3	盞	1	100.0								
その他		炭	1		石	2							

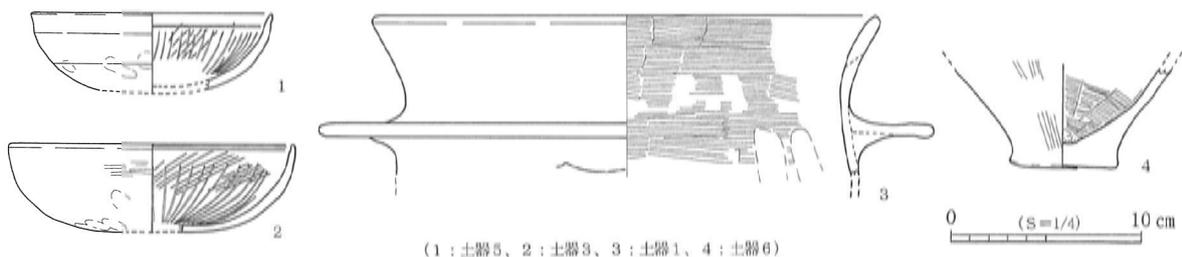
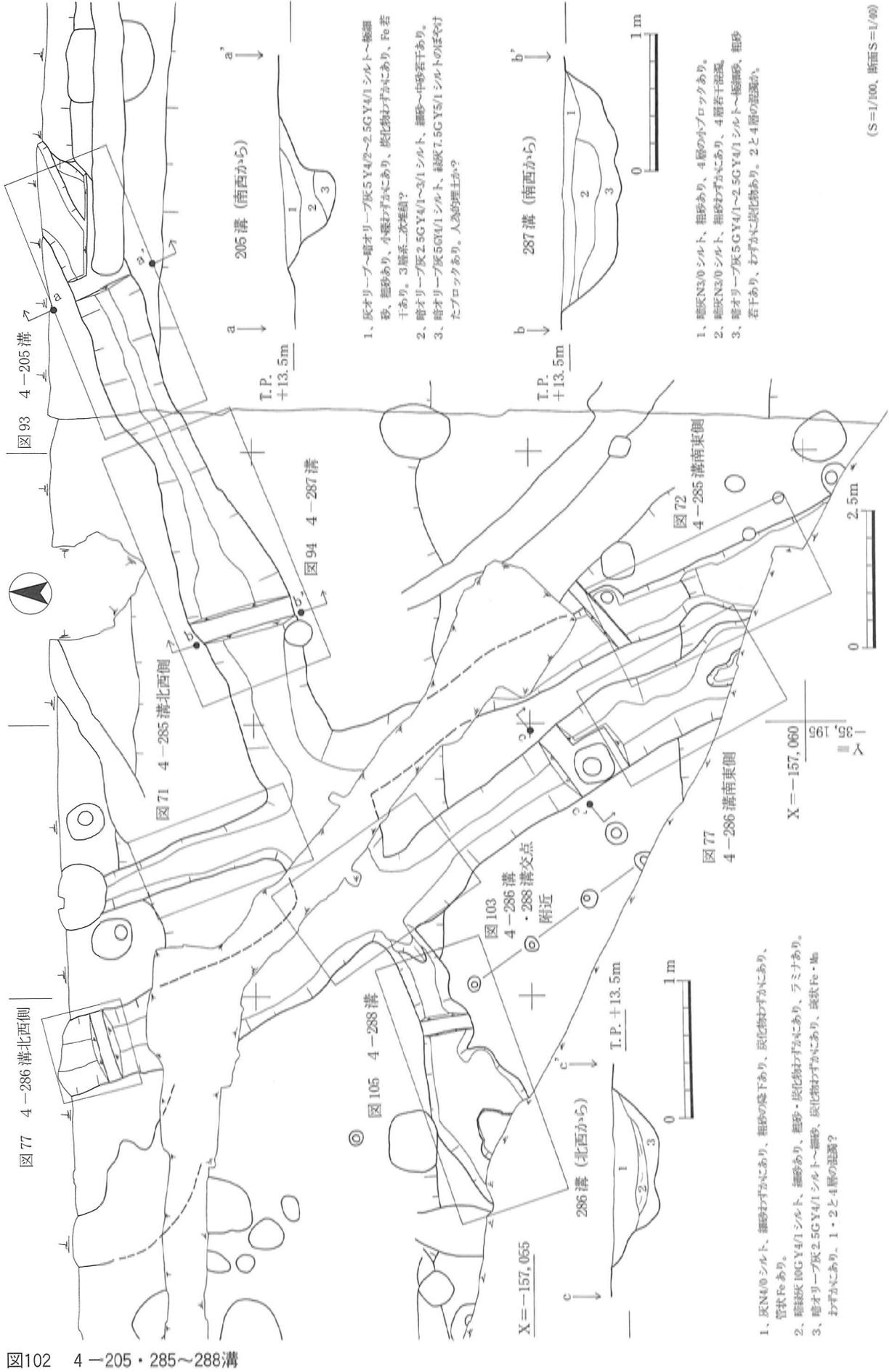


図101 4-185溝出土遺物



(S=1/100, 断面 S=1/40)

図 102 4-205・285~288 溝

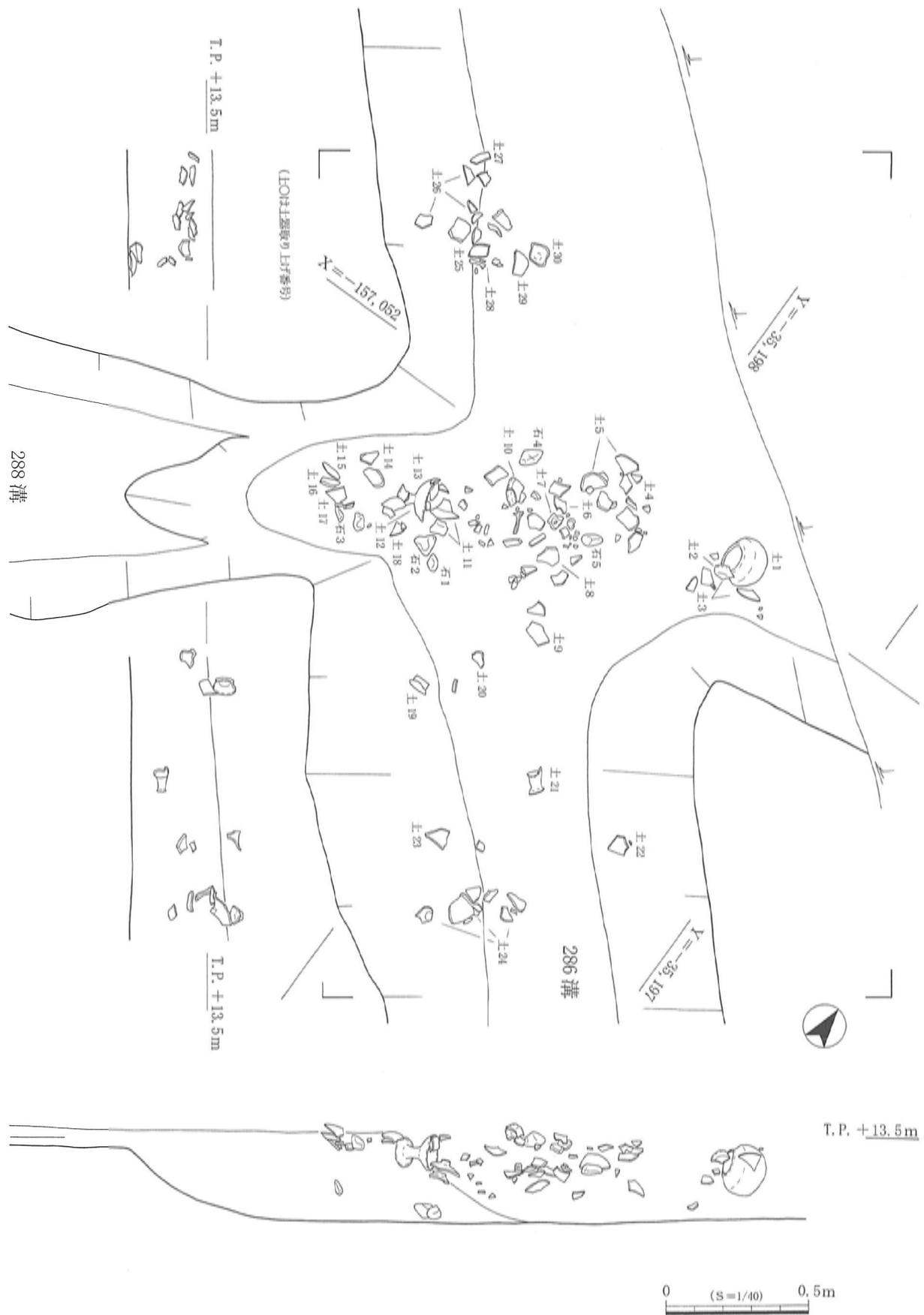


图103 4-286溝・288溝交点附近出土状况

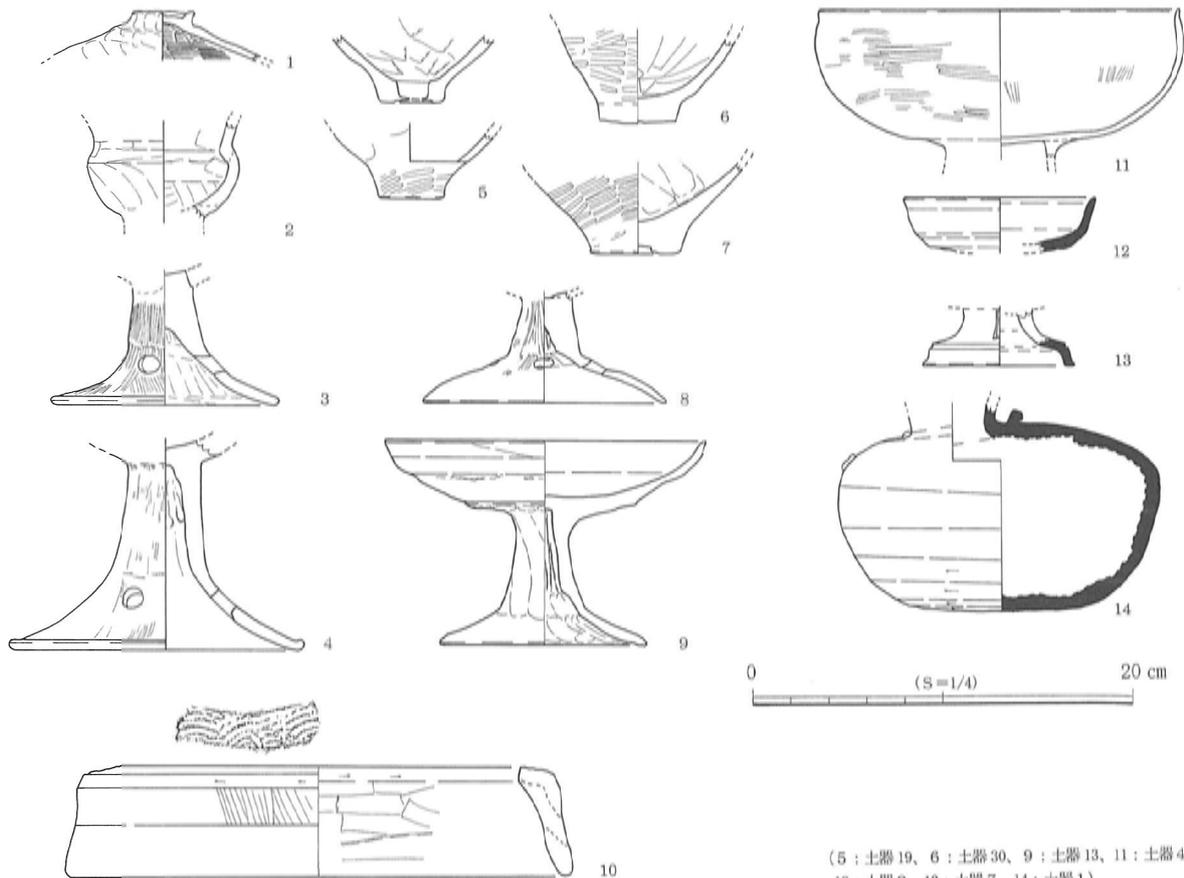
特徴的である。弥生土器群は河内VI様式で、庄内式土器もある。飛鳥時代の土師器・須恵器は前半期で良い。図104に実測可能なものを示す。

1は弥生土器甕蓋片。外面は、つまみはユビオサエ、他はユビナデ。内面はヨコハケ。胎土は暗灰黄2.5Y 4/2を呈し、角閃石多し、石英・長石ありの生駒西麓産胎土。

2は弥生土器台付き小型壺片。外面は、頸部～肩部と脚部はヨコナデ、胴部はナナメナデ。内面は、上半ヨコナデ、下半は数条の平行するナデ単位を左回りに入れていく。胎土はにぶい橙5 Y R 6/4を呈し、長石・石英あり。

表49 4-286溝・288溝交点 遺物破片数集計表

大別	総数	種別	破片数		器種	破片数		型式・部位		破片数		細別			
			破片数	%		破片数	%	破片数	%	破片数	%				
土器・陶磁器	562	弥生 (生駒小片)	467	83.1	甕	145	31.0	タタキ	106	73.1	生駒西麓	35	33.0		
					(生駒西麓)	45	31.0	底部	18	12.4	生駒西麓	4	22.2		
					壺	67	14.3	長頸壺	4	6.0					
					(生駒西麓)	15	22.4	広口壺	8	11.9	生駒西麓	2	25.0		
								底部	3	4.5					
					鉢	2	0.4				生駒西麓	1	50.0		
					高坏	45	9.6				生駒西麓	8	17.8		
					甌	1	0.2								
					土師器	73	13.0	羽釜	11	15.1			非生駒	1	9.1
								把手	2	2.7					
					鉢	20	27.4								
					高坏	11	15.1								
					坏皿類	17	23.3								
		須恵器	22	3.9	甕	10	45.5								
			壺	4	18.2	平瓶	1	25.0							
						有脚	1	25.0							
						皿型式	3	50.0	身	3	100.0				
その他		石	6												



(5:土器19、6:土器30、9:土器13、11:土器4、12:土器2、13:土器7、14:土器1)

図104 4-286溝・288溝交点附近出土遺物

3は弥生土器高坏片。外面は、脚裾ヨコナデ以外はタテミガキ。内面は、脚柱部螺旋状に連続するヨコナデ、脚裾部はタテナデで、端部はヨコナデ。三方透かし。胎土はにぶい黄褐10Y R 5 / 4を呈し、角閃石多し、長石若干あり、石英・白雲母わずかにありの生駒西麓産胎土。

4は弥生土器高坏片。外面は、身部と端部がヨコナデの他はタテハケ後タテミガキ。内面は磨滅激しいが、脚柱部はヨコナデか。三方透かし。胎土は橙7.5Y R 7 / 6を呈し、長石・赤色粒わずかにあり。

5は弥生土器甕底部片。外面はタタキ後ナデ。内面はナナメナデ。底部の穿孔は焼成前に内面からだが、未貫通で、焼成後、薄い部分を割っている。胎土はにぶい黄橙10Y R 6 / 4を呈し、石英あり、長石若干、チャートわずかにあり。

6は弥生土器甕底部片。外面はタタキ、煤附着し、焼きハゼ状の割れあり。内面はタテナデ、炭化物なし。胎土は灰黄褐10Y R 6 / 2を呈し、石英・長石若干あり、赤色粒わずかにあり。

7も弥生土器甕底部片。外面はタタキ後底部側面ヨコナデ、煤なし。内面はナナメナデ、炭化物附着。胎土は浅黄橙7.5Y R 8 / 3を呈し、石英・長石若干あり。

8は庄内式土器高坏片である。外面は脚裾端部ヨコナデ以外はタテミガキ。身部内面はナデ。脚部内面は、脚柱部上半中実、下半は絞り痕を残す、脚裾部はヨコナデ。四方透かし。胎土はにぶい橙7.5Y R 7 / 4を呈し、長石・石英・赤色粒・白雲母をわずかにあり。

今回の調査では、非常に少ない庄内式土器の一例である。

9は土師器高坏。外面は、身部ヨコナデ、接合部の段直下はユビオサエ、脚柱部はタテユビナデ、脚裾部はヨコナデ。身部内面はヨコナデ。脚部内面は、脚柱部は絞り痕残しながら軽くユビヨコナデ、脚裾部はタテユビナデ。胎土はにぶい黄2.5Y R 6 / 4を呈し、白色粘土粒若干、石英わずかにありの精良な胎土。

10は土師器輪状土器片。4-162土坑から出土したものと本例と2例のみであるが、移動式竈掛け口の附属品と考えられる。上面は同心円タタキ、その内外側面はヨコケズリ。外面はタテハケ後下半ヨコナデ。内面はヨコナデ。内面と上面の全体と、外面一部に煤附着。胎土はにぶい黄褐10Y R 4 / 3を呈し、石英多し、長石あり、角閃石若干あり、微細粒には角閃石多しの生駒西麓産胎土。

11は土師器台付き鉢片。外面はヨコナデ後、ヨコミガキ。内面は磨滅するがヨコナデ後タテミガキか。脚部内面はヨコナデ。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 3を呈し、混和砂粒のない精良な胎土。

12は須恵器坏身片。外面は、体部回転ナデ、底部は回転ヘラ切り後軽くナデか、粘土塊附着。内面は、回転ナデ後底部一定方向ナデ。胎土は青灰5 B 6 / 1を呈し、石英わずかにあり。陶邑産か。

13は須恵器脚部片。低脚の高坏か、有脚壺か。脚裾部の段が明確で、透かしが長方形二方透かしなのはほとんどが後者である。調整は回転ナデ。胎土は青灰10 B G 6 / 1を呈し、石英・長石わずかにあり。

14は須恵器平瓶。外面は、頸部とその周辺に頸部中心のヨコナデ、その他の上部は回転ナデ、下部は回転ヘラケズリ、底部は回転ヘラ切り。内面は、胴部が完形なので不分明だが大部分はヨコナデか、おそらく上部を閉じた粘土板内面は別調整か。外面上半には降灰痕・自然釉の他、窯壁片らしきものが溶着し、焼きハゼのような剥離が見られる。胎土は表面青灰5 P B 5 / 1、内部灰赤7.5 R 6 / 2を呈し、石英あり、長石若干、黒色粒わずかにあり。

4-288溝(図105・106・表50) 02-3-3トレンチ東半で検出。平面的には4-287溝が4-285・286溝との交点を経て続くようにも見えるが、溝底部のレベルがかなり異なり、先述の4-286溝との交点での遺物の出土状況もあり、交点より南西側を独立した溝と見た。

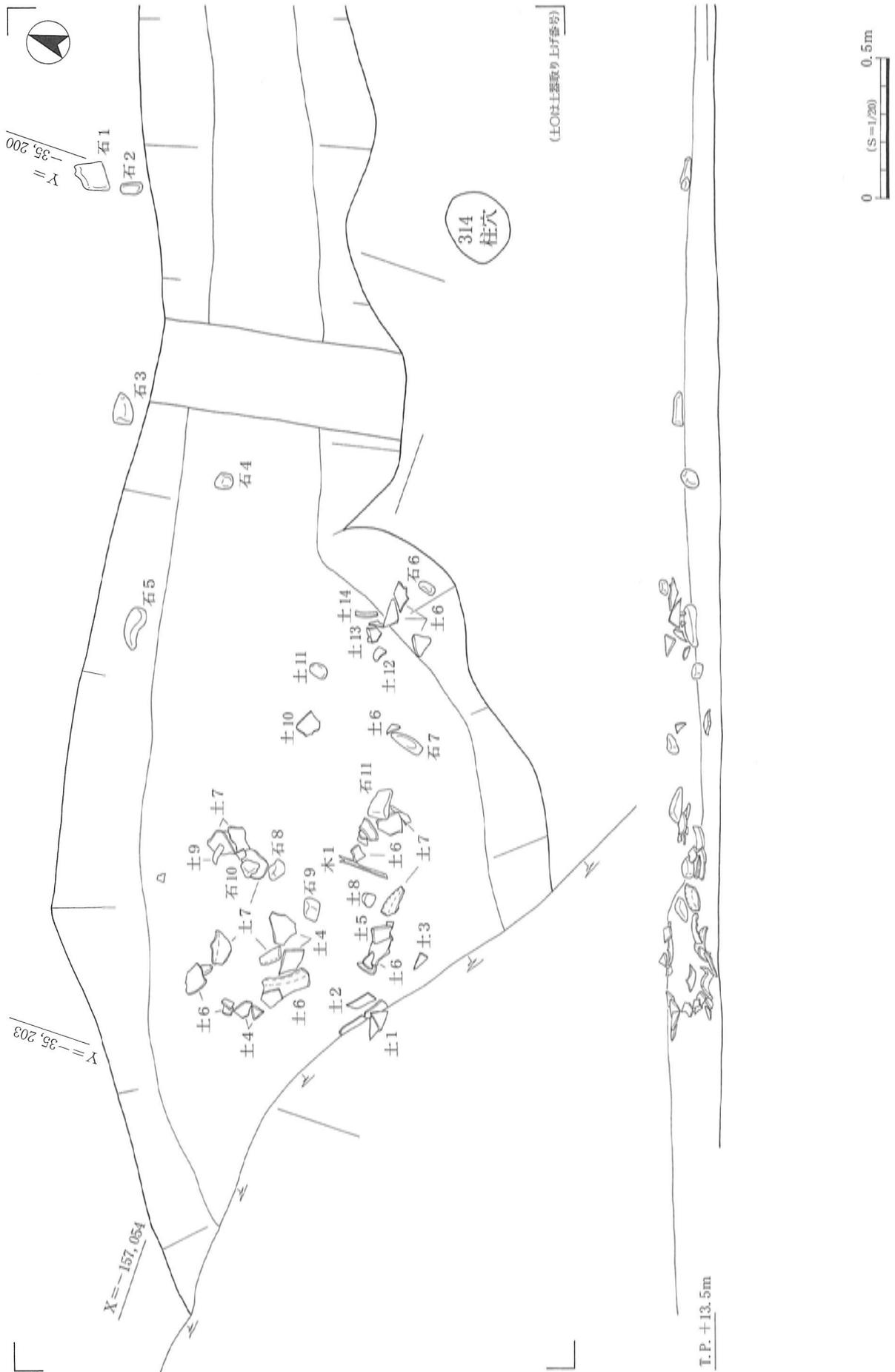


図105 4-288溝出土状況

南西側は肩が乱れ広がるが、本来は幅90cmほどの直線的な溝か。かなり削平を受けているようで深さは10~20cm。底のレベルはT. P. +13.4~13.5cmで安定している。方位はE20° Nほどを向く。遺物は南西トレンチ端に近い部分に集中し、底からわずかに浮くものが多い。全体的に完形率は低いが、同一

表50 4-288溝 遺物破片数集計表

大別	総数	種別		器種		型式・部位		細別								
		破片数	%	破片数	%	破片数	%	破片数	%							
土器・陶磁器	240	弥生 (生駒小片)	53 1	22.1	甕	3	5.7									
					(生駒西麓)	2	66.7									
					壺	13	24.5	長頸壺	1	7.7	生駒西麓	1	100.0			
		土師器	151	62.9		高坏	3	5.7	底部	3	23.1	生駒西麓	1	33.3		
						甕	11	7.3								
						羽釜	42	27.8						非生駒	1	2.4
						甕	21	13.9								
						把手	1	0.7								
						鉢	29	19.2								
						高坏	9	6.0	ミニチュア	1	11.1					
		須恵器	36	15.0		坏皿類	23	15.2								
						甕	18	50.0								
						壺	11	30.6								
		その他				木製品	2									
石	11															

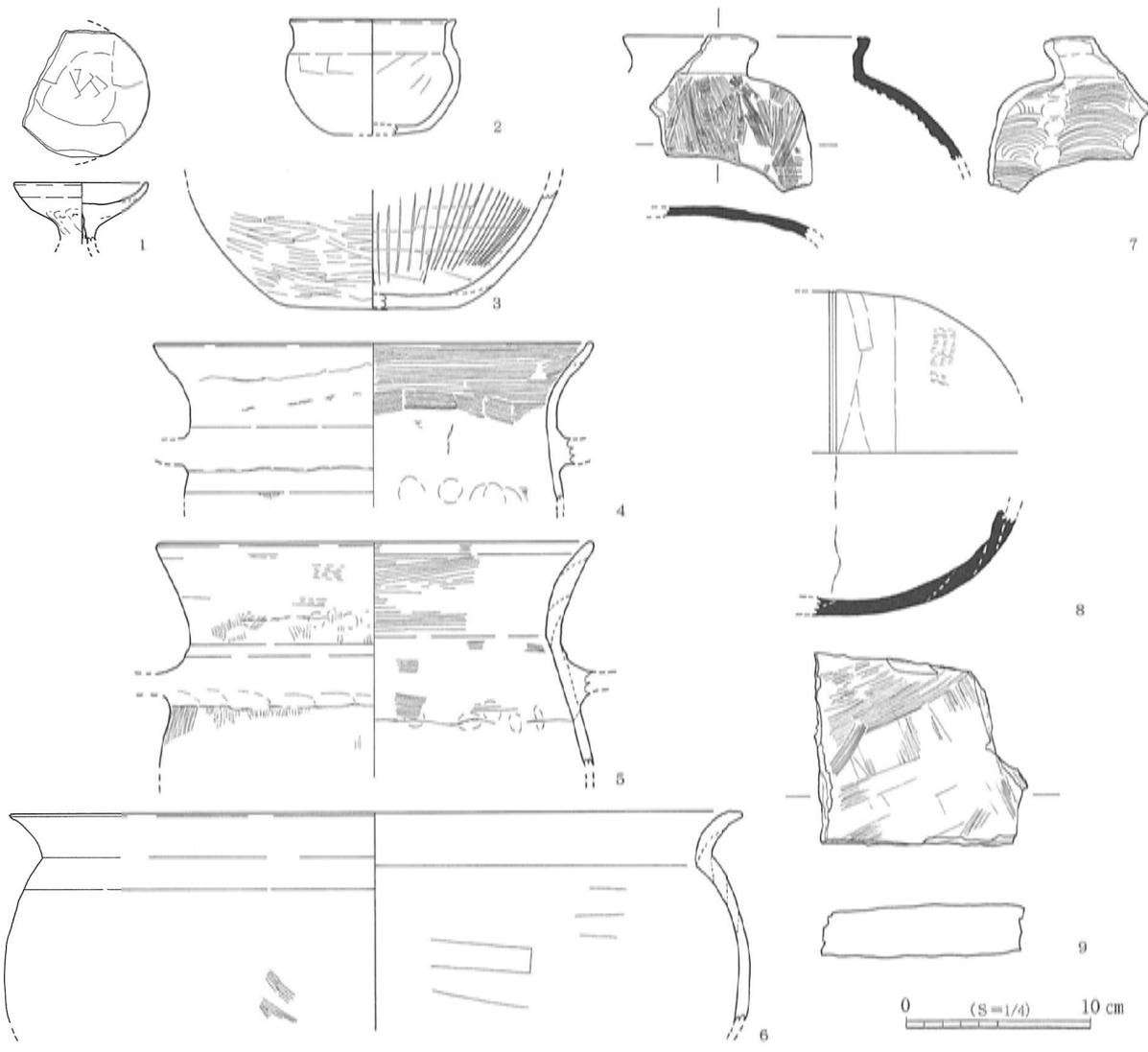


図106 4-288溝出土遺物 (2:土器6-2, 3:土器3, 4:土器2, 5:土器7, 6:土器6-1, 7:土器4-1, 8:土器4-2, 9:石1)

個体の破片があまり離れるものはない。

遺物の組成は、弥生時代の遺構が多い部分に近い割には弥生土器が少ないと言える。その中では甕より壺が多い。土師器では羽釜の割合が高いが、これは器形の大きな羽釜の破片がたまたま2個体分あったせいであろう。土師器・須恵器の組成に特に独自の点はない。飛鳥時代前半に限定できる。

図106には実測可能なものを示した。1～6は土師器、7・8は須恵器、9は石である。

1はミニチュア高坏片。ミニチュアにしては口縁があまり波打たない。外面は、身部ヨコナデ、脚部タテユビナデ。身部内面はヨコナデで、中心に工具のアタリが残る。脚部内面には絞り痕残る。胎土は浅黄橙10Y R 8 / 3を呈し、長石若干ありの精良な胎土。

2は小型壺片。外面はヨコナデ。内面は口縁ヨコナデ、胴部ナナメナデ。胎土は2.5Y 7 / 3を呈し、長石わずかにありの精良な胎土。

3は鉢片。外面は、体部ヨコナデ後ヨコミガキ、底部は一定方向ケズリ後ナデ。内面はヨコナデ後暗文。胎土は灰白10Y R 8 / 2を呈し、混和砂粒のない精良な胎土。

4は羽釜片。外面は口縁部～齔下部ヨコナデ、胴部はタテハケ、口縁に使用痕らしき磨滅あり。内面は、口縁ヨコハケ、齔裏面はヨコナデ、その下はユビオサエとわずかにヨコハケも残る。内面にのみ部分的に煤附着。胎土は褐10Y R 6 / 4を呈し、角閃石多し、石英あり、長石若干ありの生駒西麓産胎土。

5も羽釜片。外面は、口縁ヨコハケ後ヨコナデ、齔接合部上部ユビオサエ後タテハケ最後にヨコナデ、齔部は下部ユビヨコナデ後全体にヨコナデ、胴部はタテハケ。内面は、齔裏面よりやや下にユビオサエ残るが、ヨコハケ後ヨコナデ。外面の一部のみ煤附着するが、破断面にも付くので、使用時のものではない。胎土はにぶい黄褐10Y R 4 / 3を呈し、角閃石多し、石英あり、長石・赤色粒わずかにありの生駒西麓産胎土。

6は鉢片。外面は、口縁部～肩部ヨコナデ、胴部ナナメハケ後ヨコナデ、被火痕跡なし。内面はヨコナデで、全面に厚く煤附着。胎土は灰黄2.5Y 7 / 2を呈し、長石わずかにありの精良な胎土。

7は横瓶片。外面は、口縁ヨコナデ、体部横方向のタタキ後タテハケ。内面は、口縁ヨコユビナデ、体部同心円タタキ後ユビオサエ。胎土は灰N 6 / 0を呈し、長石・石英若干あり、黒色粒わずかにあり。

8も横瓶片だが、7とは明らかに別個体である。外面はタタキ後ヨコナデと回転ナデ。内面はヨコナデで、外面ヨコナデ部分の裏と、胴端部に接合痕残る。胎土は青灰5 B 6 / 1を呈し、長石・石英若干あり、チャート1粒あり。

9は板状の凝灰岩。ガラスと角閃石の粒子がまばらに見られ、細粒には長石もわずかにある。ガラスと角閃石のみからなる捕獲岩あり。擦痕のある面にのみ気孔があり、他は自然な剥離や割れである。擦痕は主に3方向で、面全体に認められる。

4-361溝(図107・108・表51) 平行して走る攪乱が多かったため、ほとんど両肩を残す部分はなかったが、02-3-3トレンチ北壁付近で、西端から少なくとも中央付近まではほぼ東西方向に走っているようである。やや蛇行するか。方向性がほぼ東西であり、他の遺構との切り合いも不明な点が多いが、出土遺物のほとんどが弥生土器で、わずかながら須恵器・土師器・瓦が出土している状況から、一応飛鳥時代の遺構と判断した。幅は1m強ほどか。

遺物は散漫に出土したが、4-373溝と重複する部分の西側だけ集中して出土した(図107)。両者の切り合いは確認できなかった。一部は4-373溝との重複部でも出土している。その部分で出土したのは弥生土器だけで、かなり完形率が高いものが多い。高坏3～4個体、壺3～4個体、甕2個体が一括

して投棄されたかのような状況である。通常なら飛鳥時代の溝ではありえないような状況だが、今回の調査では他の飛鳥時代の溝でも完形に近い弥生土器が出土しているのでそうとも言えない。ただし攪乱の多い部分でもあり、須恵器・土師器・瓦が混入か、検出できなかった重複遺構のものであった可能性も皆無ではない。新しい時期の遺物は飛鳥時代頃を、弥生土器群は河内V-3~VI-1様式頃の様相を示すと言える。図108では実測可能なもののみを示した。すべて弥生土器である。

1は高坏身部片。外面は、上半ヨコナデ、下半タテハケ後ナナメナデ。内面は、上部にヨコナデ、底面付近にタテミガキが残るがやや磨滅。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 3を呈し、赤色粒・石英わずかにあり。

2も高坏身部片。外面は、上半ヨコナデ後タテミガキ、下半タテミガキ後上部ヨコミガキ。内面は、ヨコナデ後、上半ヨコミガキ、下半タテミガキ。胎土は灰黄褐10Y R 5 / 2を呈し、角閃石多し、石英若干、長石わずかにありの生駒西麓産胎土。

3も高坏身部片。外面は、ヨコナデ後、上半タテミガキ、下半ヨコミガキ。上半のミガキは連続して往復するもの多い。内面は、ヨコナデ後、上半ヨコミガキ、下半タテミガキ。どちらのミガキも連続し

表51 4-361溝 遺物破片数集計表

大別	総数	種別	破片数		器種	破片数		型式・部位	破片数		細別	破片数				
			破片数	%		破片数	%		破片数	%		破片数	%			
土器・陶磁器	237	弥生 (生駒小片)	233	98.3	甕	82	35.2	タタキ	51	62.2	生駒西麓	8	15.7			
					(生駒西麓)	11	13.4									
					壺	86	36.9	長頸壺	27	31.4	生駒西麓	6	22.2			
					(生駒西麓)	18	20.9	広口壺	12	14.0	生駒西麓	4	33.3			
								底部	1	1.2						
					鉢	1	0.4									
					高坏	19	8.2									
					器台	1	0.4							生駒西麓	1	100.0
					土師器	1	0.4	羽釜	1	100.0						
					須恵器	3	1.3	甕	2	66.7						
その他		瓦	1		坏	1	33.3									
					石	1		須恵質	1							

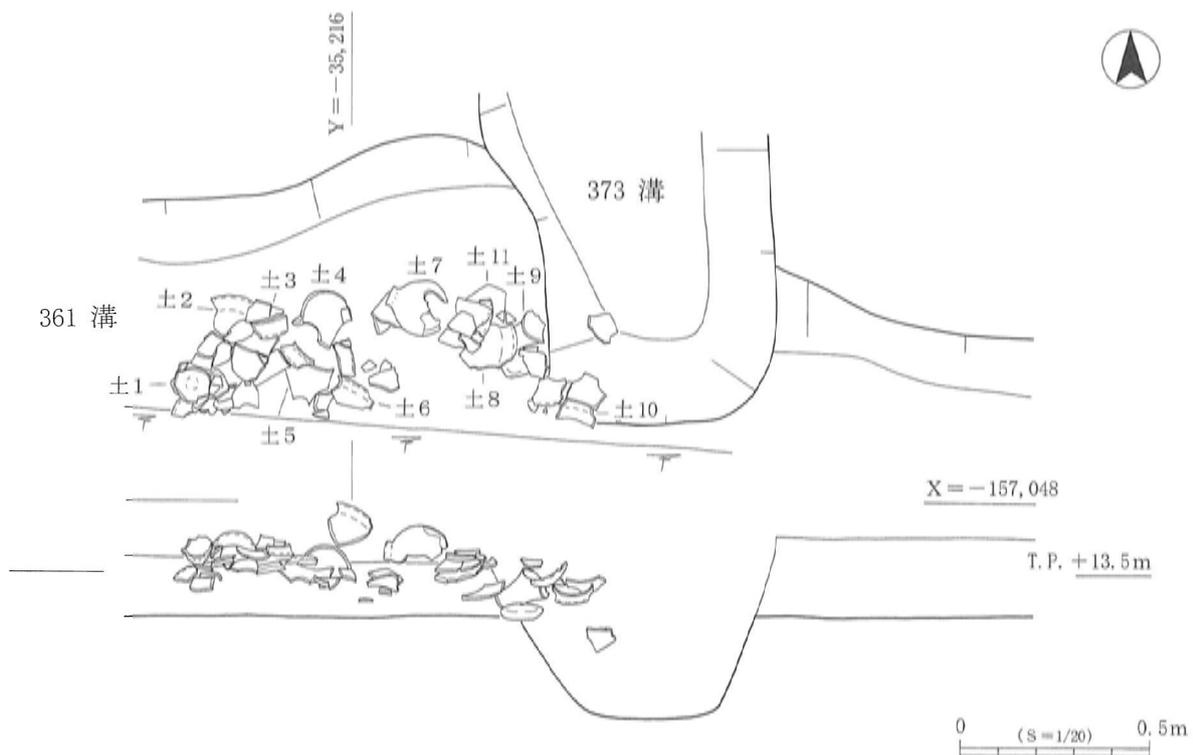
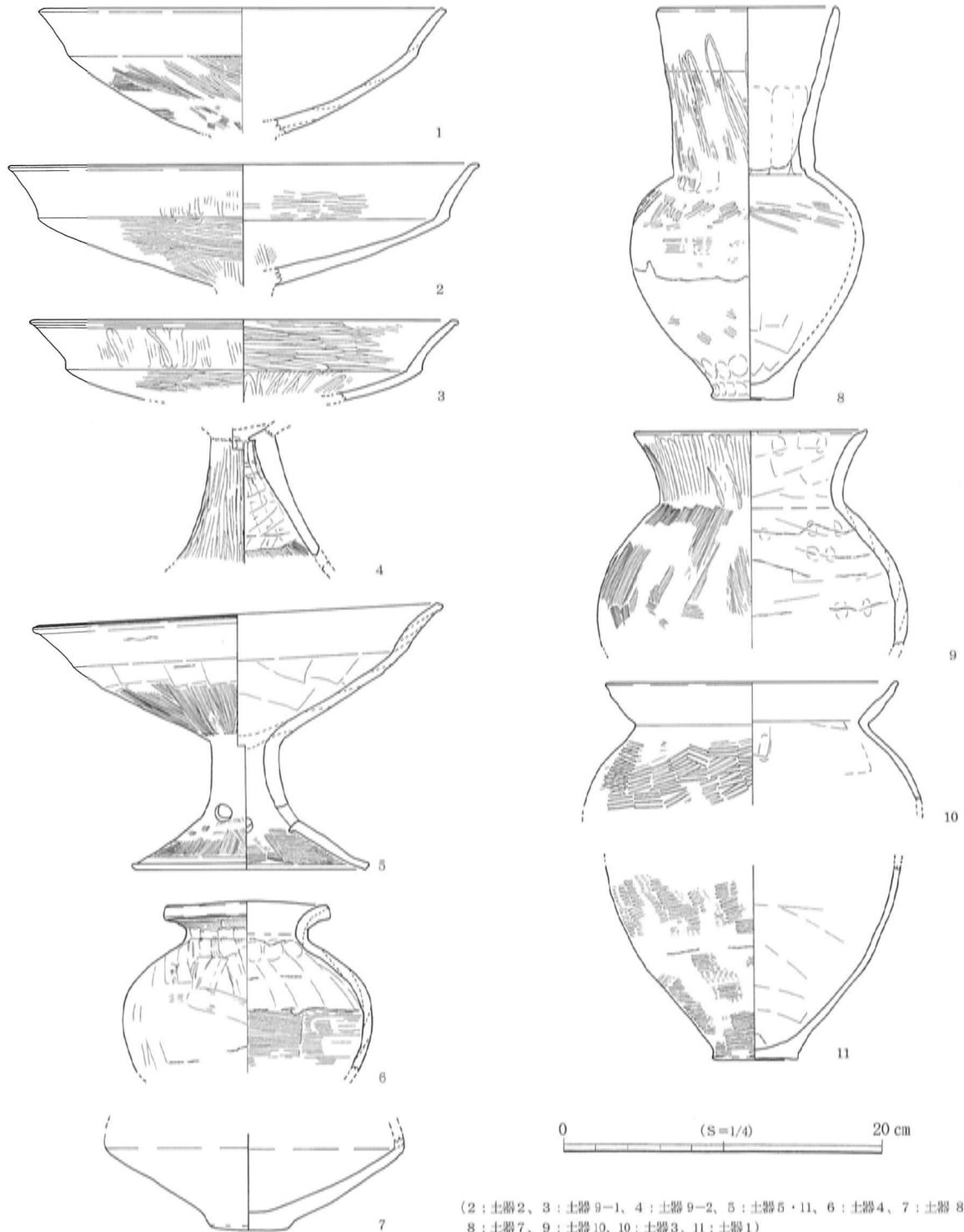


図107 4-361溝・373溝出土状況

て往復するものあり。胎土は灰黄褐10Y R 5 / 2を呈し、角閃石あり、石英若干、長石わずかにありの生駒西麓産胎土。

4は高坏脚部片である。外面は、上端にミガキ工具のアタリがあり、タテミガキ。内面は、脚柱部上半軽くヨコユビナデ、下半タテユビナデ後ナナメケズリ、脚裾部ナナメハケ。上部、円板充填の剥離痕にナナメナデのネガあり。透かし孔は1個だけわずかに残り、同じ高さで4分の1周以内にはないところ



(2:土器2、3:土器9-1、4:土器9-2、5:土器5・11、6:土器4、7:土器8、8:土器7、9:土器10、10:土器3、11:土器1)

図108 4-361溝出土遺物

ろから三方透かしかと推測される。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 2を呈し、石英若干あり、長石わずかにあり。

5は高坏。外面は、身部下半タテハケ後上半ヨコナデ、脚裾部タテハケ後端部と脚柱部ヨコナデ。身部内面は、下半ナナメナデ後上半ヨコナデ、底部は磨滅し、円板充填剥離。脚部内面は、脚柱部ヨコナデ、脚裾部ヨコハケ後端部ヨコナデ。透かしは割りつけ不均等な三方透かし。胎土は灰黄褐10Y R 4 / 2を呈し、角閃石多し、石英・長石ありの生駒西麓産胎土。

6は短頸広口壺片。外面は、口縁端面ヨコナデ、口縁ヨコハケ、頸部～胴部タテハケ後ヨコナデ。内面は、口縁部ヨコナデ、頸部ユビオサエ、胴部上半タテユビナデ、下半ヨコハケ、胴部の調整は接合痕を境にしている。胎土は黄灰2.5Y 5 / 1を呈し、角閃石多し、長石・石英ありの生駒西麓産胎土。

7は壺片。磨滅ひどく、胴部最大径内面の一部にヨコナデ残るのみ。胎土は褐灰10Y R 4 / 1を呈し、角閃石・石英多し、長石あり、赤色粒・黒雲母わずかにありの生駒西麓産胎土。

この器形が河内V-3様式まで残るか若干疑問で、やや古いものかもしれない。

8は長頸壺。外面は、口縁部～頸部タテハケ後口縁部ヨコナデ最後に連続して往復するタテミガキ、胴部は上下に方向異なるタタキ後中位に水平方向のタタキ、最後にまばらに軽いヨコナデ、底部側面はユビオサエ、底部は磨滅。内面は、口縁部～頸部タテユビナデ後ヨコナデ、胴部上半ヨコハケ、胴部下
半ナナメナデ。胎土は灰黄褐10Y R 5 / 2を呈し、角閃石多し、石英・長石ありの生駒西麓産胎土。

9は広口壺。外面は、口縁連続して往復するタテミガキにタテのヘラ記号2本、胴部上半タテハケ、下半ナナメハケ。内面は、口縁端部付近にユビオサエ残りヨコナデ、胴部は接合痕毎にユビオサエ残しヨコナデ。胎土は黒褐10Y R 3 / 1を呈し、角閃石あり、石英・長石若干ありの生駒西麓産胎土。

10は甕片。外面は胴部タタキ後口縁部～頸部ヨコナデ。内面は、磨滅するが、頸部直下タテユビナデ後全体にヨコナデか。外面煤附着。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 2を呈し、石英若干、長石・黒雲母わずかにあり。

11も甕片。外面は、タタキ後タテナデとナナメナデ散在、底部はユビオサエ後ユビナデ。内面は下部ナナメナデ、上部ヨコナデ。外面、底部から3cmほど上がった部分から上に煤附着。胎土は褐灰10Y R 4 / 1を呈し、角閃石多し、石英若干、長石わずかにありの生駒西麓産胎土。

小結 飛鳥時代溝群は、個々の溝の検討を通して、その性格が判然としてこない。ただ、溝である限り水を流すために掘られたものと考えるのが自然で、わずかな部分で溝底に残る流水堆積層や、4-286・288溝交点付近の土器群の出土状況などもそれを裏付ける。しかし、切り合いなしでほぼ同じ深さの溝が直交する状況や、溝底のレベルがある部分から両側に下がるものや不規則に凹凸するものがある事から見れば、農耕等に伴う導水路などとは考えにくい。

西群が建物群より先行している事が確実なので、建物群を造営する前の整地に伴うと考えれば、①細かい凹凸があり、部分的に低湿な環境にあるのを排水し乾燥させるために掘られた。②一時的に溝に水を溜め、平坦面を造成する水準を取るために使った。等が考えられる。

しかし、全ての溝が同じ性格であるとも言いきれない面もある。大きく見れば、3-572溝以東の東群と以西の西群では若干方向性が異なり、両者の間に切り合いのない交点は検出できていない。平行する3-572溝と3-157溝の間が道である可能性もあり、それを含め、東群は建物群と並存していた可能性も捨てきれないのである。

これらの問題に結論が出せない一つの要因として、飛鳥時代の遺構の遺物が、全て飛鳥Ⅱ期のものと

言って良く、時期差が見出せない事がある。試みに飛鳥編年よりも細かい、難波地域編年で見てみると、難波Ⅲ様式中段階に位置付けられる3-376住居址より、切り合い的にはほぼ確実に古いはずの3-450溝が、須恵器杯日などで見れば難波Ⅲ様式新段階になってしまい、時期差が、土器の消費地編年の限界を越えるほど短い事を示している。

また、溝群の中に、ガラス小玉鋳型・轆の羽口・鉄滓などといった工芸生産関連の遺物が入っているのも一つの問題である。つまり、今回検出された建物群が、炉の下部構造の可能性のある土坑を伴い、工房域であるとしても、先行する溝群にそれらの遺物が入るという事は、既に隣接する地域に同様の工房域が存在していた可能性が高いという事である。

このように、飛鳥時代溝群は、様々な問題を提示していると言える。

(7) 弥生時代

今回の調査で、4面で検出された弥生時代の遺構は、3-496井戸を北端として、02-2トレンチ西半南側から02-3-3トレンチと、調査区南西側に集中している。この部分は縄文晩期以来、調査区内に形成された微高地の最高所である。

当初は、井戸の存在から集落があった事を想定していたが、方形周溝墓が検出された事により、墓域の存在の可能性も考えられるようになった。再述するまでもなく、飛鳥時代の遺構に多くの弥生土器が含まれていたのは、残っていたこれらの他に相当数の遺構が飛鳥時代以前には残存していた事を示す。

土坑や溝は弥生時代と確定するには不安の残るものもあるが、飛鳥時代の遺構と異なる部分があり、弥生時代の遺物しか出土しなかったものはこちらに含めた。

時期的には弥生時代後期にまとめ、飛鳥時代の遺構や包含層の遺物も含めて考えれば、庄内式期までを含めて考える事ができる。

3-387井戸(図109・110・表52) 02-2トレンチ西半の南東側で検出。平面形は径1.65mほどのやや不整な円形で、検出面から50cmほど皿状に掘り下げた後、径70cmほどの円形の穴を垂直に掘り込んだようで、そこに図109断面図の3のブロック土を裏込めとして井戸枠があった可能性がある。底面レベルはT.P.+12.9m。底までブロック土なので、廃絶時に井戸枠を抜き、人為的に埋めたのであろう。断面図5のブロックがほやけるのは湧水の中に入れたためか。断面図1の層はブロックが認められないが、上面土器1(図110-1)のように完形率が高い土器が上面で出土している事と、後世や検出時の削平を考えれば、これも廃絶時の人為的埋土であった可能性が高い。

遺物の出土状況は、多くが断面図1・2の層内にあり、井戸底部に付いていたのは長頸壺の破片1片のみ、4の層内にあったのは土器7(図110-5)・土器11(図110-15)のみであり、井戸使用時に入ったと考えられるものはない。ほとんどの土器は、別の位置で割れたものの一部を埋土と共に投棄したものと考えられるが、先述の埋土内土器7・11と上面出土土器1はその出土状況や残存状況から、意識的に入れられた可能性が考えられる。埋め戻しの始めと最後を画するものであろうか。ちなみに上面出土土器2は壺の下半部か鉢のようであったが、風化激しく脆弱化しており、取り上げ時に粉碎してしまった。

遺物組成としては壺、特に長頸壺が圧倒的である。広口壺や甕は細片が多く、個体としては把握できない。個体数としては、長頸壺6個体ほどに高坏4個体ほど、それに鉢が2個体ほどという組成が復元できそうである。土器群としては、長頸壺が多い事や高坏身部の形は古い傾向だが、短頸化した小型長頸壺や小型の鉢の存在は新色で、河内V-2~3様式に位置付けられる。

図110には実測可能な遺物を示したが、埋土内で土器番号をつけて実測できなかったものは、土器1は甕口縁片、3は長頸壺片、4は高坏脚柱部片、10は壺片である。

1は長頸壺。外面は、口縁部ヨコナデ、頸部はヨコユビナデ後タテナデ。胴部はタタキで、その中位をナナメユビナデで軽く消す。底部はユビナデ。肩部に1ヶ所粘土紐を貼り付ける。「く」の字を寝かせたような形だが、その右端がさらに折れ、鳥形側面か獣形のようにも見える。内面は、口縁部ヨコナデ、頸部はタテユビナデ後ヨコハケ・ヨコナデか。胴部内面は風化のため調整不明。胎土は橙7.5Y R 7 / 6を呈し、石英・長石あり。

2は長頸壺片。外面は、口縁部ヨコナデ、頸部タテハケ。内面はヨコナデ。胎土はにぶい橙7.5Y R 7 / 4を呈し、石英・長石・赤色粒あり。

3は短頸化した長頸壺片。外面は、口縁ヨコナデ、頸部タテハケ。内面はヨコハケ・ナナメハケが錯綜するが、頸部下端にユビオサエ・タテユビナデ残る。胎土は褐灰10Y R 4 / 1を呈し、長石・石英若干、角閃石わずかにあり。色は生駒西麓産に似るが、角閃石少なく、胎土素地は細かい。

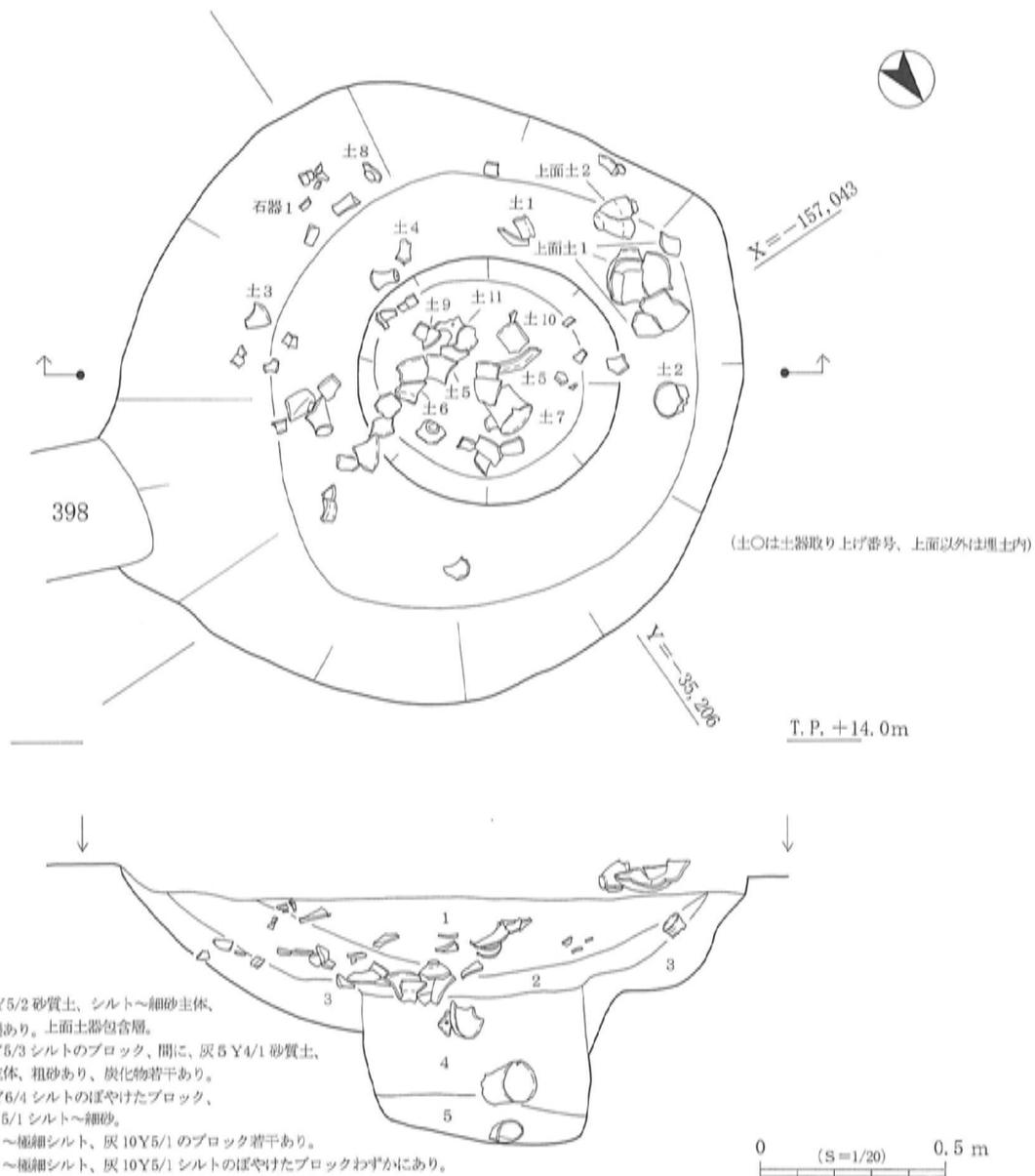


図109 3-387井戸断面・出土状況

4は壺底部片。外面は、胴部タテミガキ、底部側面ヨコナデ。内面はナナメハケで炭化物附着。胎土は褐10Y R 4 / 4を呈し、角閃石非常に多し、長石若干、石英わずかにありの生駒西麓産胎土。

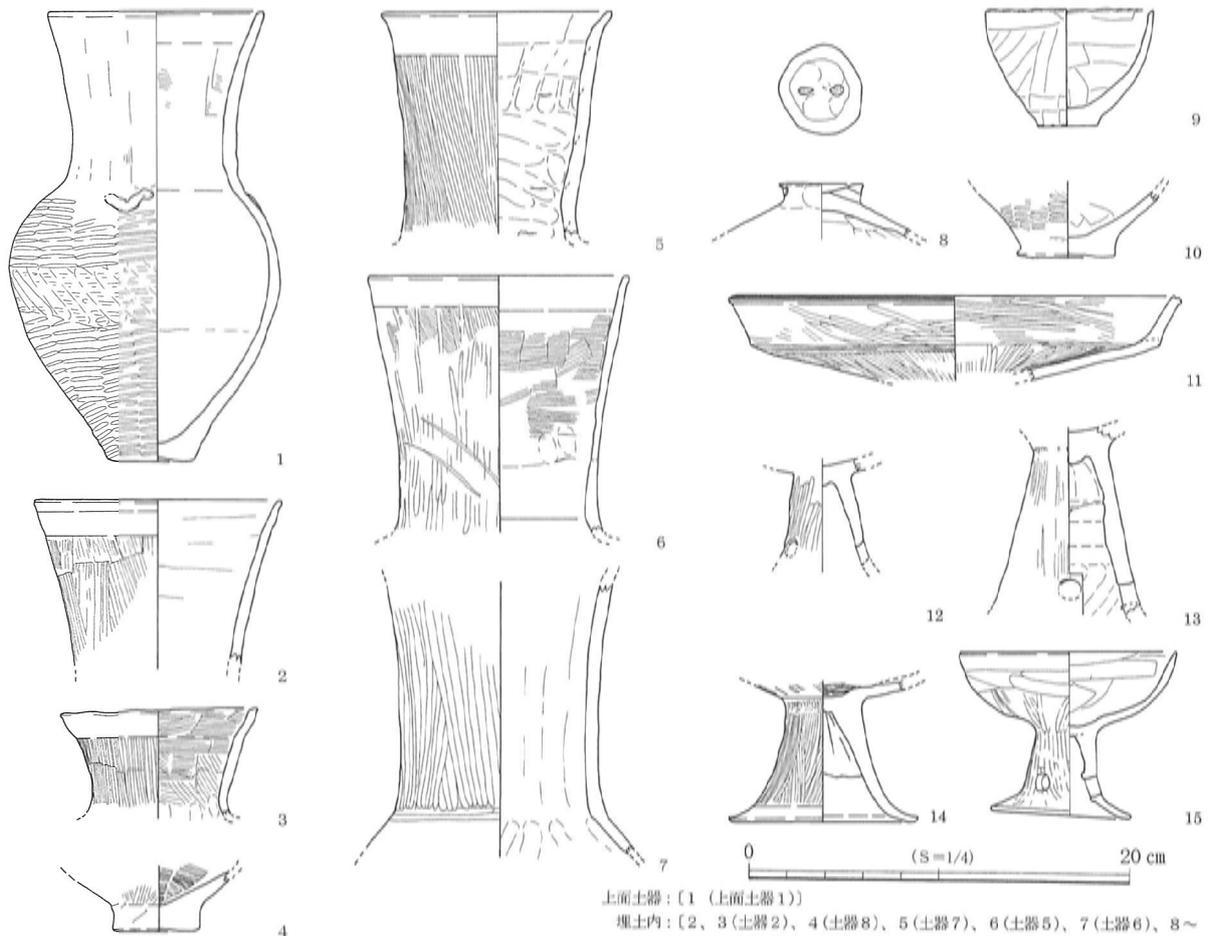
5は長頸壺片。外面は、口縁部ヨコナデ、頸部タテハケ。内面は、頸部下半ヨコ~ナナメユビナデ、上半タテユビナデ後口縁部ヨコナデ。胎土は褐灰10Y R 4 / 1を呈し、角閃石多し、長石・赤色粒若干、石英わずかにありの生駒西麓産胎土。

6も長頸壺片。外面は、口縁部ヨコナデ、頸部タテハケ後タテミガキ、ナナメに2条沈線あり。内面は、口縁部ヨコナデ、頸部上半ヨコハケ、下半ナデ。胎土は灰黄褐10Y R 5 / 2を呈し、角閃石多し、長石・石英ありの生駒西麓産胎土。

7も長頸壺片。外面は、頸部タテミガキ、下端にヨコミガキ2条、肩部は磨滅で調整不明。内面は、磨滅、頸部はタテユビナデ残る。肩部にもタテユビナデ。胎土はにぶい黄橙10Y R 6 / 4を呈し、石英

表52 3-387井戸 遺物破片数集計表

大別	総数	種別	破片数	%	器種	破片数	%	型式・部位		細別	破片数	%	
								破片数	%				
土器・陶磁器	233	弥生	233	100.0	壺	24	10.3						
					壺	76	32.6	長頸壺	41	53.9	生駒西麓	3	7.3
					(生駒西麓)	4	2.3	広口壺	8	10.5			
								底部	2	2.6	生駒西麓	1	50.0
								蓋	1	1.3			
					鉢	11	4.7				生駒西麓	2	18.2
					高坏	14	6.0				生駒西麓	2	14.3
その他		サヌカイト	1										



上面土器：[1 (上面土器1)]
埋土内：[2、3 (土器2)、4 (土器8)、5 (土器7)、6 (土器5)、7 (土器6)、8~13、14 (土器9)、15 (土器11)]

図110 3-387井戸出土遺物

多し、長石あり。

8は蓋片。つまみは外面ユビオサエ、内面ユビナデ、紐通しの孔を二つ開ける。外面はナデか。内面はヨコナデ。胎土はにぶい黄褐10Y R 5 / 4を呈し、角閃石多し、石英・長石若干ありの生駒西麓産胎土。

9は鉢。口縁が細かく波打つ。外面は、口縁部ヨコナデ、体部タテナデ、底部側面ヨコナデ、底部はナデか、底部以外に煤附着。内面はヨコナデ、底部に炭化物附着。胎土はにぶい橙7.5Y R 6 / 4を呈し、長石・石英多し、チャートあり。

10は甕底部片。外面は、胴部タタキ、底部側面ヨコナデ、底部ナデで粉圧痕あり。内面はナナメナデ。胎土は黒褐10Y R 3 / 1を呈し、長石・石英あり、角閃石わずかにあり。中河内低地産か。

11は高坏身部片。口縁端面には2条の沈線。外面は、上半ヨコナデ後ヨコミガキ、下半タテミガキ。内面は、上半ヨコミガキ、下半タテミガキ。胎土はにぶい橙5Y R 6 / 4を呈し、長石・石英わずかにあり。

12は高坏脚柱部片。外面タテミガキ。内面タテユビナデ後ヨコナデ。三方透かし。胎土はにぶい黄褐10Y R 5 / 4を呈し、角閃石多し、長石・石英若干ありの生駒西麓産胎土。

13も高坏脚柱部片。外面はタテミガキ。内面は、上から、タテユビナデ、ヨコユビナデ、ナナメユビナデ。四方透かし。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 2を呈し、長石あり、石英・赤色粒若干、チャートわずかにあり。

14は高坏脚部片。外面は、タテミガキ後脚裾端部ヨコナデ。身部内面ミガキ。脚部内面、下半にヨコナデ。胎土は黒褐2.5Y 3 / 1を呈し、角閃石多し、長石あり、石英若干ありの生駒西麓産胎土。

15は高坏。外面は、タテミガキ後身部上半ヨコナデ。身部内面は、下半タテナデ後上半ヨコナデ。脚部内面は磨滅するがヨコナデか。三方透かし。胎土はにぶい黄褐10Y R 5 / 3を呈し、長石多し、石英・角閃石あり、黒雲母わずかにあり、微細粒に角閃石多しの生駒西麓産胎土。

3-413井戸(図111~113・表53) 02-2トレンチ西半南東側で、3-411・415溝に切られた状態で検出された。平面形を確認した時点では、既に土器がかなり露出し始めており、正方位から45°ほど振った、一辺2m前後の方形に近い形であったが、そこからは緩く落ちていき、垂直に近く落ち始める部分の平面形は、正方位を向いた、南北1.6m、東西1.4mの丸みを帯びた方形となった。東辺に1ヶ所突出する部分がある。そこから60cm前後下がった部分で底となるが、底面中心に、径55~60cmほどのやや不整な円形で10~25cm下がる部分がある。その部分は壁は立たず、断面皿状である。最低部のレベルはT. P. +12.75mである。

埋土は上下3層に分かれるが、いずれもブロック土である。下層に井戸枠の痕跡や水成堆積層がなく、図111の断面図の3に含まれるブロック土が4~6層起源のものである事と、上面と下部の垂直に近く壁が立つ部分の平面形の方向性が異なり、その二段目の肩部が鋭いまな事、それより下は垂直に近い壁に浸蝕や崩れの痕跡が見られない事などから、埋め戻し直前に掘り広げられたものである可能性がある。底面に残る凹部が本来の底部か。3の層のブロック間の土は、有機分を含んだシルトで、井戸内に滞水状態で堆積していたものかもしれない。その中に井戸の壁を切り崩してブロック土として混ぜたのが3の層だろうか。そうすれば埋め戻し後の沈下を軽減できるように思える。

断面図の2の層では、ブロック間の土が有機分と砂粒を含んだ粘質土となる。おそらく周囲で、当時の土壌上面から掘り込んだ土を供給しているのであろう。断面図の1の層ではブロック土にも古土壌起

源のものが含まれ、埋め戻し土の供給元が変化しているのかもしれない。

遺物は3の層内にはほとんどなく、あっても上面近くで、基本的に上面から沈み込んだものと見て良いだろう。3の上面で2の層が入られる前に一度土器の投棄があったのであろう。それらの土器群と検出時に上面で出土した土器群とはレベル的にもはっきりと分別できる。前者を埋土内、後者を上面出土として分別して取り上げた。埋土内遺物は埋め戻しの最初の、断面図の3の層が形成された段階で、上面出土遺物は埋め戻しの最終段階で投棄されたと推測できる。上層出土遺物は、4面検出時に、3-

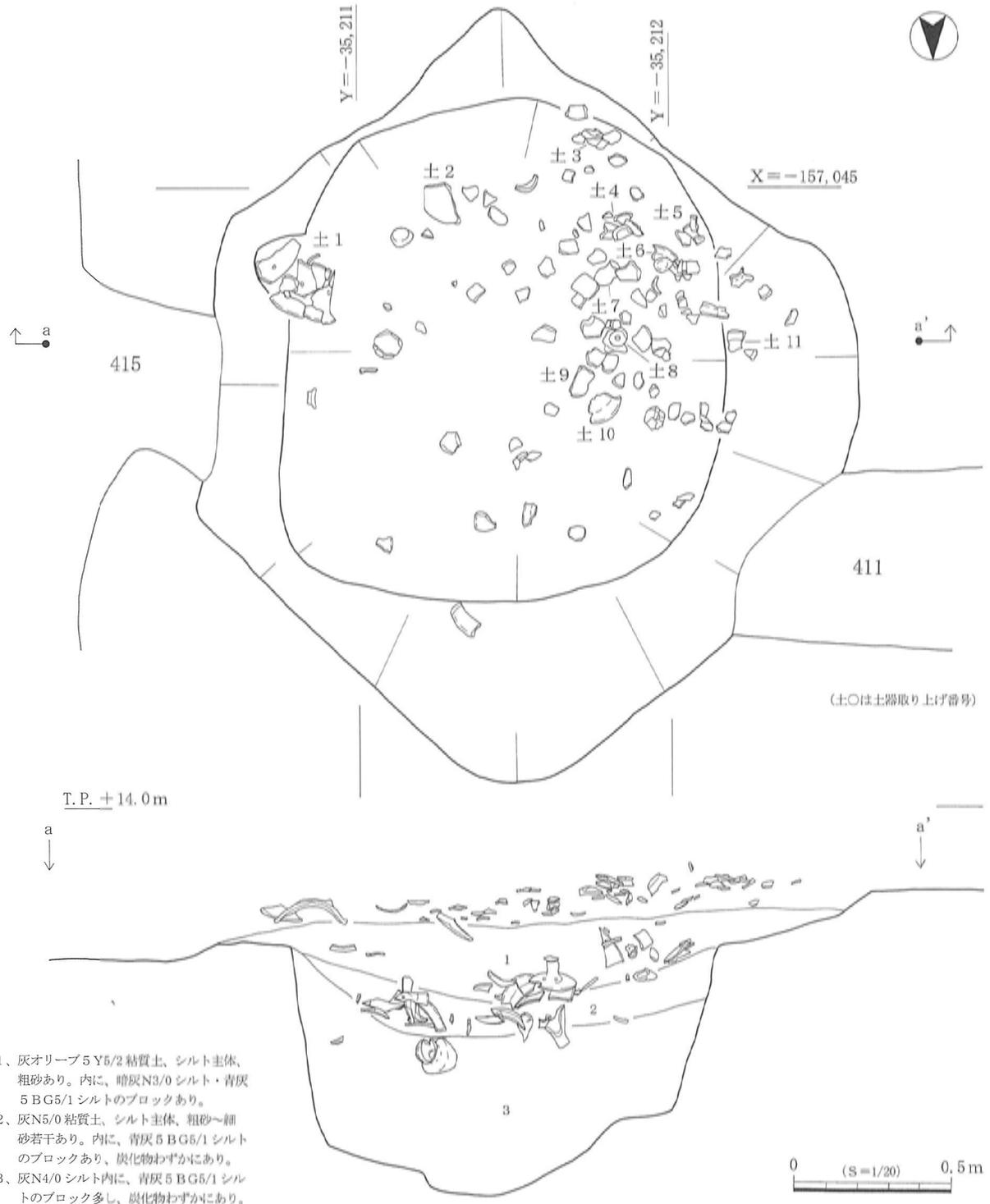


図111 3-413井戸断面・出土状況（その1・上面）

2層による巻き上げを除去する段階から出土し始めているので、この遺物群が埋め戻し最終段階のものならば、後世の削平は比較的少なかった可能性が高い。

上面出土遺物と埋土内遺物間で接合した例は埋土内土器13が上面土器1と同じ位置のやや下から出土し接合した以外ない。また、両者とも、上面土器1、埋土内土器6・12など、少数完形率の高いものがある以外は完形率は低く、他の場所で破碎したものの一部が入っているという状況であろう。

破碎前の土器群の器種別個体数を復元するなら、上面出土土器群では器台1、壺3～4、高坏3、の他、甕と鉢があったかどうかというところ。埋土内では壺4～5、高坏5～6、甕2～3、器台1ほどであろうか。

壺では長頸壺が小型も含め主体的で、それと高坏が多い。また、調査区全体の弥生土器の割合と比べ、生駒西麓産のものが少ないと言える。上面出土土器の中にわずかながら土師器が混じるがいずれも小片で、これは4面巻き上げにより混入したものと見て良い。時期を細かく決める要素には乏しいが、小型短頸化した長頸壺が一定数見られる事や、無文の器台の存在などを見れば、河内VI-1様式前後か。

図113には実測可能なものを示した。1～7が上面出土、8～21が埋土内出土である。

1は短頸化した小型長頸壺片。外面は口縁ヨコナデ後頸部タテミガキ。内面はヨコナデ。胎土は褐灰10Y R 6 / 1を呈し、長石・石英・黒雲母わずかにあり。

2は壺底部片か。外面は器壁剥離のため調整不明。内面は磨滅するがナナメナデか。胎土は橙7.5Y

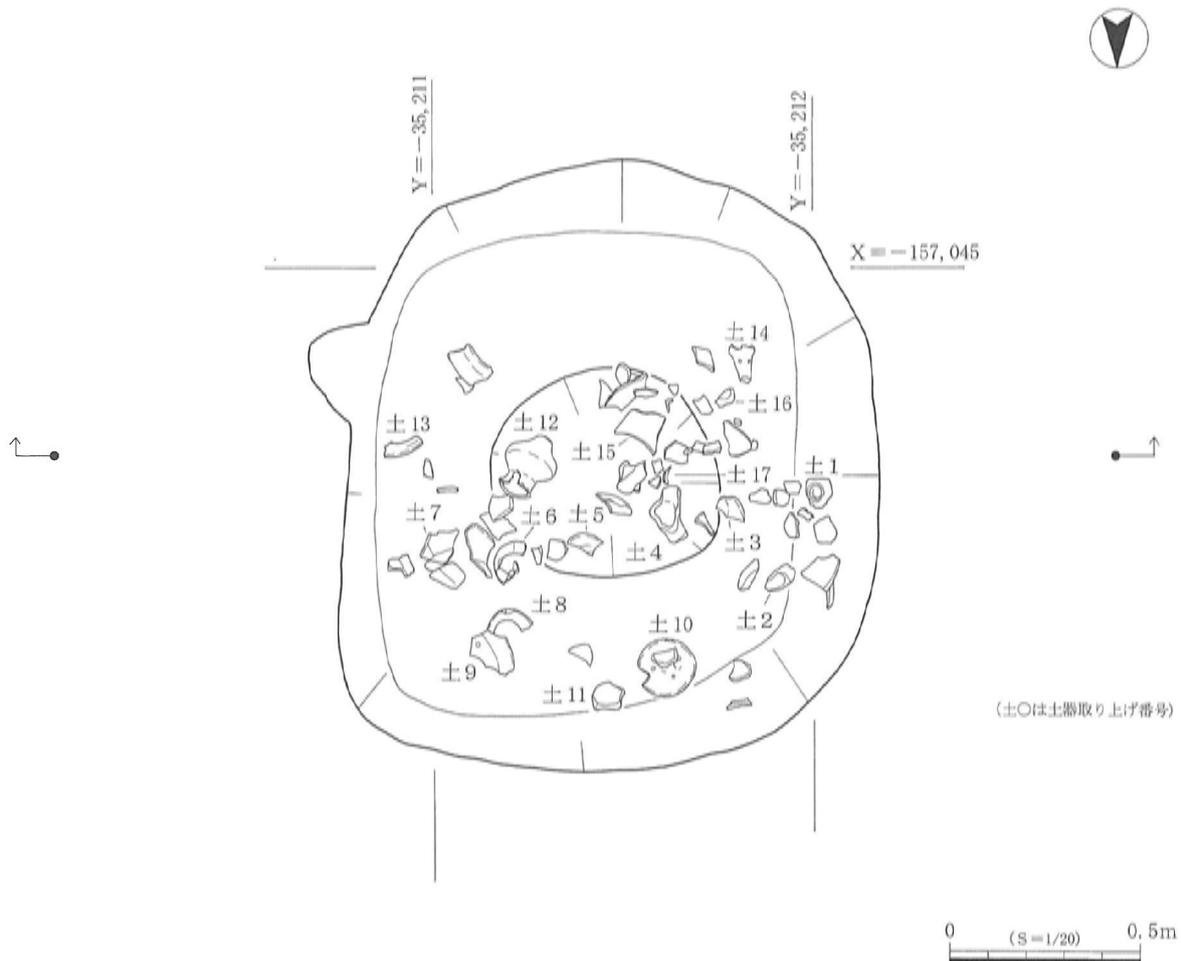


図112 3-413井戸出土状況（その2・埋土内）

R 6 / 6 を呈し、角閃石・石英・長石若干、赤色粒・黒雲母わずかにあり。中河内低地産か。

3 も壺底部片か。外面は、胴部タテミガキ、底部側面ユビオサエ、底部ユビナデ。内面はナナメナデ。

表53 3-413井戸 遺物破片数集計表

天別	種別	破片数	%	器種	破片数	%	型式・部位		細別	破片数	%		
							破片数	%					
土器・陶磁器	弥生	556	93.9	甕 (生駒西麓)	139	25.0	夕タキ	12	8.6				
					2	1.4	底部	6	4.3				
					2	0.4							
					157	28.2	長頸壺	19	12.1	生駒西麓	3	15.8	
					3	1.9	短頸壺	1	0.6				
							広口壺	9	5.7				
							底部	6	3.8				
					18	3.2							
					82	14.7							
					39	7.0					生駒西麓	1	2.6
					1	2.8							
1	2.8												
その他	石	14											

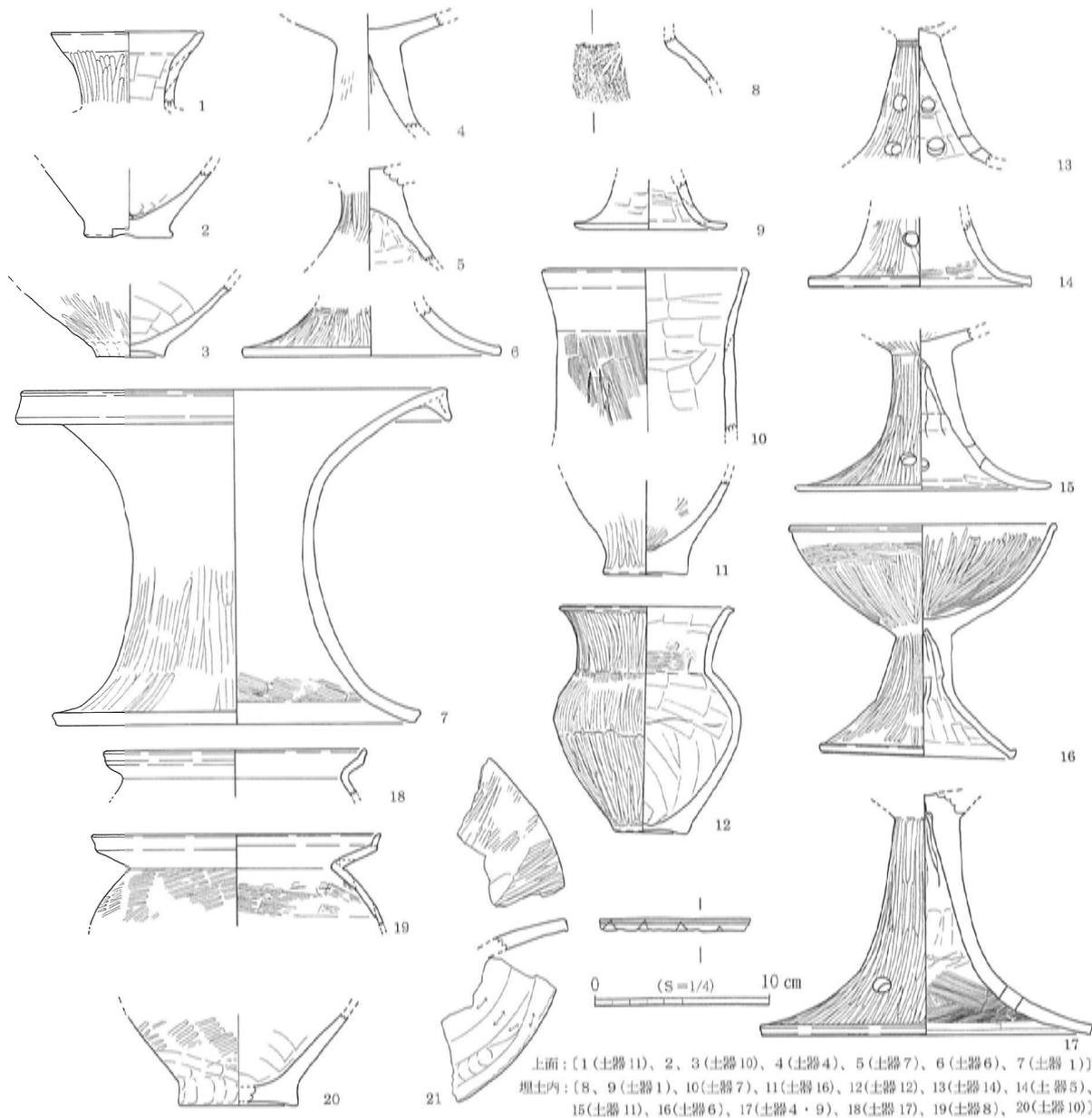


図113 3-413井戸出土遺物

胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 2を呈し、長石・石英あり。

4は高坏片。外面は磨滅で脚柱部にタテミガキ残るのみ。内面は磨滅調整不明。胎土は浅黄橙7.5Y R 8 / 3を呈し、石英多し、長石・赤色粒若干あり。

5も高坏片。外面タテミガキ。身部内面はミガキ。脚部内面は、タテユビナデ主体、一部ヨコユビナデ。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 2を呈し、石英わずかにあり。

6は高坏脚裾部片。外面は、端部ヨコナデ、他タテミガキ、その上に横位の細い沈線。内面磨滅調整不明。胎土は橙5Y R 7 / 6を呈し、赤色粒若干あり。

7は器台。外面は、垂下口縁付近ヨコナデ残るが、上半磨滅調整不明、下半タテミガキ、裾端部ヨコナデ。内面は、ほとんど磨滅、筒部はタテナデか、下部ナナメハケ、裾部ヨコナデ。完形率7割ほどだが、透かし孔残らず。胎土はにぶい橙10Y R 4 / 3を呈し、石英・角閃石多し、長石・黒雲母若干ありの生駒西麓産胎土。

8は壺肩部片。扇状に広がる4本の沈線あり。絵画土器か。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 4を呈し、混和砂粒なし。微細粒には石英・長石・黒雲母あり。

9は小型の高坏か、台付き鉢の脚部片か。外面は、タテナデ、端部ヨコナデ。内面はヨコナデ。胎土は褐灰10Y R 5 / 1を呈し、長石・赤色粒わずかにあり。

10は長頸壺片。頸部下半に沈線2本、絵画土器か。外面は、口縁部ヨコナデ、頸部タテハケ。内面はヨコナデ。胎土は黄褐2.5Y 5 / 4を呈し、角閃石多し、長石あり、石英若干ありの生駒西麓産胎土。

11は小型鉢片か。外面はタテミガキ、底部は調整不明だがかなり平滑。内面もタテミガキ。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 3を呈し、長石若干、石英・角閃石・赤色粒わずかにあり。

12は短頸化した小型長頸壺。外面は、口縁端部にヨコナデ、肩部・底部側面にタテハケ残るが、最後にタテミガキ、底部はユビナデ。内面は、口縁部ヨコナデ、頸部ヨコハケ、胴部上半ヨコナデ、胴部下半ナナメナデ。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 3を呈し、石英若干あり。

13は高坏脚部片。外面はタテミガキ、上端に横位の沈線2本。内面は、上端絞り痕残るが、その下はタテユビナデ、下半はヨコナデ。透かし孔は二段で、上段四方透かし、下段六方透かし。胎土は褐灰7.5Y R 5 / 1を呈し、石英・角閃石あり、長石・赤色粒若干あり、大粒の閃緑岩わずかにありの生駒西麓産胎土。

14も高坏脚部片。外面は、タテハケ後タテミガキ、端部ヨコナデ。内面はヨコハケ後ヨコナデ。透かし孔は1個残存するのみ。胎土は灰白5Y 7 / 2を呈し、混和砂粒なし。

15も高坏片。外面はタテハケ後タテミガキ、脚端部ヨコナデ。身部内面はタテミガキ。脚部内面は、上半絞り痕残すのみ、下半ヨコナデ。四方透かし。胎土は浅黄橙10Y R 8 / 3を呈し、石英・長石・黒雲母わずかにあり。

16は高坏。外面はヨコナデ後タテミガキ、最後に身部上半にヨコミガキ。身部はヨコナデ後タテミガキ。脚部内面は、脚柱部上半は絞り痕残すのみ、下半はヨコナデ、脚裾部はタテナデ後端部ヨコナデ。胎土は褐灰10Y R 5 / 1を呈し、石英・長石若干、赤色粒わずかにあり。

17は高坏脚部片。外面は、タテハケ後タテミガキ、裾端部ヨコナデ。内面は、脚柱部上半絞り痕のみ、下半タテユビナデ、屈曲部ナナメユビナデ、脚裾部ナナメハケ後端部ヨコナデ。胎土は褐灰10Y R 6 / 1を呈し、混和砂粒なし。

18は甕口縁部片。調整はヨコナデ。胎土は7.5Y R 6 / 4を呈し、角閃石多し、石英・長石若干、赤

色粒わずかにありの生駒西麓産胎土。

19も甕片。外面は口縁部ヨコナデ、胴部タタキ、全面に煤附着。内面は、口縁部ヨコナデ、肩部ユビオサエ後胴部ハケ。胎土は褐7.5Y R 4 / 3 を呈し、角閃石多し、石英・長石若干ありの生駒西麓産胎土。

20は甕底部片。外面は、胴部タタキ後一部ヨコナデ、底部側面ユビオサエ、底部ユビナデ。内面は、ナメナデ。胎土は暗褐10Y R 3 / 4 を呈し、角閃石多し、石英あり、長石若干ありの生駒西麓産胎土。

21は器台口縁片。上面はタテミガキ、下面はヨコナデ、端面は横位の沈線1条の後三角文を間隔開けて入れる。胎土は暗灰黄2.5Y 5 / 2 を呈し、角閃石あり、石英・長石若干ありの生駒西麓産胎土。

3-496井戸（図114～116・表54） 02-2 トレンチ西半の中央付近、現代建物基礎の東側で検出、調査区の弥生時代遺構の中で一番北側に位置する。少し四角味を帯びているかのような楕円で、東西径1.95m、南北径1.8m。断面形はおおよそ逆台形で、深さ1.2mほど、底面のレベルはT.P. +12.9m。

埋土は図114の断面図の1・3・5のブロック土と、その間にはさまる流入土のような2・4に分かれる。最下層の5がほとんどブロックのみからなり、井戸として機能していた時に堆積したようなものが全く見られない事から、埋め戻し前に中の堆積物を全て浚えた可能性が強い。そのため、素掘り井戸と断定はできない。2・4は埋め戻しの途中で二度東から砂の流入があった事を示すが、その原因は分からない。また、その上下で埋め戻し土のブロック土のあり方が変わるのも特徴的である。

遺物は上面検出時からかなり出始め、それらは断面図の1・2の層で一まとまりになる事が分かり、上面出土土器群とした。その下では埋土の途中で出土した。断面と比較すると、断面図の4の層の上面に分布する事が分かり、上層土器群とした（上層土器2～4）。ただし、上層土器1はかなり上、断面図の2の層から出土しており、実質は上面土器群に含まれる。最後に底部からほぼ完形に近い土器群が出土、これを下層土器群とした。

上面土器群は、ほぼ甕と壺の破片のみである。土器番号を付けて取り上げた中でも壺と甕の破片が混在しているものが多い。壺で器種のはかるものは1片の広口壺を除き、全て長頸壺である。極めて完形率が悪く、個体数把握や図化できるものは少ない。後世の削平で失われたものもあると思われるが破壊された土器の一部が残存している状況で。埋め戻しの最終段階で投棄したものであろうか。

上層土器群も完形率が悪く、甕・壺・鉢・高坏の破片が数個体分は混在しているようだが、図化できたのは各1点である。他にサヌカイト製石鏃やタタキ石らしき礫などが出土している。断面図の4の層の上面に少数が分布するという特徴から、3の層を埋め戻す前になんらかの理由で破片状態のまま流入した可能性がある。

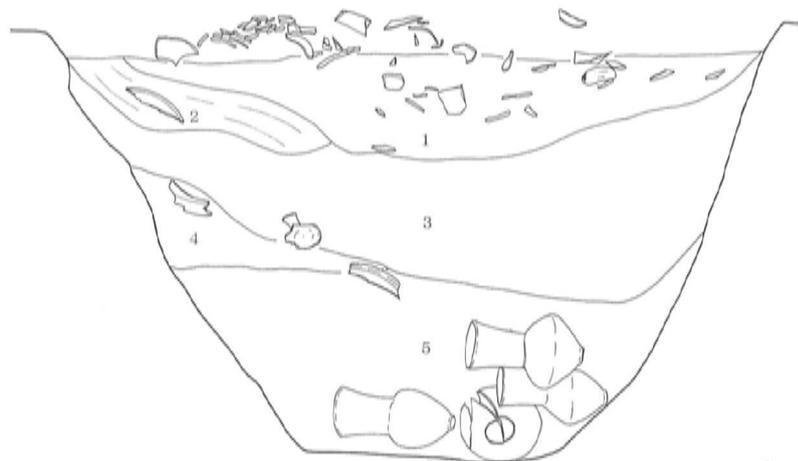
表54 3-496井戸 遺物破片数集計表

大別	総数	種別	破片数		器種	破片数		型式・部位		細別			
			破片数	%		破片数	%	破片数	%	破片数	%		
土器・陶磁器	311	弥生	311	100.0	甕 (生駒西麓)	90	28.9	タタキ	65	72.2	生駒西麓	65	100.0
						65	72.2	ハケ	1	1.1			
					壺 (生駒西麓)	202	65.0	底部	1	1.1			
						4	2.3	長頸壺	50	24.8	生駒西麓	3	6.0
								短頸壺	1	0.5			
								広口壺	10	5.0	生駒西麓	4	40
								細頸壺	1	0.5			
								底部	4	2.0	生駒西麓	1	25.0
								蓋	1	0.5	生駒西麓	1	100.0
								鉢	4	1.3			
		高坏	2	0.6									
その他		サヌカイト	1		木製品	2		石	15				

埋土上面（断面図の1、2層相当）遺物出土状況



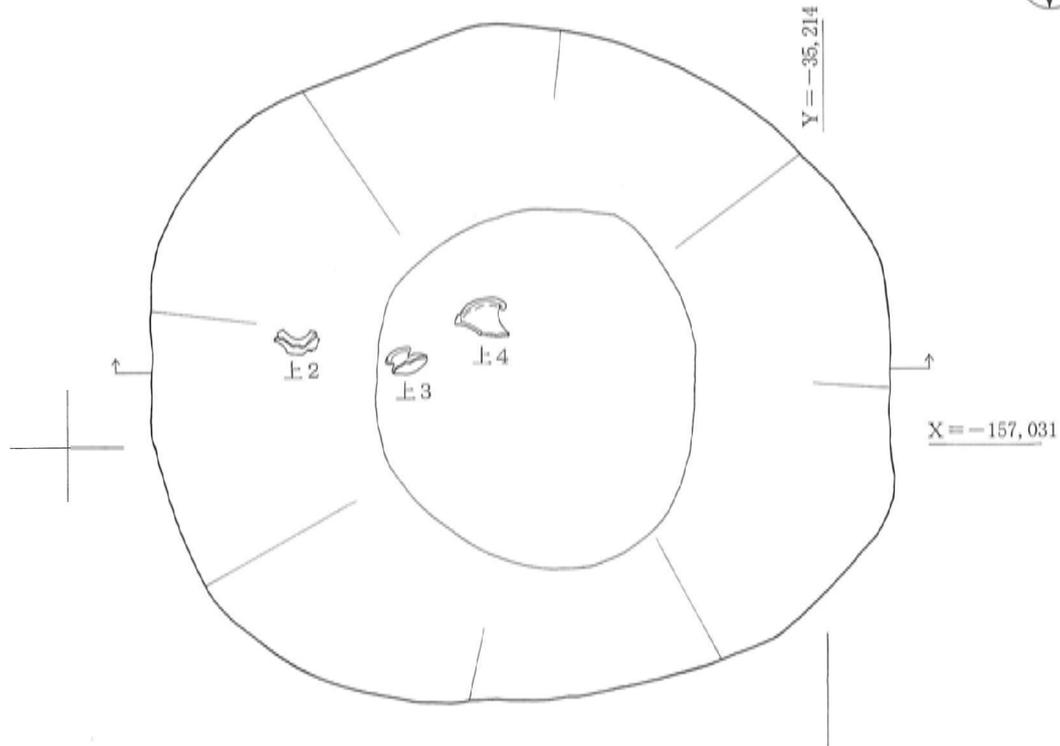
(土〇は土器取り上げ番号、上〇は上層土器取り上げ番号)



- 1、灰オリーブ5 Y4/2 粘質土、シルト主体、粗砂～中砂多し、小礫あり、炭化物あり、特に下面に集中、「オリーブ黄5 Y6/3 粘質土、シルト主体、粗砂あり、Fe あり。」の小ブロック若干あり。
- 2、灰5 Y4/1～黄褐2.5 Y5/6 粗砂、シルト若干あり、部分的にFe あり、ラミナあり。
- 3、「にぶい黄2.5 Y6/4～青灰10 B G5/1 シルト」と「灰オリーブ5 Y4/2 粘質土、シルト主体、粗砂～中砂多し。」の小ブロックの集まり、炭化物わずかにあり。
- 4、灰オリーブ7.5 Y5/2 砂質土、粗砂主体、シルト～細砂あり。
- 5、「暗緑灰10 G Y4/1 シルト」と「暗灰N3/0 シルト」のブロック、粗砂若干含む。

図114 3-496井戸（その1）上面出土状況・断面

埋土内上層（断面図の3、4層相当）遺物出土状況



埋土内下層（断面図の5層相当）遺物出土状況

（上○は上層、下○は下層の土器取り上げ番号）

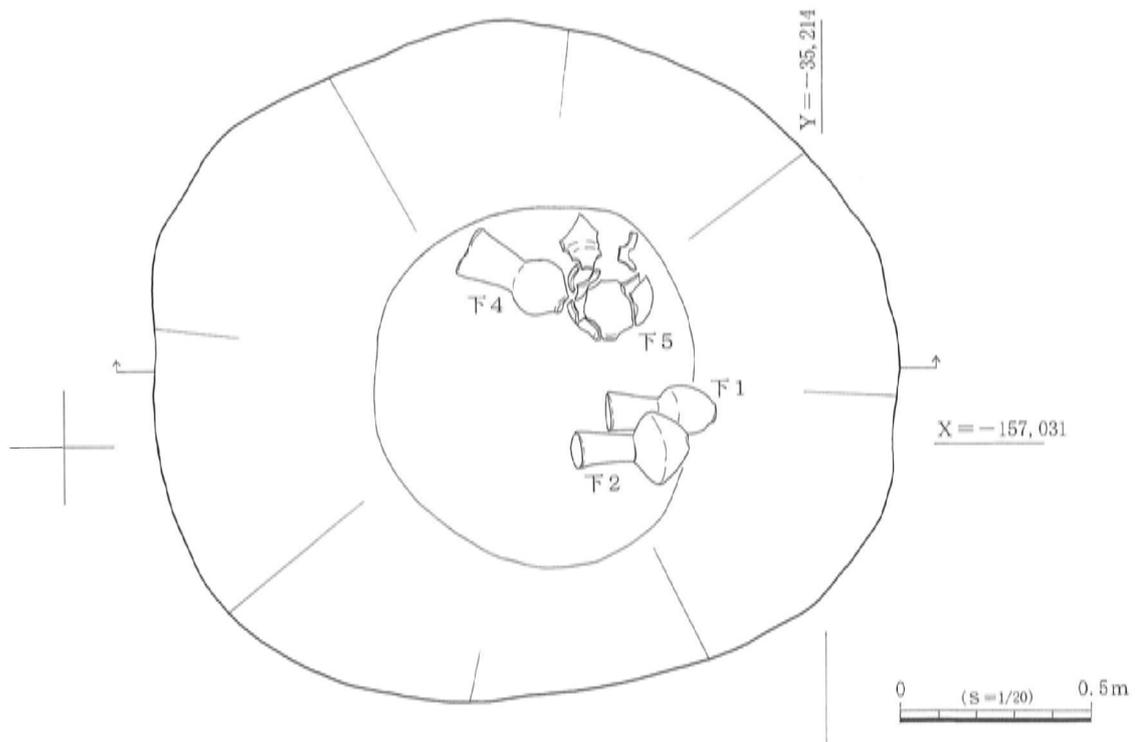


図115 3-496井戸（その2）上層・下層出土状況

下層土器群は4個の壺と蓋1個以外は少数の雑多な小片があるのみである。土器3は口縁を欠くが球胴化しながらまだ頸部の長い広口壺と思われる。つまり壺の組成は長頸壺2、細頸壺1、長頸広口壺1となる。壺は皆横置きで、底に付く土器4・5は井戸内に堆積物がない状態で置かれ、底から浮く土器1・2は若干埋め戻し土を入れた後に置かれ、埋納されたと考えられる。

全体的に見ればやはり壺が圧倒的に多く、その中心は長頸壺と言える。しかし、壺では不自然なくらい生駒西麓産の比率が低く、対して甕の破片では生駒西麓産がほとんどである。時期としては、口縁端部に凹線のある甕があり、細頸壺の胴部の扁球化傾向が強い事などが古色で、長頸広口壺の球胴化、小型鉢の存在などは新色と言え、長頸壺は最盛期のものである。以上の事からこの井戸の土器群は河内V-2様式のものとして捉えられ、弥生時代遺構の中では一番古いものである。

図116には実測可能なものを示した。1・2上面、3～9が上層、10～14が下層である。

1は壺肩部片。放射状に広がる3本の沈線があり、絵画土器か。胎土は褐10Y R 4 / 4を呈し、石英あり、長石若干、赤色粒わずかにあり。

2は甕片。外面は、口縁部ヨコナデ、胴部タタキ。内面は磨滅調整不明。胎土は黄橙7.5Y R 7 / 8を呈し、石英・長石若干あり、角閃石わずかにあり。

3は器台口縁部片。口縁端部はヨコナデで、端面に波状文。他は内外面ともタテミガキ。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 3を呈し、石英・長石あり、黒雲母わずかにあり。

4は広口壺片。外面は、ヨコナデ後頸部下半と胴部肩部以下にタテミガキ、頸部に2本の縦方向ヘラ沈線。内面は、口縁部～頸部ヨコナデ、頸部下端から肩部にタテユビナデ後、その下部にヨコケズリ、最後に胴部タテハケ。胎土はにぶい黄褐10Y R 5 / 4を呈し、角閃石多し、石英・長石ありの生駒西麓産胎土。

5は鉢。外面は、体部ヨコナデ、底部側面ユビオサエ、底部ユビナデ。内面は、磨滅するが底部に板状工具のアタリ痕残り、左上がりナナメナデか。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 2を呈し、黒雲母・石英・長石あり、角閃石若干あり、白雲母わずかにあり。中河内低地産か。

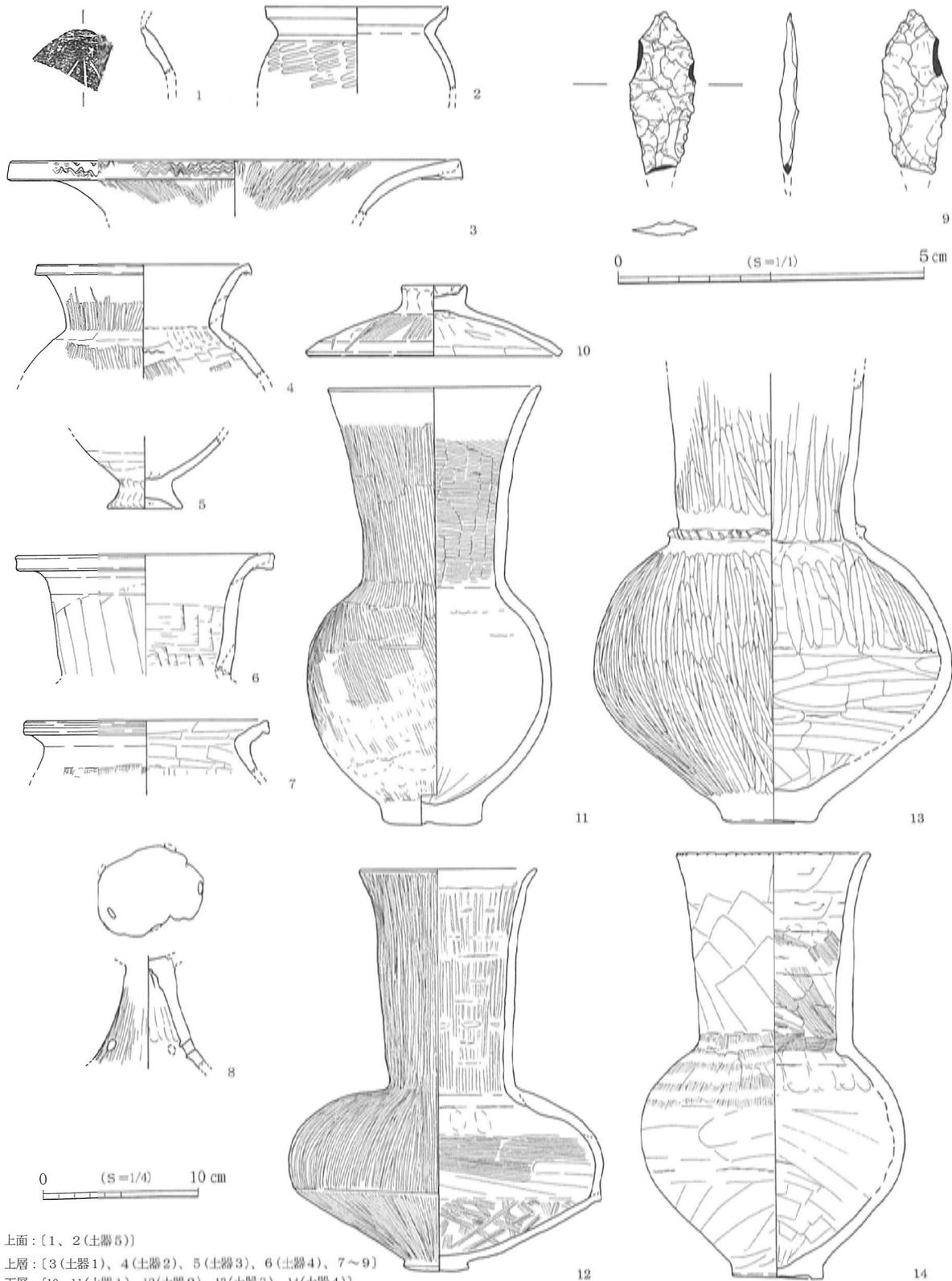
6は広口壺片。外面は、口縁部ヨコナデ、頸部は板状工具で条痕を残すがタテナデ。内面は、口縁部ヨコナデ、頸部はヨコハケ後軽くヨコナデ。

7は甕片。口縁端面に1条の凹線。口縁端面に凹線の入る甕は河内V-3様式には消滅するようである。外面は、口縁部～肩部ヨコナデ、胴部タテハケ、煤附着。内面は肩部にユビオサエ残しながらヨコナデ、ヨコナデは口縁部と胴部では上下の切り合いが異なる。胎土は褐灰10Y R 4 / 1を呈し、角閃石多し、石英・長石ありの生駒西麓産胎土。

8は高坏脚部片。外面は、タテミガキ、上端身部との接合部分ヨコナデ。内面は、上端の絞り痕直下にヨコユビナデ、その下タテユビナデ、透かし孔以下は磨滅のため調整不明。五方透かし。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 4を呈し、石英・長石あり、赤色粒わずかにあり。

9はサヌカイト製石鏃。4面の遺構出土の石器類は基本的に別にまとめたが、これに関しては遺構の時期に伴うものである可能性があるのでここに掲載した。基部を欠損するが残長27mm、最大幅11mm、厚さ3.5mm。最大幅部が鋒部に寄る柳葉形である。素材となった剥片は縦長の剥片か。その打点は鋒部側にあったと思われる。図右ネガ面の右半に剥片時の剥離痕2面残る。ポジ面は両側から成形剥離。刃部形成はポジ面から押圧剥離を入れ、鋒部では両面から入れて素材の反りを軽減している。石質は良く、風化も軽い。重量0.6g。

10は甕蓋。つまみは上面中心にユビオサエ、その周囲をユビナデ、最後に端部にユビオサエを入れ、それに対応して外側面にユビナデ。外面は、ユビオサエ後タテハケ、その後口縁部にヨコナデ、最後にタテミガキが散在する。内面は、中心部にユビオサエ、そこから右下がりのナナメナデ、最後に口縁部にヨコナデ。内面全体から外面口縁部付近まで煤附着。胎土はにぶい黄褐10Y R 4 / 3を呈し、角閃



上面：〔1、2(土器5)〕
 上層：〔3(土器1)、4(土器2)、5(土器3)、6(土器4)、7~9)〕
 下層：〔10、11(土器1)、12(土器2)、13(土器3)、14(土器4)〕

図116 3-496井戸出土遺物

石・長石・石英ありの生駒西麓産胎土。

11は長頸壺。完形である。外面は、胴部下半の接合痕にユビオサエ残るが、全体にタテハケ、口縁部はヨコナデが切る、胴部下半は軽いナデが重なる、底部は植物茎の圧痕残るが、不定方向の軽いナデ。内面は、頸部ヨコハケ後口縁部ヨコナデ、胴部はナデで、下半はタテナデか。肩部外面に逆「L」字形のヘラ記号あり。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 2を呈し、長石・石英・黒雲母若干あり、微細粒に赤色粒もあり。

12は細頸壺。胴部が一部割れていたがほぼ完形である。外面ヨコナデ後タテミガキ。内面は、頸部接合痕とその部分のユビオサエ残るが、ヨコハケ後タテミガキ、口縁部ヨコナデ、肩部はタテユビナデ後ヨコナデ、胴部上半ヨコハケ、下半は斜格子状のハケ、下半のハケの単位は幅1.5cmほどのものと1.0cm弱のものがあり、上半のものより幅狭い。最後に胴部上下の接合部にユビヨコナデ。胎土はにぶい橙7.5 Y R 7 / 3を呈し、石英・長石・角閃石わずかにあり。

畿内V様式に河内と大和で成立する細頸壺であるが、胴部がかなりしっかりした扁球形であり、球胴化が進行する河内V-3様式まで下るとは考えにくい。口縁端部まで貫徹するタテミガキも古色か。

13は、口縁部を欠くが、胴部が扁球形にまで膨らみ、頸部下端の刻み目突帯などの加飾性から見て、広口長頸壺と考えられる。口縁部以外は欠損なく接合した。外面は、タテミガキ、頸部下端の刻み目突帯の上下はヨコナデ、底部側面ヨコナデ、底部ケズリ。内面は、頸部ナデ後タテミガキ、肩部ユビオサエ・ユビナデ後胴部ナデ、最後に胴部上半にミガキ。胎土はにぶい橙7.5 Y R 7 / 4を呈し、石英若干、長石わずかにあり。微細粒に角閃石もあり。

広口長頸壺は河内V様式期にのみ存続するようで、加飾性を維持しながら、頸部の短小化、胴部の球胴化が進行するらしい。本品は胴部の張りから河内V-1様式までは遡らないと思われ、頸部の長さから河内V-3様式までは下りにくいと思われる。

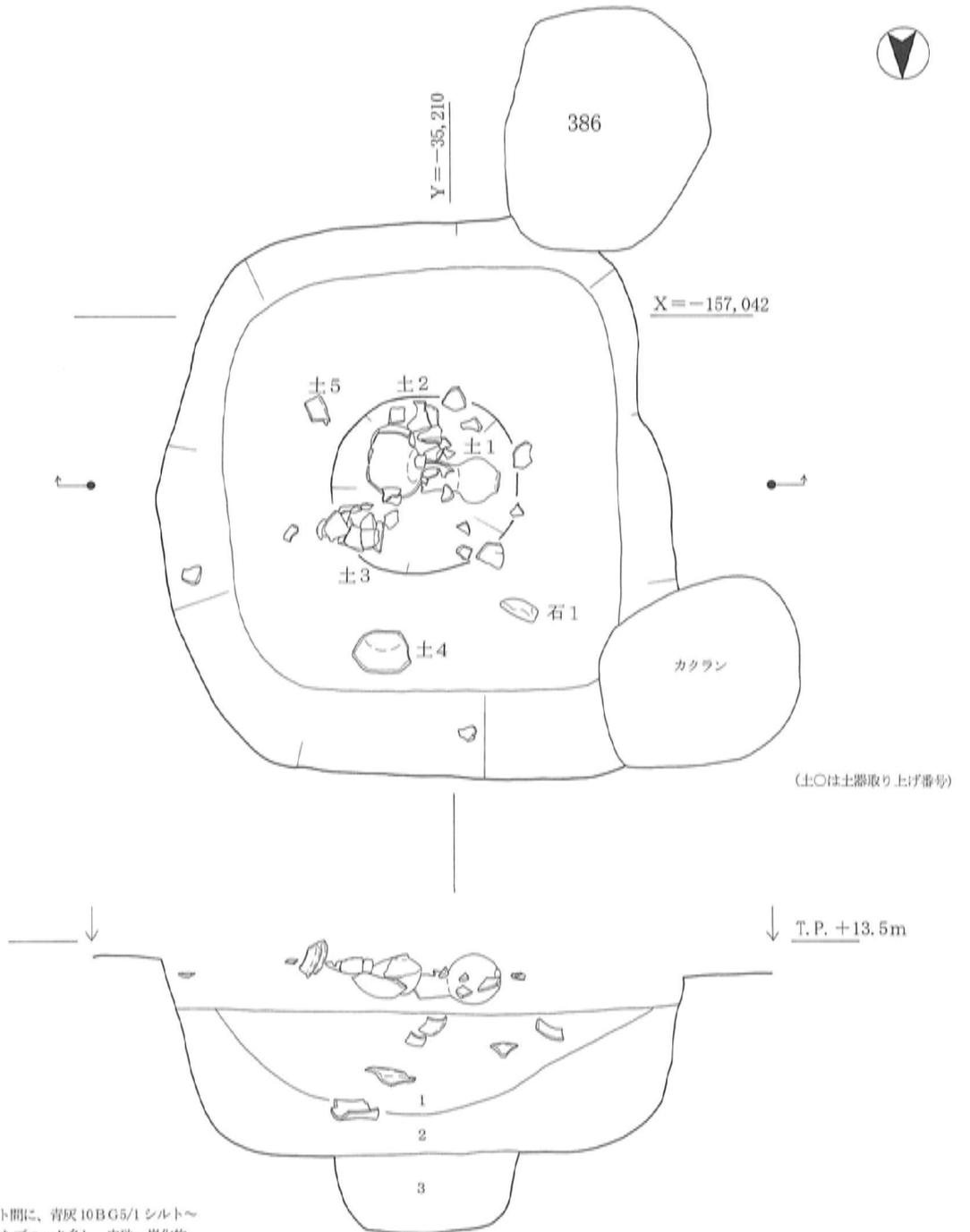
14は長頸壺。完形である。口縁端部に刻み目入る。外面は、口縁部ヨコナデ、頸部ナナメナデ、胴部下半ナナメナデの後、胴部中位ヨコナデ、その後胴部上半にタテハケ入り、それをヨコナデがまばらに消す、底部は周縁に平坦な無調整面を持ち、ユビナデ1周。内面は、頸部接合痕とその部分のユビオサエ残るが、ハケ後軽いナデ散在、肩部タテユビナデ後ヨコナデ、それ以下は左上がりナナメナデ。胎土は7.5 Y R 8 / 1を呈し、石英・長石あり、角閃石若干あり、微細粒に黒雲母もあり。

3-510井戸（図117～119・表55） 02-2トレンチ西半の南東側で検出。堀田の底に位置しているため、かなり削平を受けていると考えられる。平面形は隅丸方形に近い形で、南北1.65m、東西1.45mほど。壁は垂直に近い。底面には中央に径50cm強の円形の穴があり、それも壁が立つ。底面のレベルはT. P. +12.85m、最低部はT. P. +12.63m。

埋土は3層あるが、図117の断面図の3の層は、4～6層と7層の混濁と見られ、ブロックが入らないので、井戸機能時に堆積した層が残存している可能性もあるが、断面図の1・2はブロック土であり、それ以外の崩落土や流入土のような層が一切認められないことから、井戸底面の穴以外はいったん機能時の堆積物が浚えられた可能性がある。ブロック土はおそらく4～6層のものと思われる。断面図の1の層は遺物との関係から見れば、本来上面出土遺物の下面まであり、さらにその上に、遺物を埋めるレベルまではもう1層存在したと思われる。

出土遺物は、検出時の上面に集中していたものを上面出土、断面図1・2の層内のものを埋土内出土とした。上面出土土器群は土器1のように完形品もあり、後世の削平による破碎を考えると、何個体か

は完形品が存在していた可能性が高い。土器 2・3 がその候補となろう、しかし土器 4 が埋土内土器 2 と接合し、破碎された後一部が入っている土器もある事を示し、その破碎が、埋土内の土器と同時である可能性も示す。この土器群には図化した他にも甕数片、高坏 1 片の破片がある。埋土内土器群は破片は大きいものが多いが、完形率は高くない。図示したもの他には、甕・高坏・壺の小片が若干あるのみである。いずれも断面図の 1 の層内にある。この層はブロック土の輪郭がぼやけている事から、埋めた時滞水状態であった可能性があるが、ブロック土が消滅しているわけではないので、埋土内出土土器は上面出土土器が入れられた際、そこから沈み込んだとは考えにくい。二つの土器群に分別したのは妥



- 1、暗灰N3/0シルト間に、青灰 10BG5/1シルト～極細砂のぼやけたブロック多し、中砂・炭化物わずかにあり。
- 2、1よりややブロック少なく、輪郭はつきりする。
- 3、暗緑灰 10GY4/1シルトと、粗砂(7層)の混濁。

図117 3-510井戸断面・出土状況(その1・上面)

当であるが、両者間に接合例がある事からほとんど時期差はないと見てよからう。

組成を見てみると、壺が主体で、生駒西麓産が非常に少ないように見えるが、長頸壺では完形品が生駒西麓産だったため破片数では少なくなっているのであり、広口壺と同じく、2個体中1個体が生駒西麓産という状況である。鉢でも多く、調査区の弥生時代井戸の中では生駒西麓産が多い例と言える。個体数を復元してみると、長頸壺と広口壺が各2、高坏・鉢・甕が各1～2、器台が1個体ほどか。ちなみに出土した石は全て自然礫で、煤の附着が1個ある以外人為痕はない。

小型化傾向にある長頸壺や、小型の甕・鉢の存在、広口壺は胴部球胴や加飾のものがある、などは河内V-2～3様式の時期を示す。中でもタタキを残す鉢の存在、身部上半の外反が強まった高坏などを見れば河内V-3様式に限定できるか。

図119には実測可能な遺物を示した。結果として、土器番号を付けた土器を図示している。

1は小型の長頸壺。完形。外面は、タテミガキ、頸部・肩部境にその前のタテハケ残る、口縁部と底部側面ヨコナデ、底部は不定方向ナデ。内面は、頸部磨滅するがヨコナデか、胴部下半ナメハケ後胴部中位ヨコハケ、最後に肩部ヨコユビナデ、底部タテユビナデ。胎土はにぶい黄橙10Y R 6 / 4を呈し、角閃石多し、石英あり、長石若干ありの生駒西麓産胎土。

2は広口壺。外面は、口縁部～頸部上半にヨコナデ、頸部・肩部境にタテハケ残り、他はタテミガキ。

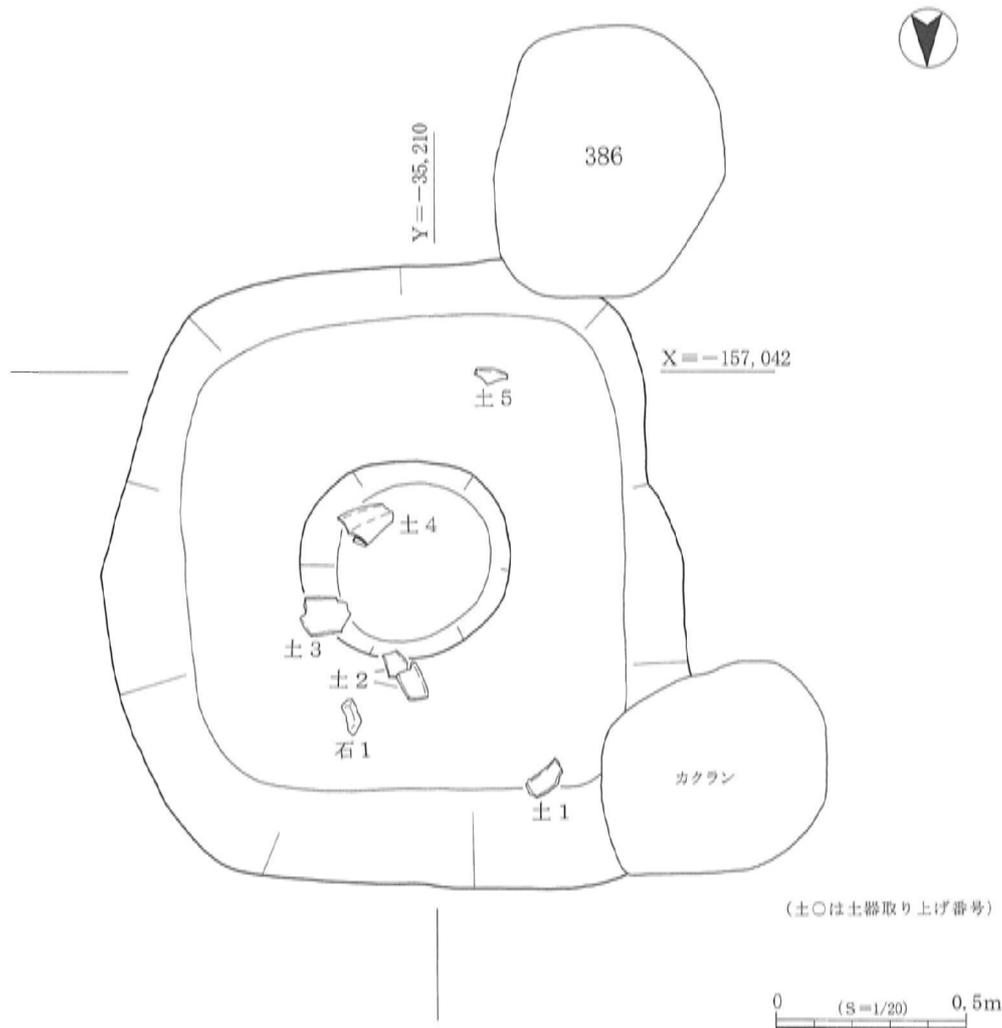


図118 3-510井戸出土状況 (その2・埋土内)

内面は、磨滅激しいが、少なくとも口縁部～頸部と肩部はヨコナデ。胎土はにぶい褐7.5Y R 5 / 4 を呈し、角閃石非常に多し、長石あり、石英若干、黒雲母わずかにありの生駒西麓産胎土。

3は小型の甕。外面は、口縁部ヨコナデ、胴部上半タテハケ、下半ナナメナデ。内面は、口縁部ヨコナデ、胴部ナナメナデ。胎土は明黄褐10Y R 6 / 6 を呈し、角閃石・石英・長石あり。

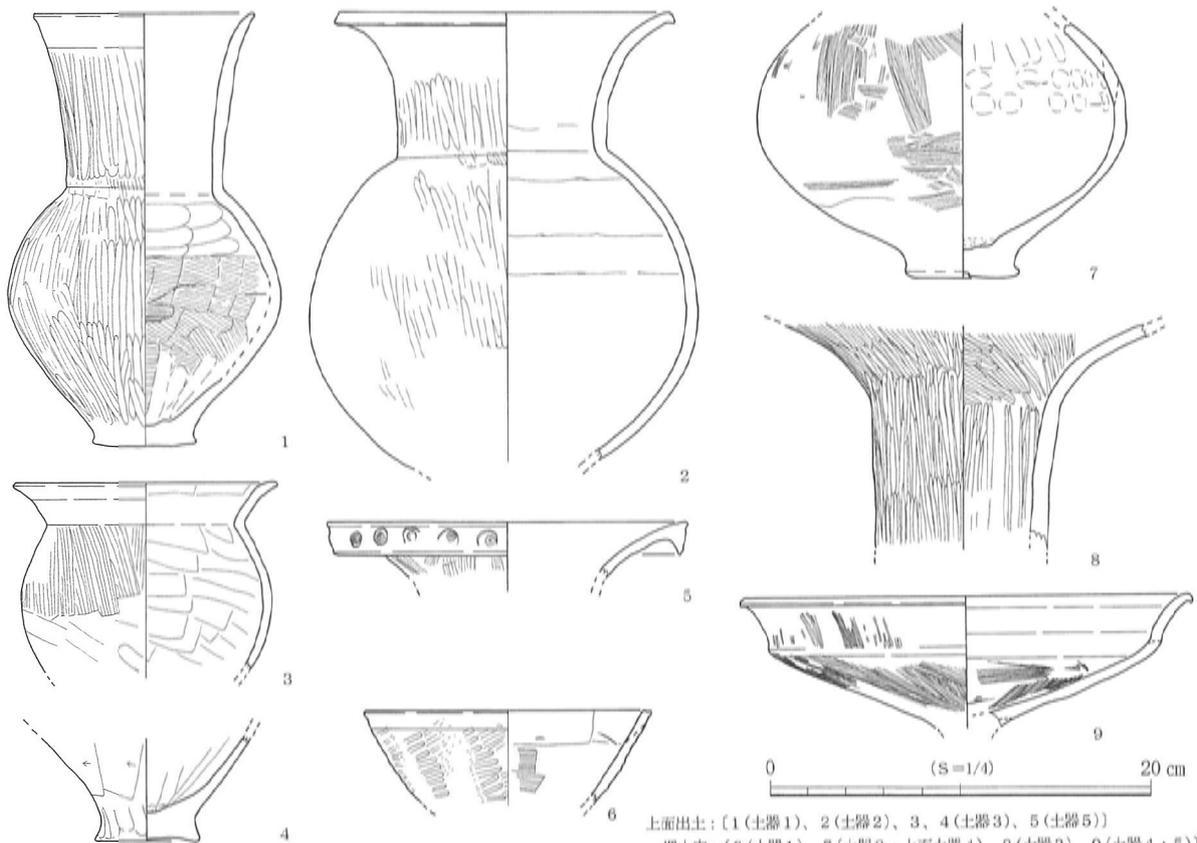
4は鉢片か。外面は、体部幅の広いヨコナデ、底部側面ユビナデ、底部植物茎圧痕残し不定方向ナデ。内面はタテナデ。胎土は黒褐10Y R 3 / 2 を呈し、角閃石多し、石英あり、長石若干ありの生駒西麓産胎土。微細粒に黒雲母もあり。

5は広口壺片か。外面は、口縁部ヨコナデ、垂下口縁には三重竹管文、各竹管文で中の二重の位置が異なる、頸部はタテハケ後ヨコナデ。内面は磨滅により調整不明。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 4 を呈し、石英あり、長石若干あり。

6は鉢片。外面は、タタキを、間隔をあけてタテナデで消す、口縁部ヨコナデ。内面は、体部ヨコハケ後軽くナデ、口縁部ヨコナデ。胎土は灰オリーブ5Y 5 / 2 を呈し、角閃石多し、長石・石英若干あ

表55 3-510井戸 遺物破片数集計表

大別	総数	種別	破片数		器種	破片数		型式・部位		細別			
			破片数	%		破片数	%	破片数	%	破片数	%		
土器・陶磁器	158	弥生	158	100.0	甕	20	12.7	タタキ	5	25.0			
					(生駒西麓)	1	5.0	底部	1	5.0			
					壺	82	51.9	長頸壺	21	25.6	生駒西麓	1	4.8
					(生駒西麓)	34	41.5	広口壺	28	34.1	生駒西麓	18	64.3
					鉢	11	7.0			生駒西麓	10	90.9	
					高杯	5	3.2			生駒西麓	3	60.0	
					その他		石	8					



上面出土：〔1(土器1)、2(土器2)、3、4(土器3)、5(土器5)〕
埋土内：〔6(土器1)、7(土器2・上面土器4)、8(土器3)、9(土器4・5)〕

図119 3-510井戸出土遺物

りの生駒西麓産胎土。

7は壺胴部片。胴の張り方から見れば広口壺の胴部か。外面は、胴部下半ヨコハケ後上半タテハケ、その後下部にヨコナデ、底部は植物茎圧痕残しナデか。内面は、磨滅強いが、肩部のタテユビナデとその下のユビオサエ2列は残る、最終調整はナデか。胎土は橙7.5Y R 6 / 6を呈し、角閃石あり、石英・長石若干、赤色粒・黒雲母わずかにあり。

8は器台片。調整はナデ後タテミガキ。胎土は灰黄褐10Y R 5 / 2を呈し、角閃石多し、長石・石英ありの生駒西麓産胎土。

9は高坏身部片。外面は、下半タテハケ後上半ヨコナデ、最後に上半タテミガキ。内面は、上半ヨコナデ、下半ハケ後ナデ。胎土は灰黄褐10Y R 5 / 2を呈し、角閃石あり、石英・長石若干ありの生駒西麓産胎土。

3-533土坑(図120・121・表56) 02-2トレンチ西半の南西側で、北側を現代建物基礎に破壊された状態で出土した。3-746溝に切られる。実はこの土坑からは、土器8を始め若干土師器・須恵器が出土している。しかし、他の飛鳥時代遺構よりかなり低い割合になると、土器8以外小片ばかりなので検討しなおすと、土器8をはじめほとんどが3-746溝が切っていた部分で出土している事が分かり、その溝の埋土を掘削し足りないままであった可能性が強まった。そこで一応弥生時代の遺構としてここに報告する。

不整形な土坑で、東西長3.2mを測る。形状から、半分ほどは残存しているものと見られる。深さ30cm、最低部のレベルはT. P. 13.22m。堀田の底部に位置しているので、かなり削平されていると思われる。本来は深さだけでなく、平面規模もかなり大きかったと推測される。埋土は、セクション断面が雨水により流失したため実測できなかったが、7層の粗砂がかなり混じり、暗色を呈する粘質土であった。オリーブ黒10Y 3 / 1ほどか。

遺物は南西側に片寄って集中している。浅い部分や法面では底に接するものもあるが大部分は浮いている。深い部分では下部に確実に空白部分があり、逆に言えば遺物の出土レベルが埋土上半に限定されている。埋土も上下2層に分かれていた可能性が高い。土器の完形率は低く、同一個体の破片の分布は狭い。削平でかなり失われているとも考えられるが、他の場所で破碎された土器の一部が投棄されているような状況であろう。

弥生土器の組成では、壺が一番多く、甕もかなりあり、それに少数の高坏と器台が附随する状況である。壺ではやはり長頸壺が主体的である。生駒西麓産はさほど多くない。甕ではハケ甕が圧倒的なのが注目され、生駒西麓産が多数である。400片を越えているので、まず信用できる傾向であろう。完形率が悪いので、復元的な個体数把握は無理がある。

口縁端部に面を持ち、胴部の張るハケ甕は、河内V-3様式までは存続しないようで、算盤玉形胴部を持つ壺も古色であろう。口縁加飾の広口壺は河内V-2~3様式に一定数あるという事と高坏の身部形態から見れば、これらの弥生土器群は河内V-2様式に限定できる。

図121には実測可能なものを示した。広口壺端部片や高坏脚部片が割れにくさから実際の割合より多く実測できた。留意されたい。1が土師器の他は、全て弥生土器である。

1は土師器甕片。先述したとおり、3-746溝の掘り残した埋土からの混入か。外面は、口縁部ヨコナデ、胴部は磨滅するがタテハケ。内面は、胴部ユビオサエ後タテナデ、口縁部~頸部ヨコナデ。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 4を呈し、石英若干あり。

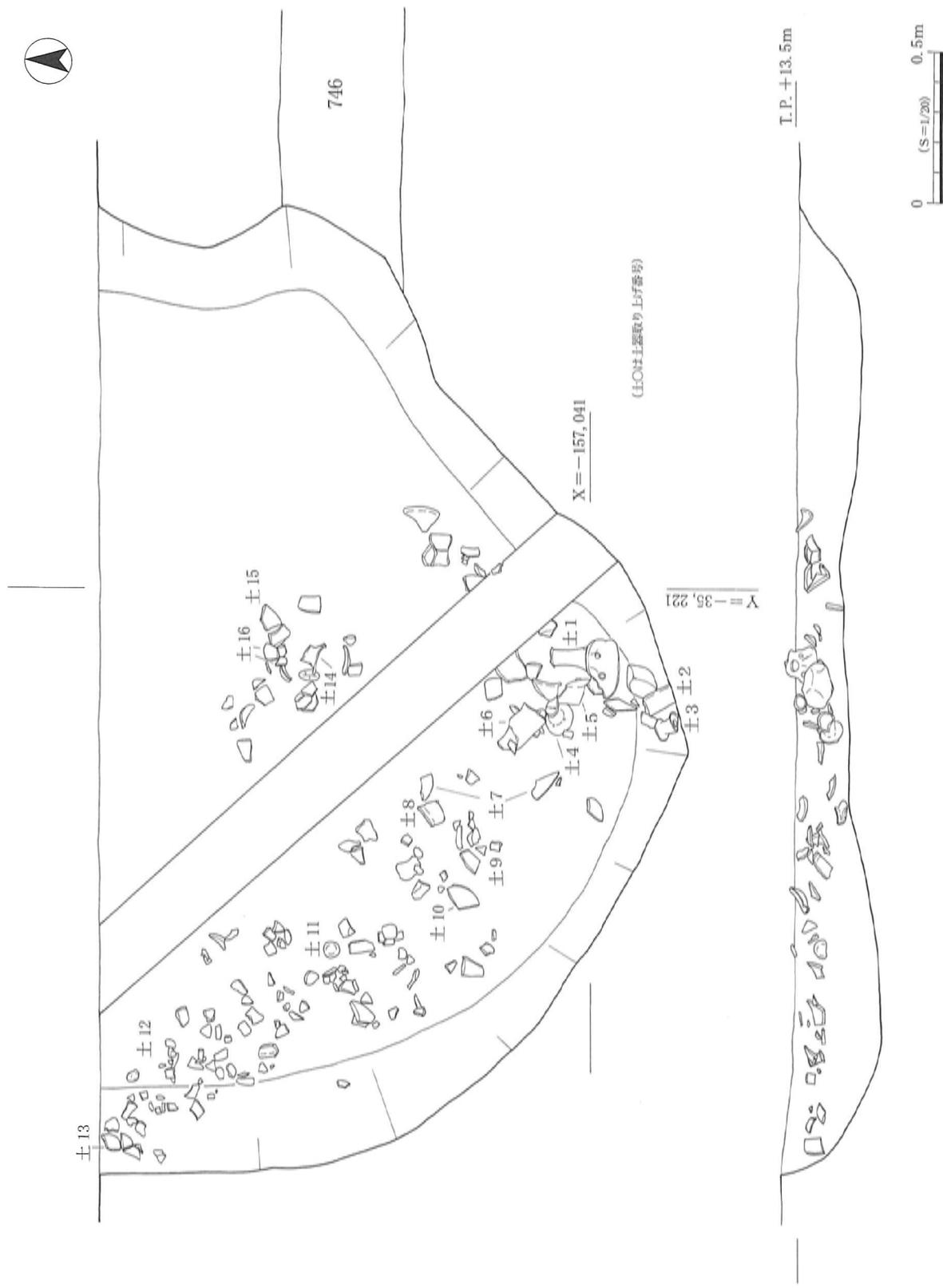


図120 3-533土坑出土状況

2は甕片。外面は、口縁ヨコナデ、胴部は頸部直下にタタキを残シタテハケ、口縁部に煤附着。内面は、口縁部ヨコナデ、胴部は、頸部直下にユビオサエ1列残し、タテケズリ後軽くヨコナデ、残存部分下端に炭化物附着。胎土はにぶい黄褐10Y R 5 / 3を呈し、角閃石多し、大粒の閃緑岩若干ありの生駒西麓産胎土か、次の3とほぼ同じ胎土である。

中部瀬戸内地方の影響を強く受けたものであるが、外面に残るタタキは畿内V様式のものとは変りはない。内面のケズリもやや雑である。

3も甕片。口縁端面に凹線1条。外面は、口縁部ヨコナデ、胴部はタテハケ後最大径部分ヨコナデ。内面は、口縁部ヨコナデ、胴部はタテケズリ後頸部直下ヨコケズリ最後に軽くヨコナデ。胎土はにぶい黄褐10Y R 5 / 3を呈し、角閃石多し、大粒の閃緑岩わずかにありの生駒西麓産胎土。

ほとんど中部瀬戸内地方の甕と言っても良いほどである。しかし、内面ヨコケズリの範囲狭いのがあまり例を見ない。また、角閃石・閃緑岩の粒子が他の生駒西麓産より粗い。特に、角閃石は細かい針状に見える柱状結晶が少なく、大粒の塊状・粒状結晶が多い。2と共に、阿波あたりからの搬入品の可能性もあると思う。

4は甕底部片。外面はタタキ、底部は無調整。内面は、底部にユビオサエ、胴部タテナデ。胎土はにぶい黄褐10Y R 4 / 3を呈し、角閃石多し、石英・長石ありの生駒西麓産胎土。

5は壺底部片。外面はハケ、底部側面にタテに2本のヘラ描き沈線あり。内面は底部ユビオサエ、周囲にナナメナデ。胎土はにぶい褐7.5Y R 6 / 2を呈し、石英・長石あり、白雲母・赤色粒若干、黒雲母わずかにあり。

6は広口壺片。外面はヨコナデ、口縁端部・頸部に各3条の凹線。内面はヨコナデ、上面に波状文、屈曲部分にヨコケズリの痕跡残る。波状文は6条で、1本の太さは外面の凹線と同じ。胎土は橙7.5Y R 6 / 6を呈し、長石・石英わずかにあり。微細粒には角閃石もあり。

7も広口壺片か。器台の可能性もあり。磨滅により調整不明。胎土は橙7.5Y R 6 / 6を呈し、角閃石・黒雲母多し、石英・長石あり。生駒西麓産と断定はできない。

8は広口壺片である。調整はヨコナデ。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 3を呈し、石英多し、長石若干あり。

9は広口壺か器台口縁片。磨滅激しいが、口縁端面櫛描文ありか。その両側にはヨコナデ。頸部外面

表56 3-533土坑 遺物破片数集計表

大別	総数	種別		器種		型式・部位		細別					
		破片数	%	破片数	%	破片数	%	破片数	%				
土器・陶磁器	453	弥生	434	95.8	甕	64	14.7	タタキ	8	12.5			
					(生駒西麓)	47	73.4	ハケ	36	56.3			
								底部	5	7.8			
					壺	105	24.2	長頸壺	30	28.6	生駒西麓	3	10.0
					(生駒西麓)	19	18.1	広口壺	8	7.6	生駒西麓	4	50.0
								細頸壺	1	1.0	生駒西麓	1	100.0
								底部	3	2.9			
					器台	4	0.9						
					高坏	6	1.4						
					土師器	14	3.1	羽釜	1	7.1			
								甕	4	28.6			
								鉢	3	21.4			
								高坏	1	7.1			
								坏皿類	3	21.4			
					須恵器	5	1.1	甕	1	20.0			
坏	4	80.0	Ⅱ形式	3				75.0	身	1	33.3		
								蓋	2	66.7			
その他	石	15	粘土塊	2			Ⅲ形式	1	25.0	蓋	1	100.0	

はナナメナデ。胎土はにぶい橙 5 Y R 7 / 4 を呈し、長石あり、石英若干あり。

10も広口壺か器台口縁片。垂下口縁はヨコナデ、その裏はユビオサエ、外面の接合部分はヨコナデ、それ以下はタテナデ。内面は、口縁端部ヨコユビナデ、その内側はナナメナデ、それ以下はヨコナデ。胎土はにぶい黄褐 10 Y R 4 / 3 を呈し、角閃石・石英多し、長石若干あり、黒雲母わずかにあり。生駒西麓産かと思うが、角閃石は粒径大きいものが多い。

11は長頸壺片。外面は、タテハケ、部分的にヨコナデが軽くハケを消す、口縁部はヨコナデ。内面は、磨滅激しいが、部分的にヨコハケ残り、口縁部はヨコナデなの分かる。胎土はにぶい橙 7.5 Y R 7 / 4 を呈し、長石若干、赤色粒わずかにあり。

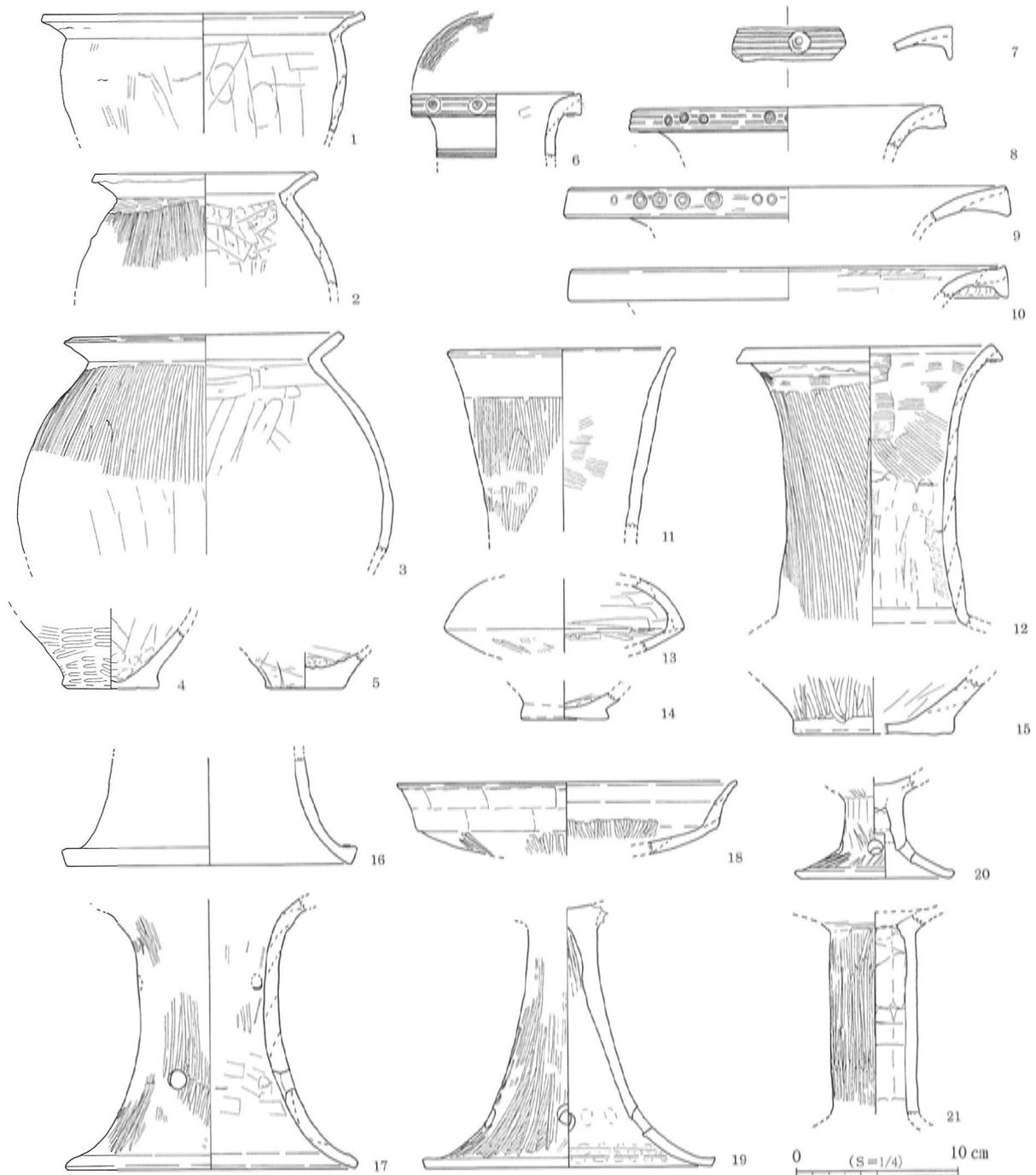


図121 3—533土坑出土遺物

(1 (土器8)、3 (土器5)、4 (土器10)、8・9 (土器7)、10 (土器9)、11 (土器15)、12 (土器6)、14 (土器11)、19 (土器1)、20 (土器4)、21 (土器2))

12は長頸壺片。口縁が外反するが、全体的な形や調整は長頸壺の範疇である。外面は、口縁部ヨコナデ、頸部タテハケ、その間にタテハケ前のヨコハケ後ヨコナデが残る、頸部にタテのヘラ沈線。内面は、先ず、ナナメハケが全体に入り、次に上半ヨコハケ、下半タテユビナデが入る、最後に、口縁部と頸部下端にヨコナデ、肩部はユビオサエ後ヨコハケか。胎土は浅黄橙10Y R 8 / 3を呈し、長石若干、石英わずかにあり。

13は壺胴部片。残存が悪いため復元径と傾きには若干不安がある。細頸壺の胴部と思われる。外面は磨滅激しいが、上半タテミガキ、下半ハケ後タテミガキか。内面はヨコナデ。胎土はにぶい橙7.5Y R 7 / 3を呈し、石英若干、長石わずかにあり。

14は壺底部片。外面は、磨滅するがナデか、底部は無調整。内面は、底部ユビオサエ後ナナメナデ。胎土は灰黄褐10Y R 4 / 2を呈し、角閃石多し、石英・長石ありの生駒西麓産胎土。

15は弥生中期の甕底部片か。外面は、タテミガキ、底部側面はヨコナデ、底部は不定方向ナデ後中央に一定方向ミガキ。内面は磨滅でやや不明確だが、タテハケ後ナデか。胎土はにぶい黄褐10Y R 5 / 3を呈し、角閃石多し、長石・石英ありの生駒西麓産胎土。

16は器台裾部片か。広口長頸壺の口縁であるなら、端部が垂下口縁であるタイプになると思われるので、そう判断した。器面荒れ、調整不明。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 4を呈し、石英・赤色粒わずかにあり。

17は器台。外面はタテミガキ、裾部はヨコナデ。内面は、上半磨滅激しく不明部分多いが、ヨコハケ後タテミガキか、下半ユビオサエ・ユビナデ後ヨコナデ、裾部ヨコナデ。透かし孔は二段でどちらも三方透かし。胎土は灰黄褐10Y R 5 / 2を呈し、石英・長石若干あり。

18は高坏身部片。外面は、上半ヨコナデ、下半はヨコケズリ後ヨコナデ、その後タテミガキの文様帯を間隔をあけて配置、一つのミガキ帯には方向のやや異なる単位が二つある。内面は、上半ヨコナデ、下半タテミガキ。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 4を呈し、石英多し、赤色粒・長石あり、チャートわずかにあり。

19は高坏脚部片。外面は、タテミガキ、裾端部ヨコナデ。内面は、上部絞り痕残り、その下の脚柱部はタテユビナデか。透かし孔あたりと脚端部にユビオサエの列残り、脚裾部はヨコナデ。三方透かし。胎土はにぶい黄橙10Y R 6 / 3を呈し、長石あり、石英若干、角閃石わずかにあり。

20も高坏脚部片。外面は、脚柱部にタテナデ後、身部と脚柱部下半～脚裾部にタテミガキ、最後に脚裾端部にヨコナデ。身部内面は放射状のミガキか。脚部内面は、脚柱部ヨコユビナデ、脚裾部は磨滅するがヨコナデか。四方透かし。胎土は浅黄橙10Y R 8 / 3を呈し、石英多し、長石若干あり、黒雲母・角閃石・赤色粒わずかにあり。

21も高坏脚部片。外面は、上端身部との境にヨコミガキ、他はタテミガキ。内面は、上端円板充填の剥離痕、その接合部にユビオサエ、脚柱部はタテユビナデ、脚裾部との境にヨコユビナデ。胎土はにぶい黄褐10Y R 5 / 4を呈し、角閃石多し、長石・石英ありの生駒西麓産胎土。

4-298土坑（図18・122・表57） 02-3-2・3トレンチ境に位置していた土坑である。長径1.3m、短径1.0mの楕円形で、深さ60cmほど、断面は逆台形、底のレベルはT. P. +13.0m。

遺物は西半部分で、壁から底部に付くような状況で出土した。

他の弥生時代の井戸と比較すると、底部のレベルがやや高く、断面形も底部が不整形なので井戸とは考えにくい、性格を明らかにする材料はない。

遺物は、図122に図化した他に、長頸壺と器台の破片がある。完形率は一番残りの良い図122-1でも5割弱で、他はかなり低い。埋土の上半からは遺物が出土していないので削平により個体の破片の一部が失われた可能性は低いと考えて良く。破碎された土器の一部が投棄されているのであろう。

図122-1は甕。口縁端部は、やや内側にユビオサエを並べるために細かく波打つ。外面は、接合痕・ユビオサエが残り、口縁部～胴部タテハケ後軽くヨコナデ、底部は側面に並ぶユビオサエを支点にしてユビナデ1周。内面は、底部ユビオサエ、そこからナナメナデが上がる、他はヨコハケ、下部はナナメハケになる。外面口縁部以外二次的の被火痕跡あり、煤附着、胴部最大径付近磨滅強し。胎土はにぶい褐7.5Y R 5 / 3を呈し、石英多し、長石あり。

2は甕片。外面は、口縁部ヨコナデ、胴部タタキ、煤附着し、焼きハゼあり。内面は、口縁部ヨコナデ。胴部はタテユビナデ後ヨコナデ。胎土は灰黄褐10Y R 5 / 2を呈し、角閃石多し、長石・石英ありの生駒西麓産胎土。

3は広口壺片。外面は、頸部と肩部にタテハケ後肩部の下にヨコハケ、最後に口縁部と頸部・肩部境にヨコナデ。内面は胴部タテハケ後、頸部～肩部ヨコハケ後ヨコナデ、最後に口縁部ヨコナデ。胎土はにぶい黄褐10Y R 4 / 3を呈し、角閃石多し、石英あり、長石若干、黒雲母わずかにありの生駒西麓産胎土。

小型で上部の開いた甕と、口縁端面が上下に拡張しない広口壺の存在は、河内V-2～3様式にありえるものでそれ以上時期を限定できない。

4-330井戸（図123・124・表58） 02-3-3トレンチ西側、4-建物2の東にあった。平面形はやや不整な円形で、径1.2mほど。壁は割と立つが、断面形は逆台形に近く、肩がやや丸くなっている部分もある。検出面からの深さは60cm強で、最低部分のレベルはT. P. +12.85m。

埋土は上下2層に分かれるが、どちらもブロック土なので、全て埋め戻し土と考えられる。底面が丸く、深い部分も片寄り、掘り方の上方が開くの見れば、素掘り井戸の可能性が強い。図123の断面図の2はブロック土がやや少なめで、井戸機能時の堆積にブロック土が投入されたものかもしれない。

遺物は遺構検出時から見え始め、図123の断面図の1の層の上半に面的に広がる一群が確認され、それを上層遺物群とした。破片は小さめのものが多い。その下では1の層の下半を中心に、2の層の上面

表57 4-298土坑 遺物破片数集計表

大別	総数	種別	破片数		器種	破片数		型式・部位	破片数		細別	破片数	
			破片数	%		破片数	%		破片数	%		破片数	%
土器・陶磁器	37	弥生 (生駒小片)	37	100.0	甕	22	59.5	タタキ	7	31.8			
			2		(生駒西麓)	7	31.8						
					壺	4	10.8	長頸壺	3	75.0	生駒西麓	1	33.3
					(生駒西麓)	2	50.0	広口壺	1	25.0	生駒西麓	1	100.0
					器台	3	8.1				生駒西麓	3	100.0

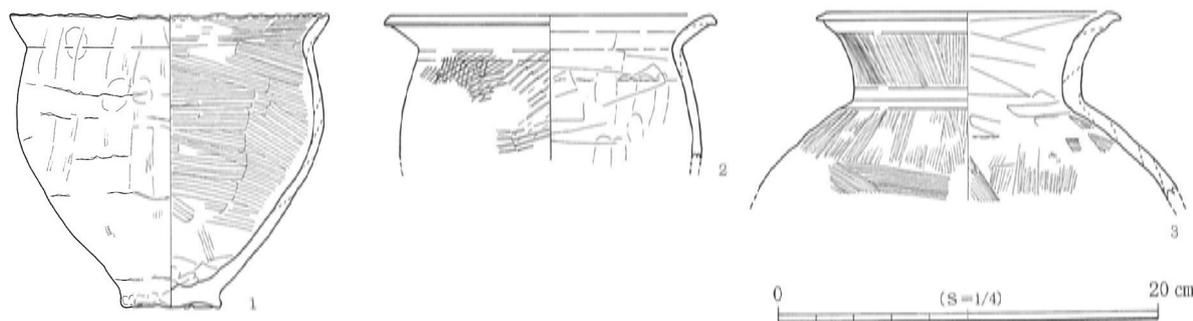


図122 4-298土坑出土遺物

近くまでで一まとまりの土器があった。これを下層遺物群とした。完形を含め、破片の大きなものが多く、完形率も高い。しかしほとんどの遺物は断面図の1の単一層内出土である。下部に完形品があり、上部は細かい破片が広く広がる状況は埋め戻しと土器投棄が併行して徐々に行われた事を示すか。

上層土器群は完形率が低く、土器番号を付けたものでも別個体が混在する場合が多く、あまり接合しなかった。だが、土器13が下層土器5に接合したのを始め、下層土器11・13・14・15に上層から接合しており、上層土器群は下層土器群の破片の残りが集まっているようである。しかし、下層のどの土器とも同一個体の可能性のない破片も相当数含まれており、下層に属する土器は破碎された土器群の一部である事が分かる。

表58 4-330井戸 遺物破片数集計表

大別	総数	種別	破片数	%	器種		型式・部位		細別					
					破片数	%	破片数	%	破片数	%				
土器・陶磁器	213	弥生 (生駒小片)	213	100.0	甕	59	27.7	タタキ	34	57.6	生駒西麓	21	61.8	
					(生駒西麓)	38	64.4	底部	4	6.8	生駒西麓	4	100.0	
					壺	84	39.4	長頸壺	39	46.4	生駒西麓	27	69.2	
					(生駒西麓)	32	38.1	広口壺	4	4.8	生駒西麓	2	50.0	
								底部	4	4.8	生駒西麓	1	25.0	
					鉢	7	3.3				生駒西麓	2	28.6	
					高坏	18	8.5				生駒西麓	5	27.8	
その他		サヌカイト	1		石	2								

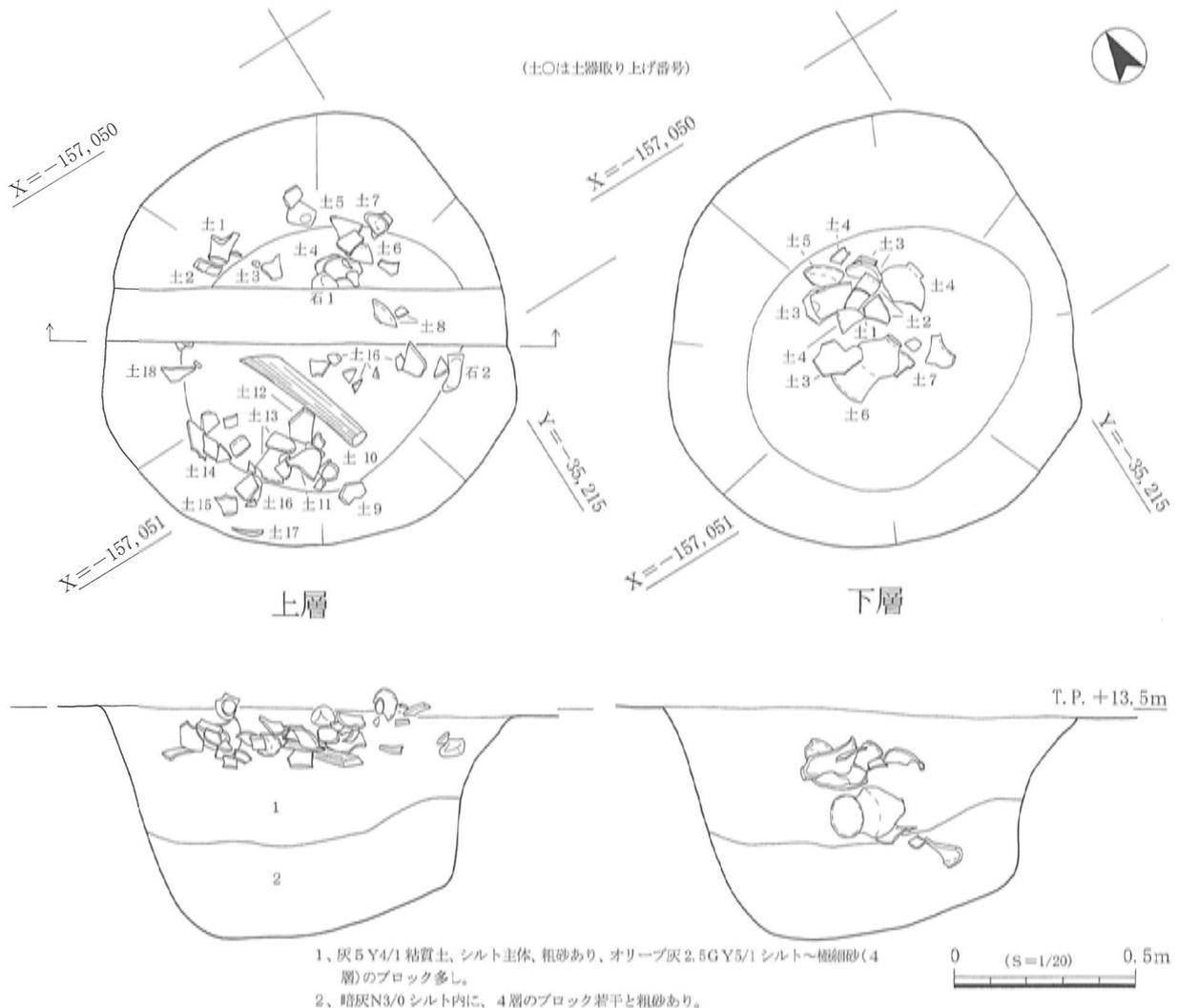


図123 4-330井戸出土状況・断面

下層土器群は、土器番号を付けたものが全て図124に掲載できたように、完形率は高いが、上層遺物から接合したものを含めても足りない破片があるのも事実である。上層で削平により失われたものもあると思われるが、破片の一部が井戸内に投棄されていない可能性もある。また、土器6のみが完形で出土しているのは特異である。

破片数の集計を見ると、壺の次に甕がかなりの数になるが、これは下層土器1・3が大型の甕で破片数が多かった事にもよる。やはり壺が突出して多いと言える。壺は完形の下層土器6以外に底部が4片出土しているので計5個体以上あった可能性が強い。広口壺の破片があるので、上層土器4などがその候補となるか。また、生駒西麓産の割合が高いと言える。

以上の事から、土器群の個体数を復元すると、長頸壺4以上、広口壺1～2、高坏2～5、鉢2、甕2～4となるか。

小型の長頸壺・鉢があるのは河内V-2～3様式的で、高坏もそれと矛盾しない。小型長頸壺が短頸化していない点や、小型鉢が内外面ミガキで粗製化していないのはその中では古い要素と言えるが、河内V-2様式に限定できるまでのものではないと思える。

図124には実測可能な遺物を掲載した。4の石器は時期的に伴うものかやや疑問ではある。

1は高坏。身部上半を欠く。全体に器表剥離激しい。外面は、身部・脚部境のヨコユビナデと、脚裾部の一部にタテナデが残るのみ。脚部内面は上端の絞り痕と、脚裾部の一部にヨコナデ残るのみ。三方透かし。胎土は褐7.5Y R 4 / 6を呈し、角閃石・石英多し、長石若干ありの生駒西麓産胎土。

2は鉢。口縁を欠く。全体に磨滅。外面は、底部側面ユビオサエ、底部ユビナデが残る。内面は底部ユビオサエ、体部ナナメナデ。胎土は橙7.5Y R 7 / 6を呈し、赤色粒若干、石英・長石あり。

3は壺底部片。胴部がかなり張りそうなので広口壺のものか。外面は、残存部上端にヨコナデ、その下はナナメナデ、底部側面はユビオサエ。内面はタテナデ。胎土はにぶい黄橙10Y R 6 / 4を呈し、石英・長石若干、角閃石わずかにあり、微細粒には角閃石多し。生駒西麓産胎土。

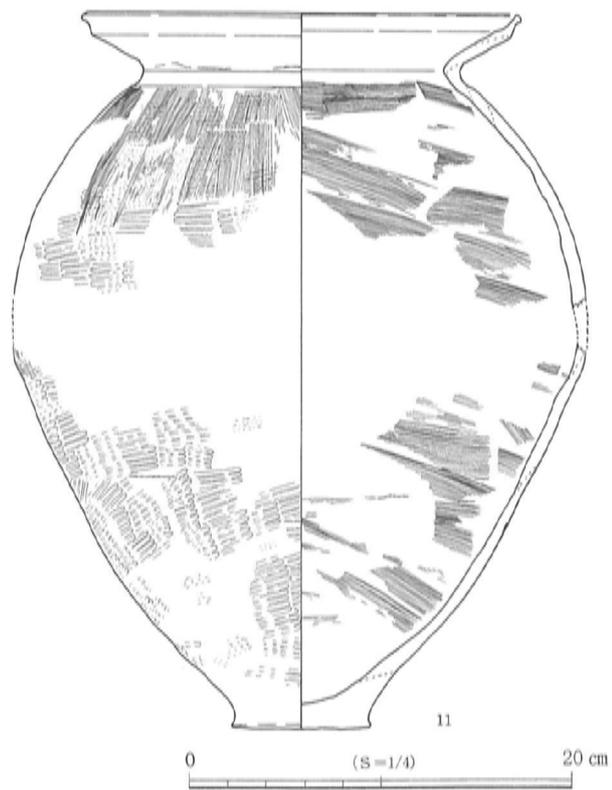
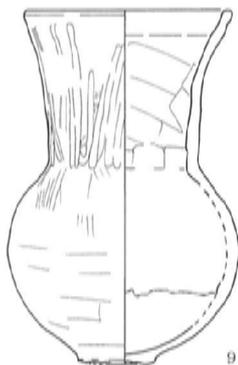
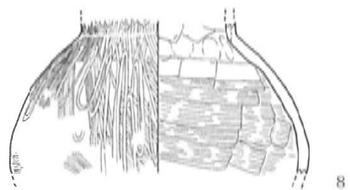
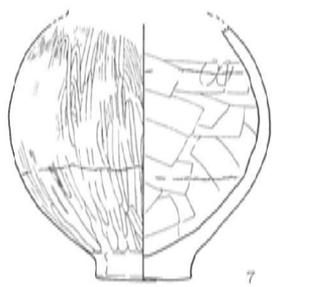
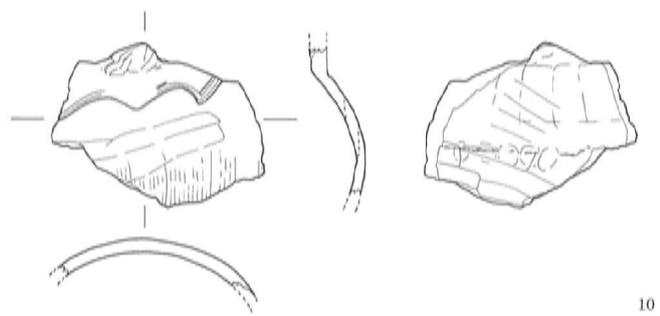
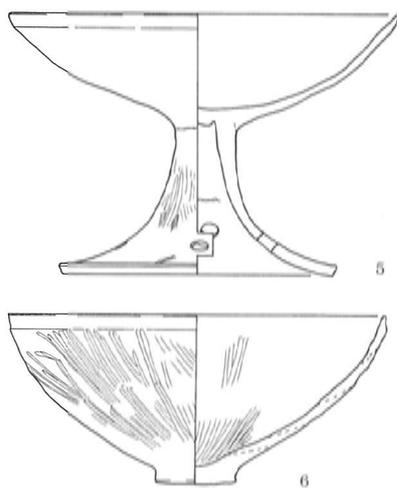
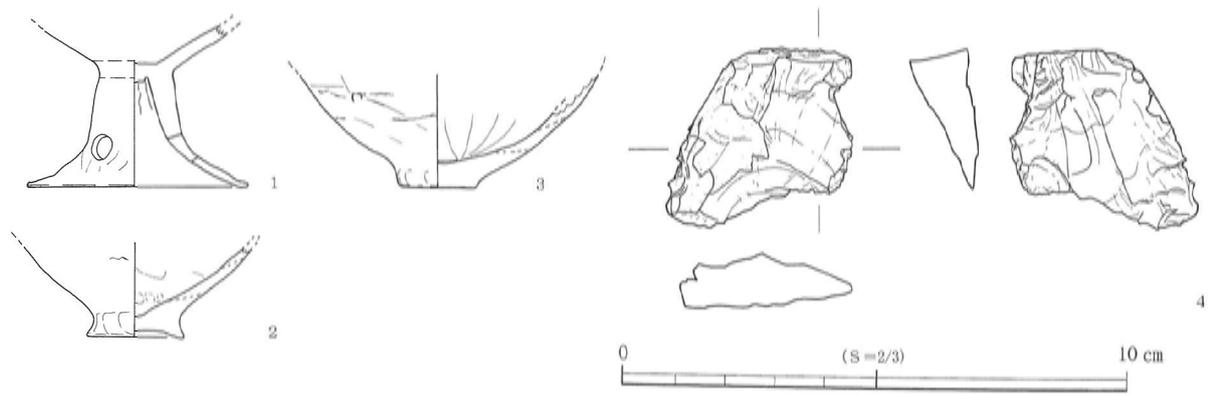
4はサヌカイト製剥片。ネガ面は左側の小さな剥離以外は下方向からの打撃による剥離。ポジ面と180°打撃方向が異なり、一部下辺に原礫面が残る事から本品の原材の厚さがほぼ分かる。ポジ面は上辺の原礫面を打点としての剥離面。本品は目的剥片として良いと思うが、打点がネガ面からかなり後退している事と、ポジ面左側が薄く終わり、素材のかなり端を剥離したようにも見えるので、剥離面調整のチップの可能性もある。

5は高坏。全体的に磨滅激しい。外面は、身部口縁のヨコナデ、脚柱部のタテハケ後タテミガキ、脚裾端部のヨコナデのみが残る。身部内面は調整不明。脚部内面は、脚柱部タテユビナデ、脚裾部ヨコナデ。四方透かし。胎土はにぶい褐7.5Y R 5 / 4を呈し、角閃石多し、石英・長石あり、赤色粒わずかにありの生駒西麓産胎土。

6は鉢。外面は、口縁部ヨコナデ、その下はヨコナデ後タテミガキ。内面も、口縁部ヨコナデ、その下はタテミガキ。胎土は黄褐2.5Y 5 / 3を呈し、石英・長石若干あり。

7は壺片。長頸壺か。外面は、タテハケ後タテミガキ。底部側面はヨコユビナデ、底部は不定方向ナデ。内面は、接合痕・ユビオサエ残しながらナデ。胎土は灰黄褐10Y R 5 / 2を呈し、角閃石あり、石英・長石若干ありの生駒西麓産胎土。

8も壺片。長頸壺か。外面は、タテハケ後まばらにタテミガキ、頸部のミガキも若干残る。内面は、胴部ヨコハケ、肩部タテユビナデ、の後、肩部ヨコナデ、頸部タテナデ。胎土はにぶい橙5Y R 7 / 3



上層：〔1(土器1)、2(土器12)、3(土器4)、4、5(土器13)〕
 下層：〔5(土器5)、6(土器2)、7(土器4)、8(土器7)、9(土器6)、
 10、11(土器1・3)〕

图124 4-330井戸出土遺物

を呈し、長石・石英若干、黒雲母わずかにあり。

9は小型の長頸壺。完形品である。外面は、口縁部～頸部上半ヨコナデ、頸部下半タテハケ、残るがそこに、頸部～肩部タテミガキ。胴部下半はヨコナデ、肩部以下に煤附着。内面は、完形で胴部の調整分かりにくい、肩部はタテユビナデ、他はナデ調整主体か、頸部はタテユビナデ後斜めナデ、口縁部ヨコナデ。胎土はにぶい黄褐10Y R 5 / 4を呈し、角閃石多し、石英・長石ありの生駒西麓産胎土。

10は壺肩部片。長頸壺か。肩部に波状文あり。外面は、タテハケ後ナデ、頸部はタテミガキ、波状文の下にヨコケズリあり。内面は、肩部タテユビナデ、接合痕にユビオサエ、の後、ナナメナデ。胎土はにぶい褐7.5Y R 5 / 3を呈し、角閃石多し、石英あり、長石・黒雲母わずかにありの生駒西麓産胎土。

11は甕。外面は、口縁部ヨコナデ、胴部タタキ後、肩部はタテハケ、下半はタテのまばらなナデが軽くタタキを消す、タタキは最大径よりやや下に上下を切るものがある。底部側面ヨコナデ、底部ナデか。内面は、口縁部ヨコナデ、胴部はヨコ～ナナメハケ後軽いナデ散在、底部はナデのみか。胎土はにぶい褐10Y R 5 / 3を呈し、角閃石多し、石英・長石若干ありの生駒西麓産胎土。

4-355溝 (図125・126・表59) 02-3-3トレンチの西端で検出された溝である。N12° Wを指向し、南東側は大きく開く。幅は北西側で1.1~1.4m、南東の最大部分で2.3m、深さ60cm前後、底面のレベルはT. P. +12.9~13.1mで凹凸する。

弥生土器しか出ていないといっても出土遺物は少なく、検出距離が短い事もあって弥生時代遺構に属すると断言するのは躊躇されるが、最大幅がかなり大きい他に、周辺の飛鳥時代溝群とは若干方向が異なる事。建物などが近辺にある幹線の規模の溝で土師器・須恵器がないのは、今回の調査では、飛鳥時代の溝としては例外的である事、近くで方形周溝墓が検出され、他にも周溝墓が分布している可能性が

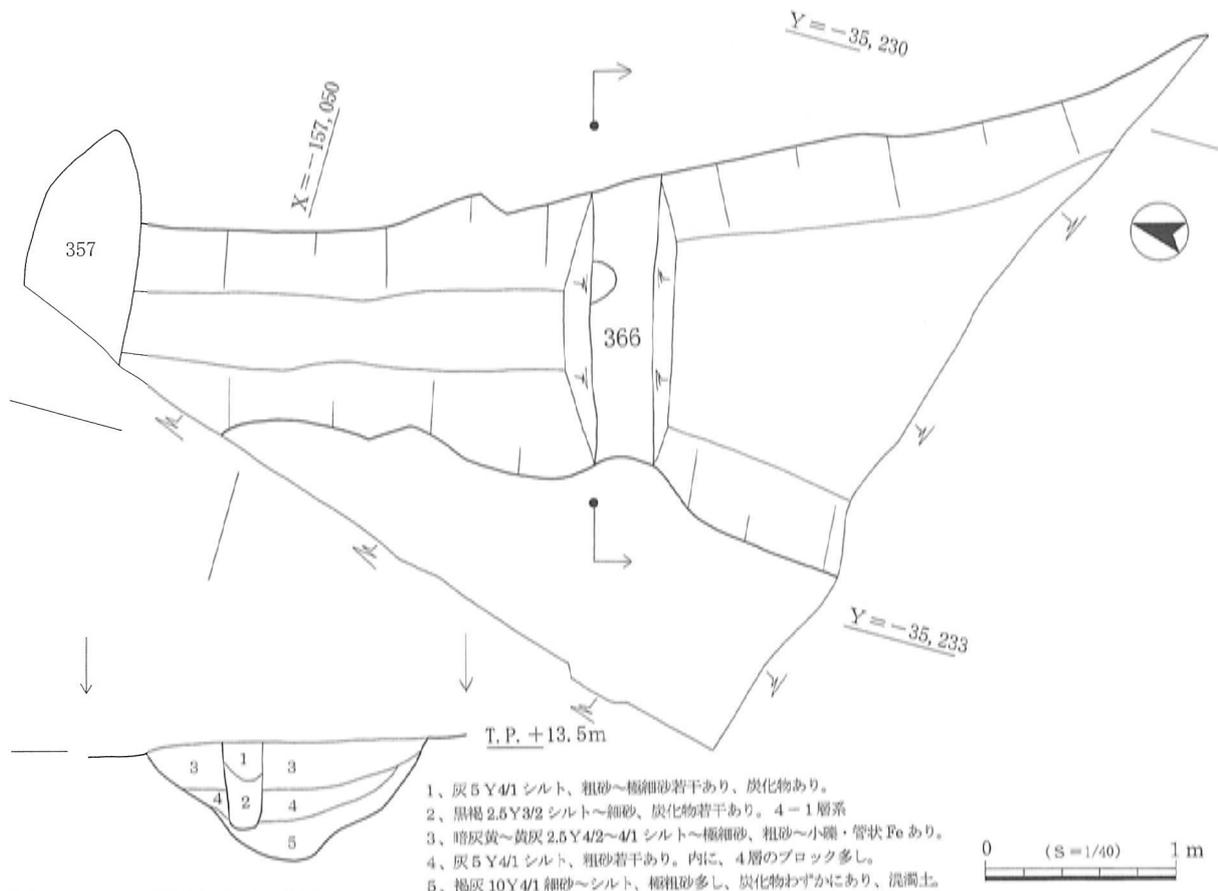


図125 4-355溝平面・断面

ある事、などから一応弥生時代の溝と判断した。

埋土は3層に分かれる。図125の断面図の5の層は砂を巻き込んだ泥土が混濁して流れたものであろう。4の層はブロック土で人為的埋土と思われる。ただ、溝の中ほどで、薄い堆積で留まるのが特徴的である。3の層は有機分多く砂粒も含み、微高地の古土壌起源のものと思われる。ブロックはないが、ラミナもなく、二次的に流入したとも考えにくい。人為的埋土か。

遺物は散発的に出土し、出土状況を記録もしていないが、底部付近で出土したものはない。完形率はかなり悪く、器種構成も、この点数では何も言えない。

実測可能なのは図126に示した4片のみである。

1は壺肩部片。櫛描文と櫛描波状文が入る。調整はナデ。胎土は浅黄橙7.5Y R 8 / 3を呈し、石英若干あり。今回の調査ではほとんどない弥生中期のものである。河内Ⅲ様式頃か。

2は小型の鉢底部片か。外面は、体部ナナメナデ、底部側面ユビオサエ、底部ユビナデ。内面は左上がりナナメナデ。胎土は橙5 Y R 6 / 6を呈し、石英若干、黒雲母わずかにあり。微細粒に角閃石もあり。

3は甑底部片。内外面ともにナナメナデ。胎土はにぶい橙7.5Y R 7 / 4を呈し、石英若干あり。

4は甕底部片。外面は、タタキ、底部ナデ。内面はナナメハケ。胎土は7.5Y R 6 / 3を呈し、石英あり、長石・黒雲母若干あり。

数少ないこれらの遺物からは、河内Ⅴ様式頃としか言えない。

4-方形周溝墓1 (図127~129・表60~62) 02-3-3トレンチ西側の南壁沿いにある。北側に陸橋部を持つ4-327周溝と、主体部と思われる4-328土坑からなる。4-327周溝の底部で検出された4-329溝と、4-328土坑を切るが同時期性の高い遺構と思われる4-375ピットを含めて述べる。

4-327周溝は多くの遺構と重複するが、溝底面で検出された4-329溝と4-350・351ピット以外には全て切られている。ほぼ正方位をとり、溝の外の肩で南北6.6m、東西6.9m。溝の幅は1.1~1.6mほど、検出面からの深さは40cmほど、底のレベルはT. P. +13.0mで安定している。埋土は全てブロック土で、人為的なものと思われるが、4-329溝との切り合いを断面図で見ると(図127)4-329溝が切る埋土があり(断面図の9)、掘削は4-329溝が後と思われる。最終的な双方の溝の埋没は同一層により(断面図の2)、同時である。削平はあるだろうが、底面の高さが一定している事もあり、北辺の東寄り周溝が途切れるのは削り出しの陸橋と思われる。

表59 4-355溝 遺物破片数集計表

大別	総数	種別	破片数		器種	破片数		型式・部位	破片数		細別	破片数	
			破片数	%		破片数	%		破片数	%		破片数	%
土器・陶磁器	28	弥生	28	100.0	甕	7	25.0	タタキ	5	71.4			
					(生駒西麓)	1	14.3	底部	2	28.6	生駒西麓	1	50.0
					壺	12	42.9	長頸壺	1	8.3	生駒西麓	1	100.0
					(生駒西麓)	2	16.7	広口壺	1	8.3			
					鉢	1	3.6						
					高坏	1	3.6						

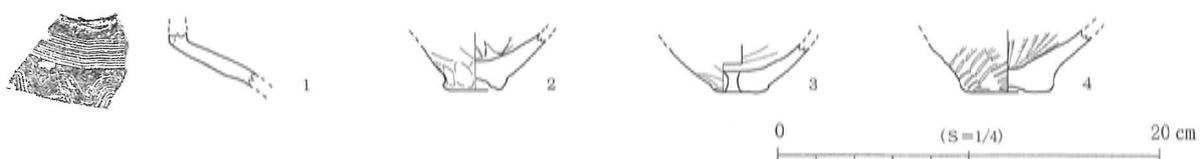


図126 4-355溝出土遺物

4-328土坑は、その位置と形状から墓塚と考えられる。南端が丸い長形状で、長さ2.7m、幅1.4mほど。残存する深さは20cmに満たない。長軸はN11° Eを指向し、周溝内のやや西寄り北短辺を陸橋部分に向けているような配置である。埋土上面から4-375ピットが切り込んでいるが、その位置関係と出土遺物、また、328土坑の底面が375ピットに向かって下がっている事から無関係とは考えにくい。断面図の1の層がブロック土で、墓塚床面の整地土の可能性もある。ピット北端から土坑北端までは1.5m弱なので、375ピットは328土坑と併存するとすれば、埋葬前にその床面に掘られたものであろう。他に、木棺の痕跡などは検出されなかった。

4-329溝は、トレンチ隅で形が分かりにくい、南東に枝が伸びるのと、南西端が南に曲がりそうな形であるのが特徴である。形態的には疑問が多いが、4-327周溝より後から掘られ、埋没は同時という事から、周溝を共有する、別の周溝墓の可能性もあると考える。

328土坑・375ピットの遺物の出土状況を見ると、328土坑では北西側で石が2個、土器片が1片出土しているのみである。石は5cmほどの垂円礫の砂岩と7cmほどの垂角礫の花崗岩で人的痕跡はなし。土器片は生駒西麓産胎土の弥生土器甕片である。375ピット内では、埋土の上面よりやや下に集中する一群があり、その下に高さまちまちで散在、一番下は底より15cmほどの高さにある砂岩である。人為痕跡はない。土器1は甕口縁で、残り悪く実測できなかった。甕・壺・高坏が認められるが、甕・壺は3個

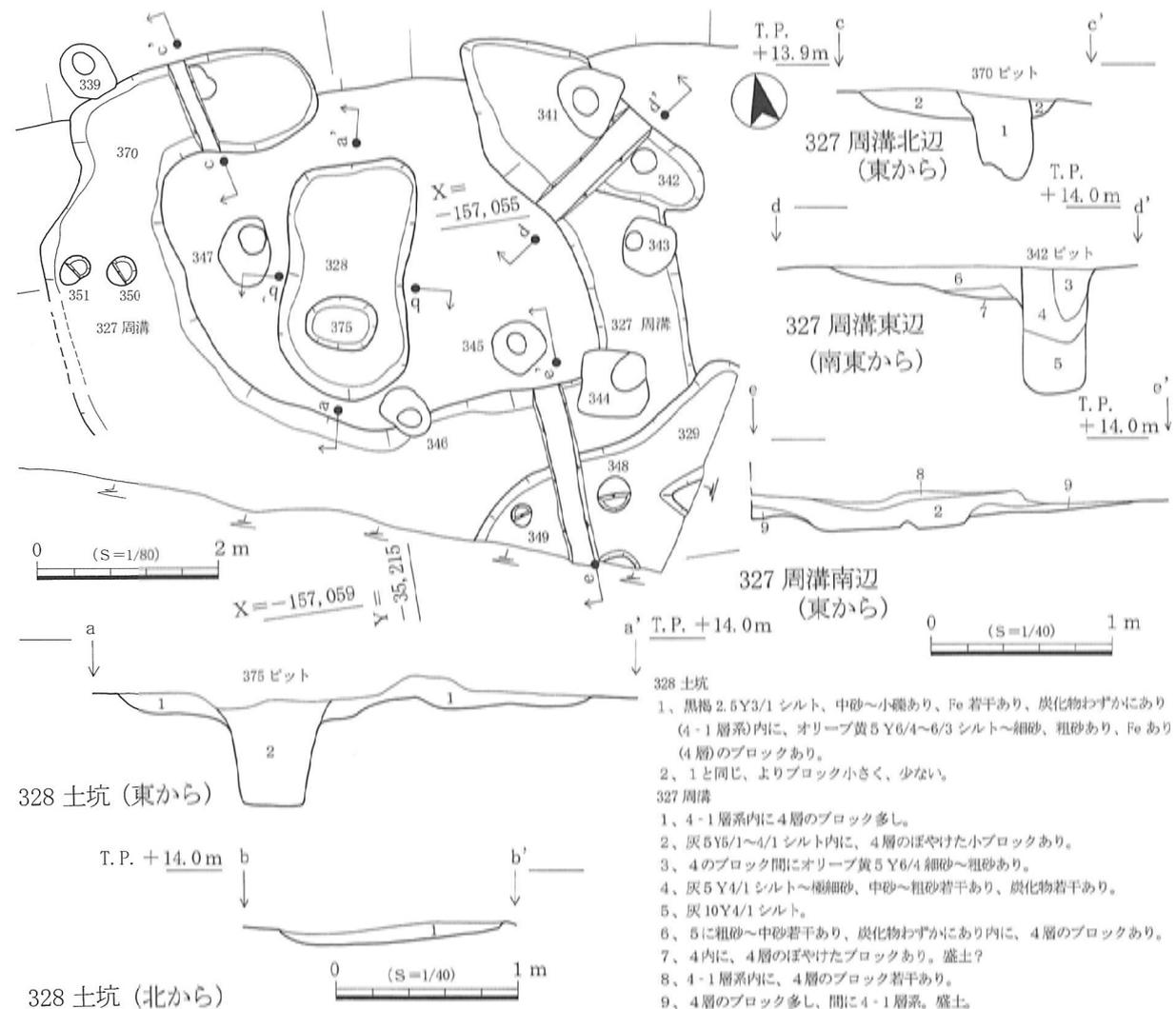


図127 4-方形周溝墓1 (328土坑・375ピット・327周溝・329溝) 平面・断面

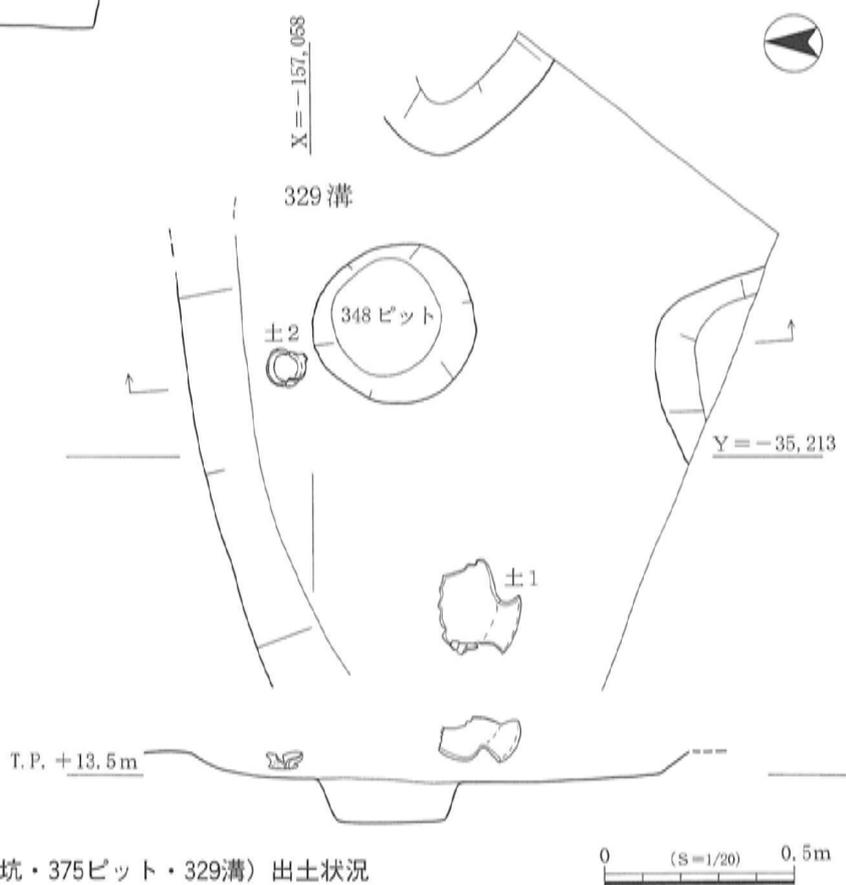
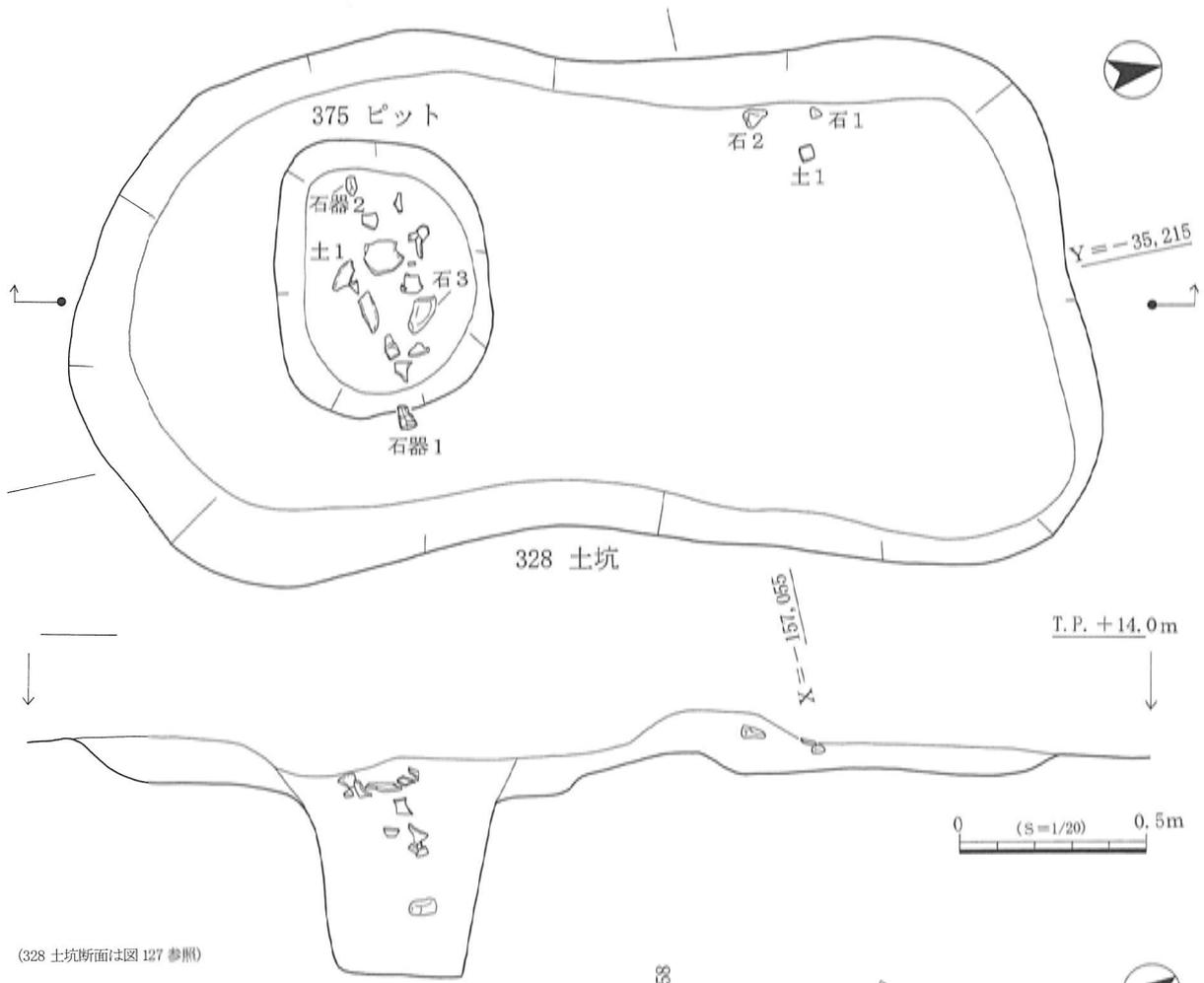


図128 4-方形周溝墓1 (328土坑・375ピット・329溝) 出土状況

表60 4-方形周溝墓1(327周溝・328土坑) 遺物破片数集計表

大別	種別	破片数	%	器種		型式・部位		細別				
				破片数	%	破片数	%	破片数	%			
土器・陶磁器	弥生	91	100.0	甕	18	19.8	タタキ	12	66.7	生駒西麓	2	16.7
				(生駒西麓)	3	16.7	底部	1	5.6			
				壺	23	25.3	長頸壺	8	34.8			
				(生駒西麓)	7	30.4	広口壺	1	4.3			
							底部	1	4.3			
				鉢	1	1.1						
				高坏	3	3.3						
その他	石	2										

表61 4-329溝(方形周溝墓1関連) 遺物破片数集計表

大別	種別	破片数	%	器種		型式・部位		細別				
				破片数	%	破片数	%	破片数	%			
土器・陶磁器	弥生 (生駒小片)	69	100.0	甕	8	11.6	タタキ	7	87.5			
							底部	1	12.5			
				壺	41	59.4	広口壺	29	70.7	生駒西麓	27	93.1
				(生駒西麓)	30	73.2						
				高坏	3	4.3						

表62 4-375ピット(方形周溝墓1関連) 遺物破片数集計表

大別	種別	破片数	%	器種		型式・部位		細別				
				破片数	%	破片数	%	破片数	%			
土器・陶磁器	弥生 (生駒小片)	48	100.0	甕	13	27.1	タタキ	6	46.2	生駒西麓	5	83.3
				(生駒西麓)	5	38.5						
				壺	10	20.8	長頸壺	7	70.0	生駒西麓	4	57.1
				(生駒西麓)	4	40.0	底部	2	20.0			
				高坏	1	2.1						
				その他	サヌカイト	2		石	1			

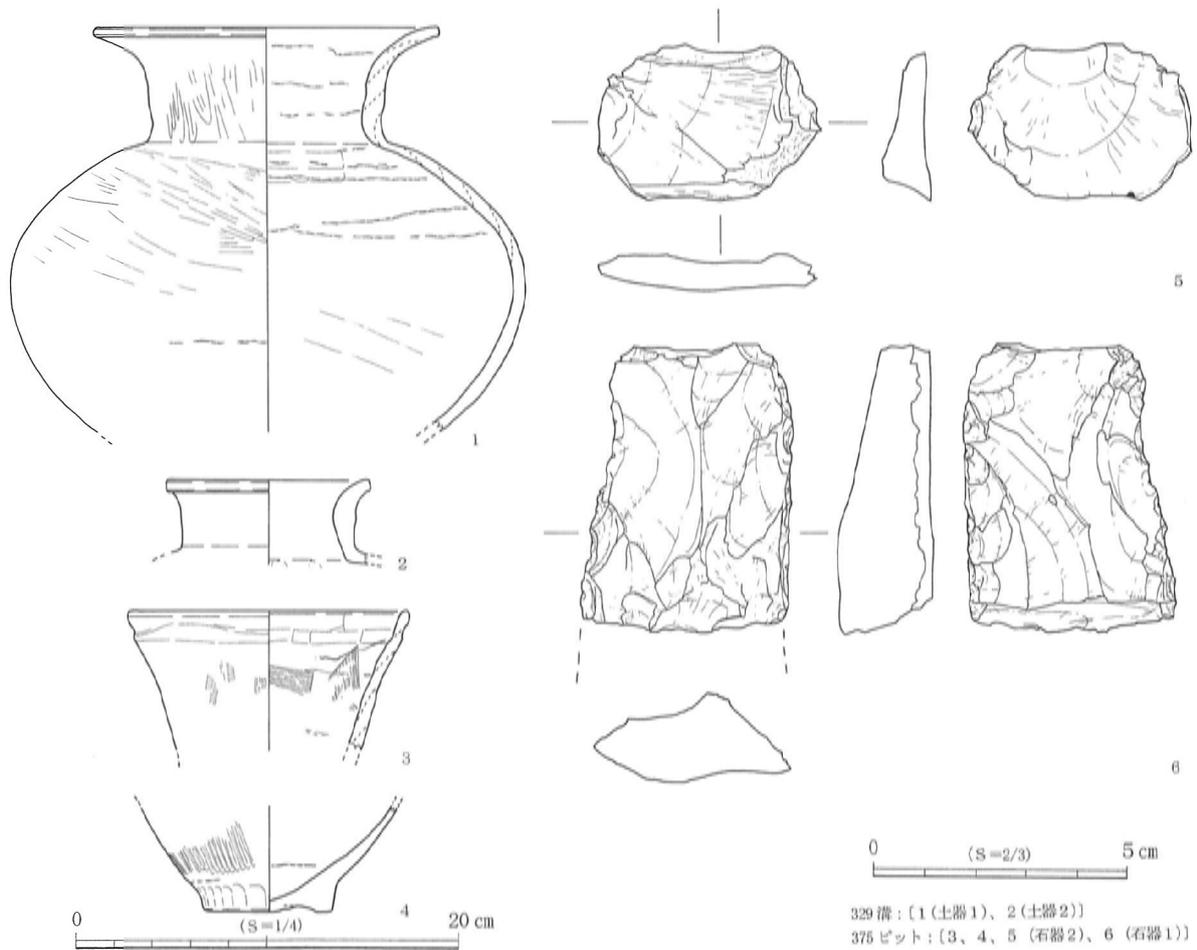


図129 4-方形周溝墓1関連出土遺物

体以上の破片がかなり完形率の低い状態で出土しており、もし破碎後に入れられたとすれば、大部分は削平された埋土上部に存在していたとするしかない。なお、石器1はこのピットのものとしたが、出土位置はちょうど328土坑の埋土との境で、どちらに帰属するかは微妙である。

327周溝から出土した土器は全て小片で実測できるものはなかった。集中する部分もなく、器種構成も特別なものはなく、流入したものと見て良いだろう。

329溝では2個体の広口壺の破片が溝底から少し浮いた状態で出土した。327溝の底部でこの溝を検出した前後で、同一個体の破片は一切出土していないので。溝に入った時点でこれらの破片のみであったと考えられる。他に甕・高坏の破片があるが、小片で、同一個体と思われるものは少なく、二次的流入と思われる。

全ての遺物を総合的に見ても時期を限定する要素に乏しいが、口縁端部に上下への拡張のない広口壺や、口縁部の傾きが大きく調整が粗雑な長頸壺の存在を見れば、河内VI様式頃の可能性が強い。その場合、石器はやや時期の古い混入遺物の可能性がある。

図129に実測可能な遺物を示した。1・2は4-329溝出土、他は4-375ピット出土である。

1は広口壺片。外面は、口縁部ヨコナデ、頸部ヨコナデ後タテミガキ、胴部上半はヨコ～ナナメミガキ、胴部下半は磨滅が激しいがタテミガキか。内面は、接合痕や肩部のタテユビナデ残り、全体にヨコナデ。胎土はにぶい黄褐10Y R 5 / 4を呈し、角閃石多し、石英・長石・黒雲母あり、大粒の閃緑岩わずかにありの生駒西麓産胎土。

2も広口壺片。内面肩部にタテユビナデ残す他はヨコナデ。胎土は浅黄橙7.5Y R 8 / 6を呈し、石英あり、チャート・赤色粒わずかにあり。

3は長頸壺片。口縁の大きさと頸部の角度からすると比較的頸部の短いものと思われる。全体的に磨滅。外面は、頸部タテハケ後口縁部ヨコナデ。内面は、頸部タテハケ後ヨコハケ、最後に軽いヨコナデか、口縁部ヨコナデ。胎土はにぶい黄褐10Y R 5 / 3を呈し、角閃石多し、長石・石英ありの生駒西麓産胎土。

4は壺底部片。外面は、胴部タテミガキ、底部側面ユビオサエ後ヨコナデ、底部ユビナデ。内面はやや磨滅するがナデか。胎土は浅黄橙10Y R 8 / 3を呈し、石英あり、長石若干あり。

5はサヌカイト製剥片。欠損品である。上下は折れで、ボジ面に打点を残していない。ネガ面の剥離が90° 打撃方向が違うのは、残る原礫面の角度から見て原礫の端部に近いと見られることから、剥片採取の前に原礫面を取り除く調整と思われる。重量12.6g。やや風化し、石質は若干悪い。

6は石剣か石槍の基部片。図下が鋒部方向。両側縁に刃ツブシ入る。ただ、図左面の左上の鑄を作り出す大きな成形の剥離が深く入りすぎ、側縁が薄くなり過ぎているので、この部分はやや鋭いままである。上辺の基部端部は折れだが、両面から、鑄を除去して身を薄くする剥離が残る。両角は丸くする押圧剥離が入る。下辺も折れだが、折れの原因となったような調整は認められず、製作中の事故とは考えにくいので、本来完成品であった可能性が高い。重量49.7g。やや風化するが石質は良い。

4-391土器群(図13・130・表63) 02-3-3トレンチ西側南壁近くで7層上部を掘削中に、砂層内から弥生土器が出土した(図13、02-3-3トレンチの黒丸)。7層上部は縄文晩期の包含層であったので、すぐ近くのトレンチ南壁断面で観察すると、両肩を4-355・368溝に切られた、幅4m強、深さ1m以上で、埋土が砂層の流路が確認でき、出土した土器はその埋土内にあった事が分かった。

その流路はおそらく4面で洪水により開析し、埋没した一時的な流路で、埋没後の肩部の凹地部分を

利用して4-355・368溝が掘られていたため、4面調査時に見落とししたのであろう。出土した土器は狭い範囲にかたまり、磨滅は少ない。洪水時に近くからこの流路に流れ込んだものであろう。

遺物は5割以上の完形率で長頸壺・甕・有脚壺が各1個体と甕底部片が1片あった。それらを図130に示す。

1は長頸壺。外面は、胴部タタキ、頸部タテハケ、口縁部ヨコナデ、最後に頸部下半から胴部上半にかけてタタキ板でタテにナデた痕が一部にある。胴部に煤附着。内面は胴部ナデ、頸部ヨコハケ、口縁部ヨコナデ。胎土は浅黄橙10Y R 8 / 3を呈し、赤色粒多し、石英・長石若干あり。

2は有脚壺。身部は布留式土器の小型丸底壺に似てその祖形となる可能性があるもので庄内式期に少数見られる。脚部の広がりかたも庄内式の小型高坏に似る。その時期で良いとすると、この土器が出土した流路の肩を切る4-355溝は弥生時代遺構の可能性を失う。外面は、胴部中位のヨコミガキ以外はタテミガキ、口縁端部はヨコナデ。身部内面は胴部下半はヨコナデ、上半はヨコミガキ、口縁部はタテミガキ。脚部内面はナデ。四方透かし。胎土はにぶい橙5Y R 7 / 4を呈し、石英・長石若干、赤色粒・黒雲母わずかにあり。

3は甕底部。外面は、タタキ、底部は植物茎痕を残し、軽いナデ、煤附着。内面は左上がりナナメナデ。胎土はにぶい橙7.5Y R 7 / 3を呈し、赤色粒あり、石英・長石わずかにあり。

4は甕、外面は、口縁部ヨコナデ、胴部タタキ、底部側面ユビオサエ、底部は外縁ナデ、中心一定方向ケズリ。タタキは上下方向の通り良く、左右のタタキ重なる部分はタテのタタキ入れる。内面は、口縁部～肩部ヨコナデ後胴部タテナデ。胎土は灰黄褐10Y R 5 / 2を呈し、角閃石多し。石英・長石若干ありの生駒西麓産胎土。

以上、この土器群は、2の高坏を除けば河内V様式の中で捉えられる。2は他の土器が皆重なり合っていたのに対し、一つだけ50cmほど離れており、その点でもやや問題があるかもしれない。

参考資料その他の弥生土器（図131） その他にも上部の包含層も含め、かなりの数の弥生土器が出土しているが、図131にその中から3点ほど紹介しておく。

表63 4-391土器群 遺物破片数集計表

大別	総数	種別	破片数		器種	破片数		型式・部位		細別			
			破片数	%		破片数	%	破片数	%	破片数	%		
土器・陶磁器	25	弥生	25	100.0	甕 (生駒西麓)	8 4	32.0 50.0	タタキ 底部	7 1	87.5 12.5	生駒西麓	4	57.1
					壺	10	40.0	長頸壺 広口壺	9 1	90.0 10.0			
					高坏	7	28.0						

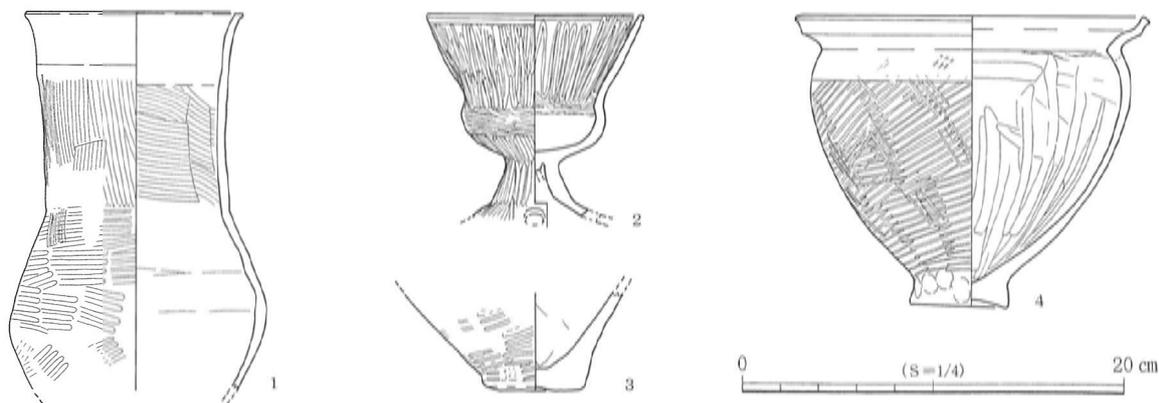


図130 4-391土器群出土遺物

1は4-218土坑から出土した甕である。この土坑は4-建物1内にあったが、弥生土器のみを出土しており、その中で実測可能だったのはこの1点のみであった。外面は、口縁部～肩部ヨコナデ、胴部ユビオサエ残しタテハケ、底部側面ユビオサエ、底部ナデ、底部より4cmほど上から煤附着、口縁は特に濃い。内面は、肩部にユビオサエ1列後上半ヨコナデ、下半はユビオサエ散在して残るがタテナデ、底部から8cmより下は炭化物附着。胎土は褐灰10Y R 4 / 1を呈し、角閃石多し、石英・長石ありの生駒西麓産胎土。

2も甕。3-415溝より出土。3-413井戸を切っていた飛鳥時代の溝である。外面は、口縁部～肩部ヨコナデ、胴部タテハケ、二次的被火で器面荒れ、一部煤附着。内面は、口縁部～胴部上半ヨコナデ、下半は底部ユビオサエ後ナメナデ、ヨコナデとナメナデの境は上下を切るヨコナデが入る、胴部最大径付近は器面荒れ、薄く炭化物附着。胎土はにぶい黄褐10Y R 5 / 3を呈し、黒雲母・角閃石多し、長石・赤色粒わずかにあり。胎土素地はかなり細かい。

3は器台。02-2トレンチ中央南北セクションから出土し、層位等不明。外面は、口縁部付近ヨコミガキ、他タテミガキ。内面は、口縁部付近ヨコハケ、その下ナメハケ、柱状部絞り痕・接合痕残り方向不明のナデ、その下ユビオサエ後ヨコハケ、裾部ヨコナデ。透かしは上下とも三方透かし。胎土は灰白10Y R 7 / 1を呈し、長石・石英あり。

小結 弥生時代の遺構として確実なものは、結局は井戸5基と方形周溝墓1基のみであった。溝や土坑は、同じ面で検出された飛鳥時代の遺構が大量に弥生時代遺物を含んでいた状況では、確実に弥生時代のものとは言いがたい。

井戸の存在と出土土器の量から集落があった可能性を考えたい。井戸内の遺物組成が壺に片寄るのに対し、飛鳥時代の遺構の遺物組成の中に、甕を最多として集落的なものがあるのが確認できる。

しかしまた、方形周溝墓から、墓域の存在も考えられる。非常に小型のものが1基のみで、単独で存在していたとは考えにくく、調査区西側の南方に墓域が広がっていた可能性が強い。方形周溝墓に近い飛鳥時代遺構の幾つかから出土した弥生土器群が、壺と高坏の割合が高いものがある事は、墓域の存在を反映しているのかもしれない。

弥生時代の遺構は、調査区の南西に集中しており、縄文時代晩期以来の微高地の上のみ存在している。飛鳥時代の遺構より広がり小さいのは、その間に後背湿地の埋積が進行し、微高地縁部が拡大したからであろう。一つの微高地の上が、集落域と墓域に分割されている景観が復元できる。後背湿地に

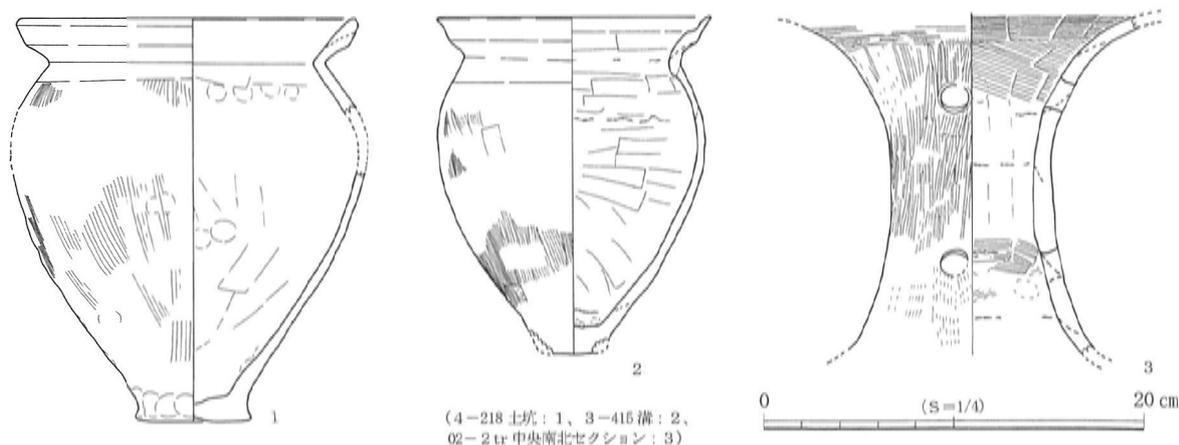


図131 4-218土坑・3-415溝・02-2 tr. 中央南北セクション出土遺物

は水田が作られていた可能性があるが、中世以降の耕地開発による掘削などが大きい事と、3-2層の地震による攪乱等の影響もあるのだろう、今回の調査では確認できなかった。しかし、用水路さえ残存していないのは若干疑問である。

井戸には井戸杵があったものと素掘りのものがあったと推測されるが、各々確実性の高いものは一例ずつである。廃棄時の土器の入り方は、破砕した土器を投棄したと考えられるものもあるが、埋め戻しと投棄の関係は様々である。完形やそれに近いものを底部に埋納するものもあり、一定はしていない。むしろ井戸それぞれによってやり方を変えているようである。土器の埋納・投棄が井戸埋め戻しの祭祀とすれば、個々の井戸に対応した方法があり、定型化していないと言える。

弥生時代の集落・墓域の存続期間は、飛鳥時代遺構や包含層の遺物も含め考えると、河内V-2様式から始まり、河内V-3様式が中心で、VI様式にも存続していたようで、わずかながら庄内式土器が見られる事から、庄内式期に廃絶した可能性が高い。畿内V様式期に成立し、庄内式期まで存続するが、布留式期まで続く事なく消えていく集落の類型になるようである。

(8) 3層・4面出土サヌカイト製石器(図132~134)

4面の遺構ではしばしばサヌカイト製の石器(石核・剥片・チップ含む)が出土した。飛鳥時代以降の遺構ではその時期に伴うものではないのが確実であるが、弥生時代遺構でも同時期のものとは考えにくいものが多かった。また、3層系の層内にも含まれていた。

それらについてここでまとめて触れたい。しかし、少数は各遺構で他の遺物と共に先述した他、出土数は多数であり、ここに掲載するものは出土数の3割以下であり、掲載遺構内から出土したものの他、大きめで目立つものなど恣意的な抽出である事を断っておきたい。

図132は3層に包含されていたものである。

1は搔器か小型の打製石包丁の破片と思われる。製作途中で折れて廃棄か。ネガ面とポジ面の剥離方向が180°違う。ネガ面が原礫面除去の調整だったのか、連続する剥片採取作業途中で打面を転換したのかは不明。上辺は折れで、本品が剥離した際のものと思われる。下辺の刃部の形成はネガ面からの押圧剥離が多く、ポジ面からは補助的で、片刃状に作る。ネガ面で見て左の端部には抉りを入れる。上辺にポジ面から押圧剥離でツブシを入れているが、その中の一つで折れが生じ廃棄されたものと思われる。重量8.0g、風化は少なく、石質は良い。

2は石鎌の残欠か。薄く細長い形の原礫をそのまま加工したようで、両面に原礫面を多く残す。下辺には刃部が形成されたようだが、ネガ面の左端のみ鋭利に残され、他はポジ面よりツブシが入る。上辺はツブシ。ネガ面左辺の折れは製作に伴うものではない。完成した後の折れか。全体の形状から石鎌と思われ、刃部のツブシや、両面で原礫面を除去するような比較的大きな剥離も、柄に固定するための調整と見れば納得がいく。重量16.8g。若干風化するが石質は良い。

3は小型の搔器か。ネガ面に残る三つの大きな剥離痕の内、下の剥離痕の打点方向が90°異なり、なんらかの調整剥離だったかもしれない。ネガ面左辺と右上辺の折れは本品剥離時のものか。ポジ面右辺と上辺はツブシが入り、下辺は両面からの押圧剥離で刃部を形成する。極めて小型のナイフ形石器とも言えるが、刃部が直線的で、全体から見ると片刃状であるので搔器とした。重量3.1g。やや風化するが石質は良い。

4は剥片。ポジ面の下辺の折れはステップ状であり、左上辺の折れは打点から生じ、本品剥離時のものであろう。ネガ面の二つの剥離痕がポジ面と打点方向が同じものと180°違うものであるが、下のも

のは下辺の折れに伴うものであろう。重量4.6g。風化少なく石質は良い。

5は剥片。折れにより廃棄か。ポジ面の右上辺が打点より生じており、本品剥離時の折れ。ネガ面の剥離痕の内、左下のものもその折れから剥離している事から同時剥離の可能性高い。重量10.6g。若干風化するが石質は良い。

6は石核。上辺を打撃面としたネガ面上部の剥離痕で左辺の折れが生じたようである。他の三つの剥離痕も、切り合いではそれより後なのに打点が残らないので、折れに近いような同時剥離か。背面は原礫面で、打面形成の剥離の打撃はこちらから行っている。重量31.5g。風化少なく石質良し。

7も石核。本来の剥片採取のネガ面は図右の面である。図左の上部二つの剥離痕はその後で本品自体

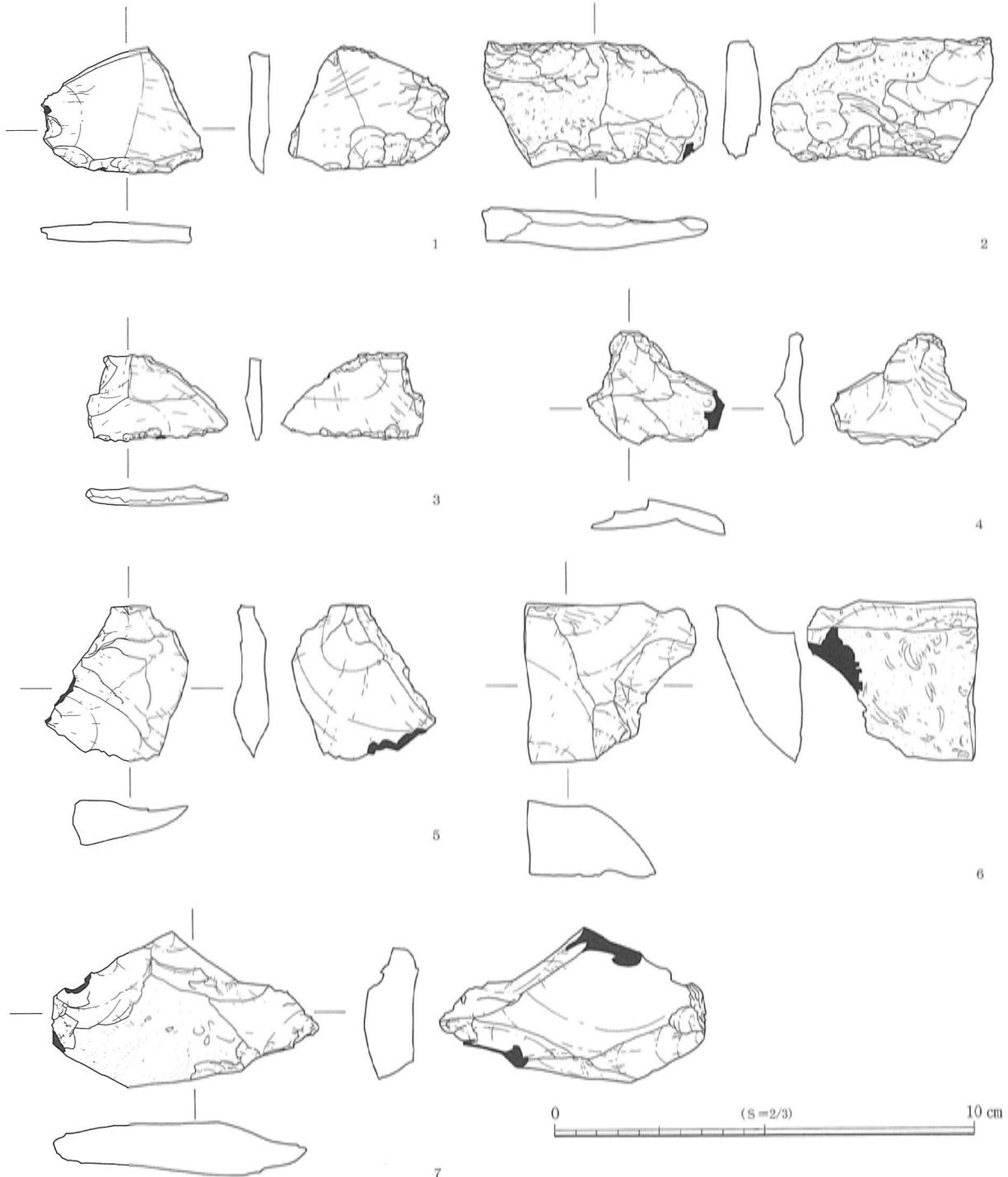


図132 3層出土サヌカイト製石器

を製品に加工しようとしたか、反対方向から剥片が取れないか試みたものと思える。その結果、図右の左上辺と下辺の折れが生じ廃棄されたものか。

図133は4面遺構より出土したものである。

1は3-139堀田から出土。石核を転用した楔形石器か。図右の面の三つの大きな剥離痕のうち、左側のものと同右端から下半のものは、他と比較してかなり風化が進んでおり、素材として利用する以前の自然の割れか。その事から、素材は転石であった可能性が高い。つまり、図右の面がその二つの剥離も含め、素材の丸みを持った端部であったようである。図左がネガ面で、右下からの打点で剥離している一番大きな剥離痕が剥片のネガである。その上辺はツブシ状であり、下辺は一見刃部状だが、両面同時剥離のものが多い。対辺に向かって伸びる剥離痕はないが、上下辺の剥離が対応するようで、両極打法と思われ、楔形石器とした。重量12.4gやや風化するが石質は良い。

2は3-376住居出土。小さく、薄い剥片か。ネガ面右側に打面調整と思われる剥離痕が二つあり、左側に前の剥片のネガ残る。中央の剥離面は剥離がポジ面と同時の打痕裂痕。小さすぎ、ネガ面で同時剥離が起こったため厚さもないために廃棄されたか。重量1.2g。風化あまりなく、石質良し。

3は3-158溝出土。剥片。原礫面を打面とし、剥離時にポジ面左辺の折れが生じたか。ネガ面の右辺付近の剥離痕は同時期割れ。ネガ面の打撃方向と90°異なるので、剥離面を整えた後の最初の剥片か、もしくはこれ自体がまだ剥離面調整のチップであった可能性もある。重量は14.6g。風化は若干あるが石質は良い。

4は4-162土坑出土。剥片。上辺の原礫面を打撃面にしている。ネガ面下辺沿い下からの打撃による剥離痕は、剥片採取前の剥離面調整か。右辺沿いのネガの剥片を取った後、左上方から剥離面調整をした後、本品を剥離する。前の剥片のネガから、素材（打撃面を原礫面とする板状剥片）はかなり幅があったと思われる。下部が薄くなりすぎたために廃棄か。重量14.0g。風化弱く石質良い。

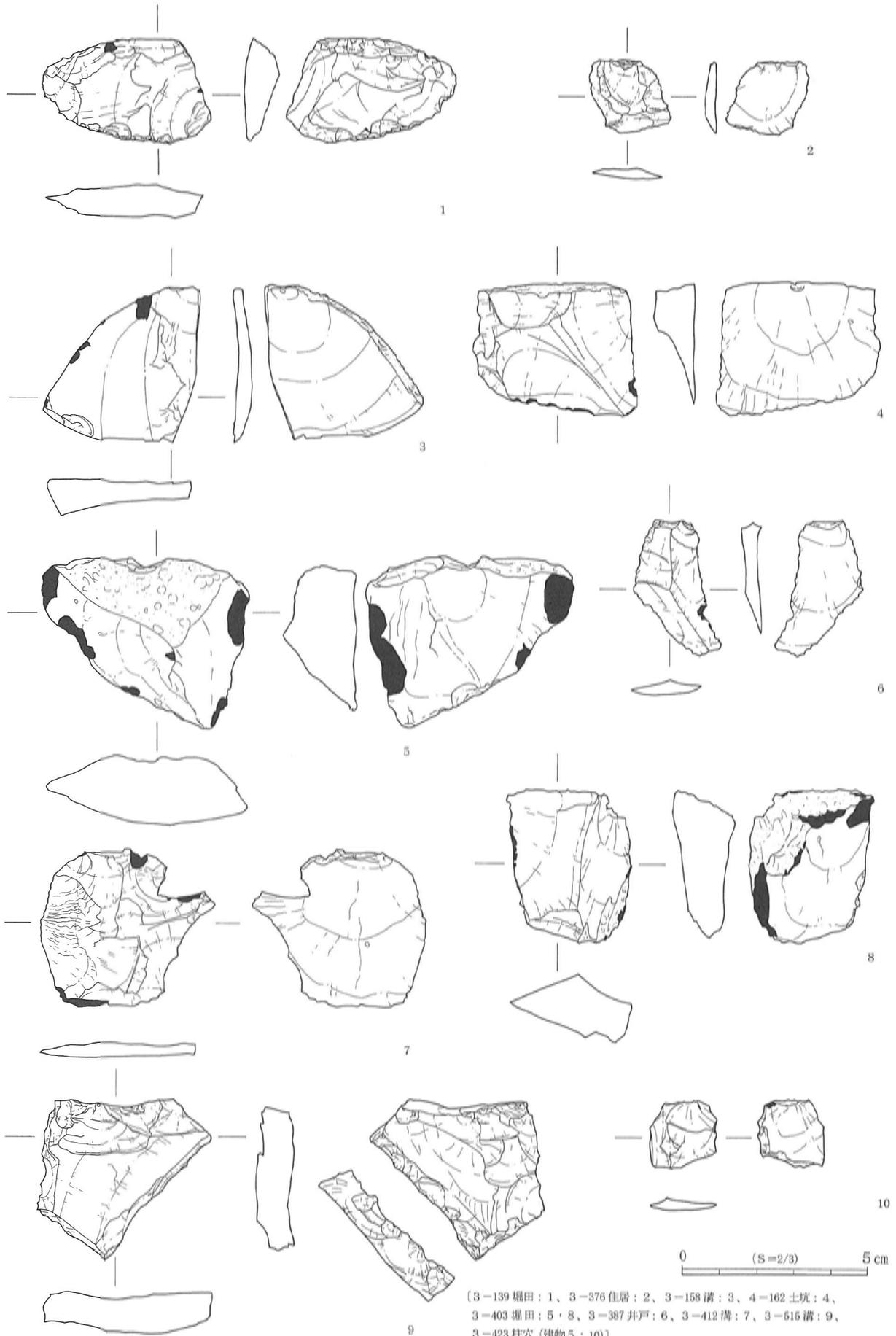
5は3-403堀田出土。石核。図左の二つの剥離痕は、原礫面との境が交叉する部分での打撃により割れており、人為的割れではないかもしれない。図右がネガ面で、上辺原礫面を打撃面にして剥片を取っていった残りである。上辺の面には原礫面をとばした剥離もあり、打撃面調整か。ガジリも若干風化しており、廃棄後もローリングを受けたようだ。重量は48.1g。風化激しいが石質は良い。

6は3-387井戸出土。剥片か。ネガ面の右側の剥離面痕は剥片のネガ。左上方の二つの小さな剥離痕は剥離面調整か。本品はその調整でも取りきれなかった稜を除くための剥離面調整のチップか、打点がずれ、幅が狭く薄い剥片しか取れなかった剥片の失敗品と思われる。重量2.6g。風化少なく石質は良い。

7は3-412溝出土。剥片。ネガ面の右下方の剥離痕は剥片採取前の剥離面調整の残りか。左側の二つは剥片のネガ。右上は本品剥離前の剥離面調整と思われる。薄くなりすぎて廃棄か。重量9.1g。若干風化進み、石質やや悪い。

8は3-403堀田出土。調整剥片か。素材の板状剥片は、上面（打撃面）と側面が原礫面のもの。ネガ面左の剥離痕は剥片のネガ。その後に右の剥離調整を行ってもまだ剥離面端の反りを取るのに足りなかったためもう一度剥離面調整を行った際のチップが本品か。重量21.5g。風化少なく石質良し。

9は3-515溝出土。二次加工のある剥片。本品剥離時に上辺以外全ての辺、折れたか。ネガ面下方の剥離痕はポジ面と大きく方向が異なり、かつ打点がかなり遠い。打撃面となっている上辺は剥離による平坦面なので、素材はかなり大型の板状剥片であったと思われる。本品剥離後、上辺から両面に剥離



[3-139 堀田: 1、3-376 住居: 2、3-158 溝: 3、4-162 土坑: 4、
3-403 堀田: 5・8、3-387 井戸: 6、3-412 溝: 7、3-515 溝: 9、
3-423 柱穴 (建物5: 10)]

図133 4面遺構出土サヌカイト製石器 (その1)

を入れ、ポジ面左下辺端面はネガ面から剥離を施し、端面を整えているかのようで、右辺は両面から剥離して加工中に上辺寄りの部分が再び折れたようである。どの辺も端面が残り、刃部の形成が見られないが、ポジ面上辺が元々もう少し広く、上辺・右辺の加工がさらに進むとすれば、上辺が刃部となり、下方が柄に部分となる石匙を製作する途中であったのかもしれない。風化少ないが石理強く出て石質は良くない。

10は3-建物5-423柱穴出土。調整剥片。ネガ面・ポジ面の打点が同じである。ネガ面の左辺・下辺は折れ。剥片を剥離した際に打点ネガ面側で同時剥離したチップと思われる。重量1.0g。風化少なく石質は良い。

図134は4-286溝南東側出土石2である。石核転用タタキ石か。図中央で、右上・左・左下からの打撃である程度礫面を除こうとしているように見える。その後、図左の面では、左側で剥片を取ろうとしたが2回目の剥離でネガがステップ状になり、右方向への剥離に転回する。その後の部分で左にも剥離が生じるため、ツブシ状になる。図右の面は、左上に残る剥離痕で、先ず下からの打撃で平坦面を作ろうとしたと考えられる。その後右からの打撃で剥片を取ろうとしたが、多くはステップ状で打点もツブレ、失敗したようだ。最後の段階では下面が下からの何回もの打撃でツブレ、周囲の下からの打撃の剥離痕はそれに伴うものか。タタキ石としてこの部分で打撃したものと考えられる。重量954.0g。剥離痕には風化少なく、原礫面は風化若干。石質は良い。

小結 今回の調査で出土したサヌカイト製石器の中には、結果として旧石器時代のものは認められなかった。石核・剥片・チップから見ても、縄文時代以降の石器といえる。また、細石刃の不在も一つの時期の目安となろう。しかし、打製石包丁や石鎌らしきものや、4-方形周溝墓1で出土した石槍か石剣の基部らしきものがあるといっても、楔形石器の可能性のあるものもあり、弥生時代の石器のみではないようである。また、弥生時代の石器と言っても、4面の河内V-2様式～庄内期の遺構と同時期のものはほとんどないであろうと思われる。

ただ、おそらくは近辺に石器製作址が存在したであろう事と、石材としては原礫面の風化が進行した小型の転石を多用しているとは言える。



[4-286溝南東側石2]

図134 4面遺構出土サヌカイト製石器(その2)

(9) 小結 (表64)

弥生時代の遺構群は後期の初頭を除く時期から終末期まで存続期間があり、庄内式期までかかる可能性がある事が判明した。その遺構群は大和川と石川の合流点の北西側に形成された、北西に手の平状に枝分かれする微高地の、西端となる枝の一つに立地していると思われる。さほど広い面積のある立地とは思えず、その狭い中で南に墓域、北に集落域が存在していると想定した。船橋遺跡の中ではかなり広い範囲に弥生時代後期の遺構が分布しているが、それらは一まとまりの巨大な集落となるのではなく、このような小さい単位が間隔をあけて微高地状に散在していた集落であった可能性を提示できるだろう。

弥生土器で注目できるのは生駒西麓産の割合で、器種不明破片も胎土分類した(その4)の調査分で見れば、甕・壺では4割弱を占め、おそらく全体の破片数では3割程度を占めるであろう。甕ではタタキ甕とハケ甕の割合が10対1程度だが、ハケ甕の中では生駒西麓産の割合が非常に高いが目立つ。壺に関しては、実測した個体での印象では生駒西麓産がもっと多いように思ったが、破片数で見ると長頸壺と広口壺との割合も変わらず、3割程度である。中河内低地産と南河内産の土器の違いは明確にしがたいが、どちらの土器も入っているようで、もしかすると3地域の土器が、おのおの等分に入っているのかもしれない。遺跡の立地自体がそれらの境界線上にある事からすれば当然かもしれない。ただ、生駒西麓産が高坏・鉢で割合が少ない事は、器種によって産地の選択が行われていた可能性を示唆するものかもしれない。

飛鳥時代では、溝群が直接のつながりが確認できない東群と西群に分けられ、西群は確実に建物群に先行する事が判明したが、東群は建物群と併存する可能性もありえる状況である。

それでも、これらの溝群の性格は漠として明確にしがたい。今のところ、建物群の成立に先立っての、整地地業に関係するものであると考えるのが妥当と思われる。

溝群の遺物として先ず目立つのは大量の弥生土器である。埋土上半で完形や、その場で割れたような状況で出土するのは、飛鳥時代の開発に伴い出土した土器を、当時の人々が丁寧に掘り出し、埋め戻した事を示す珍しい例と言える。また、そのおかげで弥生時代後期の遺構群の土器組成を考える資料にもなる。全体に甕が一番多い、集落的な土器組成であるが、方形周溝墓に近い南西部の溝では、壺と高坏の比率が高いものがある、などである。

建物群は、周辺のガラス小玉鑄型や甕の羽口などが出土した土坑などと共に工房域を形成する可能性が高いと言える。ガラス小玉の生産の他、漆の使用や小鍛冶が存在していたようだ。

また、溝群にも甕の羽口など、工芸生産関係の遺物が入っている事は、ここに成立した工房域以前に、既に周辺に工房域が存在した事を示す。

飛鳥時代の遺構は、飛鳥Ⅱ期に時期的に限定される事も確実にになった。短い期間に存続し、先述のような工芸品を生産した工房域と言える。

奈良時代の遺構は、今回の調査ではかなり少なかったが、完形に近い土器があり、平城宮Ⅰ～Ⅱ期頃にあたる事が判明した。やや孤立したこの時期に何があったのかは判然としないが、二つのピットのみとは言え、包含層の同時期遺物に墨書土器などが見られる事を考えると、軽視できないものがある。

本格的に耕地化の証拠が残るのは中世に成立したと思われる島島と堀田である。ここでは島島が洪水砂の処理という性格を持たず、堀田を掘った土を盛り上げるという形を取る。この耕地形態は、当時の水利状況と深く関わっていると考えられるが、その解明は今後の課題である。

表64 掲載遺構 遺物破片数集計表

大別	総数	種別		器種		型式・部位		細別															
		破片数	%	破片数	%	破片数	%	破片数	%														
(その4)	22768	弥生 (生駒西麓) (生駒小片) (その4)	8167 869 154 2468	35.9 10.6 1.9 67.2	甕	2091	25.6	タタキ	712	34.1	生駒西麓	197	27.7										
					(その4)	761	30.8	ハケ	67	3.2	生駒西麓	48	71.6										
					(生駒西麓)	443	21.2	底部	87	4.2	生駒西麓	23	26.4										
					(その4)	286	37.6																
					甕	8	0.1					生駒西麓	1										
					壺	2113	25.9	長頸壺	507	24.0	生駒西麓	144	28.4										
					(その4)	604	24.5	短頸壺	7	0.3													
					(生駒西麓)	349	16.5	広口壺	209	9.9	生駒西麓	59	28.2										
					(その4)	231	38.2	底部	139	6.6	生駒西麓	18	12.9										
					鉢	92	1.1					生駒西麓	11	12.0									
					高坏	462	5.7					生駒西麓	38	8.2									
					蓋	4	0.0					生駒西麓	2	50.0									
					器台	79	1.0					生駒西麓	18	22.8									
					土師器	9457	41.5	甕	1247	13.2													
					(その4)	3670	(その4)	1000	27.2	羽釜	669	7.1				非生駒	14	2.1					
										甕	53	0.6											
										甕	74	0.8											
										輪状土器	4	0.0											
										壺	48	0.5	広口壺	2	4.2								
													直口壺	2	4.2								
													短頸壺	13	27.1								
													小型壺	14	29.2								
										把手	16	0.2											
										鉢	953	10.1											
										高坏	686	7.3	脚部	66	9.6								
													ミニチュア	16	2.3								
										坏皿類	3282	34.7	皿	33	1.0								
													小皿	15	0.5								
										椀	3	0.0											
										製埴土器	1	0.0											
										土鉢	2	0.0											
										輪羽口	24	0.3											
										棒状製品	3	0.0											
										鋳型	28	0.3											
										須恵器	1999	8.8	甕	840	42.0	口縁	32	3.8					
										(その4)	200	200	5.4	23.7	壺	474	23.7	長頸壺	14	3.0	型式判明		25.0
																		短頸壺	5	1.1	する壺の	56	8.9
																		小型壺	3	0.6	破片数		5.4
																		提瓶	4	0.8			7.1
																		横瓶	7	1.5			12.5
																		平瓶	4	0.8			7.1
																		瓶子	1	0.2			1.8
																		はそう	10	2.1			17.9
																		有脚	2	0.4			3.6
																		蓋	6	1.3			10.7
															甕	1	0.1						
															鉢	16	0.8	播り鉢	1	6.3			
高坏	12	0.6																					
坏	712	35.6	II形式	297											41.7	身	108	36.4					
																蓋	160	53.9					
			III形式	104											14.6	身	56	53.8					
																蓋	60	57.7					
			奈良	54											7.6	高台坏	21	38.9					
																無高台	15	27.8					
																蓋	10	18.5					
瓦器	22	0.1	甕	2											9.1								
			羽釜	8											36.4								
			鉢	4											18.2								
			椀	7											31.8								
黒色土器	3	0.0	椀	3												A類	3						
(その4)	1	0.0																					
灰釉陶器	5	0.0																					
白磁碗	2	0.0																					
緑釉陶器	1	0.0																					
(その4)	1	0.0																					
その他			瓦	42		平	35		須恵質						13								
						丸	6		土師質						10								
									いぶし						3								
									須恵質						4								
									土師質						1								
									いぶし						1								
			鉄滓	9		サヌカイト	23		木製品						28		炭	6					
			桃核	2		牛馬歯	1		石製品						4		粘土塊	18					

5、6面・7層縄文時代晩期

(1) 概観

5層は、有機分を含んでやや暗色を示す層で、古土壌であると推測された。場所によって暗色の程度が違い、薄いところではほぼ4・6層と区別がつかないようなところもある。上面での遺構の検出は難しいと見て、その下面である6面で遺構の検出を行った。ここで検出された遺構は、本来は5面から切り込んでいたと考えられる。02-1トレンチでは5層がほとんど暗色を示さない部分が多く、6面の追跡が難しかったが結局遺構は検出できなかった。02-2トレンチでは西半の微高地には5層が遺存していない事が分かったので東半のみで6面を検出し、わずかな遺構と遺物を確認した。02-3-1トレンチでは遺構も遺物も確認されなかった。遺構の分布密度が低く、それも微高地と後背湿地の境目あたりにしかない事が分かったので、02-3-2トレンチでは北西の一部分のみ6面を検出し、わずかな遺構と遺物を得た。02-3-3トレンチでは4面の追い討ちをかけた時点で6面が検出され、東側で浸蝕痕を検出したに留まった。

7層は砂層が横方向で切り合う下部と、洪水の溢流堆積で水平なラミナを持つ上部に分かれる。調査区西側の微高地を形成するのは上部である。02-1トレンチで上部のみが遺物を包含する事が判明したので、後は7層上部まで掘削し、遺物の採集を行った。



図135 6面全体図

6面で出土した土器も7層上部で出土したのも、その示す時期は縄文晩期長原式の時期である。その期間内に微高地が形成され、土壌が出来、遺構が掘られたと考えられる。

(2) 6面 (図135)

自然の落ち込みや浸蝕痕の他、わずかな土坑・ピットが検出された。遺構や土器の出土は微高地と後背湿地の境部分でのみ検出されるが、微高地の最も高い部分では4面に7層が露頭するような状況で、5層形成当時の面は残存していないと思われ、本来はこの部分にも遺構が存在していた可能性はある。3-814土坑(土器1)(図136・138-6) 02-2トレンチ東半南東側で検出された。やや方形に近いような不整形な土坑で、北に向かって緩いスロープ状に底が上がっている。土器の出土状況からみれば、5面から切り込んでいた形はもっと南北に長いものであったと推測される。検出面での平面規模は南北・東西ともに80cm。深さ25cm。埋土は5層に似る。

土器は破片が埋土上面から北の肩外の6面上に広がっていた。遺構埋土内に破片がないのは疑問だが、ちょうどここで埋土が変わっていたのかもしれない。破片は1個体の壺形土器のもので、ほとんどの破片が内面を上に向けていた。接合・復元したところ縦に割った半分弱の部分が残存していた。

遺構の性格は不明だが、稀少な壺形土器が1個体出土しているのが特徴的とは言える。

図138-6は壺形土器。完形率は接合しなかった破片も含めれば4割ほどである。外面は、口縁部の粘土帯は棒状工具でヨコナデ、頸部~肩部はタテハケ後タテミガキ、胴部はタテケズリ後最大径部分にヨコケズリ、最後にその上にヨコナデが入るが、上のミガキは明確な境界を持って消すが、下の削りは漸移的に消す。内面は、口縁部ヨコナデ、頸部タテユビナデ、不明確だがその後軽いヨコナデが入っていたかもしれない。胴部は最大径部分に多くユビオサエが残るがナデで、肩部は左上がりナナメ、下部は右上がりナナメ、中位はヨコナデ。胎土は黒褐10Y R 3 / 1を呈し、石英・長石・角閃石ありの生駒西麓産胎土。

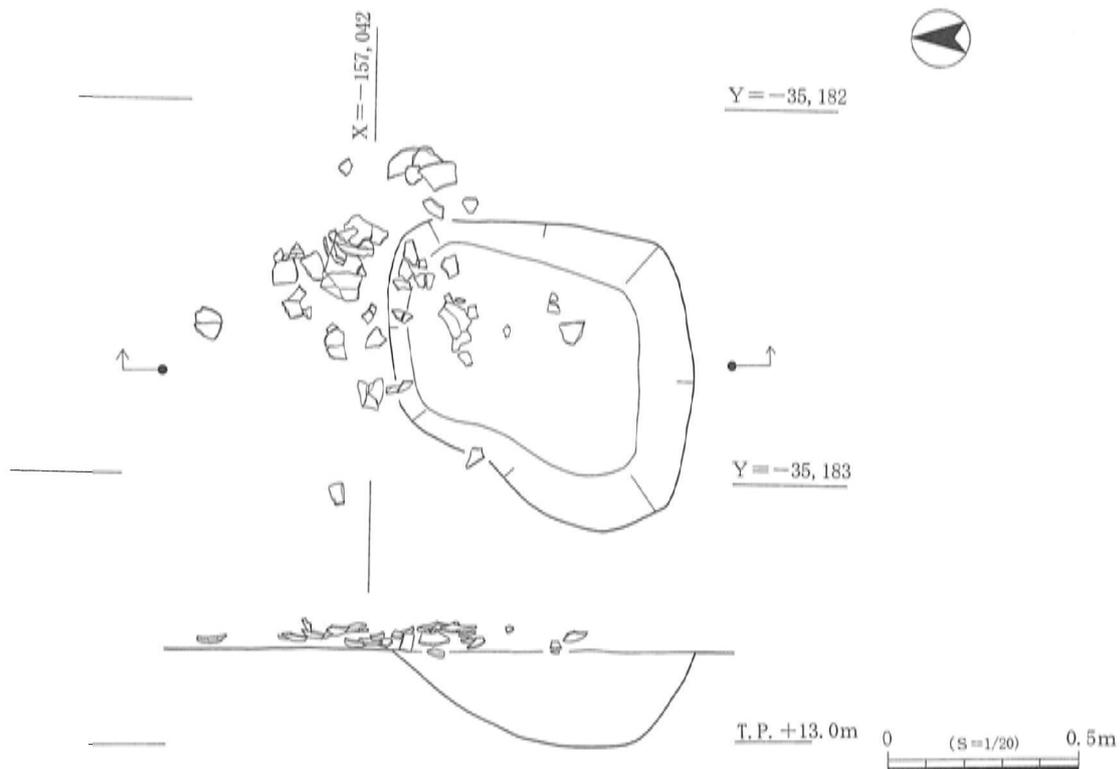


図136 6面3-814土坑・土器1出土状況

口縁部の突帯が、刻み目がないばかりか、かなり丸くなっているのは長原式の壺形土器でも新しい傾向のような感じを受ける。また、外面上部にミガキが採用されている事は、弥生土器の影響と考えられ、実質は弥生時代と併行している時期のものと思われる。

02-3-2 トレンチ深掘り部 (図137・図138-1~5) 02-3-2 トレンチ北西側の一部で6面を調査し、1個の不定形な落ち込みと5個のピットを検出した。またその中心の4-245~246ピットの周辺から土器片が7片出土した。

ピットはいずれも不整形円で、径60~80cmほど。検出面での深さは浅く、10cm前後だが、本来は5面から切り込まれていた遺構だとすると、周囲の5層の厚さから見て、最低20cmほどの深さはあったと推測される。埋土は5層に似る。

土器片は検出面からやや浮き、散在したような状況だが、5面での状況を復元的に考えれば、土器片1~3が4-243落ち込みの斜面に、土器片4・5が4-245ピット内に、土器片6・7が4-246ピット内にあったものと思われる。しかし、土器片3・4・6が接合したという事は、これらの遺構が同時

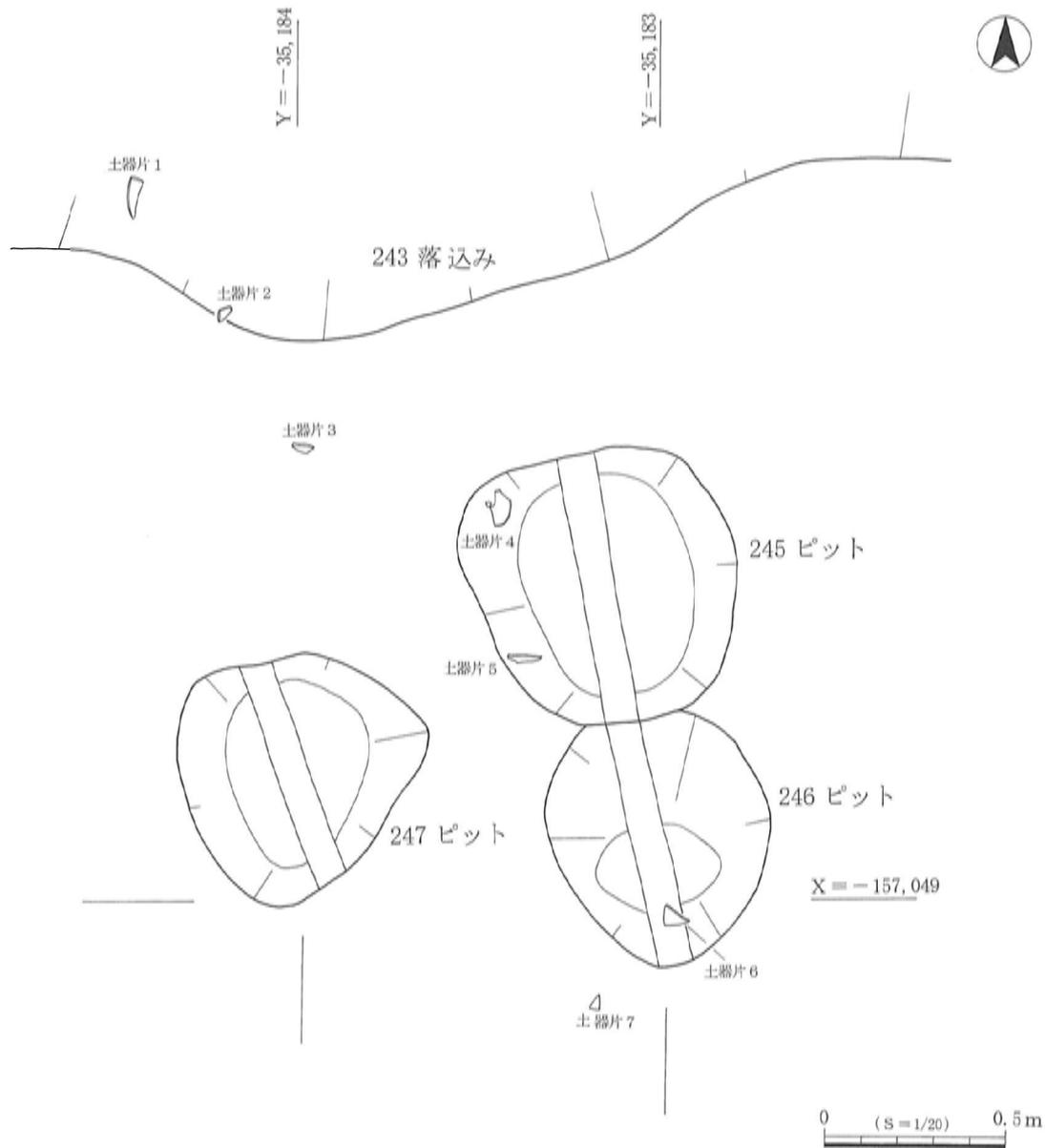
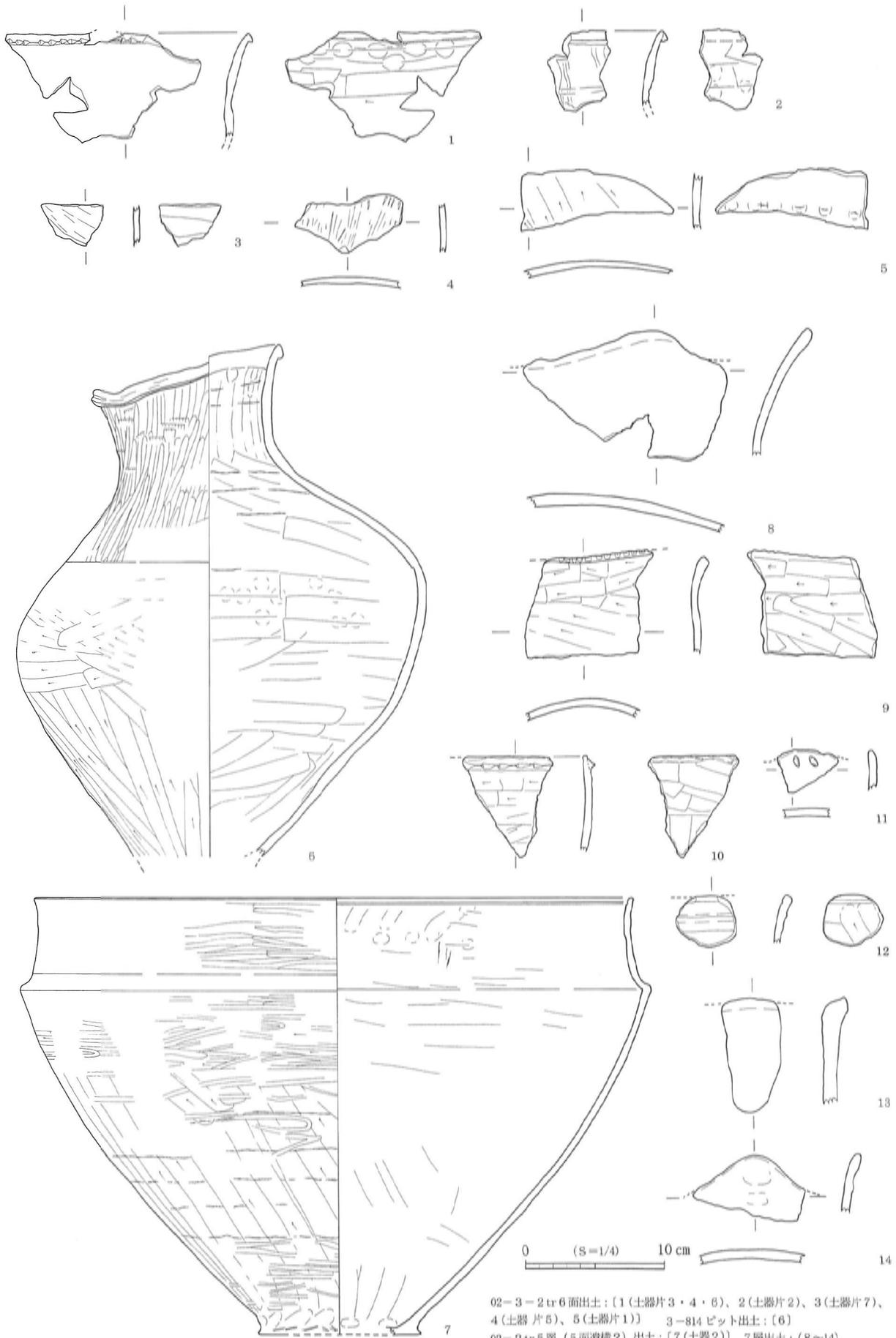


図137 4-243落ち込み・245ピット・246ピット周辺土器出土状況



02-3-2tr6面出土：〔1(土器片3・4・6)、2(土器片2)、3(土器片7)、4(土器片5)、5(土器片1)] 3-814ピット出土：〔6〕
 02-2tr5層(5面遺構?)出土：〔7(土器2)] 7層出土：〔8~14)

図138 6面及び6・7層出土土器

期併存していた事を示す。他の土器片も胎土・焼成が良く似ているものがあり、1個体の破片の一部が残されている状況だと思われる。

図138-1は深鉢口縁片。長原式。口縁の欠けた部分が少し上方に突出するかもしれない。外面は、口縁端部の刻み目突帯以外は磨滅で調整不明。内面は口縁近くにユビオサエが良く残るが、それより下はヨコケズリか、全体に最終的にヨコナデが入る。胎土は黒褐2.5Y 3 / 2を呈し、角閃石多し、石英・長石若干あり、微細粒に黒雲母もありの生駒西麓産胎土。

2は壺形土器の口縁か。長原式か。口縁の突帯に刻み目はない。外面はタテハケ後ヨコナデ。内面はユビオサエ後ヨコナデ。胎土は黒褐2.5Y 3 / 1を呈し、角閃石多し、長石・石英若干あり、微細粒に黒雲母もありの生駒西麓産胎土。

3は鉢胴部片か。外面ナナメケズリ、内面ヨコナデ。胎土は黒褐2.5Y 3 / 2を呈し、角閃石多し、石英・長石若干あり、微細粒に黒雲母もありの生駒西麓産胎土。

4も鉢胴部片か。深鉢胴部の下半のようである。外面はタテケズリ。内面は磨滅で調整不明。胎土は黒褐2.5Y 3 / 1を呈し、角閃石多し、石英・長石若干あり、黒雲母わずかにありの生駒西麓産胎土。

5も鉢胴部片か。深鉢胴部中位ぐらいか。外面ややナナメのタテケズリ、煤附着。内面は接合痕にユビオサエ並び、後にヨコナデ。胎土は黒褐2.5Y 3 / 1を呈し、角閃石多し、石英・長石若干あり、微細粒に黒雲母ありの生駒西麓産胎土。

2以外は同一個体かもしれない。外面に煤附着するものある事から、深鉢を使用していたと思われる。土器2（図138-7） 02-2トレンチ東半北壁近くで5層掘削中に出土した（図135）斜めに傾いた状態で出土し、その状態の上半は失われていた。おそらく5面切り込みの遺構内の遺物と思われるが、遺構は確認できなかった。完形率は5割弱。

外面は、口縁部ヨコナデ後ヨコミガキ、肩部ヨコユビナデ、胴部上半ヨコケズリ後ヨコミガキ、胴部下半タテケズリ後まばらにヨコミガキ、底部側面ナナメユビナデ後下端部に棒状工具の圧痕、底部は植物繊維の圧痕が一部に残り、無調整か。内面は、口縁端部沈線1条、口縁部絞り痕・ユビナデ・ユビオサエ残りヨコナデ、胴部上半ヨコナデ、胴部下半タテナデ、底部ユビオサエ。内面の口縁より10cm下より下部で部分的に薄く炭化物附着。胎土はにぶい褐7.5Y R 5 / 4を呈し、長石・角閃石多し、石英あり、黒雲母・赤色粒わずかにありの生駒西麓産胎土。

縄文土器の浅鉢ではあるが、外面のミガキは弥生土器の影響と思われ、長原式でも弥生土器と併存する時期のものと考えられる。

（3）7層出土遺物（図138-8～14・139・140）

図138-8は波状口縁の浅鉢口縁片と思われる。口縁端部がやや外側に肥厚する。強くローリングを受けて調整不明。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 2を呈し、石英・長石多し、角閃石わずかにあり。船橋式までは下らず、滋賀里IV式頃か。

9は口縁端部に外傾する面を持ち、そこに刻み目が入る深鉢の口縁片。波状口縁と思われる。調整はケズリだが、内面口縁部のみその後ヨコナデ。胎土はにぶい橙7.5Y R 7 / 3を呈し、長石・石英・角閃石あり。ローリングはほとんど受けていない。滋賀里III b式～IV式頃か。

10は長原式の深鉢口縁片。外面口縁端部に刻み目突帯付く。外面は、上部ヨコケズリ、下部ナナメケズリ。内面は、口縁端部に棒状工具による沈線、上部ヨコナデ、下部タテナデ。胎土は黒褐7.5Y R 3 / 1を呈し、長石・石英若干あり、微細粒に角閃石もあり。

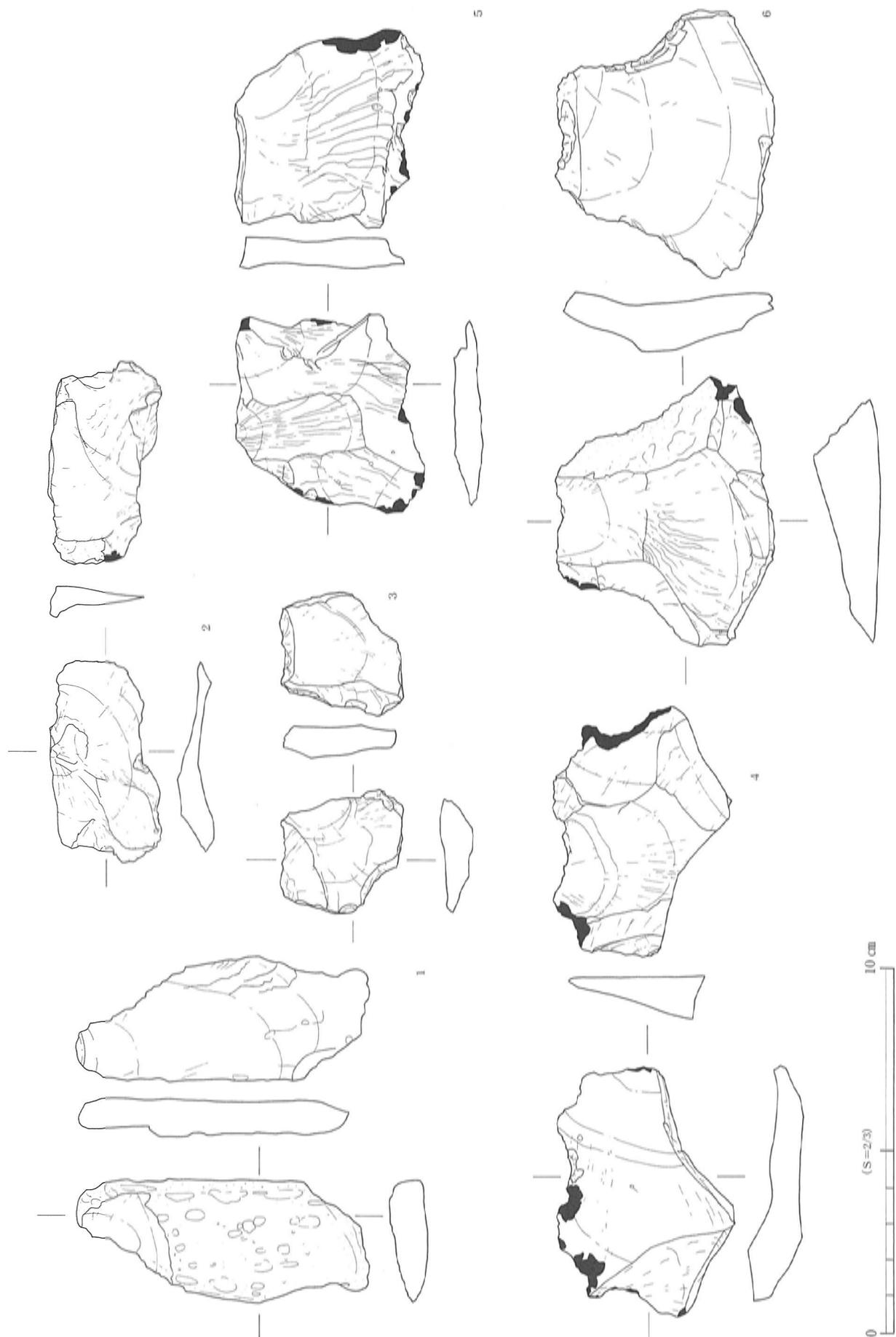


図139 7層出土サヌカイト製石器（その1）

11は波状口縁の破片。ローリングを強く受け調整不明。刺突痕らしきものが口縁外面に残る。胎土はにぶい黄橙10Y R 5 / 3を呈し、石英あり、長石・角閃石・黒雲母わずかにあり。刺突が半裁竹管によるものであるなら、滋賀里Ⅱ式まで遡る可能性がある。

12は口縁部片。深鉢か。強くローリングを受け、外面調整不明、ただ、浅い2条の凹線が口縁に走る。内面は口縁端部に沈線1条、調整はケズリか。胎土は灰白10Y R 8 / 2を呈し、石英多し、長石若干、チャートわずかにあり。口縁部外面の2条の凹線の間が磨滅した突帯であるなら、船橋式の可能性もあるが、確定はできない。

13は口縁片。強くローリングを受け、破断面も丸くなり、波状口縁かどうかとも判然としない。器壁はかなり厚い。胎土はにぶい橙7.5Y R 6 / 4を呈し、角閃石多し、長石・石英あり、黒雲母わずかにありの生駒西麓産胎土。

14は波状口縁片。浅鉢か。強くローリング受け調整不明。波状口縁の突出部の外面とその直下に浅い凹部がある。胎土は灰5Y 6 / 1を呈し、石英多し、角閃石若干、赤色粒わずかにあり。船橋式まで下る事はないと言えるのみである。

図139はサヌカイト製石器である。

1は調整剥片。原礫面が多く残る。剥片採取前に原礫面を除く作業ででたチップか。重量8.1g。風化・磨滅激しいが石質は良い。

2は剥片。図左がポジ面である。ネガ面の打撃方向は大きく異なり、その側縁に原礫面残るので、減礫面を除去する作業か。上辺打撃面も原礫面である。薄すぎて廃棄されたものか。重量12.6g。やや風化するが石質は良い。

3は剥片。図左ネガ面の右下の剥離痕は剥片のネガ、左上は打面調整か。その左辺は原礫面。ポジ面の上辺・左辺は本品剥離時の折れ、これにより廃棄か。各折れ面にある小さな剥離痕は同時割れか二次調整か定かではない。重量12.1g。風化・磨滅激しいが石質は良い。

4は剥片。下方の2辺は折れ。ネガ面の二つの剥離痕は、右の大きいものがポジ面と打撃方向が90°異なり、その後、左の、ポジ面と同じ打撃方向の剥離痕が出来る。下辺の折れとポジ面左右の剥離痕は本品剥離時に同時割れか。そのために廃棄か。重量39.8g。やや風化するが石質は良い。

5も剥片。ネガ面の左下の剥離痕はポジ面と180°打撃方向が違い、剥片採取前の剥離面調整の残りか。右側で上下に通じる剥離痕は剥片のネガ。左上はその後の剥離面調整。右端はポジ面と同時割れか。ポジ面は打点が定かでなく、ネガ面の同時割れからも変則的な力のかかり方で剥離したようだ。フィッ

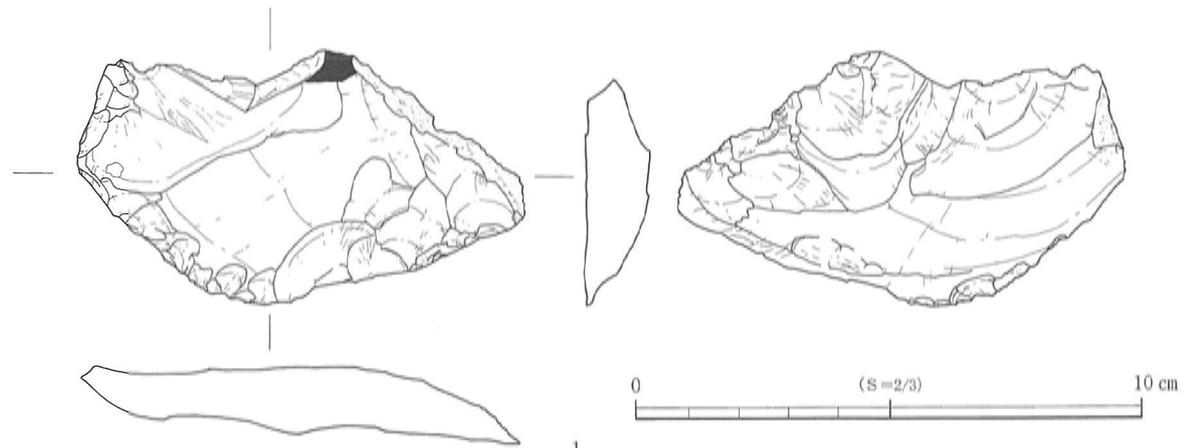


図140 7層出土サヌカイト製石器（その2）

シャーが多く深く入ったため廃棄か。重量30.3g。風化進み、石質少し悪い。

6は調整剥片か。本品剥離時に打面ハジケが起こり、ポジ面に打点は残っていない。ネガ面中央の剥離痕は、その後の剥離痕で打点残り打面にハゼも見られる。その左の剥離痕は他より明らかに風化が進み、素材採取前の自然の割れと思われる。下辺の剥離痕は先行する調整か。本品自体は板状剥片端の丸く突出した原礫面を除去したチップと考えられる。その後ネガ面に剥離を入れたのは剥片として利用しようとしたせい。重量70.0g。若干風化するが石質は良い。

図140はサヌカイト製二次加工のある剥片。ポジ面に残る本品剥離時の剥離面の打点は右上。残存する二つの原礫面が90°に近い角度なので、右上の原礫面を打撃面としたものと考えられる。その時、ネガ面の左上の大きな剥離面も同時割れ。上辺の折れもその時潜在割れを起こしていたか。その右下の剥離痕は先行するものだが、ポジ面と90°打撃方向が異なり、右上に打点があるはずだが、原礫面残るのに打点なく、リングから見ても妙な剥離である。その後下辺には刃部が形成され、ネガ面から見て右側には刃部の形成が、左辺には基部の形成が進む。しかしポジ面で、中央に鑄を作り、上辺に刃部を作るための剥離を行っている途中で、最初にダメージを受けていた上辺が折れ、外形が大きく抉れる形になったため製作途中で廃棄されたものか。製作しようとしていたものは石槍のようなものか。重量59.4g。やや風化するが石質は良い。

(4) 小結

以上の状況をまとめると、7層上部が何回かの堆積で次第に微高地を形成していった時期は、縄文晩期のうちで広く見れば、滋賀里Ⅱ式～長原式の期間と考えられる。しかし、7層上部に包含される土器片は、激しくローリングを受けたものと、あまり磨滅のないものにはっきり分かれ、磨滅の少ないものだけを見るなら滋賀里Ⅳ式～長原式に限定される。またその事から、出土した石器類も縄文晩期頃限定された資料と言える。それらの石器類は剥片や製作途中の破損品の存在から付近に製作址が存在した事を示す。技法的には板状剥片から、やや大型の横長長方形の剥片と小型の台形の剥片を取っているようで、打撃面が原礫面である事もある。剥離面が凹面になると剥離面調整を行う。板状剥片端部の原礫面を除き剥離面を形成する打撃は、剥片採取の打撃面とは方向が異なる場合がある。目的とした石器は剥片の大きさから石鏃や搔器類と推測されるが石槍も製作している。

では、これらの土器片と石器類を残した人々の拠点はどこにあったのであろう。7層上部は何層かの堆積単位があるが、その中に土壌化痕跡が一切残存していなかった事から、船橋遺跡周辺の沖積平野はかなり不安定な状態であったと思われる。調査区の微高地より東に、大和川と石川の合流点西側の微高地が先行して形成されていたはずだが、本流沿いの微高地であるから、ある程度発達しても、大きな洪水の被害を受けやすかったと思われる。おそらくは遺跡の南に隣接する国府台地に拠点を持つ人々が、活動の場としていたのではないだろうか。微高地が発達しだし、後背湿地と流路が錯綜し、頻繁な洪水によって、森林化が阻止されているような状況は、狩猟・漁労に適した環境であったであろう。

微高地が発達し、洪水堆積物がシルトになり、やがて6面上に5層が土壌として形成され出したのは、土器から見れば長原式の時期であり、7層の最新の遺物とあまり時期差がないように思える。しかし、02-2トレンチ東半の土器1・2のように、明らかに弥生土器文化と接触したと思われるものがある事から考えると、長原式期でも7層のものより新しい時期のものとも考える事もできる。おそらくは同時期の大阪平野には発達した微高地上に集落を営み、後背湿地に水田を拓いた弥生文化社会が成立していたであろう。長原式土器には底部に舂圧痕が残る例が知られており、その交流は肯定できる。

南隣の国府遺跡では弥生時代前期中段階の土器がわずかながら見られるが、遺構が確認されるのは新段階以降である。北西の田井中遺跡では弥生時代前期中葉の集落が想定されている。そのように船橋遺跡周辺に弥生時代集落が進出してくる前期中葉より前、河内Ⅰ-1様式の時期が、これらの遺物と併行するのではなかろうか。

この時期に少数ながら遺構が残されている事と土壌の形成は、調査区内の微高地も安定してきた事を示す。しかし土器の全てが生駒西麓産胎土である事は、人々の拠点が生駒西麓の扇状地あたりにあった事を示唆しているようである。しかしまた、遺構が残され、そこに完形の土器を持ち込んでいるという事は、この地域がまだ長原式土器を使用する集団の占有的活動域であった事を示すと考える。

だが、安定した微高地が形成され、後背湿地と交錯している環境は、弥生時代の水田開発に最適であるとも言え、その前提となる自然環境が整った時期であるとも言える。

6、2000年度確認調査の成果

(1) 概観

2000年度に今回の調査と同じエリア内で、確認調査として二つのトレンチを開けている。00-2トレンチは02-1トレンチ内の南東隅付近。00-3トレンチは02-3-3トレンチ東半の南隣接地、堤防からの工事中仮設道路の下に当たる。

00-2トレンチは3・4面の堀田部分にあたり、2面では逆に島畠が形成されたようで、4層が遺存していないなど、狭い範囲では層序の確認が困難であったようだ。また、堀田の削平だけでなく、元々遺構密度の少ない部分であったため、1面の東西方向の溝以外、遺構は検出されなかった。

00-3トレンチは微高地上であるが故にまた層位がかなり異なり、調査当時は層位の対応に苦勞したようだ。4面上の二次的な堆積が多かったようで、第2面・第3面・第4面と分けて検出した遺構のうち幾つかは同じ面に属する遺構だったらしく、再整理の結果、1棟の掘立柱建物を復元する事ができた。今回の調査の4面に当たると考えられる。

なお、ここでは、確認調査時の各トレンチでの基本層序は「第○面・第○層」と呼称し、2002年度調査の基本層序は「○面・○層」と呼称する。確認調査の基本層序では面と層の数字は対応していない。

(2) 層序 (図141)

各トレンチは階段状に段を付け掘削を進めたので、その段の部分で、若干連続を追いにくくなっているようである。また、狭いトレンチゆえに認識しにくかった層もあるようである。

00-2トレンチ 第2層が1層に当たる。第3層上面を第1面として東西方向の溝を検出しているが、断面図から見れば第2層上面からの切込みであり、1面検出の近代以降の東西方向溝群の一部である。

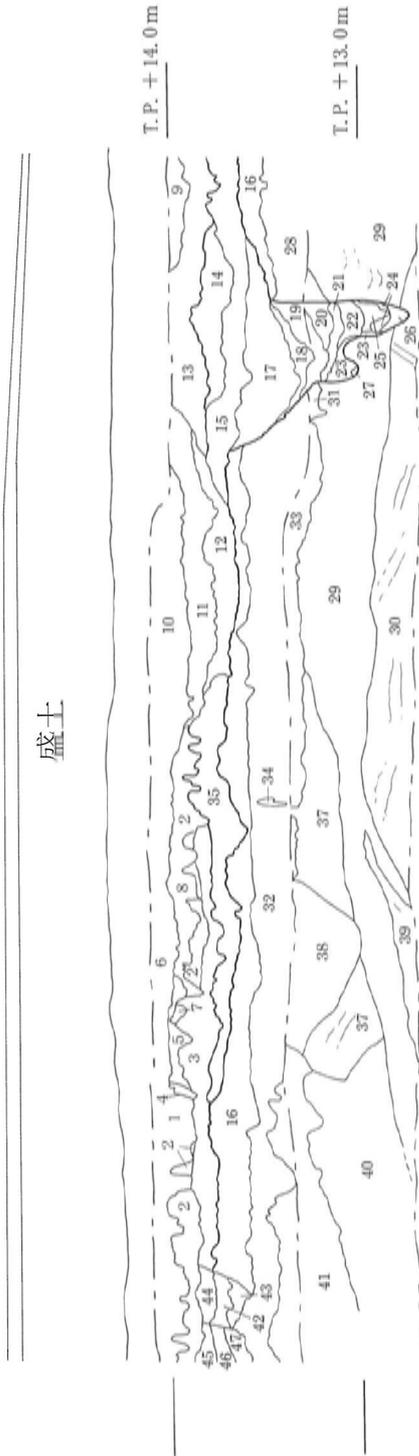
断面図上の第3層(断面図の2)は洪水砂であり、1・2層間洪水砂に当たる。

断面図の5・12・19は、5を第4層としているが、全て2-1層に当たる。6は2-2層。14・20は層位的には2-2層に当たる、2面の古い段階の堀田耕土かもしれない。ならば15はそれに併存する島畠盛土か。

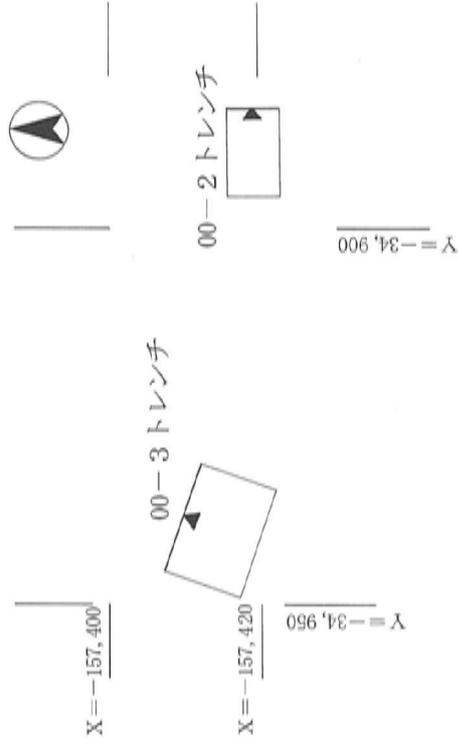
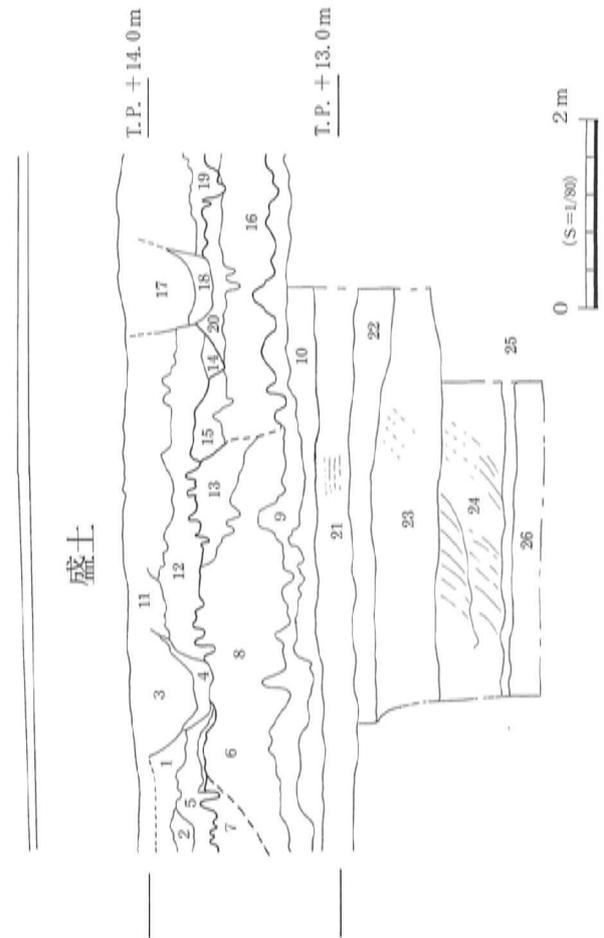
7・8・16は第5層としている。7と8は単に還元・酸化の違いかもしれない。8は4層らしきものが「もやもやと」入っているので3-2層が含まれている事は間違いない。しかし、層厚が厚すぎなのが気になり、16との関係を見ても疑問が残る。このトレンチ付近は還元が強く、3~6層までが青灰系の色を呈し、特に3-2層上下は3-2層のコンポリュートラミナのせいかな層境が見えにくかった。8

00-3 トレンチ北壁

アスファルト



00-2 トレンチ東壁



トレンチ・断面位置図 (S=1/800)

図141 確認調査トレンチ断面

表65 2000年度確認調査トレンチ断面(図141)土色・土質

00-2トレンチ	00-3トレンチ
1、褐灰10YR 6/1 中粒砂、第2層、02-1層。	1、黄灰2.5Y 6/1 中粒砂、第2層、02-0層？
2、灰白5Y 7/1 中粒砂および粗砂、洪水層、第3層。 02-1～2層間洪水砂。	2、灰黄2.5Y 7/2 中粒砂混じりシルト、第3層、02-1層。
3、灰7.5Y 6/1 細砂混じりシルト、締め悪し、深002埋土。	3、黄灰2.5Y 6/1 細砂混じりシルト、第3層、02-2層。
4、褐灰10YR 5/1 細砂混じりシルト、締め悪し、深002埋土。	4、灰白10Y 7/1 中粒砂混じりシルト。
5、黄灰2.5Y 6/1 微砂混じり粘質シルト、洪水層、微砂は下部に多し、第4層、02-2-1層。	5、黄灰2.5Y 6/1 細砂混じりシルト、第3層、02-1層。
6、黄灰2.5Y 粘質シルト、02-2-2層。	6、灰白10Y 7/2 中粒砂混じりシルト。
7、褐灰10YR 5/1 粘質シルト、若干中粒砂混じる、土質8と差はなし、第5層、02-3層か。	7、灰白10Y 8/1 中粒砂混じりシルト。
8、青灰5B 6/1シルト～粘土、中粒砂若干混じる、黄灰2.5Y 5/1がもやもやと混じる(02-4層をフレア状に巻き上げているものか)、地盤による層の乱れか、第5層、02-3-2層。	8、黄灰2.5Y 7/2 中粒砂混じりシルト、第3層、02-1層。
9、青灰5B 5/1 粗砂混じり粘土、遺物は含まない、第6層、02-4～6層？	9、オリーブ灰5GY 6/1 中粒砂、第2層、02-1面暗渠埋土か？ 10、9に同じ。
10、灰黄褐10YR 5/2 中粒砂混じり粗砂、流路、第7層、02-7層上部。	11、灰オリーブ7.5Y 5/2 中粒砂混じり粘質シルトに、青灰10BG 5/1粘土の小プロック多し、遺構埋土。
11、灰白10Y 7/1 中粒砂、深002埋土。	12、オリーブ黒5Y 3/2 細砂混じりシルトに、青灰10BG 5/1粘土の小プロック多し、遺構埋土。
12、5と同じ、下部に微砂のラミナ。02-2-1層。	13、オリーブ灰2.5GY 5/1 中粒砂混じりシルト、第3層に、青灰10BG 5/1粘土の小プロック多し、第4層、02-3層
13、黄灰2.5Y 5/1 中粒砂混じり粘質シルト、7と似るが中粒砂は多い、02-3層系島盛土か。	14、オリーブ灰2.5GY 5/1 細砂混じりシルト、第4層、02-3層 堀田耕土系。
14、灰黄褐10YR 6/2 微砂混じり粘質シルト。	15、オリーブ灰2.5GY 5/1 細砂混じり粘質シルト、第4層、02-3層系島盛土か。
15、暗灰黄2.5Y 5/2 粘質シルト、02-2層系島盛土？	16、緑灰7.5GY 5/1 粘質シルト、02-4層。
16、灰白5Y 7/2 粘質シルトと灰5Y 6/1 粘質シルトが混じる、第5層、02-3-1層？プロック土？	17、オリーブ灰5GY 5/1 中粒砂混じり粘質シルト、遺構埋土。
17、灰白10YR 7/1 粗砂混じり中粒砂、締め悪し。	18、緑灰10G 5/1 微砂混じり粘質シルト、微砂の薄層あり。
18、黄灰2.5Y 6/1 中粒砂混じり粘質シルト。	19、青灰10BG 5/1 細砂混じり粘質シルト、オリーブ灰10Y 6/2の もやもやあり。(ラミナ?)
19、黄灰2.5Y 5/1 中粒砂混じりシルト、下部に遺物多し、02-2-1層。	20、暗青灰5BG 4/1 極細砂混じり粘質シルト。
20、灰白2.5Y 7/1 粘質シルト、02-2層系堀田耕土？	21、灰N 6/0 極細砂混じり粘土。
21、灰黄2.5Y 7/2 粗砂、02-7層上部。	22、暗緑灰7.5GY 4/1 極細砂混じり粘質シルト、炭化物若干あり。
22、におい黄2.5Y 6/3 微砂、02-7層上部。	23、暗緑灰5G 4/1 細砂混じり粘土。
23、灰白2.5Y 8/1 粗砂、これ以下7層下部。	24、灰5Y 4/1 微砂混じり粘質シルト。
24、灰白2.5Y 8/1 粗砂。	25、灰オリーブ5Y 4/2 粘質シルト、青灰10BG 5/1のプロック 含む。
25、灰白2.5Y 8/1 粗砂、中層多く含む。	26、黄灰2.5Y 4/1 微砂混じり粘質シルト、微砂のプロック混じる。
26、灰白2.5Y 8/2 粗砂。	27、灰7.5Y 5/1 極細砂混じり粘質シルト。
	28、オリーブ灰5GY 6/1 微砂混じり粘質シルト、細砂も多く混じ る。
	29、灰白5Y 7/1 細砂、02-7層上部。
	30、灰白2.5Y 7/1 中粒砂、02-7層下部。
	31、暗オリーブ灰5GY 3/1 微砂混じり粘質シルト。
	32、灰白7.5Y 7/1～青灰5BG 6/1 中粒砂混じり粘質シルト。 02-5-6層。
	33、緑灰10GY 6/1 極細砂混じり粘質シルト、02-5-6層。
	34、明黄褐10YR 6/6シルト混じり粗砂、噴砂か。
	35、灰7.5Y 5/1 細砂混じりシルト、02-3層系島盛土。
	36、オリーブ灰2.5GY 5/1 細砂混じりシルト、杭直か。
	37、灰黄2.5Y 6/2 粗砂、02-7層上部。
	38、浅黄2.5Y 7/4 微砂、中粒砂のプロック混じる、02-7層上部。
	39、灰白5Y 8/1 中粒砂、02-7層上部。
	40、灰白5Y 7/2 中粒砂～粗砂、02-7層上部。
	41、緑灰10G 6/1 極細砂混じりシルト、02-6層？
	42、灰黄2.5Y 6/2 中粒砂混じり粘質シルト。
	43、灰黄2.5Y 6/2 細砂混じりシルト。
	44、黄灰2.5Y 5/1 中粒砂混じり粘質シルト、炭化物含む。
	45、黄灰2.5Y 6/1 細砂混じりシルト。
	46、灰5Y 5/1 中粒砂混じりシルト。
	47、黄灰2.5Y 6/1 中粒砂混じり粘質シルト。

は3-2層の上に3-1層が残存していた可能性もある。下は凹凸があるので、3-2層下面であろう。3-1層時点で島島の基部になり、3-2層時点では堀田であったと思われる。ならば13は島島盛土か。16は3面の堀田耕土。

9は第6層とされる。5・6層か。この部分は4・3面時点で堀田となり、3-2層段階までその耕土下面となっていたようで、4層は残存していない可能性が強い。また、5層は暗色が弱い部分でもあるので、その場合6層との判別は難しい。

10以下を第7層としている。10・21・22は7層上部、それ以下は7層下部である。また、一部深掘りをして、T. P. +10.470mのレベルで暗灰～黒N 3 / 0 ~ 2 / 0 粘土を確認している。

00-3 トレンチ 第2層上面を第1面として検出したとするが、断面図の上の一点破線ラインか。東西方向の溝が検出されているので、1面に当たると思われる。

断面図の2・8は第3層とされ、2-2層に当たる。3も第3層とされるが2-2層か。13も小ブロックがあるのが若干疑問だが、2-2層系であろう。このトレンチ北壁は3・4面の島島から堀田への肩を斜めに切っているので、35が3層の島島耕土、14・15が3層の堀田耕土と思われる。14・15を第4層としている。

16は4層。第5層としているのはこれか。32・33・41は5・6層と思われる。5層の暗色の程度が薄かったのと、トレンチの段にかかっていたために5・6層の層境が認識できなかった可能性もあるが、微高地にかかる部分でもあるので、5層は残存していなかった可能性もある。

29・30・37~40は7層上部。30は7層下部。一部深掘りをして、T. P. +10.0mで00-2 トレンチと同じ暗灰色粘土層を確認している。

(3) 遺構面と遺構

00-2 トレンチ 第1面で東西方向の溝を2本検出した以外は明確な遺構は確認できなかった。第1面の遺構は1面の近～現代東西方向溝群の一部である。

他に平面検出は2面行っている。第2面は第4層上面で2面に当たる。2-2面まで下げると、2層耕土時点の古い段階での島島と堀田の境が検出されたはずであるが、この面積では遺構としての認識は難しいであろう。

第3面は第5層上面、3面に当たる。島島と堀田がわずかに段差を持って検出されるはずであるが、認識されなかったようだ。断面図の15・20も第5層と認識してしまったものか。

第3層では土師器・須恵器が出土している。第4層は土師器・須恵器・黒色土器が出土し、調査者は平安時代かと推測しているが、2-1層なので江戸時代の層である。第5層は土師器・須恵器・弥生土器が出土。3層包含遺物としてもおかしくない。第6層でも少数ながら土師器・須恵器・弥生土器が出土しているが、これは4面で遺構検出の後、追い討ちで若干削平した時出土した遺物と同じ状況で、3-2層が下面を巻き上げた凹凸の中に遺物が沈み込んだ状態であると理解できる。また、第7層砂層から磨滅した弥生土器が出土したと報告されていたが、確認したところ、磨滅の激しい小片で、おそらくは7層上部包含の縄文晩期のものであろう。

00-3 トレンチ 第2層上面を第1面として東西方向の溝を検出している。1面である。

第3層上面を第2面として2本の溝と少数のピットを検出している(図142)。2面である。この面の溝は大体正方位を向くものが多いが、ここでの溝はそうでなく、性格は不明である。

018溝は南東から北西に走る溝である。検出長約5.6m、幅0.6m、深さ約0.1mを測る。断面形は皿状

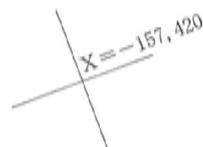
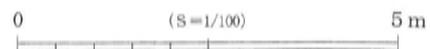
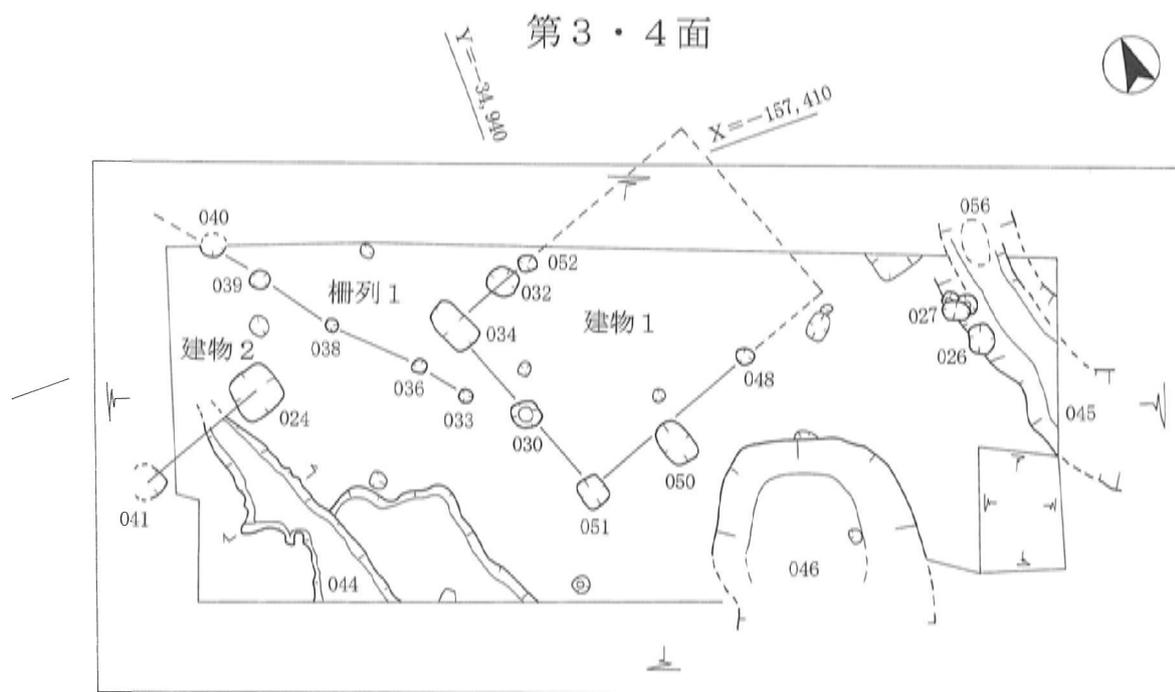
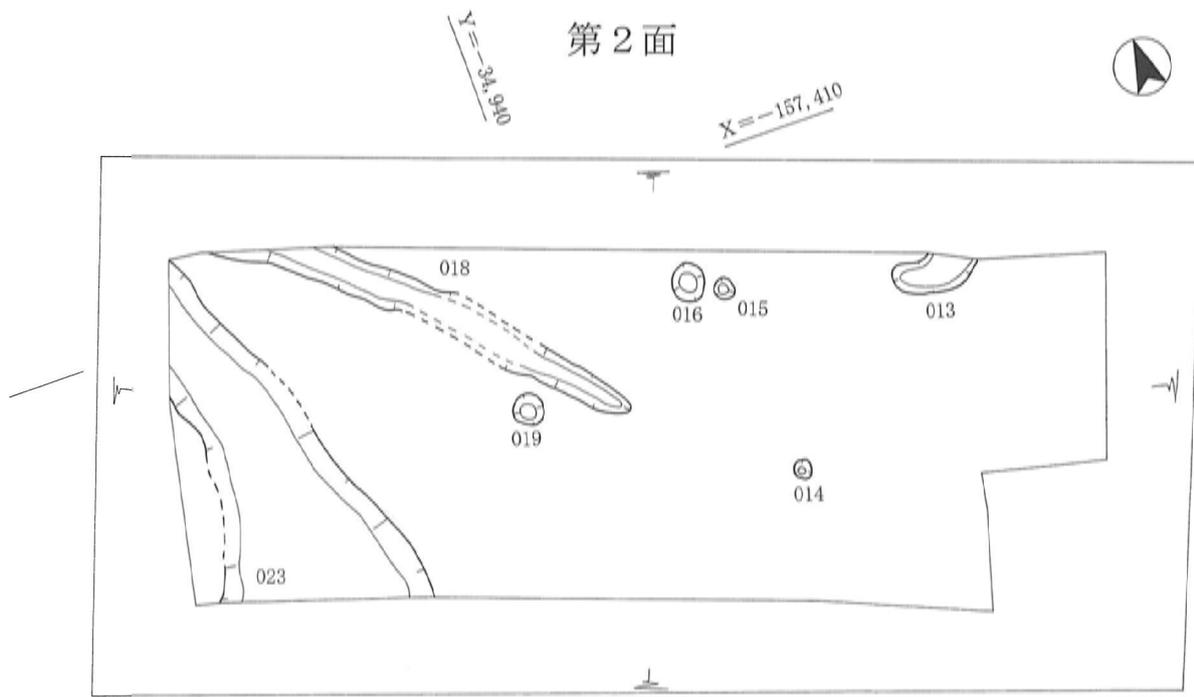
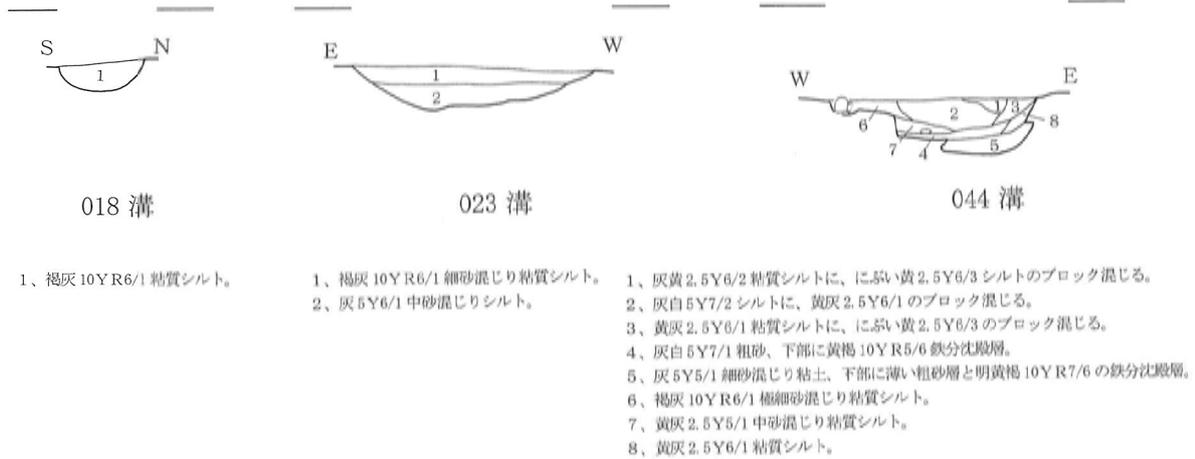


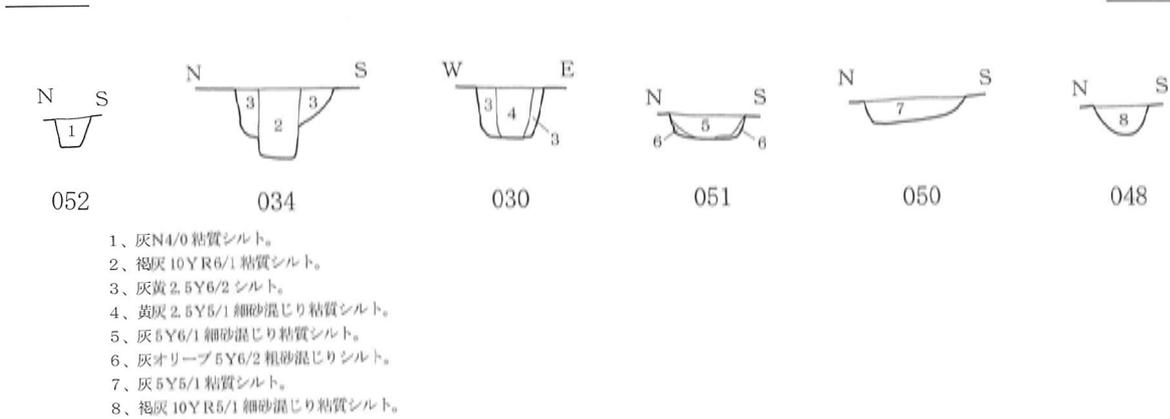
図142 確認調査00-3 トレンチ平面

T.P. +14.0m



建物 1

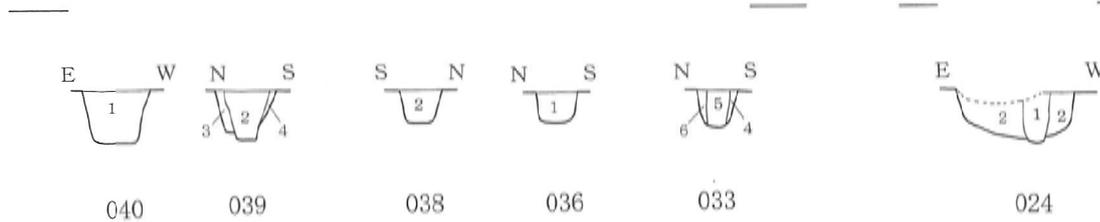
T.P. +14.0m



柵列 1

建物 2

T.P. +14.0m



- 1、灰黄褐 10YR5/2 細砂混じり粘質シルト、にぶい黄 2.5Y6/3 シルトのブロック混じる。
- 2、黄灰 2.5Y6/1 粘質シルト。
- 3、灰黄 2.5Y6/2 細砂混じり粘質シルト。
- 4、にぶい黄 2.5Y6/3 粘質シルト。
- 5、暗黄灰 2.5Y5/2 細砂混じり粘質シルト。
- 6、灰黄 2.5Y6/2 シルト。

- 1、褐灰 10YR6/1 粘質シルト。
- 2、灰黄 2.5Y6/2 シルト。

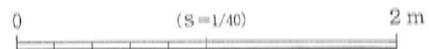


図143 確認調査遺構断面

で、埋土は単層（図143）。土師器が出土している。

023溝は南から北方向に走るが、やや西に曲がる傾向が見える。検出長4.7m、幅1.2～2.4m、深さ約0.15mを測る。断面形は皿状で埋土は2層（図143）に分かれる。弥生土器・土師器・須恵器・瓦が出土した。

第4層上面を第3面として、第5層上面を第4面として検出しているが、ここで若干の問題があった。

第4層と認識されているのは第5面で検出された045溝の上を覆う、断面図（図141）の14・15のみである。これは3層堀田耕土で、3面で面を追っていくなら、そこから北に一段上がって島島の上で直接4面が出る部分を経て、島島耕土として残存する断面図の35の上面を検出するはずであるが、遺構面になんら段差が検出されていない。そして、検出された遺構は第3面では北に片寄り、第4面では南に片寄り。また、島島耕土が平面的にどの程度広がり、その上下どちらの面を検出したのかも不明である。

つまり、第3面では3層堀田耕土の上面と、島島側の4面を同時に検出した状態である可能性が高く、第4面では堀田耕土の下面で4面を検出し、島島側は削平してしまった可能性が高い。

第3面では、完結する掘立柱建物はなく、2～3個の柱穴が並ぶのみのものを含め、建物の可能性があるものを4組想定していたが、第3・4面の図面を合わせると、1棟の掘立柱建物と一つの柵列が復元できた。よって、第3・4面として検出された遺構を4面の遺構としてまとめる（図142）。

044溝は調査区の西隅で検出された溝である。埋土から数回の掘り直しが想定できる（図143）。最後は人為的なブロック土で埋められる。出土遺物は弥生時代後期を中心とする。飛鳥時代溝群の一部と考えて良いだろう。

045溝はトレンチ東隅で検出された。最大幅1.2m、深さ0.32mを測る。トレンチ北壁にかかる部分で、底部に木杭を伴う056土坑が検出された。やや通りはずれるが、02-3-3トレンチの4-256溝の続きの可能性はある。底部から手焙形土器が出土し、他の土器も含め、調査時は弥生時代後期から古墳時代前期と考えているが、飛鳥時代の溝であろう。

046土坑は径2.5～2.8mの不整形円で、深さは0.31mと記録するが、写真を見るともう少し深いようである。底部が7層内に達しているので井戸の可能性が考えられる。遺物は弥生時代後期の土器と、底部から骨片が出土している。井戸とすれば弥生時代後期のものとして問題ないが、完形率の高い土器が出土していないのと、壁があまり立たない形状が気になる。土坑埋没後に埋壘が行われていると記録されるが（図146-2）、重複する別遺構か。壘は古墳時代前期のものである。

建物1は東隅柱を欠くが、おそらく2×3間の掘立柱建物であろう。梁行は2.82m、梁行は推定4mほどか。北西側の梁行では032ピットと052ピットが近接するが、柱間を考えると052ピットが妥当であろう。02-3-2トレンチの4-建物1と方向が合い、4-建物1の北西桁行のラインが、この建物の南東桁行のラインとほぼ一致する。

建物2は、柱穴が二つ並ぶだけであるが、平面形が隅丸方形で両者の方向性が合うので一応建物の可能性があるものとした。柱芯距離は1.86m。方向性は建物1と同じ。

柵列1は小さな柱穴が5個並ぶ。正確な直線ではない。おおよその方向性はN40°W。北西方向へは伸びる可能性があるが南東側は033柱穴が端だろう。建物や溝とは重複しないが、方向性は合わず、建物1とは接近しすぎているので併存は考えにくい。040柱穴から完形率7割ほどの土師器小型壺（図144-9）が出土している。

これより下は遺構面は検出されなかったようである。微高地でも高い部分であり、5層はないよう

あるし、6面もかなり上部が流失していたであろう。7層から少数の土器片が出土している。激しく磨滅したもので、調査当時は弥生土器と考えていたようであるが、縄文時代晩期のものであろう。

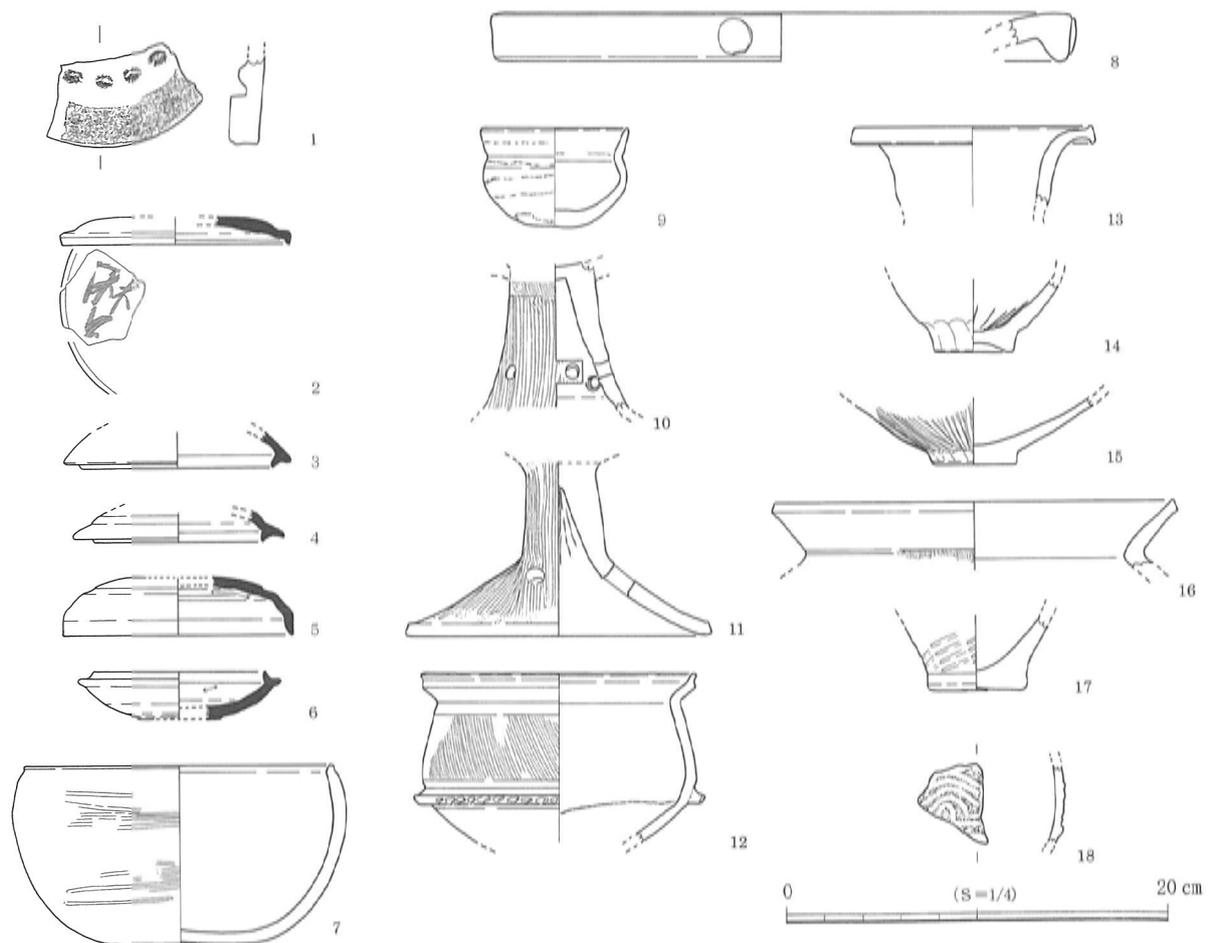
(4) 遺物 (図144~146)

遺物はコンテナ数にして9コンテナ出土している。そのうち00-2トレンチから出土したものは1コンテナに満たない。内容は近世の陶磁器類と瓦、少数の奈良時代須恵器、飛鳥時代の土師器・須恵器、古墳時代前期の土師器、弥生土器、少数の縄文土器である。2002年度調査の分とあまり変わらないが、ただ、全体での古墳時代前期の土師器の割合が若干高い。これは古墳時代前期の土師器がわずかに見られた02-3-3トレンチより、その南に隣接する00-3トレンチの方が古墳時代前期のものが多いという事であり、さらに南にその時期の遺構・遺物の分布の中心がある可能性が高い。

実測可能遺物は90点ほどあったが、その中から特徴のある遺物や時期を示すのに良い遺物56点を選んで掲載した。なお、00-3トレンチの第5層以下の遺物は仮の層名をつけて取り上げたままになっており、基本層序との対応が取れないため第5層以下と一括した。

図144-1は軒丸瓦片である。燻し瓦。胎土は灰白2.5Y 7/1を呈し、長石・石英あり。

2は須恵器坏蓋片。天井部に墨書。「麻呂」と読める。調整は回転ナデ。胎土は灰白10Y R 7/1を呈し、混和砂粒はない。微細粒には石英・長石あり。復元径に不安があり、時期を限定しがたいが、奈良時代のものとは言え、平城宮I~II期の可能性が高い。



第3層：〔1・6・7・16〕第4層：〔3~5〕第5層以下：〔8・10~14・16・17〕砂層（第7層か）：〔18〕001溝：〔2〕040柱穴：〔9〕

図144 確認調査出土遺物

3は須恵器坏蓋片か。身の可能性もある。調整は回転ナデ。胎土は灰N 6 / 0を呈し、長石・石英わずかにあり。飛鳥時代前半。

4は須恵器坏蓋片。調整はほとんど回転ナデだが、残存部外面上端に回転ヘラケズリ。胎土は灰N 6 / 0を呈し、長石わずかにあり。飛鳥時代前半。

5も須恵器坏蓋片。外面は体部回転ナデ、天井部は周縁部回転ヘラケズリ後ナデか、中心は無調整。内面は、回転ナデ後天井部一定方向ナデ。胎土は灰N 4 / 0を呈し、混和砂粒なし。微細粒に石英・長石あり。古墳時代後期末～飛鳥時代前半。

6は須恵器蓋坏身片。外面は、体部回転ナデ、底部回転ヘラ切り後粘土塊附着。内面は、回転ナデ後底部一定方向ナデ。胎土は灰N 6 / 0を呈し、長石・石英・黒色粒あり。飛鳥時代前半。

7は土師器鉢。外面はやや磨滅するが、体部ヨコナデ後ヨコミガキ、底部ケズリ後ナデ。内面は磨滅し、口縁部にヨコナデ残るのみ。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 2を呈し、石英多し、長石あり。口縁が内弯し、身が深いので鉢だが、その中ではかなり小さい。この法量のものでは把手鉢が類例としてある。欠けた部分に把手があった可能性もある。飛鳥時代前半。

8は弥生土器器台か壺の口縁片。器台の方が可能性高いか。磨滅により調整不明。復元径と傾きには不安がある。垂下口縁に付く円形附文も1個しか残存していない。胎土はにぶい黄2.5Y 6 / 3を呈し、石英・長石あり、角閃石若干あり。時期は弥生時代後期頃としか言えない。

9は土師器小型壺。調整は接合痕残しながらヨコナデ。胎土はにぶい橙7.5Y R 7 / 4を呈し、石英・長石わずかにあり。底部が平底であり、口縁がやや短く、作りも粗雑である。古墳時代の小型丸底壺の系譜をひくものか、飛鳥時代の小型壺のやや粗製のものか判断できない。

10は弥生土器高坏片。外面はタテハケ後タテミガキ。身部内面はナデ。脚部内面は透かし孔以下ヨコナデ。透かし孔は四方透かしだが間隔は均等ではない。胎土はにぶい橙7.5Y R 6 / 4を呈し、石英・長石あり。

11も弥生土器高坏片。外面は、タテミガキ、脚裾端部にヨコナデ残る。内面は透かし孔付近以下ヨコナデ。三方透かし。胎土は橙5Y R 6 / 6を呈し、長石・石英若干あり。弥生時代後期頃。

12は、残存した部分から見て、手焙形土器の可能性高い。外面は、口縁部ヨコナデ、胴部上半タテハケ、刻み目突帯ヨコナデ、胴部下半ナデ。内面はナデ、下方に煤附着。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 4を呈し、石英・長石あり、白雲母わずかにあり。河内VI様式頃か。

13は破片が小さくやや歪んでいるようで、口径はもっと大きく、角度ももう少し立って、下端部はやや膨らむ感じがする。頸部の途中がやや膨らみ、肩がなだらかなタイプの壺の口縁片。内外面ともヨコナデ。胎土は灰黄褐10Y R 4 / 2を呈し、角閃石多し、長石・石英ありの生駒西麓産胎土。このタイプで生駒西麓産のものは河内IV様式でも後半であろう。

14は弥生土器壺か鉢の底部片。壺だとするとかなり小型である。底部内面にユビオサエがないので鉢の可能性高いか。外面は、体部ナデ、底部側面ユビオサエ、底部ユビナデ。内面は底部に工具のアタリを残し、ナメナデか。胎土はにぶい橙7.5Y R 7 / 4を呈し、長石・石英あり。小型の鉢だとすると弥生時代後期か。

15は弥生土器壺底部片。外面は、胴部タテミガキ、底部側面ユビオサエ、底部ナデ。内面はやや磨滅するがナデか。胎土はにぶい黄褐10Y R 5 / 4を呈し、角閃石多し、石英・長石ありの生駒西麓産胎土。

16は弥生土器甕片。外面は、口縁部ヨコナデ、肩部タテハケ。内面は磨滅で調整不明。口縁端部は摘

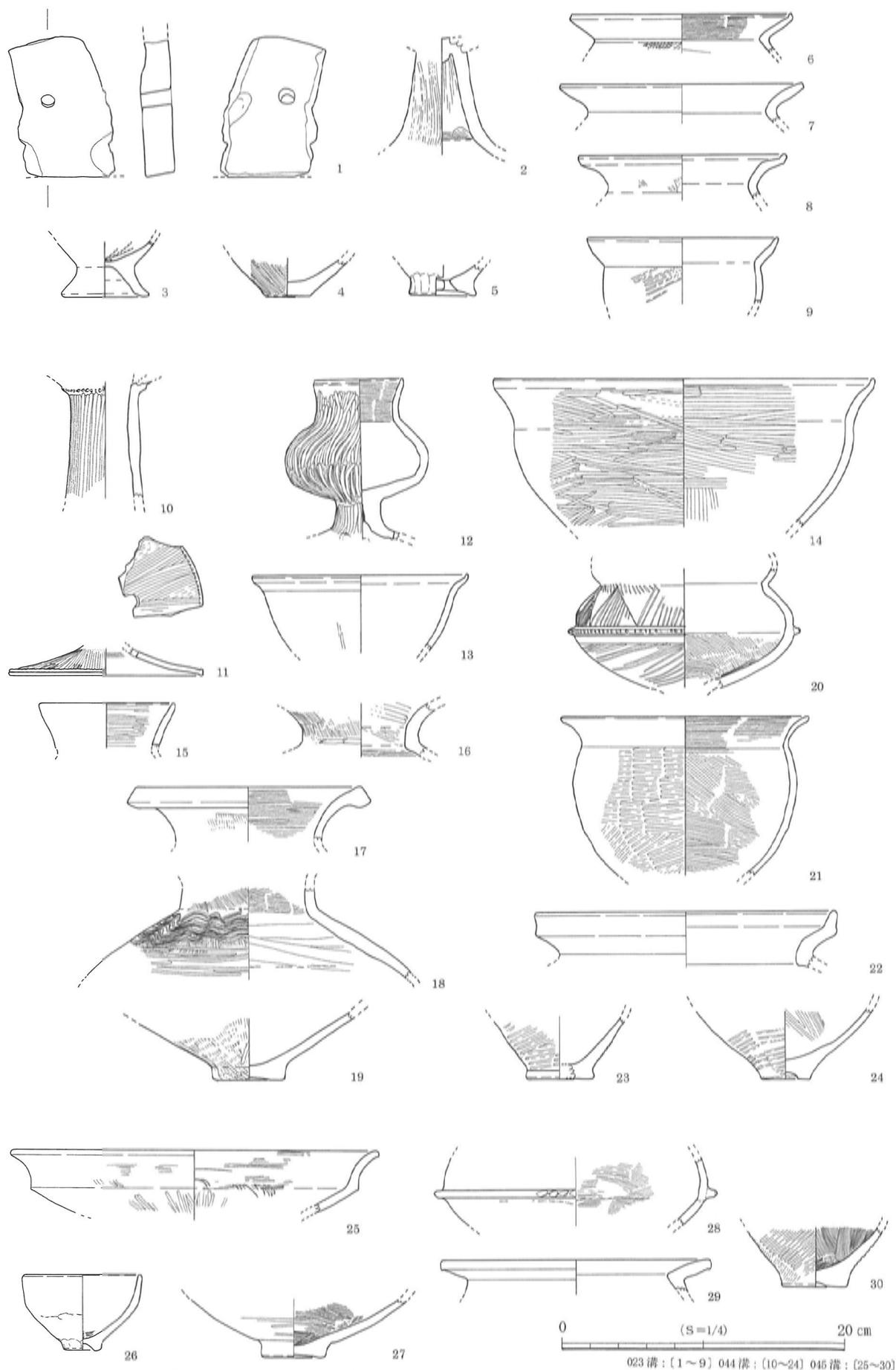


図145 確認調査023溝・044溝・045溝出土遺物

023溝：〔1～9〕 044溝：〔10～24〕 045溝：〔25～30〕

み上げではなく、面を持つタイプである。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 2を呈し、石英・長石・角閃石あり。弥生時代後期。

17は弥生土器甕底部か。かなり小型である。外面は、胴部タタキ、底部側面ヨコナデ、底部ナデ。内面はやや磨滅するがナデか。胎土はにぶい黄褐10Y R 5 / 3を呈し、角閃石多し、石英・長石ありの生駒西麓産胎土。弥生時代後期か。

18は縄文土器片。文様から、波状口縁の頂部付近の破片ではないかと思われる。磨滅で調整不明。胎土は明褐灰～灰褐7.5Y R 7 / 2～5 / 2を呈し、長石・石英多くあり。内湾する波状口縁に沈線による文様が入るとすれば、北白川上層式か。その3期頃か。

図145-1は燻し平瓦片。釘留め用の孔が残る。やや磨滅し調整不明。胎土は灰5Y 6 / 1を呈し、長石・石英多し。

2は弥生土器か。高坏片。外面は、脚裾部ヨコナデ後全体にタテミガキ。内面は、脚柱部絞り痕残り、脚裾部ヨコハケ後ヨコナデ。透かし孔はない。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 3を呈し、石英・長石あり。

3は弥生土器台付き甕片か。脚部が高台風につまみ出すものではなく、その付く底部の器壁が薄いことから鉢とは考えにくい。外面は磨滅し調整不明。身部内面は左上がりナメナデ、脚部内面はヨコユビナデ。胎土はにぶい橙7.5Y R 6 / 4を呈し、長石・石英あり。河内VI様式に少数ながら存在する。

4は弥生土器甕底部片か。底部側面が屈曲せず、タテハケがそのまま下端に達し、底部がかなり小さいので、壺よりはハケ甕の底部であろう。外面は、胴部タテハケ、底部ナデ。内面はナデか。胎土は灰黄褐10Y R 6 / 2を呈し、石英・長石あり。

5は甕底部片。外面は、底部側面ユビオサエ以外調整不明。内面も磨滅で調整不明。底部の穿孔は1個。胎土はにぶい褐7.5Y R 5 / 4を呈し、角閃石多し、石英・長石ありの生駒西麓産胎土。

6は庄内式甕片。外面は、口縁部ヨコナデ、肩部タタキ。内面は、口縁部ヨコハケ、肩部ヨコケズリ。胎土は黒褐2.5Y 3 / 1を呈し、角閃石多し、石英ありの生駒西麓産胎土。頸部直下にタタキを消すヨコナデがないものは庄内式期後半に多い。

7は甕片。調整はヨコナデ。胎土はにぶい褐7.5Y R 5 / 4を呈し、石英・長石あり。弥生時代後期～庄内式期か。

8は弥生土器甕片。調整はヨコナデ、外面に残るハケはナデの後、胴部タテハケか。胎土はにぶい黄橙10Y R 6 / 4を呈し、石英・長石多し、黒雲母あり。受け口状の口縁形は河内V-3様式に多い。

9は弥生土器小型の甕か鉢の破片。外面は、口縁部ヨコナデ、胴部タタキ。内面は、口縁部ヨコナデ、胴部は磨滅のため不明。胎土はにぶい褐7.5Y R 5 / 3を呈し、石英・長石若干あり。弥生時代後期後半か。

10は弥生土器高坏片。外面は、脚部タテミガキ、身部ヨコナデ、その境に刺突文1列。内面は、上端円板充填の剥離痕、脚柱部はナデ。胎土は橙5Y R 6 / 6を呈し、角閃石・石英・長石あり。柱状の高坏脚は弥生時代後期前後か。

11は高坏脚裾部片。外面は、タテハケ後タテミガキ、端面は沈線1条入り、上端に刻み目。内面は上部ヨコハケ、下部ヨコナデ。胎土は橙5Y R 6 / 6を呈し、長石・石英あり。明確に屈曲して柱状の脚柱部を持つ高坏と思われるが、そのタイプは河内V様式後半～VI様式前半に多い。裾端部が上方に拡張しないのは新しい要素か。

12は弥生土器有脚壺。外面、口縁部はヨコナデで軽く沈線が入る、その他はタテハケ後タテミガキ。

身部内面は、口縁部ヨコハケ、胴部ナデ。脚部内面は上部絞り痕残り、下部はヨコナデ。三方透かし。胎土はにぶい橙7.5Y R 6 / 4を呈し、石英・長石あり。広く近畿地方に分布する有脚細頸壺が短頸化したものと考えられ、弥生時代後期～庄内式期頃にありえるが、その中では古いものか。

13は鉢片。外面は口縁部ヨコナデ、体部は磨滅するが、タテミガキがわずかに残る。内面は、口縁部ヨコナデ、体部は磨滅するがナデか。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 3を呈し、石英・長石あり。口縁部が外に屈曲する小型の鉢は河内V-2様式～VI-1様式にありえる。

14は鉢。口縁にヨコナデが残る他は密にミガキ、内面胴部下半にタテミガキがある他はヨコミガキ。胎土は褐灰10Y R 4 / 1を呈し、石英・長石あり。口縁部が内弯する鉢は河内VI様式に一般化し、庄内式期前半まで残るが、ミガキが密である事から河内VI-1様式頃か。

15は土師器直口壺片。外面は磨滅し調整不明。内面はヨコミガキ。胎土は橙7.5Y R 7 / 6を呈し、長石・石英・赤色粒若干あり。内面にミガキがあるのは珍しいが、庄内式土器の直口壺と思われる。

16は壺片。外面は、頸部タテハケ、肩部との境に棒状工具による断続的な凹線。肩部は磨滅するがミガキか。内面は、頸部上半ミガキ、下半ナナメハケ、肩部ヨコハケ。胎土は橙5Y R 6 / 6を呈し、石英・長石あり。河内VI様式～庄内式期か。

17は弥生土器壺片。外面は、口縁部ヨコナデ、頸部タテハケ。内面はヨコハケ。胎土は灰黄褐10Y R 6 / 2を呈し、長石・石英あり。無文化した広口短頸壺の系統と思われ、河内V-1～2様式か。

18は土師器壺片か。外面は、タテハケ後胴部にまばらにヨコミガキ、肩部に波状文。内面は、頸部ヨコハケ、胴部ヨコナデ。胎土は灰褐7.5Y R 4 / 2を呈し、石英あり、長石若干あり。庄内式期の加飾の広口壺と思われる。

19は弥生土器壺底部片か。外面はタテミガキ。内面はナデ。胎土はにぶい黄褐10Y R 4 / 3を呈し、長石・石英・黒雲母あり。

20は手焙形土器。外面は、胴部上半ヨコナデ後鋸歯文、刻み目突帯とその上下ヨコナデ、胴部下半ナナメミガキ。内面は、覆い部との境にヨコケズリ、胴部上半ヨコナデ、下半ナナメハケ。胎土は灰褐7.5Y R 4 / 2を呈し、石英・長石若干あり。河内VI様式から庄内式期のものだが、鉢の口縁部状の部分がないまま覆い部につながる形や、鋸歯文は新しい要素だが、刻み目突帯や小さい底部は古い要素と言え、庄内式期前半頃か。

21は弥生土器甕片。外面は、口縁部ヨコナデ、胴部タタキ、全体に煤附着。内面は、口縁部ヨコハケ、胴部ナナメハケ。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 4を呈し、石英・長石あり。河内V-2様式から庄内式期までありえる小型で口縁が最大径になるものである。分割成形。

22は弥生土器甕片。外面はヨコナデ。内面はヨコハケ後ヨコナデ。胎土はにぶい黄橙10Y R 6 / 4を呈し、石英・長石若干あり。弥生時代後期、特に河内V-3様式に多い。

23は弥生土器甕底部片。外面は、胴部タタキ、底部側面ヨコナデ、底部ナデ。内面はナデか。弥生時代後期～庄内式期。

24も弥生土器甕底部片。外面は、タタキ、底部はナデ。内面はタテハケ。胎土は橙2.5Y R 6 / 8を呈し、長石・石英若干あり。弥生時代後期～庄内式期。

25は弥生土器高坏身部片。外面は、上半ヨコハケ後タテミガキ、下半タテミガキ。内面は、上半ヨコハケ、下半タテミガキ。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 2を呈し、石英・長石あり。身部上半の外反が強まっており、河内VI様式か。

26は弥生土器小型鉢。その中でもかなり小型である。外面は、体部ヨコナデ、底部側面ユビオサエ、底部ユビナデ。内面は底部からナナメハケ後ナデ。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 3を呈し、石英・長石わずかにあり。ここまで小さく身部形態が深めのもはかえって庄内式期に多いが、底部の形態は古色であり、庄内式期始め頃か。

27は弥生土器壺底部片。外面は、胴部磨滅するがヨコミガキ残る、底部側面から底部ナデ。内面はナメハケ。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 3を呈し、石英・長石わずかにあり。

28は手焙形土器胴部片。外面はヨコナデ、胴部最大径部分に刻み目突帯。内面はヨコハケ。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 3を呈し、石英わずかにあり。

29は弥生土器甕片。調整はヨコナデ。外面煤附着。胎土は褐7.5Y R 4 / 3を呈し、角閃石多し、長石・石英ありの生駒西麓産胎土。

30は弥生土器甕か鉢の底部片。外面はタタキ、底部はナデ。内面はタテハケ。胎土は灰黄褐10Y R 5 / 2を呈し、黒雲母・石英・長石あり。弥生時代後期後半～庄内式期。

図146-1は弥生土器器台口縁片。上面はタテミガキ。垂下口縁はヨコナデ、下面はミガキか。垂下口縁外面には、櫛描横線文後、三重竹管文を並べ、それを斜めの沈線でつなぎ連続蕨手文状にしている。胎土は灰黄2.5Y 6 / 2を呈し、石英・長石を含む。弥生時代後期頃か。

2は弥生土器甕。外面は、口縁部二段にタテハケ後軽くヨコナデ、胴部は所謂「長いタタキ」でタタキ板でハケ状になでる庄内式の調整であるが、タタキ板は荒い弥生甕のものである。内面は、口縁部ヨコハケ、胴部ナメハケ、肩部ヨコナデ。胎土は橙5Y R 7 / 6を呈し、長石・石英若干あり。立つ口縁や球胴化傾向の胴部など、庄内式併行のV様式系甕と思われる。河内VI様式にもありえる。

3は弥生土器高坏身部片。磨滅するが、調整はヨコナデ後ミガキか。残存悪く口径不明。胎土は橙7.5Y R 7 / 6を呈し、石英・長石・赤色粒あり。河内VI様式頃か。

4は弥生土器高坏脚裾部片。外面は上方タテハケ後タテミガキ、下方ヨコナデ。内面ヨコハケ後まばらにヨコミガキ。四方透かし。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 3を呈し、石英・長石・角閃石あり。

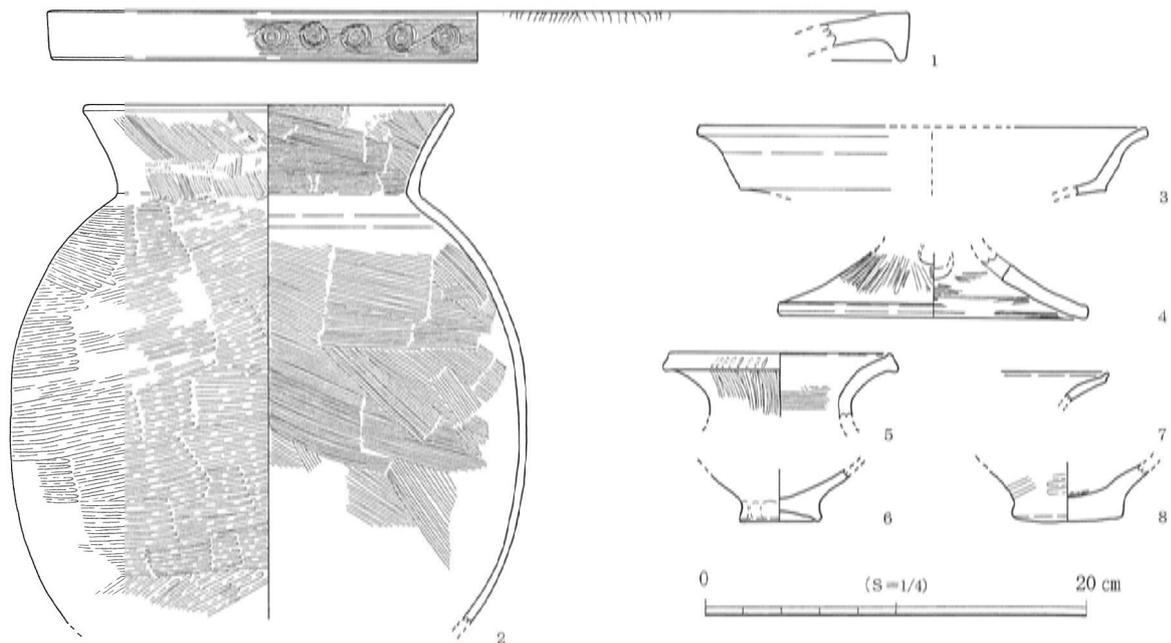


図146 確認調査046土坑出土遺物

5は弥生土器細頸壺か。外面は頸部タテミガキ、口縁端面は磨滅するが縦位の櫛描列点文らしきものあり。内面は、上方ヨコナデ、下方ヨコミガキ。胎土は橙5YR6/8を呈し、石英あり、長石わずかにあり。河内Ⅳ-4様式頃か。

6は弥生土器鉢底部片。磨滅し、底部側面のユビオサエと底部のユビナデを残すのみ。胎土は浅黄橙10YR8/3を呈し、石英・長石・白雲母あり。弥生時代後期か。

7は庄内式甕口縁部の小片。調整はヨコナデ。胎土はにぶい黄橙10YR6/2を呈し、石英・長石あり。生駒西麓産ではない。

8は弥生土器甕底部片。外面は、胴部タタキ、底部側面ヨコナデ、底部ナデ。内面は、左上がりナメナデ。胎土はにぶい黄褐10YR5/3を呈し、角閃石・石英多し、長石ありの生駒西麓産胎土。

(5) 小結

若干の混乱はあったが、後の調査から検証すれば、おおよその事実関係を把握する事は出来たと言える。また、調査時の時期の推定も、基本的には後の調査で是正でき、矛盾は生じなかった。

結果、建物が1棟検出でき、古墳時代前期の遺物が割合良く見られるなどの成果があったと言えよう。

00-3トレンチの第2面が2面である事は023溝から燻し平瓦片が出土している事からも裏付けられる。ただ、023溝は正方位を向いていておかしくはないが、018溝の方向性は解釈しにくいものがある。

00-3トレンチの第3面・第4面として検出した遺構は4面のもので、第5層上面が4面である。その面の遺構では、建物1は02-3-2トレンチの4-建物1との位置関係から飛鳥時代のものと見て良い。柵列1もその可能性が強いが、溝群とも建物群とも方向性が一致しない事にやや疑問を残す。040柱穴から出土した土師器小型壺から、弥生時代後期に属する遺構ではないとは言えるであろう。

044溝は飛鳥時代溝群に属すると思えるが、不整形で方向性が不明確な事と、4-方形周溝墓1と位置的に近い事から、方形周溝墓の溝の可能性もある。もしそうであるならば、方形周溝墓群が存在し、しかもそれが弥生時代後期から庄内式期前半まで存続していた事になる。

045溝は4-286溝の続きと考えられるが、かなり蛇行している事になる。また、02-3-3トレンチで、底部のレベルが一段下がった後、このトレンチでもさらに低く、4-288溝との交点から南東側は、南東方向に底部が傾斜していると言える。02-3-3トレンチ東側で交った溝群の最終的な排水方向の有力な候補と言える。出土遺物は基本的に弥生土器だが終末期のものが多いのが特徴的である。しかし溝自体は飛鳥時代のものと見て間違いなからう。

046土坑は庄内式甕の破片が出土し、その時期のものであろう。弥生時代後期の遺構群に継続する。井戸の可能性が高いが、弥生時代後期の井戸と形態が違うのも時期差を示すのか。埋没後の埋甕も庄内式期のもので、土器には時期差は認められず、埋め戻し後の祭祀に関わるものであった可能性がある。

また、7層の砂層の下面を確認したのも成果である。東側での2001年度調査でも確認されており、いずれもT.P.+10~10.5mの中に収まり、さほど高低差のない古土壤がある程度の範囲広がっている事が確認できたと言える。今のところ遺物等は得られていないが、縄文時代後期の面である可能性がある。

遺物では、00-2トレンチ第1面の東西溝の一つである001溝から出土した墨書土器は(図144-2)、人名を記した可能性が高く、当遺跡の墨書土器の中に属人器が存在する事を示すものとして貴重である。

以上のような成果が見られたが、範囲が狭いが故に層序の把握が難しく、時期の推測にも限界がある事も認識された。また、00-2トレンチのように、遺構のほとんどない部分に当たる事もあるのが確認調査の危険性と言える。

第Ⅳ章 まとめ

1、船橋遺跡の地形環境の復元（図147）

調査地点周辺は、縄文時代晩期までに堆積した層厚2mを超える砂層が広がっており、それが縄文晩期以降の基本的な地勢を決定している事が今回の調査で判明した。

船橋遺跡は広い面積の遺跡ではあるが、遺跡内の地形環境に関する資料は少なく、その考察も進んでいるとは言いがたい。詳しく分析するには紙数が限られるが、ここで簡単な見通しをつけておく事は必要であろう。

（1）砂層（7層）の構造

7層は、堆積単位としては幾つもの砂層の集合であり、その中でも上部と下部に大別できる。下部は横同士が斜めに切り合う構造であり、砂粒の供給方向は南から、全て西側の層が東側の層を切る。自然堤防流路側側面の堆積状況のようで、流路が西に移動しながら形成していったものと考えられる。砂粒は粗砂～小礫を主体として粗く、今のところ遺物は全く見られない。

上部は、多いところでは4層ほどの重なりが確認できるが、基本的に重層的に堆積していき、下部と比較するとかなり水平の堆積である。ラミナも水平に近いものが多い。砂粒も下部より細かく、粗砂～細砂が主体で、一部にはシルトもある。層厚は西側が厚いものが多く、結果的に調査区内では西側に微高地が形成される。砂粒も西側が粗く、東側は細かい。供給方向は南西からのようである。縄文時代晩期の遺物をわずかに含む。洪水時のシュートバーが重なって形成される自然堤防の堆積である。

（2）旧流路の推定

以上の7層の状況を見れば、流路が調査区内を西に移動していき、少なくとも縄文時代晩期の一時期には調査区の西隣にしばらく留まり、そこからの数回の洪水によって調査区内西側の微高地が形成されたと考えられる。では、その流路は遺跡内をどのように通り、どの程度の期間存続していたのであろうか。次にそれを考えていきたい。

現大和川の河川内で過去に調査が行われているが、その成果を見ると、ちょうど調査区の南側あたりに、古土壌と考えられる層がなく、砂層しか確認されていないトレンチが集中していることに気づく。

（図147-A白丸）調査者は現大和川が河床をえぐったものであろうと推測しているが、幅140mほどの砂層が南東から北西に現大和川を横切っていると見て良い。大和川北岸では調査区にかかりつつその西側を通る形になり、南岸を見ればそれに続く河川的作用によって形成された地形の痕跡であろう耕地区画を見出せる。（B）幅からしても中小河川の氾濫原としておかしくない規模であろう。

それらにより推定される流路は、国府台地の東裾を北上してきてから（C）西に蛇行し、台地北端の北側を西に直進してから、北へ大きく蛇行し、現大和川の中で緩く西へ蛇行して、調査区の西側を北西へ抜けるものと考えられる。現大和川河川内の調査では、もう1ヶ所、西側で砂層しか確認されないトレンチがかたまる部分があり、（D白丸）それは、現大和川南岸の北側に大きく蛇行する部分から分岐した流路が北西に抜けていくと考えると理解しやすい。また、さらに西の大井の集落は、東から北に反る三日月形を呈しており、（E）そのような形の微高地に乗っていた可能性が高く、その微高地を形成した流路がさらに分岐していた可能性が高い。（F）始めの流路は現大和川北岸の耕地区画に痕跡を残

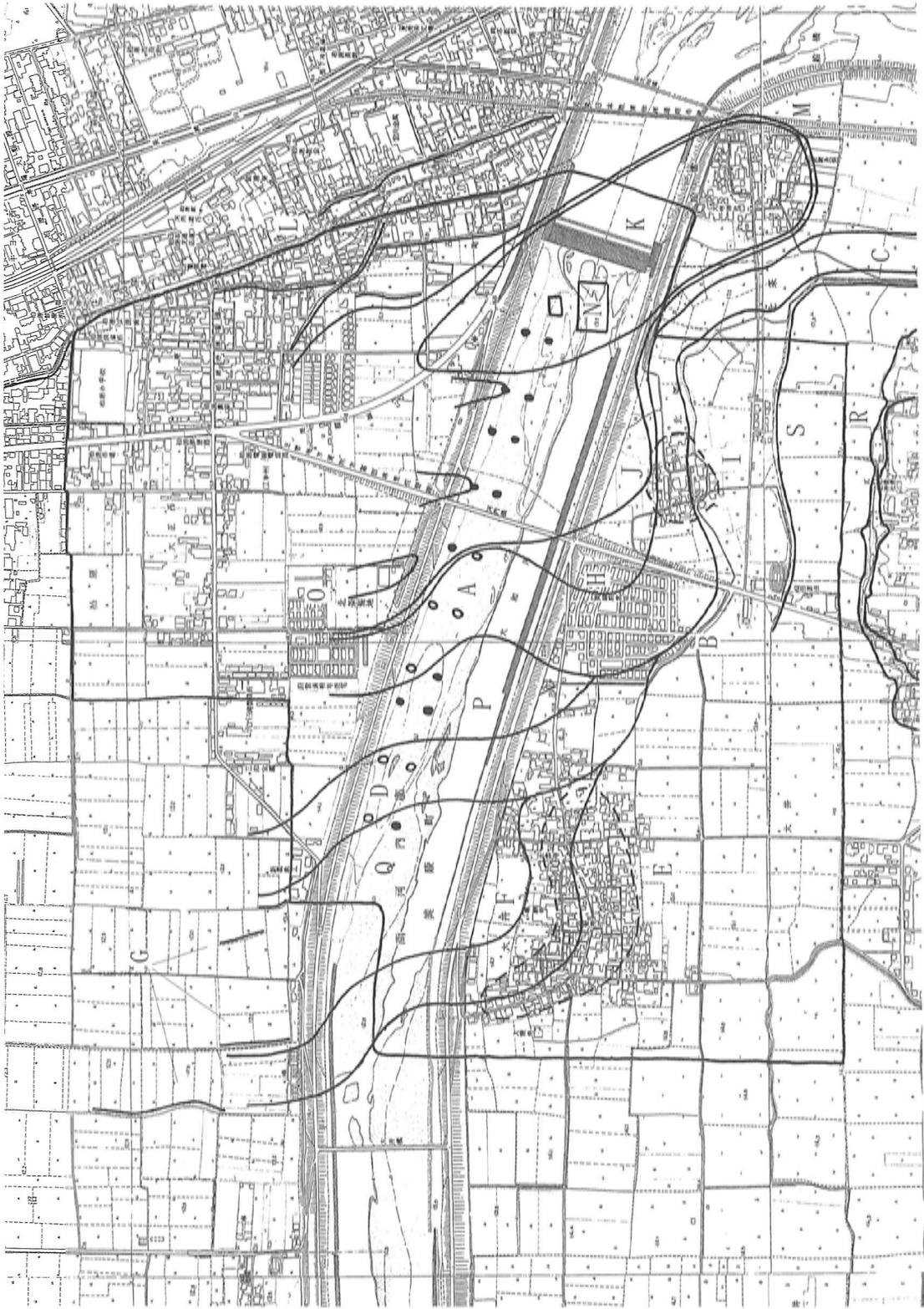


図147 船橋遺跡の地形環境復元案 (S=1/10000)

さないが、後者二つの流路は北岸に条里地割が乱れた部分を残すため、(G) 西へ分岐するものが時期的に新しいと推測される。

東側から国府台地の北端を回り込み、その北西側で流路変遷を重ね網の目状の埋没地形を残した流路が存在した事は、以上の事から确实と考えられるが、国府台地の東裾には、そのような流路の源流と考えられるような規模の大きい開析谷がない事から、この流路は石川が大和川と合流するより少し上流側で石川本流から分流していたものと考えられる。

流路が変遷を重ねつつ何時まで存続していたかは、2000年度の船橋遺跡00-1の調査で、現大和側南岸で検出された平安時代後半の流路が参考になろう。(H) この流路は小規模なものであるが、自然堤防上に用水路が走る事から見て、常時流水のある流路と考えられ、完全な埋没は12世紀頃である。

その調査地の南東側で北条の小規模な集落が流路推定位置上に立地している。(I) この集落が微高地に乗っているのなら、その微高地は流路を塞ぎ止めるように形成されたものと考えられ、それにより、流路が廃絶したと推測できる。

(3) 微高地の推定

上述の流路が、国府台地の東側から直接には北上せず、西へ蛇行してしばらく直進するのは、微高地にさえぎられたためと推測される。先述の北条の集落の北側でも、弥生時代後期の住居が確認されている事から微高地の存在が推測され、(J) 各時代の遺構の分布は、かなり大きな微高地が遺跡内の南東部付近にあった事を示唆しているようである。

その核となるのは、大和川と石川の合流点西側に出来ていたはずの自然堤防であろう。(K) 長瀬川の左岸付近には、川筋が固定化され、天井川化していった際の自然堤防より西側に、それ以前の氾濫原の西端を示していると思われる地割が残り、(L) そこには完新世段丘崖が形成されていた可能性が高い。

そのラインを南東側に延長すると、現大和川南岸の船橋の集落の東側に至る。(M) 自然堤防の先端がそこにあった可能性があり、おそらく、船橋廃寺の推定位置とされる付近(N) までがその自然堤防の範囲であり、微高地の核として、最も古くに形成され、一番安定していた部分と思われる。

微高地がそこから西に拡大していくのは、大和川・石川本流の作用ではなく、先述の石川分流の作用であろう。今回の調査で7層下部が、流路が西側へ移動していくような構造であるのがそれを示す。先述の自然堤防の西側に次々とシュートバーが重なり拡大していき、その北西側は微高地が手の指状に枝分かれしてその間に後背湿地をはさむような地形だったのではないだろうか。縄文時代晩期には調査区の微高地と後背湿地をそのセットの西端として(O) いったん微高地の拡大が終息したものと思われる。

当センターの船橋遺跡00-1の調査は、その微高地と国府台地にはさまれた流路が沖積平野に出る地点にあたり、極小規模の扇状地的環境ができたのではないかと推測される。流路の変遷が激しく、そのために土地利用も水田や墓域など色々と変化したのであろう。微高地の南西端付近での弥生時代～平安時代の環境と言える。

遺跡内の西側には流路が分岐した間の部分に各々微高地が存在したようであるが、(P・Q) その実態は遺構・遺物の確認が少なく、不明である。微高地Pに関しては、弥生時代後期と古墳時代前期の遺構がわずかに確認されている。また、大井や北条の集落が乗る微高地は形成時期の新しいものであろう。

遺跡の南側では、国府台地の段丘崖下で古墳時代前期の住居が検出されている例があり、(R) そこから石川分流の氾濫原まで、若干平坦地があり、その間に完新世段丘崖が存在した可能性がある。(S)

この段丘崖と長瀬川の段丘崖はその形成時期が問題ではあるが、縄文時代晩期に続く時期であった可能性があるのではないだろうか。流路がある程度安定し、微高地への堆積物の供給が減少する事がそれを示唆しているように思える。

船橋遺跡の中では、縄文時代晩期頃に以後基本となる微地形が形成され、最大の微高地が南東部にあり、その上に各時代の遺構が集中する。船橋廃寺はその微高地でも最も安定した部分に占拠しているであろう。弥生後期から古墳時代前期の遺構がその微高地上で広範囲に広がるのはシュートバーが重なった微高地上の微地形の中で、各々の適地を選んで小さな単位が分散していると考えられる。

また、微高地の拡大の原因ともなる石川からの分流が、西側では時期により大きく流路を変えながらも、遺跡内を南東から北西に横断し、平安時代後半頃まで存続していたらしい事も判明した。その事は周辺に遺存する条里制地割の施行・拡大の過程とから興味深い問題である。

2、縄文時代晩期

7層上部の砂層が縄文時代晩期のうちに堆積し、調査区西側に微高地が形成され、いったん地形環境が安定するようになって、土壌形成が進み、遺構が見られるようになる。7層上部に包含される土器の最新のものには縄文時代晩期終末の長原式であり、6面で検出された遺構にからむ土器も長原式である。微高地の成立から土壌の形成までが長原式期の中で進行しているわけで、その土器形式期の時間的長さを示唆する。

しかしまた、6面の土器1・2が弥生土器の影響を受けていると考えられるのも重要である。遺跡周辺では、弥生時代前期中段階の遺物が若干見られ、前期新段階で集落の進出が本格化するようであるから、その時期には微高地と後背湿地が交錯する船橋遺跡は水田開発の対象地となったであろう。長原式土器を使用する集団が、水田稲作に参画していないのであるなら、遺跡内を占有し活動していたのはその時期より前で、かつ、弥生文化と交流のある時期とすれば、弥生時代前期古段階から中段階の間に併行する時期と言える。

遺物量が少ないので、確定的に考えるのに危険はあるが、あえて言えば、7層出土の土器が生駒西麓産以外の胎土もあるのに対し、6面出土の土器が全て生駒西麓産胎土であるのは、縄文土器を使用する集団の拠点的な地域が、しだいに縮小していった事を示しているようにも思える。

7層出土のサヌカイト製石器は、ほぼ縄文時代晩期に限定できる石器群として貴重と言える。比較的中小型で、自然割れも生じているような礫を原材として使用している事と、製作途上で失敗するとある程度の大きさがあっても廃棄しているのが特徴として挙げられる。二上山周辺地域の自家消費的な製作環境と言えるかもしれない。

今回の成果は、縄文時代晩期と言っても、大阪平野に弥生文化が到達し、しだいに拡散していく時期に、ようやく水田稲作に適した環境が成立・安定してきた遺跡内に、つかの間残された縄文時代最後の痕跡と評価できるのかもしれない。

3、弥生時代後期～古墳時代初頭

(1) 居住域と墓域の構造

井戸と方形周溝墓の存在と、飛鳥時代溝に大量に含まれていた弥生土器から、居住域と墓域が存在していたと推測できたが、遺構・遺物の分布は、上部の包含層を除けば、調査区西側の狭い範囲に限られ

る。また、西側でも02-2トレンチ西半北側の3-450溝では、含まれる弥生土器の量がかなり少ない。それが居住範囲のほぼ北限を示しているとし、南限は方形周溝墓1までとすると、居住域は井戸の分布する周辺の径わずか30mほどの範囲に限られてしまう事になる。推測される微高地の範囲からは矛盾はないが、単独で集落を成すものとは思われず、かつ遺跡内で同時期の遺構が各所で確認されている状況を考え合わせると、そのような単位が微高地上の適所に散在しているような景観を想定できる。

方形周溝墓は小型のものが1基検出されたのみであるが、そのような単位に隣接する墓域であると考ええると、さほど大きいものではないと思える。現大和川で対岸にある船橋遺跡00-1の調査でも方形周溝墓群が検出されているが、庄内式期～布留式期と時期も微妙にずれ、そこからこの調査区にいたる広大な墓域があったとは考えにくい。ただ、方形周溝墓周辺でのみ若干の庄内式土器が見られる事を考えると、居住域自体は河内V-2様式期から河内VI様式期まで終わり、墓域のみがその後庄内式期まで存続していたと考える事もできそうである。

(2) 井戸

5基の井戸からは良好な一括資料が得られただけでなく、井戸廃絶時の作業を復元的に考える事もできた。それぞれ土器の器種構成や廃棄の仕方に微妙な差があり、個別的であるのも特徴の一つであるが、共通する特徴を考えると、

井戸最下層までブロック土で、機能時の堆積が残されている例が少ない。

土器の投棄・埋納がある。

土器の破片は井戸内に全てが入るわけではない。

埋め戻し途中で複数回土器片の投棄がある。

土器の器種構成は長頸壺が中心的である。

などが挙げられる。井戸廃絶時の祭祀例として重要な成果であろう。

5基の井戸は狭い範囲に分布しているが、特に3-387・413・510の3基はほとんど隣接したように集まっている。このように近い位置では同時期併存の可能性は少ないだろう。遺物からは井戸は河内V-2様式からVI-1様式までの間に収まるが、その中で時期を限定できるのは3-496が河内V-2様式、3-510が河内V-3様式、3-412が河内VI-1様式と見られる。

中央で集中する3基の井戸は土器編年の1形式に1基ずつ存在していた可能性が高く、各時期に1～2基の井戸が存在していたと考えても良いのではないだろうか。

だとすると、ここに居住していた集団は、そのような数の井戸を共同で使用する規模であると考えられ、家族のような最小規模の集団を想定しても良いように思える。

(3) 土器の構成

井戸祭祀の関係と、墓域の存在も影響しているのであろうが、全体的な器種構成でも、一般的な集落の例に比べ、壺の比率が高いと思える。甕とほぼ同数を数え、どちらも全体の25%ほどを占める。

甕は口縁が受け口状に屈曲するものや端部に面を持つものが目立ち、胴部タテハケのものも一定数あるようだが、破片数的には少なく、タタキ甕が圧倒的である。

壺は長頸壺が圧倒的に多く、口縁片が目立つ広口壺との割合は5対2ほどである。

供膳器は高坏が主体で小型の鉢がそれを補完するが、数は少なく、1割に満たない。他に器台や甌・蓋などが少数あるのが全体の状況である。甌は底部穿孔が複数あるものが目立つが主流ではない。

胎土で目立つのは生駒西麓産のものである。全体でも3割ほどになるが、甕・壺で比率が高く、4割

近くなる。ハケ甕では7割を超える。しかし高坏・鉢では1割前後しかなく、煮沸器と貯蔵器において好まれているようである。しかし壺に関しては、井戸で完形に近く個体把握できるものに生駒西麓産は少ない。実用的な場で好まれているのであろうか。

その他、中河内低地産と思われる胎土と、南河内産の可能性のあるものもあるが、その2種の胎土は全ての破片で正確に分別できるものではないので各々の比率は不明である。ただ、生駒西麓産胎土が3割程度存在する事を思えば、3種の胎土が各3割ほどで均衡を保って構成されていた可能性もあるかと思われる。

船橋遺跡は3種の胎土が由来する3地域の境界上に位置しているとも言え、どれをもって在地の胎土とするかは決定できないように思う。ただ、生駒西麓産の土器が、日常使う供膳器と、祭祀的に使用される壺において比率が低いのは、限定された目的で実用性の高い製品として導入されているとも考えられ、そう見れば客体的と言えるかもしれない。

また、確実な遠隔地域からの搬入土器が存在しないのも一つの特徴と言える。

(4) 遺跡内での位置付け

今回の調査区での弥生時代後期の状況は、住居址などの直接的な遺構は検出されなかったものの、家族単位のような小さな集団が、独自の墓域を隣接して持って一つの居住域を構成していると考えられ、それを微高地全体に敷衍できるとすれば、散村のような集落の景観が復元できる。

しかし、その立地は微高地縁辺部の枝状部分であるので、その地形に制約された特殊な状況であったかも知れず、遺跡内微高地の中心的な部分には規模の大きな集住域が存在した可能性もあるだろう。

搬入土器の不在も集落の中心からはずれている事が反映しているのかも知れない。

ただ、そのような単位の存在が判明した事と、井戸廃絶時の祭祀の状況がつかめる資料が得られた事は、大きな成果だと言える。

4、飛鳥時代

飛鳥時代の遺構は全て飛鳥Ⅱ期のものであると見て良い。土器編年におけるそれ以上の時期的細分が不可能である事は、遺構の切り合いと出土土器の比較から先述した通りである。

その中で、切り合いから大別すれば先行する溝群と、後出する、土坑などを伴った建物群に分けられ、溝群からは大規模な平地地造成の可能性が、土坑を伴った建物群と遺物からは工芸生産に関わる工房域を兼ねた集落が成立した可能性が高い事が明らかになってきた。

また、この時期に正方位を向く遺構がない事も一つの特徴である。

(1) 溝群

溝群は方位性が若干異なり、直接的なつながりが検出されていない事から、東西の2群に分けられる事が判明した。西群は建物群との切り合いからそれらより先行する事が確実であるが、東群は建物との切り合いが確認されたものはなく、方位が西群より建物に近い事、平行する3-154・572溝が道路遺構の可能性のある事などから、建物群と併存していた可能性もある。

さらに西群は4-285・286溝が南東方向に底が傾斜し、3-450溝が北東方向に傾斜している事、そして、3-446溝が、中央が高く、両端が下がっている事から、3-447溝のように貫通する溝がありながら、3-建物6がある付近を境として、北西側と南東側では最終的な排水方向が異なるものと考えられ、その点でさらに細別できるかもしれない。

少なくとも西群は溝掘削時点で多くの弥生時代遺構を削平している事は、溝内から大量に出土した弥生土器から確実に、弥生時代遺構に井戸が遺存しているのに住居址などが無い原因は、溝掘削前後、埋没以前に、溝群のある範囲でかなりの面的な削平がなされた事によると考えられる。

その事は溝の掘削がそういった平坦地造成地業に伴うものであった事を傍証するとともに、その開発がかなり大規模なものであった事を示す。

溝群は直交するものに切り合いがない事や底面のレベルに一貫性がない事などから、用水路ではない事がほぼ確実であるが、その掘削と前後して大規模な平坦地造成が行われているらしい事は、溝群がそれに関わる目的のために掘られたものである事を示すと考えられる。

その考えられうる用途は二つある。第一は、造成前の凹凸のある自然地形で湿地状になっている部分から排水し、乾燥させる事である。

第二は、それらの溝に水を溜め、造成面の水平をとるための基準とする事である。水平をとるために水を使用するのは最も普遍的な方法であり、縦横に交叉した溝群の形態は、面的な水平をとるには適した形であろう。

問題は、何故、それほど念入りな平坦地造成が必要であったかである。その後に成立するのが工房域で、ガラス小玉製作の炉や、小鍛冶の炉が作られるといっても、それらにそれほど厳密に水平な立地が必要だとも思えない。

おそらくは、後に続く建物群が短期間で廃絶する事が当初から計画されており、その後の生産性の高い耕地の造成などを見越した整備であったのではないだろうか。その点で、調査区南東側で、わずかではあるが、溝群と方向性の近い、飛鳥時代に遡る可能性のある耕地の痕跡が検出されたのは貴重であると言える（32P、に先述）。

また、今回、この溝群から多く出土した弥生土器の中で、完形に近いものや、その場で割れたような状態で出土したものがあつた事は注目できる。「風土記」等にも古代に古墳時代や弥生時代の遺物が出土した記録があるように、当時の人々が地中から出土する考古学的遺物を特別なものとして扱ったのは当然であろう。ここでも造成の途中で出土した見慣れぬ器を、残りの良い幾つかは丁寧に掘り出し、最後に埋め戻す溝の中に入れ、再び地中に戻したのであろう。当時の人々の精神活動の一端を示すものと言える。

（2）建物群と附随する遺構（図148）

工芸的な生産の工房域と考えられるものである。掘立柱建物と、それに附随するようにある、炉下部構造の可能性のある土坑とが主要な遺構である。

建物群は、3-建物1が、現代建物基礎による空白もあるが、他の建物からやや離れている。東隣に位置する（高堤2-2）の調査でも2棟の建物が検出されており、それらと方向性が合う事から、東側に別の一群があり、それに属すると見た方が良いでしょう。それに対する西群は、3-建物6・11・12を中核とすると見て良いでしょう。その南東端は4-柵列1が候補となる。

しかし、西群の中でもさらに細分が可能である。4-建物1・柵列1・確認調査建物1はそれらでは方向性を合らしながら中核とはやや方向性が異なり、若干の空閑地もある。また、北西部分では特異な構造の3-建物9を門と考えれば、それより北西側の3-建物3・8・10は別群であるとも言える。3-建物9の北西側ラインからほとんど離れていない3-建物8・10は方向も合うので中核の群に附随すると見ても良いが、やや離れる3-建物3は方向性も異なり、別群に属していた可能性が高い。

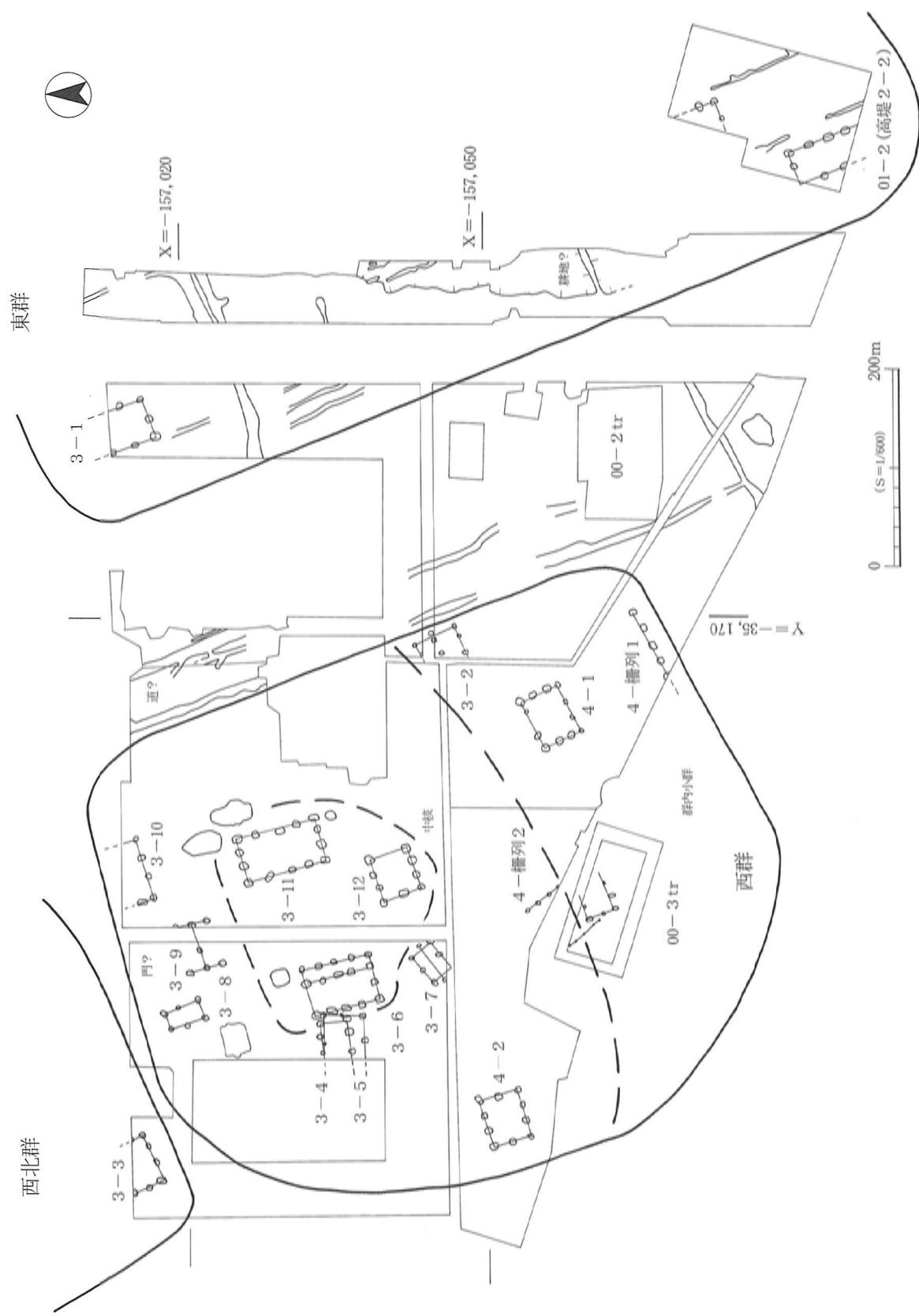


図148 飛鳥時代建物・溝東群・土坑等略図

3-建物7は方向性が大きく異なるが、小型の建物でもあり、位置関係から中核に附随すると見て良いだろう。4-建物2は少し離れるが中核と方向性は合い、それに附随する可能性が高い。

まとめると、調査区周辺では3-建物1が属する東群、3-建物3により想定できる北西群、3-建物6・11・12を中核とする西群の3群が想定でき、西群の中では中核となる群と、その周辺に附随する群としての3-建物7・8・9・10・4-建物2、中核と同じ区画内でも南東側で別の小群を構成しそうな4-建物1・柵列1・確認調査建物1がある、という事になる。

しかし、3-建物6に柱穴を切られる3-建物5と、それに重複する建物4は位置付けが困難である。建物4も接近し過ぎ、建物6との併存は考えられず、建物5と、方向と妻の位置をほぼ合わせている事から、建物6より後出のものとは思えない。すると溝群埋没から建物群成立までの間に、この2棟の建物がかわるがわる建てられた事になる。

正方位に近い方向性も特異で、地鎮など、なんらかの祭祀に関わる短期的な建物であったのであろうか、と推測されるのみである。

他に溝と平行する4-柵列2のように、溝群と同時期の可能性のある遺構も存在する事も忘れてはならないだろう。

炉の下部構造の可能性のある土坑は、4-150炉・162土坑が、別の建物群に附随していると見れば、おおよそ建物群周辺にあると見る事ができる。3-483・687・707・708土坑は建物の角に近い位置を占める傾向があるようだ。溝状・円形・長方形の一つの短辺が突出する五角形の3種が確認でき、埋土に炭化物を含み、埋土途中に整地面があるなどの共通点がある。ただ、具体的な上部構造を考察する資料を欠く。また、埋土に水成層があるなど疑問のあるものもあり、建物の数に比べて総数が少な過ぎるという疑問もある。

工房域として行っていた事は、遺物からガラス小玉の生産、小鍛冶、漆を使用した加工等が考えられる。ただ、それらの遺物は先行する溝群からも出土しており、特に北西側の3-450溝などに見られる。建物西群の成立以前に北西隣接地に既に工房域が成立していたと思われ、それが3-建物3によって示唆される建物北西群になるかもしれない。

また、鉄滓類は東側からの出土が多く、ガラス小玉鋳型片は3-376住居や3-687土坑からの出土のみならず、包含層でも西側からの出土が多いので、東群が小鍛冶、西群がガラス小玉生産、と群によって分業がなされていた可能性も考えられる。

だとすると、01-2調査区の建物検出面はやや高いので、本調査区東半の後背湿地を挟んだ二つの微高地上に職種の違いの工房域があり、3-154・572溝間が道であるなら、さらにその間に道が配されている事になり、その点でも極めて計画的に作られた工房域であると言える。

しかし、その中で使用されている土器は、供膳器だけでなく調理器も多くあり、むしろ一般的な集落より比率が多いぐらいである。家族のような小集団毎に炊事を行っていた結果であろう。

また、糸巻きの部品や櫛も出土している事から考えると、工房的な性格だけではなく、極めて日常的な、居住域としての生活もここで行われていた可能性が高い。

つまり、工房域でもあり、居住域でもあるという形態が考えられ、炉の下部構造の可能性のある3-708土坑から完形に近い甌の他、羽釜などが出土した事はそれを象徴しているとも言える。建物の数に比して、炉の数が少ないようなのはその事に起因するのかもしれない。

しかしまた、当該時期の井戸が確認されていないのは一つ疑問である。この時期に石川からの分流は

まだ調査区の西隣あたりを流れていた可能性があり、そこから水が得られるとしても、弥生時代にも井戸が掘られ、工房という性格上水も多量に必要だったと思われるのにである。

いずれにしても、この工房域は、北西側に想定される先行する工房域の存在から、平坦地の造成、工房域の成立、廃絶までの過程が全て飛鳥Ⅱ期の間に行われたようで、なおかつほとんどの建物が同時期併存と考えられる事から、その存続期間は長く見積もっても掘立柱建物の平均的耐用年数を越えるものではないだろう。20年間ほどか。それと計画的で大規模な造成の可能性を考え合わせると、その成立には、なんらかの権力機構の関与があったと思われ、工人集団は短期間ながら、家族のような日常生活を営む単位を基本として、ここに居住していたと見るのが妥当と思われる。

(3) 土器

土師器と須恵器の割合はおおよそ10対2ほどである。

土師器では坏が突出して多いのは当然であるが、鉢が甕に次いで多いのが目立つ。供膳器的な坏形鉢、貯蔵器的な鉄鉢形鉢、調理器的な把手付き鉢があるせいか。鉢を除いての調理器と供膳器の割合は1対2でかなり調理器が多い。

調理器では火にかける大型のものとして移動式竈と羽釜があり、ほぼ100%生駒西麓産なのはその胎土が耐熱性に優れている事を示すのであろう。それが炊事を中心となる。補完する甕は、口径17cm以下の小型のものがほとんどで、南河内産が多いと思われるが、精良な胎土のものは少ない。ハケ甕が非常に少数で、胴部をナデで仕上げるものが多く、すでに南河内型甕の特徴が出ていると言える。

他の土師器のほとんどが精良な胎土で南河内産と思われる。壺類は非常に少ない。

供膳器で坏を補完する高坏は、破片数ではどうしてもミニチュア高坏が少数になるが、法量計測可能な個体数では高坏の半数にせまるほどで、単なるミニチュアではなく、供膳形態の一端に含まれている実用品の可能性はある。他の高坏は、調整に若干の多様性はあるものの形態・法量において非常に安定し、1型式にまとめても良いほどである。

甕の羽口・棒状土製品・ガラス小玉鋳型などは、総数の上では微量である。

甕の羽口の出土したものは形態・法量とも共通しているようである。先端部の溶けて垂れた方向と二次的被火の痕跡から炉への装着状態の分かるものがある(図65-5)。それによれば炉壁の厚さは5cmほどで、そこに先端を下に斜め45°ほどの角度で装着されていたようだ。

ガラス小玉鋳型は全て破片であるが、縁辺部の残るものは全て円弧を描き、それによって推測される径はみな20cmほどになる。これも法量的に安定しているようである。

鋳型穴の配置も全て同心円状のもののみであり、それは中心部の残る破片で、中心から螺旋状に配されている事が判明した。鋳型穴の大きさは全て共通しており、法量的には同サイズのガラス小玉しか生産していなかったと考えられる。あと、縁辺部で長方形に鋳型穴のない部分があるのを2例確認できた。おそらくは鉄鉗でつかむための部分と思われる。大阪府難波宮址に類似の例がある。

芯持ち孔は鋳型を堅い台の上において細い鉄針のようなものを回転させて刺し開けたようである。ほとんどが貫通し、中には台に当たって曲がった状態で回転し、下に開くラッパ状の孔になったものもある。鋳型の途中で折れたまま回転したものもある。

二次的被火の痕跡は上面と下面で異なるものがあり、下面はやや還元的な雰囲気、上面は酸化の強いものがある。上面が開いた炉で、炭などの火床に直接置かれたものか。

ガラス小玉鋳型は日本列島域では4世紀から出現しているが、近畿地方の飛鳥～奈良時代に限って見

れば、奈良県上之宮遺跡例と平城宮址に方形のものがある以外は円形のものが多いようである。しかし、鋳型穴の配置は直線的なものばかりで、今回のような螺旋状の配置を取る例がないようである。工人集団の個性と見て良いのだろうか。

須恵器は、甕が多いが、残存度の高いものは皆無で、ただ破片のみあるような状況である。実際、個体がどの程度使用されていたか疑問なほどである。次に多いのは坏で、飛鳥分類の杯H類と杯G類の割合は3対1ほどで、飛鳥Ⅱ期的な状況である。杯H蓋が身よりかなり多いのは身としても使用できるためか。また、壺類は一定数あり、肩部が鋭角に屈曲するものがなく、隙が少数ながら普遍的にある事が飛鳥Ⅱ期の特徴を良く表している。

土器の総合的な法量の分析をする余裕がなく、また時を改めて示したいと考えているが、ここで土器器坏に関してはおおよその見通しをつけておきたい。

法量の計測が確実に出来るものは100点弱であった。それを口径を中心としてⅠ～Ⅶ類に分ける。また、各々が身の浅めと深めものに分かれる傾向があるようなので、前者をa類、後者をb類とする。

口径7.8cm器高2.9cm以下のものは手捏ね主体のもので多くミニチュアに分類される。

Ⅰ類は小型のため、法量の境界も微妙なところがあるが、口径8.4～8.9cm。器高はa類2.5～2.8cm、b類3.5～3.7cm。

Ⅱ類は最も個体数が多く、口径は9.2～10.7cm。器高は明確な境界がないが、2.9～3.0cmと3.2～3.4cmにピークがありおそらくそれがa・b類となろう。明確に分類しにくいのは規格性の高いその2類の他に、器高がばらつく規格性の低い一群が混在しているためのものである。規格性の高さの一例として、Ⅱb類の中で、3-376住居出土のものでぴったり3個体重ねる事ができる例があり（写真図版40-4）、セット関係で生産された可能性が高く、その一群は口径でも9.6cm以下、9.8～10.1cm、10.3cm以上に細分できる可能性がある。

Ⅲ類はわずか5例しかないが、他の類とやや間隔があき、ここに1型式設定しておくのが妥当と思われる設定した。口径11.2～11.5cm。しいてa・b類に分けるなら、器高3.3～3.5cmと3.9cm前後か。

Ⅳ類は口径11.9～12.9cm。器高a類3.5～3.6cm、b類は3.8～4.3cmだが、4.0cm以上のものが多い。

Ⅴ類も6例しかなく、Ⅲ類と状況が似るが、口径13.2～14.8cm。器高a類3.6～4.1cm、b類は5.7cmと突出する一例があるが、4.6～4.7cm前後か。

Ⅵ類は口径15.4～17.9cm。器高a類4.7～5.1cm、b類5.5～6.3cm。ただ、点数の割に法量分布域が広く、例数が多いければ細分できる可能性が高い。

1点のみ口径22.0cm、高さ5.5cmと大きいものがあり、一応これをⅦ類としておく。飛鳥分類で鉢Bとされる坏形鉢は最小のもので口径20cmほどだが、器高は7.0cm以上ある。それに対し、最大の坏は口径19cm台で器高5cm前後のもの、口径18cm台で器高7cm弱のもので、そこにははっきりした境界があるようだ。本例はその境界線上のもので、やや特異なものかもしれない。

全体を概観し、暗文と調整に関して見ると、見込みの螺旋状暗文は法量に関係なく、少数ながら全体にあるようだ。放射状二段暗文は数が少ないが、強いて言えばⅣ類以上のものに偏る。外面下半のケズリ調整はⅤ類から見られ、Ⅵ類以上の大型品で一般的である。

器形で見ると小さいものではb類が圧倒的に多いが、大型ではa類の比率が増すようで、a類対b類の割合はⅡ類ではおおよそ1対2なのに対し、Ⅵ類では1対1になる。

Ⅱ類が数量的にも多い事から供膳器の中心となるものであろう。その中でもⅡb類が坏の典型的な形

表66 遺物法量一覽 土師器坏・高坏・皿

器種	圖No.	登録No.	遺構名・土器No.	口径 cm	器高 cm	高坏身深 cm	残存率 %	暗文	メモ
坏?	40-1	222	3-376住居最上層	5.8	1.9		30	無し	ミニチュア
坏?	85-2	399	3-450溝 土器群3	7.6	2.9		60	無し	ミニチュア
坏?	85-3	586	3-450溝 土器群7土器78	7.8	2.5		90	無し	ミニチュア、手づくね
坏	40-2	452	3-376住居上層 土器9	8.4	2.8		40	無し	
坏	95-1	157	4-205溝 土器14	8.6	3.7		30	無し	
坏	85-4	788	3-450溝	8.7	2.7		90	一段	
坏	85-6	344	3-450溝	8.7	3.5		30	二段・格子	外面ミガキ下半ケズリ
坏	85-5	429	3-450溝 土器群5土器39	8.8	2.7		90	一段	
坏	67-1	802	3-412溝	8.9	2.8		30	一段	
坏?		802	3-412溝	9.0	2.0		20		漆附着皿?
坏	95-2	288	4-287溝	9.2	3.1		80	一段	
坏	40-3	875	3-376住居上層 土器81	9.2	3.2		90	一段	
坏		490	3-376住居上層 土器47	9.3	2.7		20		
坏		899	3-376住居上層 土器94	9.4	3.4		40		
坏	67-2	693	3-412溝 土器9	9.5	3.2		95	不明	粘土紐全て分かる。
坏		443	3-376住居上層	9.6	3.0		20		
坏		508	3-376住居上層 土器65	9.6	3.2		30		
坏		855	3-376住居上層	9.6	3.2		30		
坏		570	3-450溝 土器群5	9.7	2.9		60		
坏	53-17	797	3-708土坑	9.7	3.2		50	一段・螺旋	
坏		222	3-376住居最上層	9.8	2.6		20		
坏	14-1	71	3-139掘田	9.8	2.9		40	不明	
坏		487	3-376住居上層 土器44	9.8	3.0		40		
坏	89-1	602	3-515溝 土器群1	9.8	3.1		40	不明	
坏	85-8	419	3-450溝 土器群4土器32	9.8	3.1		100	一段	
坏		418	3-450溝 土器群3土器31	9.8	3.2		50		
坏	79-2	825	3-447溝 土器群2土器7	9.8	3.4		30	不明	
坏	100-17	80	4-126溝	9.8	3.5		30	一段	
坏	100-1	116	4-125溝 土器5	9.9	2.9		50	一段	
坏	40-4	222	3-376住居最上層	9.9	3.0		10	不明	
坏	100-2	119	4-125溝 土器8	9.9	3.1		90	一段	底部穿孔
坏		840	3-376住居	9.9	3.3		20		
坏		788	3-450溝	9.9	3.3		50		
坏	95-3	153	4-205溝 土器10	9.9	3.4		100	一段	
坏	85-7	423	3-450溝 土器群5	9.9	3.4		90	一段	
坏	100-16	127	4-126溝 土器3	10.0	3.0		100	一段	
坏		855	3-376住居上層	10.0	3.2		40		
坏	40-5	868	3-376住居上層 土器74	10.0	3.5		90	一段	
坏	14-2	71	3-139掘田	10.1	2.9		50	一段	
坏		840	3-376住居	10.1	3.0		30		
坏	67-3	802	3-412溝	10.1	3.3		80	一段	
坏		914	3-376住居上層 土器119	10.1	3.4		40		
坏	15-3	568	3-345掘田	10.2	2.9		20	不明	
坏		443	3-376住居上層	10.2	3.0		20		
坏	58-11	137	4-162土坑下層	10.3	2.9		30	一段	内面横線2本
坏		448	3-376住居上層 土器5	10.4	2.9		10		
坏		881	3-376住居上層 土器86-3	10.4	3.4		80		
坏	67-4	722	3-412溝 土器21	10.5	3.2		70	一段	
坏	40-6	874	3-376住居上層 土器80	10.7	3.2		70	一段	
坏	40-7	855	3-376住居上層	11.2	3.9		80	一段	
坏	14-3	71	3-139掘田	11.3	3.5		50	一段	
坏		840	3-376住居	11.4	3.3		30		
坏		840	3-376住居	11.4	3.9		20		
坏	85-9	788	3-450溝	11.5	3.5		80	一段・螺旋	
坏	67-5	802	3-412溝	11.9	3.5		30	二段	上段はミガキ?
坏	95-5	774	3-736溝 土器14	11.9	3.6		60	不明	
坏	40-8	912	3-376住居上層 土器117	12.0	3.8		50	一段	
坏	53-18	797	3-708土坑	12.0	3.9		50	一段	
坏	44-1	104	3-182炭化植物遺体集積	12.0	4.2		80	一段・螺旋	
坏	95-6	144	4-205溝 土器1	12.1	4.0		90	一段	
坏	58-12	137	4-162土坑下層	12.2	2.9		20	一段	
坏	95-4	391	4-287溝 土器9	12.3	3.6		90	一段・螺旋	
坏	40-10	473	3-376住居上層 土器30	12.3	4.1		50	不明	
坏		867	3-376住居上層 土器73	12.4	4.2		50		
坏		408	3-450溝 土器群4	12.5	3.9		40		
坏	101-1	206	4-185溝 土器5	12.5	4.3		20	一段	内面横線1本
坏	89-2	602	3-515溝 土器群1	12.6	4.2		30	一段	
坏	40-9	499	3-376住居上層 土器56-1	12.8	3.6		50	一段	
坏	46-8	282	3-483土坑	12.9	3.6		一段		
坏		477	3-376住居上層 土器34	13.2	4.6		30		
坏		866	3-376住居上層 土器72	13.4	3.9		20		
坏	40-11	471	3-376住居上層 土器28	13.6	5.7		30	一段	外面下半ケズリ
坏	101-2	204	4-185溝 土器3	14.3	4.7		30	二段	
坏		344	3-450溝	14.5	3.6		40		
坏		461	3-376住居上層 土器18	14.8	4.1		10		
坏		443	3-376住居上層	15.4	4.9		20		
坏		802	3-412溝	15.6	5.0		30		

坏	95-7	146	4-205溝 土器3	15.8	4.7		30	一段・螺旋	外面ミガキ有り
坏	14-4	71	3-139掘田	15.8	5.1		40	一段	外面下半ケズリ
坏	67-6	714	3-412溝 土器13	15.9	5.1		30	一段・螺旋	螺旋二重外面下半ケズリ
坏	79-3	819	3-447溝 土器群1土器1	15.9	5.8		40	無し	外面下半ケズリ
坏	16-8	285	3-403掘田	16.0	6.1		30	二段	外面ミガキ
坏	40-15	881	3-376住居上層 土器86-1	16.4	6.3		30	一段	
坏	40-12	881	3-376住居上層 土器86-2	16.5	4.3		50	一段	外面下半ケズリ
坏	40-13	900	3-376住居上層 土器105	16.5	5.0		10	不明	外面下半ケズリ
坏	85-10	1001	3-450溝	16.5	5.7		95	一段・螺旋	外面下半ケズリ
坏	40-14	905	3-376住居 土器110	16.6	6.1		70	二段	外面ミガキ下半ケズリ
坏	58-13	214	4-162土坑 土器19	16.8	5.5		70	一段	外面下半ケズリ
坏		222	3-376住居最上層	17.2	4.8		20		
坏	40-16	855	3-376住居上層	17.9	5.6		20	一段	外面下半ケズリ
坏	40-25	909	3-376住居上層 土器114	18.3	3.9		40	一段	外面下半ケズリ 皿?
坏	14-5	71	3-139掘田	22.0	5.5		20	二段?	
台付き坏	40-17	888	3-376住居 土器93	9.4	4.7	2.8	70	無し	身の器高3.2cm
把手付坏	85-13	788	3-450溝	8.2	4.3		90	一段	外面ミガキ、把手欠失
高坏	95-12	288	4-287溝	6.4	5.7	1.0	50	無し	ミニチュア、身復元
高坏	65-4	93	3-180溝	7.3	5.6	1.4	60	無し	ミニチュア
高坏	106-1	320	4-288溝	7.3		1.2	40	無し	ミニチュア残高3.4cm
高坏	85-14	344	3-450溝	7.6		1.2	40	無し	ミニチュア、残高3.6cm
高坏	40-19	855	3-376住居上層	8.2	7.1	1.2	90	無し	ミニチュア
高坏	100-4	142	4-125溝	8.4	7.8	1.3	100	無し	ミニチュア
高坏	95-8	770	3-736溝 土器10	8.9		1.4	10	無し	ミニチュア、残高2.3cm
高坏	40-18	443	3-376住居上層	9.3	6.2	2.1	50	無し	ミニチュア
高坏	85-16	411	3-450溝 土器群4土器24	10.3	6.5	1.4	90	無し	ミニチュア
高坏		485	3-376住居上層 土器42	15.6			20		
高坏	64-8	4	3-側溝	15.8	11.6	3.0	100	一段・螺旋	
高坏	100-5	122	4-125溝 土器11	16.0		3.7	30	一段	残高4.4cm
高坏	40-22	507	3-376住居上層 土器64	16.2		3.6	30	一段	残高5.9cm
高坏	85-19	395	3-450溝 土器群2土器13	16.4	11.6	3.0	70	一段・円	
高坏	85-17	575	3-450溝 土器群7土器67	16.4		3.1	40	一段	残高5.1cm
高坏	40-23	454	3-376住居上層 土器11	16.4		3.9	20	一段	残高7.1cm
高坏	40-24	869	3-376住居 土器75	16.5	13.8	3.1	95	不明	
高坏		502	3-376住居上層 土器59	16.6			30		
高坏	104-9	479	4-286・288溝交点 土器13	16.8	10.8	3.0	80	無し	やや粗雑
高坏	89-3	955	3-515溝 土器群2土器3	16.8		3.7	20	一段	残高4.3cm
高坏		459	3-376住居上層 土器16	16.8			30		
高坏		222	3-376住居最上層	16.9			10		
高坏	14-7	71	3-139掘田	17.2		4.4	50	一段	残高11.7cm
高坏	46-6	842	3-483土坑	17.8		3.4	20	一段	残高4.0cm
高坏		344	3-450溝	15.6		3.4	20		
皿	14-6	71	3-139落ち込み	29.1	2.1		40	二段	
皿	67-12	802	3-412溝	22.0	2.7		30	無し	
皿	40-26	491	3-376住居上層 土器48	27.2	4.1		30	一段・螺旋	

態として意識されていたのではないだろうか。大型のものは鉢類と調整方法を共通させながらも、その機能的な区分を明確にするかのようにa類が増加すると言える。

土師器坏の法量分布は飛鳥編年の飛鳥Ⅱ期のものと比較しても矛盾はない。ただ、Ⅰ類のように小さいものは奈良県側ではあまり見られないようである。また、各口径による区分の中にa・b類が存在する事が判明し、Ⅱ類ではさらに細かく、入れ子状に重ねる事ができるセットが生産されていた可能性を指摘できた。これは、飛鳥～奈良時代の有力な土師器生産地の候補である、土師の里遺跡を中心とする石川左岸地帯に近く、そこからのみ直接的に供給を受けていて生産地のセット関係を良く反映していると推測する事も可能である。

(4) 遺跡内での位置付け

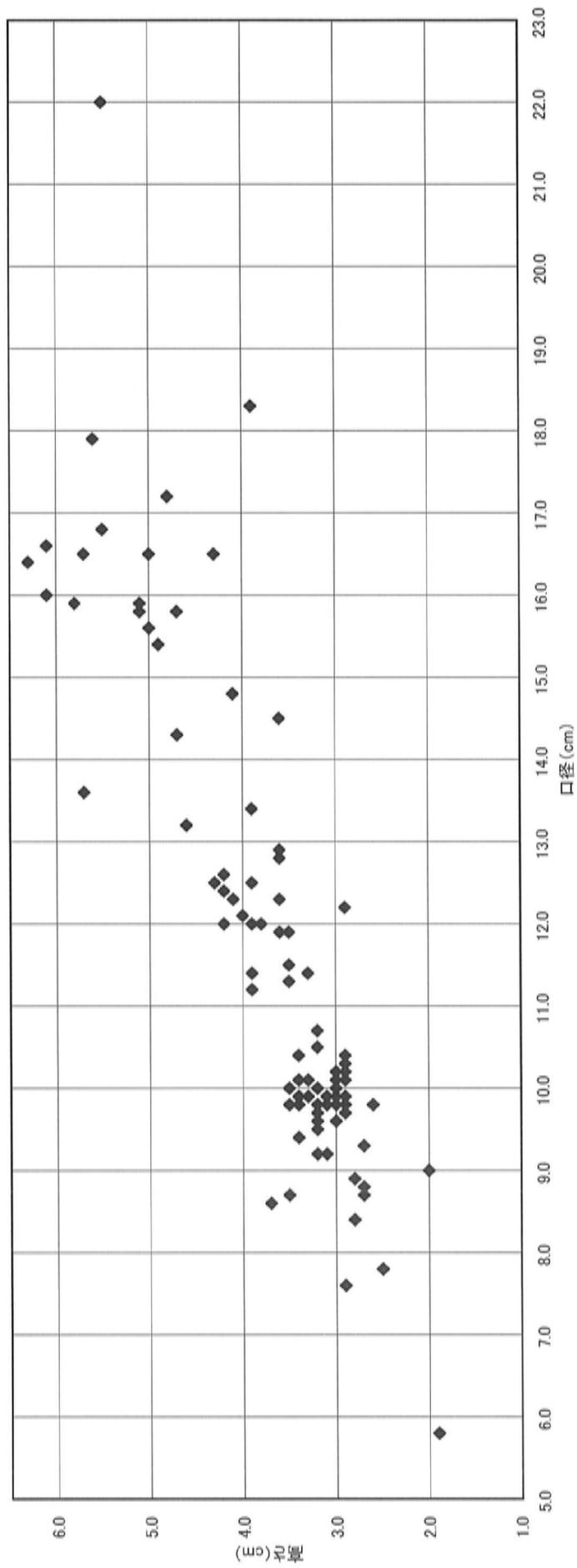
今回の調査成果から、飛鳥Ⅱ期に、生産と居住を兼ね、複数の区域で分業もなされていた可能性もある計画的な工房域が出現し、短期間で廃絶した様子が考えられるようになってきた。

船橋遺跡で、それと関連しそうな要素と言え、船橋廃寺が有力な候補となろう。その想定されている位置は調査区から東南東400mほどである(図147のN)。

船橋遺跡内では飛鳥寺同范瓦も出土しているが、船橋廃寺は四天王寺式伽藍配置であるらしいので、飛鳥Ⅱ期の創建であってもおかしくはなからう。

むしろ、今回の成果を寺院創建時の短期間の生産と考えれば、船橋廃寺創建時期を傍証するの一つの手

表67 土師器坏法量分布



掛かりとなるかもしれない。

船橋遺跡には、もう一つ、河内国府説も存在するが、今回は、工房域が極短期間で廃絶する事から、国府に伴う生産施設としては疑問が残り、飛鳥Ⅱ期における国府の存在に関しては否定的な成果であると言える。

5、奈良時代

今回の調査では奈良時代と特定できる遺構は二つの土器埋納ピットしか確認されず、かなり希薄であると言わざるをえない。しかし、包含層にも若干の遺物があり、遺跡内では遺物の多い時期でもあるので、一定の評価は必要であろう。

遺跡内で奈良時代の遺物が多いのは調査区より南東の現大和川内であり、船橋廃寺付近とも言える。奈良時代を通じて遺物はあるが、特に多いのは平城宮Ⅲ～Ⅳ期頃のようなようである。

今回の遺構は平城宮Ⅰ～Ⅱ期頃と考えられるが、飛鳥時代後半期には一旦空白域となったこの部分に何故この時期に再び遺構が見られるのであろうか。

土器埋納ピットという形は祭祀的な感じを受ける。そして隅丸方形の平面形は飛鳥時代のものと異なり、各辺が正方位を向く。

それだけしか手掛かりはないが、大胆に想像すれば、その時期に条里制地割がこの部分に施行された可能性もあるかもしれない。ただし、中世における島畠と堀田の造成に至るまでの耕作関係の遺構がまったく確認できないのはやはり疑問であり、包含層の遺物でもわずかな平安時代の遺物まで時期的な空白がある事がやはり否定的要素である。

船橋廃寺はまだこの時期も存続していたようであるので、やはりそれとの関係でこの時期何かがあったのだろうか。包含層遺物で特徴的なものに墨書土器がある。過去に遺跡内から出土した墨書土器には「玉井家」「大家」というものがあり、公的機関を兼ねた在地豪族の邸宅が近辺に存在していた可能性を感じさせる。今回も「麻呂」は人名であろうし、属人器の可能性もあるが、文字資料の点から見れば、人名は寺院関係での出土が多い。「粟」も人名の可能性もある。寺院での何らかの行事に参集した人々の残したものである可能性もあろう。

奈良時代に関して今回の調査から考えられる事はおよそ以上である。それ以降も船橋廃寺は存続していたようで、平安時代前期、9世紀頃まではあったようであるが、次第に遺物が減少し、いつしか廃絶したようである。

6、中世以降

12～13世紀頃、高低差の少ない島畠と堀田が交互に並立する、条里制地割による耕地が成立する。これが確実な耕地化の最古のものであるが、何故それ以前に耕地化の確実な痕跡がないのだろうか。

この耕地造成の際に、それ以前の耕作痕跡が全て消滅したのであろうか。しかし、4面の遺構の残存具合から見てもそれは考えにくい。この調査区付近の局所的な状況であったとしても耕地化されなかった理由があるはずであるが、今のところ不明であるとしか言いようがない。

あえて言えば、成立した耕地の形態から考えられるかもしれない。ここの島畠は、洪水砂の処理のためではなく、あえて堀田を掘り込み、その排土を盛土として作るもので、不安定な給水にも対応できる耕地形態として造成された可能性がある事を先述した。それと飛鳥時代以降の堆積物の少なさを考える

と、ここは洪水もほとんど来ない周辺の河川から導水しにくい部分で、なんらかの理由で用水路などの人工的な導水施設も作る事が困難な土地であったのではないだろうか。

だが、それでもなぜ12～13世紀頃になって耕地化したのかの理由は不明である。その頃には沖積平野扇状地帯は完新世段丘Ⅱの形成後であり、大和川・石川の本流からの取水は一層困難になっていたはずである。ひとつ推測できるのは、石川からの分流の事である。この流路の存在がさらに上流から導水する水路を延長する妨げになっていた可能性はないだろうか。

船橋遺跡00-1の調査で検出された流路は、この分流の最後の頃の流路と思われるが、自然堤防に手を加えた堤防上に水路が走っており、取水して流路自体の氾濫原に給水する体系があった事が分かる。その灌漑体系の存在こそが、南側の微高地への給水を不可能にしていると言える。

現在この付近は石川上流の堰と羽曳野丘陵東側の開析谷を水源として、丘陵・台地の裾のやや高い部分を幹線的な水路が北上する灌漑体系が存在するが、それもここに一段低い氾濫原に独立した灌漑体系が存在すると、それより北側の微高地に延長する事は難しい。流路は12世紀頃に埋没したようだが、その埋没の際に形成された微高地を渡れば、北側の微高地に給水可能になる。

つまり、12世紀頃に石川からの分流が埋没した事が調査区の立地する微高地への給水を可能にし、それにより耕地化がなされた可能性が考えられるのである。

しかし、石川分流の流路の跡は洪水の通り道になりやすく、しばしば水路は破壊されたであろう。それに加え、既存の水利体系の中に新たに拓かれた耕地は水利に関する権利が弱かったと思われ、そういった不安要素が、給水が不十分な事態にも対応できる耕地形態をとらせたと想像する事もできる。

その後も島島と堀田は少しずつ変化しながら維持される。3-2層が耕土となっていた時期は14世紀頃で、その頃に地震があったようである。3面を埋没させる洪水が来たのが15世紀頃、それにより島島と堀田が逆転した部分もあるが、基本的には耕地形態は維持されていく。

耕地が平坦化するのには18世紀初頭頃で、その後暗渠などの水田床面の排水施設が発達するが、それは大和川付け替えを契機としている可能性が強い。

しかし、条里制地割自体は宅地化が進行した現代にも遺跡内に良好に遺存している。

参考文献

- 高橋学 2003年 『平野の環境考古学』 古今書院
- 1991年 『アーバンクボタ No.30 大阪とその周辺の第四紀地質図』 株式会社クボタ
- 1976年 「大和川環境整備事業柏原地区高水敷整正工事に伴う船橋遺跡試掘調査報告書」『大阪文化財センター調査報告書Ⅲ 文化財調査報告集 '75』 (財)大阪文化財センター
- 1977年 「大和川環境整備事業柏原地区高水敷整正工事に伴う船橋遺跡試掘調査報告書」『大阪文化財センター調査報告書Ⅳ 文化財調査報告集 '76』 (財)大阪文化財センター
- 1998年 『(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第29集 船橋遺跡』 (財)大阪府文化財調査研究センター
- 1980年 『陶邑Ⅲ 大阪府文化財調査報告書 第30輯』 (財)大阪文化財センター
- 1992年 『古代の土器1 都城の土器集成』 古代の土器研究会
- 1998年 『古代の土器5-2 7世紀の土器(近畿西部編)』 古代の土器研究会

- 寺沢薫・森岡秀人他 1989年 『弥生土器の様式と編年 -近畿編Ⅰ-』 木耳社
- 1993年 『平安京提要』 古代学協会・古代学研究会
- 1995年 『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会
- 大川清他 1996年 『日本土器事典』 雄山閣
- 三宮昌弘 2003年 『平安時代の粗製土師器椀について -河内地域南半部の土師器椀の動向-』 『(財)大阪府文化財センター調査報告書第88集 郡戸遺跡』 (財)大阪府文化財センター
- 佐藤隆 1992年 『平安時代における長原遺跡の動向』 『長原遺跡発掘調査報告Ⅴ』 (財)大阪市文化財協会
- 上田睦 1995年 『遺物 -北岡遺跡中世土器編年試案-』 『石川流域遺跡群発掘調査報告Ⅹ 藤井寺市文化財報告第11集』 藤井寺市教育委員会
- 一瀬和夫 1995年 『墨書のひろがり』 『古代人名録-戸籍と計帳の世界-』 大阪府立近つ飛鳥博物館
- 1973年 『叡福寺西方の寺院址調査概報-太子町文化財調査報告第2集-』 太子町教育委員会
- 2001年 『第4回摂河泉古代寺院フォーラム 中世寺院の幕開け -11・12世紀の寺院の考古学的研究-』 摂河泉古代寺院研究会・摂河泉文庫
- 1997年 『鳴神Ⅳ遺跡第5次発掘調査』 『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報4』 (財)和歌山市文化体育振興事業団
- 1986年 『亀井北(その1) 近畿自動車道天理~吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』 (財)大阪文化財センター
- 佐藤隆 2000年 『古代難波地域の土器様相とその史的背景』 『難波宮址の研究 第十一』 (財)大阪市文化財協会
- 加藤晋平他 1983年 『縄文文化の研究 第7巻 道具と技術』 雄山閣
- 山内基樹 2000年 『滋賀県下における剥片石器石材の変遷 -縄文時代後期から弥生時代前期のサヌカイト流通-』 奈良大学卒業論文
- 佐藤隆 2004年 『宮殿東方地域の調査』 『難波宮址の研究 第十二』 (財)大阪市文化財協会
- 2000年 『飛鳥池遺跡』 奈良国立文化財研究所・飛鳥資料館
- 1987年 『藤井寺市及びその周辺の古代寺院 (上)(下) 藤井寺の遺跡ガイドブック No. 2・3』 藤井寺市教育委員会
- 2000年 『大阪府内出土の文字資料一覧』 『発掘速報展 大阪2000』 (財)大阪府文化財調査研究センター・大阪府立弥生文化博物館